KAIZO

改造

十二月號

1925

第七巻 第十二號 十二月號

糖尿病治療ホルモン劑 ランゲリン

獨逸ザールブルッケン微生物研究所長
フオルネット博士創製

糖尿病の大部分を占むる輕症及び中等症に最も適應し、その内服は糖尿を減退又は無糖となし、煩渴、多食慾その他合併症を治癒し、心身を著しく爽快ならしむ、然も應用簡便にして何等の副作用なきを特長とす。

プロフエッソル エスクッヘン氏（伯林、一九二四年十二月）曰く

『吾が病院にては從來糖尿病の治療にインシユリン注射療法を行ひ來りしが、今回ランゲリンの內服療法を系統的に實施觀察せるに、全然同樣の作用あることを知りたるが故に入院患者は勿論、退院後に於ても之を持用せしむることゝせり。今その成績を總括して述べんに、重症にありては、尿中の糖排泄量常に三〇%以上の減退を示し、自覺症狀著しく輕快せり。輕症にありては、一方に於て相當に食餌の節制をなさば常に無糖の狀態を持續し、一日の糖排泄量を僅に二〇―四〇瓦位減退せしむるを得たり。

要するに輕症患者にして嚴重なる食餌療法を忌み、又これを行ふを得ざる事情の下にある者にとりては實に有用缺くべからざるものにして、又重症に於ては注射療法の旁ら之を連續服用せしむるときは一層有効なり。』

（世界各地の醫學者二百數十氏の報告の一例）



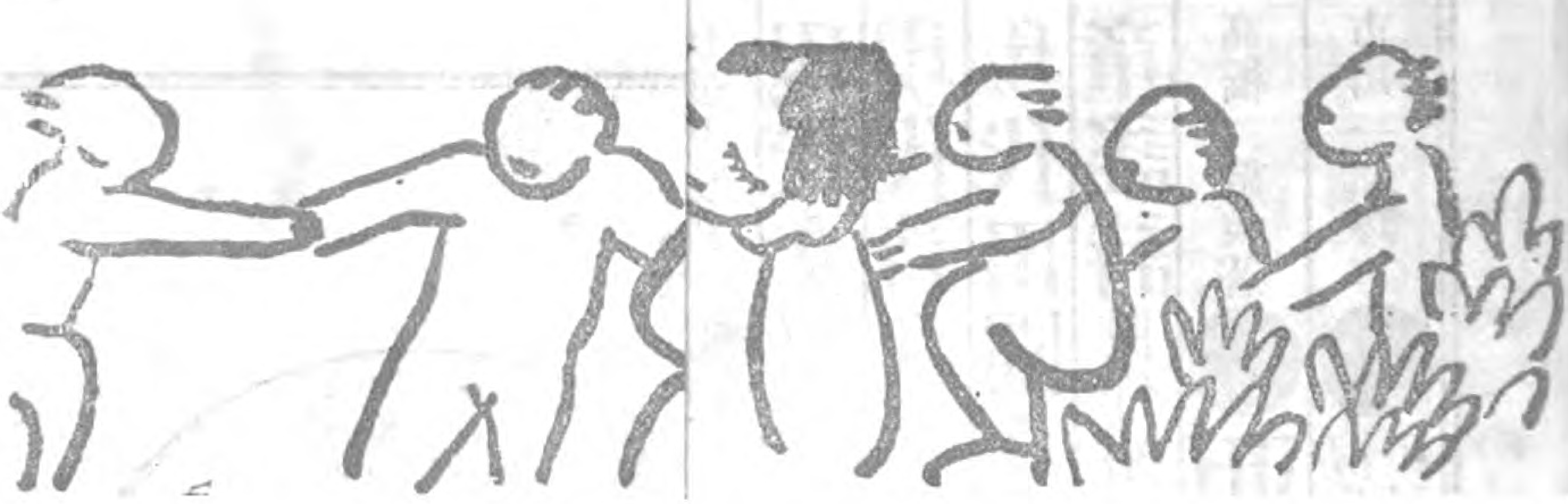
三〇丸入 四圓五十錢
一〇〇丸入 十二圓十五錢
著名藥店にあり

（實驗報告書進呈）

日本總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町



改造十二月號目次



明後日のユートピア

創作

「見よ！見よ！キング」

満天下愈驚嘆！

果然！發行部數

「世界第三位！」

創刊一年ならずして此大盛況！本社の第一理想を實現し得たるは之れ偏に満天下御同情の賜物です。謹んで感謝いたします。

是非！一家庭一キング！

今や讀書界の人氣を獨占せる本誌新年號は、更に素晴しい評判で前注文殺到の大盛況！一刻も早く本屋へお申込置き下さい。

◎表紙「猛虎」は、日本畫壇の重鎭帝展審査員竹内栖鳳畫伯筆。

◎口繪とグラフは折込口繪「國の華繪卷」の外數十葉、畫壇の巨匠の力作及泰西名畫の原色版印刷、世界の珍寫眞を集めたる優美精巧グラビヤ版等、何れも讀者本位に莫大な費用をかけた飽迄壯麗なもの、眞に天下一品の大畫報

天下一品の大畫報



新年號表紙（猛虎）

此大人氣を負へる新年號は來る

◎◎◎◎◎

十二月四日

全國書店で一齊發賣：

大傑作小說講談

素敵！素敵！無類

◎新小說　題未定　菊池幽芳

◎新小說　題未定（小杉天外）

◎長篇小說　人間味（村上浪六）

◎熱血小說　悲願千人斬（下村悅夫）

◎科學冒險　天空魔（本間華紅）

◎武勇講談　元和三勇士（坂東太郎）

新年號の新陣容！

◎大隈重信傳……法學博士 高田早苗

◎趣味の科學……理學博士 山内繁雄

◎眞勇と蠻勇……醫學博士 小酒井光次

◎古今東西大人物美談逸話……

◎名人達人決死の大試合……鳴絃樓主人

◎修養一口話……名士大家執筆

▲題未定……（菊池寛）

▲題未定……（久米正雄）

▲血……（里見弴）

▲社會美談 兄弟の誓……

▲珍妙無類話の種……

▲古今東西大笑ひ噺……

△洋行土産……
△泰西立志傳……
△笑の逸話……
△滑稽和歌……
△名人苦心談……
△成功美談……
△世界珍聞奇聞……
△漫畫漫文……
△名家玉什……
△笑科大學……

破天荒の三大附錄

（讀者本位の大計畫利益を度外視せる大提供全く素敵！）

(1) 萬人熱狂知惠くらべ

◇新しくて奇拔で一寸問題を見れば誰でも考へて見ずにはゐられない教育的で興味深い考へものいろ〳〵。

(2) 立身の礎・幸福の鍵

◇各方面の名士大家が熱血を注いで執筆された悉く力強い大文字！一字一句人の肺腑を衝く名句名文揃ひ！

(3) 世界一周競爭双六 家庭大運動會双六

◇遊び方が非常に面白くて爲になる二大双六！一家揃つて笑ひ興じて樂しめる奇拔で非常に面白い！美しい事天下無比

飛び切り面白い！

◎滑稽小説 親鳥子鳥（佐々木邦）

◎武俠小説 劍難女難（吉川英治）

◎創作 勝敗（加藤武雄）

◎童話 嫁さがし（宇野浩二）

◎新講談 雷電爲右衛門（大島伯鶴）

◎歴史小説 快俠不知火（前田曙山）

特別讀物 劍俠美疇の舞臺

力作快作五篇

何れもキング獨特の快讀物で、忠孝貞節に勇と俠、戀と美を配して面白い事天下無比！息もつけぬ樣な大場面が續出する大作揃ひ！

此外讀物尙澤山あり

◎三大附錄付新年號 一册五十錢 送料三錢

發行所 東京市本鄕區駒込坂下町四八 大日本雄辯會講談社 （振替東京三九三〇）

（全國到處の書店で販賣）

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同しだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を頼ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね！、驚いたと仰有いました、此時迄傍觀主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に各社員の方が總立になつて「カロ ト」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讚下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷」を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る半に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生する時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（内地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（内地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

これ空前の大飛躍!!

特別三大附錄

代

▽米山梅吉（財界人物列傳）……

▽運命開拓立身相談……

▽海外成功美談……

◎傳記 田中義一（横山健堂）

▽各地商賣打明け話……

▽大入滿員誌上ルナパーク……

▽浮世哲學世渡り指南所……

(1) 新興日本誌上國民大會

…階級を論ぜず、職業を問はず、苟くも日本人たるものは速に來れ！現代一流の大家數十氏が憂國の叫び、眞に壯烈熱誠腸を抉るの概あり

(2) 小資本大資本 利殖金儲け實際談

…不景氣恐るゝに足らず進んでこれを突破し以て生活戰の勝利者たらんとする人に薦む。最も確實で素人にも出來る金儲け實際談！機は今！

(3) 戀と譽れ人情美の極致

…或は水火も辭せぬ熱火の戀、或は凄艶、或は淸楚幽戀の種々相を語り之に武勇膽力怪奇を織り交ぜて素敵に面白い。傑作大讀物數十篇！

素敵

見よ！左の顔觸れ 眞に小說界の異彩

■長篇小說 不滅の光…（長田幹彦）

■歷史小說 怪傑兵助…（半井桃水）

■歷史小說 題未定…（前田曙山）

■實業講談 大倉喜八郎…（大瀧鞍馬）

■武俠小說 題未定…（吉川英治）

■小說 題未定（加能作次郎）

■小說 題未定…（正宗白鳥）

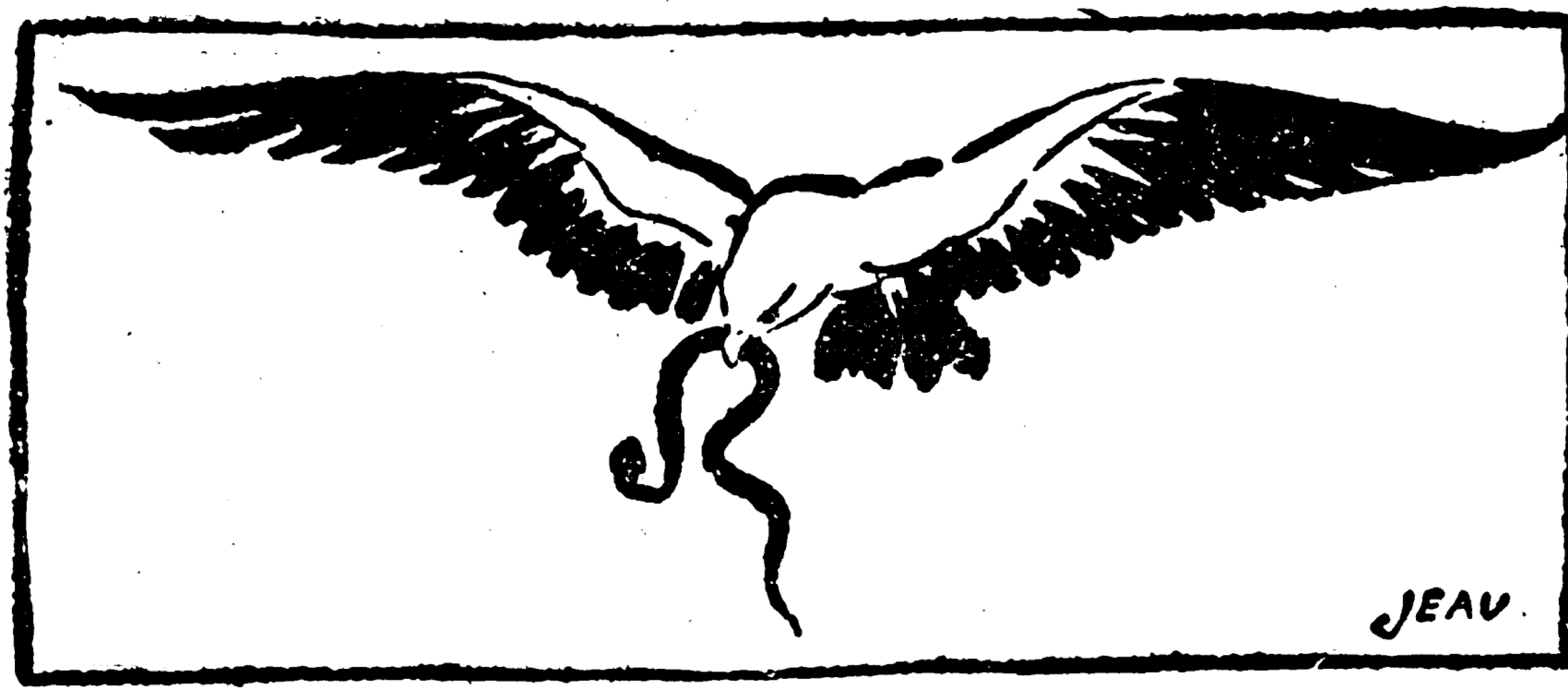
■劍豪物語 齋藤彌九郎…（木刀劍客）

■豐艶秘史 驕猿王…（笹野雪彦）

■漫畫講談 人間改造…（漫畫家總出）

定價本號に限り 壹圓五十錢（郵稅五錢）

東京本郷駒込坂下 大日本雄辯會（振替東京三九三〇番）



（十二月號）

無產政黨の成立及黨首問題

今年ももう歳晩號でお目にかかるやうになつた、日月の流れの早いのには我ながら愛惜がつきる、世はかくして一年一年と近世文明をとりいれて面白可笑しく發展すると云ふ――と同時に我々は恒例によりて一歳の老人になるのだ――機械文明の發展は反面に原人的人間性をドシドシ去勢して行くところに我々は限りなく愛執の念を深くする。傳統を打破することは一面につらいことではあるが、しかし我々は斷乎として我々の生活、生存のために傳統と一大奮闘すべく運命づけられておる。否、既に大なる闘爭の渦中に飛び込んでいるのである。

今年の冬の議會は必然的に解散を作ふ、そして永年の期待であつた無產者政黨が成立するのだ。それはもう間もないことである。ただこの秋に當りて未だにその組織要素たる生產勞働者達の大多數に無產政黨の綱領主張の徹底を缺ぐのは太しく遺憾である。殊に農民階級に於て然りである。今回の旗上げはその想敵とする政黨が既成政黨の總てであり、且つそれらの政黨のブルジョーア政策である以上、それに對應し得る實力の準備をウント整へてかかるべきである。その將來は別として今回の旗上げには農民階級、勞働階級を網羅するのは勿論のことではあるが、智識階級、否、ブルジョア政黨の味方である小有產階級までも包括する規模でやつて欲しい。そして無產政黨の發達段階に應じて機

宜の政策を保留しておくのを忘れてはならぬ。傳統を打破するのはなかなか難い。その想像の二倍乃至三倍の力を培養してそこに始めて勝利のあることを忘れてはならぬ。ただしかし、唯今のやうに勞働總同盟も、政治研究會其他も左翼と右翼とが相對峙して小競合をなすやうではそれは畢竟既成政黨に漁夫の利を與へるやうなものだ。今の場合はすべての感情を一掃し、小我、小異を捨てゝ一大團結に就くべきの秋である。明治維新における薩、長、土、肥等があのやうな紛糾したお互の行きかゝりを介然すてて一大團結したやうに。

隨つてその黨首の如きも從來の無産歴史の偶像からのみ物色せずに眞に識見と實力の優れた人を選ぶのは勿論だが、その人物の包容力が一層吟味されなくてはならぬことと思ふ。この説に對して或る一部の人は、黨首はどうでもよい、我々は主義、綱要のみで戰ふ。民衆を背景としての闘爭のみに從ふと云ふかも知れない。そしてこの説を英雄崇拜病とけなし、時代錯誤と罵るかも知れない。しかし我々は「時代」てふ背景のみで進んだのみで、さうやすやすと既成勢力をおしつぶすことが出來ないのを知つている。最近のロシア革命に見るも我々は必ずしもレニンとトロツキイが「時代」と云ふ大波の上で泳いでばかりいたとは思はない。彼等の經綸と、精力とそして性格的から來る偉大さがどれだけロシア革命を可能に導いたかは論議するまでもないことと思ふ。換言すれば、現代人の心理をすべて萬遍なく促へよと云ふのだ。と、いつて我々は民衆の力をそう見縊るやうな不心得ものでは決してない。我が國に近來どれほど唯物的思想が擴大されたか、そして自覺せる「個性」がどれほど浸潤されて個人そのものの力がどれだけ強くなつたかはそれは別の機會に論ずるとするが。ロシアでも佛蘭西でも殊に我が東洋では指導者の指導能力と性格的影響とを重大視せねばならぬ理由がいくらもあるからである。それは歴史的に見て一目瞭然だ。

無産者政黨はここ旬日の間に成立しやう。否くばそれが花々しく行はれて欲しい。それと同時に無産政黨の生命は永き將來にあるのだからこの點に重點を置くことを忘れてはならぬ。だから黨首を間にあはせではいけないと云ふのだ。一片の婆心を無産者のために捧ぐる。

本邦人口過剩問題

高野岩三郎

一

凡て人口問題の論議も亦經濟界の景氣不景氣に依て影響されるやうに思はれる。之を我國に就て考へて見ても、數年前經濟界好況の時代には勞働に對する需要激甚であり、如何なる人口の增殖も優に之を咀嚼するに足るの感があつたので、人口問題は自ら閑却せらるゝの趣であつた。然るに近年不景氣の風が我經濟界を吹き捲るに及んでや失業の聲は到る處に叫ばれ、之に伴つて又人口過剩の憂惧は深く世人の心を襲つたやうに見受けらるたのである。恰も又最近內閣統計局は十月十三日の官報を以て昨大正十三年に於ける我國人口動態統計を公表し、其の中に於て同年內地人口の自然增加即ち出生の死亡に超ゆること正に七十四萬三千五百七十四人なることを報道したので、如上の憂惧は一層深刻化した

もの、如くである。況や近來官私諸方面に於て我經濟界發展の前途に對する不安、我資本主義經濟の行詰りの議論は屢屢吾人の耳朶に觸るゝ所であり、如何して將來――目前の不況時代が經過したる後に於ても――我國は此の夥たしき人口增加を養ひ得べきやの考察は自ら世人の念頭を強打せざるを得ざる時に於ては吾人の憂惧は益々其勢を增すものゝやうである。

獨り大正十三年に止らす、故近數年來我人口增加の著しきは疑ふべからざる事實である。大正十年に於ける人口の自然增加は七十萬、十一年は稍減少して六十八萬餘に下つたが、十二年には七十一萬餘に上り、十三年には前述の如く更に七十四萬餘となつて未曾有の增加額を示したのである。併しながら吾々が此の事實に當面して悲觀的若くは樂觀的の見解を形成するがためには、先づ以て如此き人口增加が果して如何なる關係より生じ來れるか、又之を既往の狀勢に比較して如何なる變遷を經過したるか、諸外國の過去現在に於ける事實と對照して如何なる類似若くは差異を發見するか、是等の諸點を攻究するを要するであらう。之を爲さずして徒らに短期間の事實に基いて一定の論斷を下すのは恐らく輕率の譏を免れぬであらう。

併しながら人口問題は要するに經濟問題に歸着する。若し我國民經濟が此の人口增加を支持するに足りなかつたならば、結局增加は行詰る譯である。從て我經濟社會の將來に對する悲觀論者が我人口過殖を患ふるのは尤もの次第であるが、併しこれも亦我國民經濟の過去現在に於ける狀勢や之と人口との關係に關する詳細且つ冷靜なる考察の後にあらざれば容易に論者の言に與し能はざる所である。が兎に角此點に關する研究は之を他日の機會に讓り、此處には暫く視點を單に人口論の範圍に止め、過去現在に於ける我人口の動き方を說明して我人口問題批判の資料乃至將來に對する豫測の一助たらしめやうと思ふ。

二

凡そ一國の人口は一方には出生及死亡、他方には來住移住の關係に因て增減する。そこで我國の人口に就ても順次是等の諸點を考察することとする。註

註、私は曩に明治四十四年までの事實に基く研究を纏め拙著『本邦人口の現在及將來』に於て之を公けにしたが、本論は其の續篇と見做さるべきものである。從て讀者に拙著の參考を希望する。

先づ我國の出生數（死産を除きたる出生數の意味である）を觀察しやう。我出生數は近年には一年約百八十一萬乃至二百萬に上つてをり、人口に對比すると千人に付常に三一以上に出で甚だしきは三六余に達し、（下表參照）歐洲の主要國に殆ど類例を見ざる高率を示して居る。但し歐洲大戰爭以前に於ては露西亞（一九一二年四一・四‰）、匈牙利（一九一一年三五・〇‰）の如き我國より高率なるものもあるのであつて、若し我國が文明國に比類なき出生率を有すると想像するならばそれは確かに謬見である、併し、兎に角我出生率が文明國中高き方に屬することは事實明かなる所である。

出生數

	實數	人口千に付
大正元年	一、七三七、六七四	三三・三
同二年	一、七五七、四四一	三三・二
同三年	一、八〇八、四〇三	三三・七
同四年	一、七九九、三二六	三三・一
同五年	一、八〇四、八二二	三二・七

同六年	一、八一二、四一三	三二・三
同七年	一、七九一、九九二	三二・二
同八年	一、七七八、六八五	三一・六
同九年	二、〇二五、五六四	三六・二
同十年	一、九九〇、八七六	三五・一
同十一年	一、九六九、三一四	三四・二
同十二年	二、〇四三、二九七	三四・九
同十三年	二、〇四一、一〇六	三三・八

斯様に本邦近時の出生率は高き方であるが、更に過去に溯つて如何に變遷し來つたか、之を諸外國に於ける狀勢と比較すれば如何。抑も歐米諸國に於ては近代一般に出生率低下の傾向行はれ、殊に千八百七、八十年代以來然るを見る有樣であることは今更喋々しく說明するまでもない周知の事實である。但し之に伴ふて結婚率も亦下降したかと云へば、結婚率は近代稍々減少の傾向を呈してをるが其の勢力は甚しくない、とても出生率減退の勢の滔々たるに及ばない、換言すれば結婚は余り減少せずして出生が著しく減退したのである。併しながら世界大戰爭は如上の傾向に對して一轉機を形成したのではあるまいか、之を點檢するために試に英佛獨三國の數字を査察しやう。

人口千に付出生

	英吉利	佛蘭西	獨逸
一九一一年	二四・四	一八・七	二八・四
一九一二年	二四・〇	一八・九	二八・〇
一九一三年	二四・一	一八・七	二七・二

一九一四年	二三・九	一四・九	二六・五
一九一五年	二二・一	九・七	一九・九
一九一六年	二一・一	七・九	二〇・四
一九一七年	一八・二	八・六	一五・二
一九一八年	一八・一	一〇・〇	一四・三
一九一九年	一九・〇	一二・二	二〇・〇
一九二〇年	二五・三	二一・三	二五・九
一九二一年	二二・五	二〇・七	二五・三
一九二二年	二〇・七	—	—

即ち英吉利に就て言へば戰時中には太だしく出生率を低下したが、戰後は其の反動として著しく之を高め一九二〇年には二五・三‰と云ふ近代無比の高率を示したれども、其の後は再び之を低めて戰前よりも却て減退せるの趣を呈してゐる、蓋しこれは特に戰後に於ける經濟界の不況に起因する所多しとも認められるのであるが、併し抑々又戰前長く行はれたる出生率減退の傾向をして依然其勢を持續せしむるものあるに因るとも考へられる。要するに大戰爭が此傾向を變轉せしむるに足りなかつたと――少なくとも最近までの狀勢に徴しては――言はなければならぬやうである。之を佛蘭西外に獨逸の數字に依て見るも亦殆ど同種の趣を現はしてゐる。

歐洲諸國に於ける出生率減退の狀況は如此であるが、本邦の趨勢をば歐洲大戰前までの有樣に就て見れば千八百七十年代（明治六年乃至明治十三年を指して言ふ）の二五・一‰より千八百八十年代（明治十四年乃至明治二十三年）の二八・三、九十年代（明治二十四年乃至明治三十三年）の二九・八と漸增して第二十世紀の初頭十年間（明治三十四年乃至

明治四十三年）には三二・九‰に高まつてをる。之は正に歐洲に普通なる曲線と反對の方向に向つて進みつゝあるものである。換言すれば本邦に於ては出生率減退の傾向を見ずして却て逆まに其の増進の趨勢を見たのである。但し之は曲線の方向を談じたものである。之と同時に吾人の與々も忘るべからざるは我國の從來の出生率が低きものであつたと云ふことである。千八百七十年代には獨逸は三九・一‰、英蘭三五・五‰を示したのに、我國は僅に二五・一‰に過ぎなかつた佛蘭西の二五・四‰と殆ど伯仲したのである。千八百九十年代でも二九・八‰であつて、佛國（二三・九‰）には遙に超えたが、英蘭（三〇・〇‰）と殆ど同じく、獨逸（三六・一‰）には遙かに劣つて居た。千九百年の初頭に至つて漸く當時の普通並に近くなつた。殊に我が國の結婚率が常に高率の部類に屬したことを考へるときは益々此の出生率の低かつたことは注意すべきことと言はなければならぬ。而して此の事實は恐らくかの徳川時代の封鎖的農業社會に行はれ又行はるべき人口抑壓制度の因襲的余波ではあるまいか。兎に角此の低率が維新以來の社會的解放幷に進歩に促がされて上騰の勢を釀成し來つたものと思はれる。然かして歐洲諸國では近來益々出生率を減少するに反して我國では上騰の勢止まざるが故に遂に大戰爭直前時代には寧ろ普通並より高き率を示すに至つたのである。要するに本邦の出生率増加の傾向を談ずるときは常に此の事實を忘れてはならぬ。單に彼は退き我は進むと言へば、從前も普通並のものが愈々進んで今は異常的のものとなつたかの如くに誤解せしむる虞がある、併し決してかく了解してはならぬのである。

歐洲大戰前の頃に於ける我出生率は斯樣に普通並よりも寧ろ高い方であつたが、其後に於ては如何に成行いたか。既に當時に於ても我出生率は最早頂上に達してをる、既に行詰りであると考へた人もあつたのである。事實果して如何。之がために前に掲げたる大正元年乃至大正十三年の我出生數の統計を注意して見るならば、さしも昂騰の勢を續けた我出生率も明治四十四年（一九一一年）に於ける三四・一‰を頂點として其後は大正元年より殆ど常に下降の傾向を呈し

大正八年三一・六‰となるに至つた。然るに翌大正九年に及んでは俄然更に三六・二‰なる高率を示し、其後は少しく下れるも尙ほ且三五・一、三四・二、三四・九‰と云ふ高率を保つておる、これは蓋し重には歐洲戰爭の結果として我國に生じたる成金時代の影響が却つて該時代のクライマックス（大正八年）より少し遲れて其の姿を亦結婚、出生の上に現はし、併かも好景氣の甚だしかりしだけそれ丈け其の勢も强くして景氣去りたる後までも尙ほ續きたるものと考へられるのである、（近時に於ける我結婚率の起伏の波は出生率のそれと大體良く照應するものゝ如くに見受けられる、併しこの點に論及することは暫く此處に省略する。）併しながら斯樣に上騰せる出生率は更に再び下降して大正十二年に三三・八‰を示しておる。換言すれば歐洲大戰勃發の前後の頃既に稍すれば下降の傾向を示したる我出生率は戰爭に因る成金時代の出現のために轉回せられたれども永續せず併かも近時に於ける深刻なる不景氣や生活難の加重は一般に資本主義の進展に伴ふ家計の形成及維持の困難や婦人職業範圍の擴張や等と相俟て徐々に出生の上に其影響を現はすに至るのではあるまいか、一言すれば最近時をエポックとして始めて漸く我國に出生率減退の勢を馴致するのではあるまいかとも思はれるのである。勿論一年一年の數はそれぐ\の短期的事情に因て影響せられるから、向後と雖年々の數字に幾分の起伏あるは素り豫想せられる所であるけれども、我國に於ける資本主義浸潤の程度乃至經濟的社會的の一般狀態より判斷して私は上述の如き感想を抱くのである。

三

轉じて我死亡數（死産を除きたる死亡數を意味す）を觀るに近年は一年約百萬乃至百五十萬の間を上下し、人口數に對比すると千人に付二〇‰内外を昇降し間々二十五・六‰に達して居り（下表參照）歐洲主要國に比べ少なからず高率を示

しておる。尤も歐洲大戰以前に於て露西亞（一九一二年二五・二‰）、匈牙利（一九一一年二五・一‰）墺太利（一九一一年二一・九‰）の如き我國よりも高き若くは伯仲する率を有する物もあるのであつて、我國の死亡率を以て近代に於て他に比類なき高率を示す物とは看做し難いのであるが、併し近時の我死亡率は文明國中、中々に高き方に屬すと言はなければならぬ

死亡數

	實數	人口千に付
大正元年	一、〇三七、〇一六	一九・九
同二年	一、〇二七、二五七	一九・四
同三年	一、一〇一、八一五	二〇・五
同四年	一、〇九三、七九三	二〇・一
同五年	一、一八七、八三二	二一・五
同六年	一、一九九、六六九	二二・四
同七年	一、四九三、一六二	二六・八
同八年	一、二八一、九六五	二三・八
同九年	一、四二二、〇九六	二五・四
同十年	一、二八八、五七〇	二二・七
同十一年	一、二八六、九四一	二二・三
同十二年	一、三三二、四八五	二二・八
同十三年	一、二七三、七二〇	二一・三

更に本邦近時の死亡率を過去のそれと比べ又歐洲諸國の狀況と對照を試むれば如何なる相違を見出すであらうか。元

來歐洲諸國に於ては千八百七、八十年代以來一方かの出生率減退を見たると共に他方死亡率も亦漸次低下の勢を現はし來つたのであるが、此の趨勢は大戰爭のために如何なる影響を受けたかと云ふに、試に之を英佛獨の三國に就て見れば、(下表參照)英國に於ては一九一五年及一九一八年に一六・〇、一五・八％なる高率を示したる外は大體戰爭前の數字を現はし、併かも又戰後に於ては戰前の傾向を追つて死亡率益低下するを見るのである。佛國に於ては戰時中却て死亡率を低め戰爭の終結前後より之を高めたるを見たけれども、間もなく戰前の率に復したやうである。若し夫れ獨逸に至つては流石に戰爭の死亡率に及ぼしたる影響の顯然たるものがある、唯た戰後は直ちに戰前の狀態に復し爾來益々死亡率低下するやうに見受けられる。之を要するに英佛獨の諸國に於て戰前の行はれたる死亡率低下の傾向は戰後に於ても依然其の勢を持續するやうに思はれるのである。

人口千に付死亡

	英吉利	佛蘭西	獨逸
一九一一年	一四・八	一九・六	一七・二
一九一二年	一三・八	一七・五	一五・四
一九一三年	一四・三	一七・七	一四・八
一九一四年	一四・四	一六・三	一五・三
一九一五年	一六・〇	一六・四	二二・三
一九一六年	一四・六	一五・二	一九・八
一九一七年	一三・四	一五・三	二〇・七
一九一八年	一五・八	一九・七	一八・四
一九一九年	一四・三	一九・一	一五・六

一九二〇年	一二・八	一七・二	一五・一
一九二一年	一二・五	一七・七	一三・九

如此く歐洲諸國に於ける死亡率は今後依然として減退の傾向を有するやうであるが、我國に就て之を見れば千八百七十年代（明治六年乃至明治十三年を指して言ふ）の一八・七‰より千八百八十年代（明治十四年乃至明治二十三年）の二〇・〇‰に昇り、其の後は千八百九十年代（明治二十四年乃至明治三十三年）も、又千九百年の初頭十年間（明治三十四年乃至明治四十四年）も共に二〇・九‰となつてゐる。即ち歐洲大戰前に於ける我死亡率の狀勢を歐洲諸國に比べて異なる所は彼に在ては死亡率漸減の傾あるに反し我に在ては、減少せずして停滯の狀にあると云ふ事である。但し之と同時に注意すべきは我出生率が從來比較的に低率なりしと同じく、死亡率も亦從前低率であつたことである。千八百七十年代の一八・七‰は例へば獨逸の千九百一年乃至千九百十年の率と同一である。然るに歐洲諸國にては近代頻りに其の低落を告げたるに反し、我に在ては千八百八十年代に却て增加した、併し其後も頻りに增加すると云ふのではなく、二〇‰台に停滯しておるのであつて、此の率を以てすれば其の當時に於ては敢て高率を以て目すべきものではなかつたのである。

然るに歐洲大戰勃發後大正五年の頃より我死亡率は少しく增進するの傾を呈するに至つた。其の間大正七年（二六・八‰）及九年（二五・四‰）の如きは非常なる高率を示したのである、これは大正七年乃至九年に猖獗を極めたる流行性感冒の影響に重に歸すべきもののやうである。此の兩年を除くも尚ほ最近は二一、二二‰台に止まつて居て現時の歐洲諸國に比べて高率に屬するものとなつたのである。（上掲大正元年乃至十三年死亡數表參照）

斯樣な次第であつて我人口の現狀は之を死亡率の點より觀察して斷じて樂觀を許せないのである。我死亡率の高率に

して併かも未だ減退の跡を現はさない事其自身が既に奇觀を呈するものである、況や又此の死亡狀態を解剖して男女の別に依り、年齡の多少等に依りて檢討するときは面白からざる數個の事實を發見するからである。以下少しく説明を試みやうと思ふ。

其の一は女子の死亡率に關する事實である。英佛獨等の諸國に於ては男子の死亡率は女子よりも高く且兩者間の開き少なしとせざるに反して我國に在ては男女の死亡率は殆ど同率なるか若くは男子死亡率の方女子よりも多きも其の間の開き少なきこと下の數字を見て明らかであらう。更に此の點を諸年齡級に立入て吟味することを避けるが、兎に角女子の死亡率が斯樣に比較的に高いのは決して喜ぶべきことでないのは言を俟たぬ所である。

		男子人口千に付男子死亡	女子人口千に付女子死亡
英蘭	一八九六年乃至一九〇五年	一七・九	一五・七
佛蘭西	同上	二一・八	一九・三
獨逸	同上	二一・八	一九・四
日本	一八九九年乃至一九〇三年	二〇・七	二〇・四
	一九〇四年乃至一九〇八年	二〇・五	二〇・六
	一九一八年（大正七年）	二六・九	二六・八
	一九一九年（大正八年）	二三・〇	二二・六
	一九二〇年（大正九年）	二五・七	二五・一
	一九二一年（大正十年）	二三・二	二三・二
	一九二二年（大正十一年）	二二・七	二一・九

一九二三年(大正十二年)	二三・二	二二・四

其の二は一歳以下の乳児の死亡に關する事實である。元來我國の乳児死亡率は英佛獨等の諸國に比べ過去に於ては低率であつたが、彼に在ては概して著しく改善せられたるに反し我に在ては漸次其の率を高め其の結果英佛等よりも遥かに劣るに至つたのである。之を最近の數字に就て見るも亦依然として同種の趣を呈してをる、即ち彼に在ては徐々に改善の實を認め得べきに反し我國に於ては改良の跡を見ず、即て大正三年以來遞増して大正七年には同年の出生百に對し乳児死亡一八・九の高きに達した、翌年以後は漸減して大正十二年には一六・三となつたが、これとても十年以前の率と大差なきに止まるのである。

出生百に付一歳以下の死亡

	日本	英蘭	佛蘭西	獨逸
大正三年	一五・九	一〇・五	一〇・九	一六・四
同四年	一六・〇	一一・〇	一四・一	一五・四
同五年	一七・〇	九・一	一二・二	一三・六
同六年	一七・三	九・六	一二・三	一五・〇
同七年	一八・九	九・七	一三・八	一五・四
同八年	一七・一	八・九	一一・九	一四・五
同九年	一六・六	—	—	一三・一
同十年	一六・八	—	—	一三・三
同十一年	一六・六	—	—	—
同十二年	一六・三	—	—	—

尤も乳兒死亡の高率なるは獨り我國に限る譯ではない、(例へば匈牙利の如きは一九一三年に二〇・一%、一九一四年に一九・五%、一九一五年に二六・四%と云ふやうな率を示してをる)併しながら小兒死亡が從前よりも一層多きを加へて文明國中高率なる部類に入り併かも又十數年來著しき改善の實を表はさゞるは斷じて滿足すべき狀態でないのである。

其の三は死產に關する事實である。元來死產の國際的比較は困難であるけれども、我國の死產數は文明國中例外的の多數を示してをるものと認めねばならぬやうである。尤も近來大分趣を改ため來り從前は出產(出產及死產を合したるもの)の九%內外を占めたるものが年々遞減して最近大正十一年には六・四%に降つた、併し此の死產率を以てするも尙且例へば獨逸に於て一九二〇年に出產百中三・二であるが如きに比べて頗る多いと言はねばならぬ。況や又更に之を出產兒の身分に分つて查察するとき公生兒の側に在ては其の出產總數中死產は六・四%を成すに過ぎざるに反して私生兒の側に在ては其の出產中一五・七%を占めてをる、此の私生死產率は從前に比べて遙かに少きを加へたるものではあるが、併し尙ほ私生兒の六分一弱は死んで產まれてをると云ふことは決して喜ぶべき現象ではないのである。之を要するに前段に述たやうに我國に於て旣生兒の少なからざる部分が一歲以下で夭折するに止らず、旣に已に生れざる以前に於て亦斯樣に生命を絕たるゝものの少なくないと云ふことは如何なる國粹論者も誇り得ざる所であると考へられる。

其の四は少壯者の死亡に關する事實である。本邦に於ける少年及壯年の死亡率が面白からざる狀態に在ることは夙に統計研究者の指摘したる所であるが其の近狀は如何。今私は之を明らかにするに足るべき數字を算出して讀者に示すの暇を得ないが、最近內閣統計局當局者が死亡者の年齡に關して下の如くに說明したる所に依て見れば我少壯年者の死亡率が依然として舊態を脫せざるを察知するに足りるやうである。曰く

一死亡者を年齢別に見ると、五歳迄の小兒は死亡全體の三割八分を占めて甚だ多いが、五歳以上九歳になると急激に減少して、三分となり、十歳以上十四歳では更に下降して二分余となる、十五歳以上十九歳以上十九歳と二十歳以上二十四歳の階級では少しく増加して四分余となるが二十五歳より五十四歳迄は甚しき増減なく、五十五歳以上七十九歳迄は年齢の長ずるに從て増加し、八十歳以上になると逐次割合減少するのを例とする。……

大正十二年の死亡も亦大體前記の狀勢を呈するが、唯青年期及壯年期の死亡が稍高い、此の年齢に於ける死亡が割合に高いことは大正七年以來のことであつて唯大正十年を例外とするのみである』と（『大正十二年日本帝國人口動態統計記述編』四十二頁）

（參照）死亡者年齢別

	千分比例 大正十二年	千分比例 大正十一年
〇—四歳	三七九・六	三八二・四
五—九歳	二八・七	二七・一
一〇—一四歳	二三・二	二一・三
一五—一九歳	四四・三	四二・三
二〇—二四歳	四四・五	四三・五
二五—二九歳	三三・三	三一・六
三〇—三四歳	二七・五	二六・五
三五—三九歳	二七・一	二六・六
四〇—四四歳	二九・五	二八・八
四五—四九歳	三一・四	三〇・五
五〇—五四歳	三一・六	三二・二

五五――五九歳	四一・五	四〇・三
六〇歳以上	二五七・五	二六六・九
年齢不詳	〇・三	〇・〇

要するに此の事實も亦前に揭げたる二點と共に容易に吾人の見逃し難き現象である。

四

以上私は我國近時の出生死亡の狀勢を別々に論じたのであるが、元來出生死亡の差增が即ち所謂出生超過又は人口の自然增加であつて、之に來住移住の關係より來る所の人口增減を斟酌して始めて實際の人口增加額が定まるのであることは喋々する迄もない。而して北米合衆國や濠洲の如きは來往の關係よりして夥しく人口を取得するけれども、歐洲の諸國は之に反して普通に人口を失ふのである。只此の所謂移住超過は人口全體より見れば其の一小部分に過ぎない。例へば獨逸に於て割合多くの海外移民を出したる年である一九二一年に就て見るも其の數約四萬三千人、人口に割當れば十萬に付僅に三十八人に過ぎないのに依ても察知することが出來る。今之を我國に就て見れば實際移住に因て失ふ所の人口數は亦太だ少數である。試みに之を外國旅券下付人員に依て窺へば其の數は近時大正元年乃至大正十一年の期間に於て三萬乃至六萬の間を往來し中移民と名の附いたものは約一萬三千乃至二萬三千の間を上下しておる。總數五千余萬、年々の增加六七十萬を數ふる我人口の中より一年二萬內外の人民を失ふのは決して多數なりとは言へないのである。朝鮮台灣の如き我殖民地と雖既に已に此地方に稠密なる先住民を有し併かも其の生計程度は遙かに低きものなる以上（大正九年十月一日に於て一方里に付人口、朝鮮は千二百六人台灣は千五百六十七人）到底我內地より之に向つて多

數の移住者を出し能はざるは智者を俟たざる所である。北海道へ向つての內地殖民さへ永年の努力にも拘らず遲々として進まざるの狀況を以てして如何に多くを外に向て望み得やうや。たとひ北米の天地が我移民に向て開放せられおるとするも、又現今頻りに唱道せらるゝ南米移民が將來故障なく行はるゝとするも、之を我國過去の實蹟に徵し又之を歐洲諸外國の事實に鑑み、年々多數の人口捌ケ口となるを望むは到底一の空想に屬すと考へねばなるまい。

他方更に外國より我國へ來往するものは極めて少數である。それは大正十二年末本邦在留外國人の數僅かに一萬八千余人に止まつておるのを見ても明らかである。併しながら近年朝鮮人の來往者の多きを加へたるは人の知る所である。併し我國と經濟的社會的狀態が將來常に多數の朝鮮人を吸收するを得るや疑を存すべき點である。斯樣な次第であつて結局將來とても今日と同じく我國に來往移住の關係に因て人口を得喪すること普通大ならずと考へざるを得ないのである。

五

上述したる所を以て我人口が出生死亡の差より生ずる所謂自然增加に因て主として增殖すべき理は自ら明かである、自然增加の量が其儘亦人口全體の增量を表はすとも言ひ得る。今此の增量を最近時代に就て見れば大正七年流行性感冒のため僅に三十萬に止まれるもの丶外は五十萬乃至七十萬余を上下し人口に對比すると千人に付普通一〇以上に超ゆることこと少なからざる有樣である。

人口自然增加	實數	人口千に付
大正元年	七〇〇、六五八	一三・四

同二年	七三〇、一八四	一三・八
同三年	七〇六、五八七	一三・二
同四年	七〇五、五三三	一三・〇
同五年	六一六、九九〇	一一・二
同六年	六一二、七四四	一〇・九
同七年	二九八、八三〇	五・四
同八年	四九六、七二〇	八・八
同九年	六〇三、四六八	一〇・八
同十年	七〇二、三〇六	一二・四
同十一年	六八二、三七三	一一・九
同十二年	七一〇、八一二	一二・一
同十三年	七四三、五七四	一二・六

翻て更に明治初年以來の本籍人口の數字を窺へば年々一昂一低可成りの激動を示しておるけれども傾向は常に上騰に向ひ大正十一年には前年に比べ増加實數七十六萬余、人口千に付一三・〇の増加率を呈して居るのである。

併しながら是に於て吾人の想到せざるべからざるは、如此き夥しき人口増加は明治維新以後に初めて現出したる事態なることである。本庄榮治郎教授の研究に依れば徳川時代後半の人口は二千八百萬乃至三千萬の間を上下せざるものと概算せられる、換言すれば徳川時代後半期百二十年間には人口殆ど停滯したるを想察せられるのである、然るに明治維新の改革は亦人口をも解放して自由發展の素地を與へたるがために駸々として增進の途に就いたのである、況や又日清、日露、世界戰爭と云ふが如き事件次から次へと發生したるがために人口も亦飛躍的に進展したと言へるのである。併し

ながら一步を進めて言ふならば、明治維新に因る人口の解放と云ふは實は閉鎖的農業時代より突如開放的資本主義への進出に因る人口の解放である。日清日露世界戰爭に基く人口の飛躍と云ふも、同じく是等の戰爭に伴ふ資本主義の一張一弛と相照應する。かく觀じ來るときは人口問題も結局經濟問題となるのである。

そは兎に角、我國の人口は明治の初以來殆ど常に飛躍的に發展し來つた、而して之を招來せる主要の原因たる出生及死亡の關係に就て考察すれば、出生は始め低率より進行して漸次高率に到達したのであるが、近時に至り減退の兆を現したるの趣あるやに見受けられる、既に德川時代に於て當時の事情に適應して人口を制限したる我國民は亦新事情の必要又は利益のために出生を抑制するに苦しまないやうにも思はれるのである。若し夫れ死亡に至つては我現下の人口問題の中核を成すこと恰も歐洲戰前の人口問題の中心が出生率に在つたと同樣である、之も亦低率に始まつて高率となり近時に至るも減退の勢を示さぬ、而して之を齎らすに與つて力ある事情として女子、乳兒、少壯年者の死亡狀態の險惡を見るのである。言はば多產多死、弱者虐待の事實を示しておるのであつて吾人の愼重なる考慮を促かすものあるのである。併しながらかの人口增加と云ひ又是等の出生死亡の狀態と云ひ共に一方には能く是等事實の眞相を究めて判斷を誤まらざるを期すると同時に、他方には又是等の事實と我國民經濟との關係を研究して問題の中核に觸るゝの要あるを覺へる。私は本論文に於て聊か前者に就て說明を試みた積りであるが、後者に關しては近日大原社會問題研究所雜誌上に於て我國近時の經濟組織の狀勢を論述して幾分の參考資料を提供せんと欲する。敢て讀者の併讀を希望する次第である。

移民問題と太平洋の平和

——太平洋關係調査會第一回總會で討議された移民問題諸相——

高柳賢三

一

太平洋を周る諸國間に、果して平和が永久に保たれ得ようか？そして又、眞理と正義とに基いた平和が維持される可能性があるか、如何か？

勿論此の問題は、果して世界の平和の理想、そして眞理と正義とに基いた世界平和が實現の可能性ありやの問題の一形相に過ぎない。そして又、歐洲諸國間の平和の保障の可能性如何と均しき原理の支配の下に立つ。然しながら、太平洋の諸國間の平和確立には、之に伴ふ特種なる要因が強く働いて居る事を認めなければならぬ、第一に、東洋文化に就て相當の自負心を有する支那民族乃至マホメット教國の覺醒に依て、有色人種と白色人種との接觸干係に變化を來しつゝある事である。歐米諸國は最早從來の如く、此等の民族をバックワード・ネーションとして劣等視し、或は人格を無視した保護的態度を示したり、或は又、其無智に乘じ横暴を敢てし、不當な利得を獲得することは漸次出來難くなつて來て居る。

歐米人の東洋に於ける道徳的プレスティージュは歐洲大戰と共に東洋諸國の間に大部分失墜して了つた。そして知識的プレスティージュに於ても、漸次此の同じ傾向に向つて進みつゝある。米國ではロスロップ・ストダートは "Rising tide of colour". "New Wuorld of Isalm" の二書で、黄色人種の覺醒、イスラムの覺醒をセンセーショナルな書き振りで論及し、多大の注意を一般民衆の間に喚起して、洛陽の紙價を高からしめて居る。又近くは、カイゼルに依て再び黄禍論が唱へられ、米國上院外交干係委員長ウイリヤム・ボラーの、之に對する反駁論が發

表されて、此黄白兩人種接觸の問題は世界の注意を惹いて居る。兎に角、白人は此等民族を平等視し、彼等の人格を尊重し、彼等の傳統的文化の發育に同情し得るか、何うか。結局右様なるにせよ、この間には幾多の波亂があらう。日本は巴里講和會議の際、人種平等案を提出したが通過しなかつた。然し極東政局の開展は、恐らく更に强い形で此要請が高唱される事にならう。此の場合歐米諸國の態度如何。それは太平洋の平和に就て至大の影響を有する。兎に角、傳統と歴史との異つた文化を持つた異人種の接觸問題は、太平洋の平和を脅かす一大要因である。

第二に、東洋は人口の過剰に苦んで居る。そして經濟的動機から、東洋人が廣大なる土地と富源とを持ち、且つ賃金の高い北米、南米乃至濠洲方面に移動を欲求するに至るは自然の勢である。然るに此等の國では、東洋人は西洋文化に同化しないとか、生活程度が異るとか、血統の純潔を脅かす恐ありとか、諸種の理由で移動を制限又は禁止する傾向がある。一方が、移動の自由は天賦人權であつて、之を抑壓せんとするのは不都合だと云へば、他方は、自國に入り來る人間を選擇するのは一國主權當然の作用で、之に就てかれこれ云ふ方が不都合ぢやと主張する。支那移民は、米國、加奈陀等では法律で入國禁止をされて居るに拘らず、從來何等有力な抗議をしなかつたが、日米間では、過日の米國新移民法を中心として爭議が起つた。勿論此の爭議では、日本は米國の移民制限の主權を否認したのでなく、その行使方法に對して異議を挾んだ丈であるが、支那、印度等が覺醒して來れば、此の問題は更に根本まで遡つて、「移動自由」の要請と國家の「入國拒絶權」との衝突の形を取らないとも限らない。そして此の問題は又、太平洋の平和確保に付て重要なる要因であることは疑ない。

第三に、東洋諸國は漸次産業化の道程にある。先づ日本が産業化し、次いで印度、支那皆此の道程を辿つて居る。此場合、歐米諸國の産業に如何なる影響を爲すであらうか。恐らく西洋諸國との間に産業上の競走が起つて來るであらう。そしてその間から、太平洋の平和を脅かす大きな原因が釀成されないと誰か云へよう。それ許りでなく、産業の發達と共に、是等諸國に於ても共産主義的思想が漸次發達する、然もその背後には、ロシヤと云ふ共産國家が常にその炯眼を輝して、此の運動の助成に同情と援助とを惜まないであらう。問題はかくして一層紛糾して來る。

要するに太平洋平和維持は、東洋文明と西洋文明の接觸問題、黄色人種と白色人種との接觸問題、世界經濟の諸問題、民族自決の問題等複雑な諸問題の正しき解決を前提として居る。

太平洋の平和、眞理と正義とに基いた平和は果して可能性を有するや、否や。

一九二五年七月一日から七月十五日まで二週間に渉つてホノル丶に集まつた太平洋沿岸を周る諸國からの代表者約百二十名は、此複雜なる太平洋の諸問題を冷靜に研究し、以て眞理と正義とに基いた太平洋の平和建設を期待するアイデアリストの一團である。そして此の一團は、太平洋關係調査會（Institute of Pacific Relations）の名稱の下に永久的團體を組織し、常に各國有識者間の連絡を保つと共に、隔年一回づ丶會合して、是等諸問題を討議し、其目的を達成せんとするに至つたのである。

二

此會議に代表されたのは、太平洋に面接する九つのグループであつた。即ち、會議は、濠洲六人、加奈陀六人、支那十三人、米國本土卅八人、日本十九人、朝鮮六人、フイリツピン三人、新西蘭十一人、ハワイ十六人、無所屬三人、合計百十一人の會員より成立し、此の外準會員四十余人、合計百五十余人を算した。會議の場所としては、ホノル丶の郊外にあるプナホ學校の大講堂及教室が此れに充てられ、此等會員の大部分はその寄宿舍に寢食を共にした。會員は、宗教家、教育家、政治家、法律家、學者、新聞雜誌記者、實業家、社會運動家等、雜多な分子から成つて居つた。此等の人達は會議の議場に於て、諸種の重要なる問題に就て議論を戰はしたのみならず、或は食卓に於て、或は芝生の上に橫臥し、或は相共に郊外にドライブを試み、談笑の間に意見の交換をなし、又個人的に相識るの機會が與へられた。斯くの如くにして討議せらる丶題目は、幾多デリケートな論點を包藏せるに拘らず、互に胸襟を開いて各自の思ふ所を忌憚なく述べ合ふ事が出來たのであつた。國際會議に屢々見らる丶各代表間の感情の疎隔を來す事なく、二週間に渉る論議を完了する事を得たのは、此の私的交際を密接ならしめんとした主人役の機智に負ふ所が多い。各グループの代表員は、政府、國民乃至特殊の團體を代表するものでなく、全然個人の資格に於て意見を述べるものであつた。從て會員は、最初、代表者即ちデレゲートなる名稱が用ひられたのであつたが、後にはこの名稱は不適當なるのとして、會員即ちメンバーなる名稱が使用せらる丶に至つた。勿論、各會員は、全然個人の資格に於て對議するのではあるが、その個人の國家的、社會的雰圍氣に依て、その意見が彩られる事は自然的傾向であるが故に、その個人的意見の內に、國家的、社會的乃至國民的意見、若しく

は偏見が窺はれる。例へば、社會運動家は、自らその密接の交渉を有する勞働團體の意見を代表して居り、實業家は、自ら資本家的立場、又は一國の產業商業と云ふ方面から事物を觀察し、宗教家は、人道主義的空氣を表現し、學者、教育家は大體に於て、理想主義的、研究的雰圍氣に依て其意見が彩られて居る。又各代表者は、其屬する國家の政策に贊成すると否とを問はず、事實として此れを說明する機會が與へられて居る。そして實は、此處に會議の妙味が存するのであつて、會員の色彩が多種多樣であればある丈、異つた見方が陳述せられ、夫れが又自由な討議に依て相互に批評せられ、修正せられるのである。

最近の外交は、舊事の宮廷外交的色彩が減少して、公論を基礎とする會議外交が重要なる地位を占むるに至つたのは、巴里講和會議以來殊に著しい。然し此等の國際會議に於ては、代表者はみな各國政府の訓令に依て拘束せらるゝのであつて、國際的バーゲニングの色彩が強く、掛引きが多い、國際聯盟總會、ワシントン會議等の實例に照して見ても此の點は明かである。又、國際聯盟協會總會は、右に比して一層自由な空氣が橫溢するけれども、然も尙、各國の聯盟協會には一種の色彩がある結果として、幾分一方に偏する傾向がある。今回の會議は此の點に於て、一層學問的空氣が強いのは、此等の國際會議と稍々趣を異にして居る。然し又、純學術的國際會議とも多少空氣を異にする。それは、取扱はるゝ問題の多くが、現代の國際政治に密着する活きた問題であるからである。此の會議は、半學術的、半政治的會議であるとも云へよう。會議の方法は、米國マサチユセツツ州ウイリヤムス・タウンの政治學會の會議方法に範を取つた樣うである。然し又、ウイリヤムス・タウンの會合は、國際政治を論じ、各國の政治家、政論家が集まるのではあるが、それは必竟米國々內の會合であつて、今回の會議が純國際的なのとは其趣を異にして居る。

七月一日、會議の第一日目に、各グループの一人がそのグループを代表して、そのグループの立場からステートメントを發表した。理論的に云へば、此のステートメントは、此れを發表した會員の個人的意見ではあるが、恐らく多くの場合に於て、是等のステートメントはそのグループの間に於て協議せられた結果、作成せられたものと見るべきであらうから、會議の趨勢を知り、その雰圍氣を諒解する爲には、最も重要なる陳述と見做す事が出來る。從て私は先づその大要を述べよう。

一　米國本土

米本土のステートメントは、スタンフォード大學總長ウイルバー氏に依て述べられた。この陳述の重心は、一九二四年七月、

米國會議で實施された移民法の辯明にある樣うに見受けられた。彼は、歐洲諸國より米大陸への移民の歴史、獨立戰爭、内亂戰爭、宗教自由の確立、節制均衡の政體、產業發達に伴ふ生活程度の向上を說き、尙ほ進んでフイリツピン獲得、パナマ運河開通に依て、太平洋問題に對し米國民の注意が向けられるに至つた事等を論じ、移民問題に關しては、米國議會が日本の感情を害するが如き立法を敢へてした原因として、(1)世界大戰に於て米人は、米人でありながらその由來した本國の方に同情を持ち、米國に同化しない移民が數多く米國内に在る事を實感し、此れに對し何等かの處置を取らなければならないと感じた事、(2)移民問題の處理に就て、立法府と行政府との間に權限上の爭があつた事、(3)西部諸州が米國々內政爭に就て有するカステイング・ボート、(4)米國人が太平洋沿岸の特種の事情に精通せず、外交關係に無智であるといふ事等を擧げて居る。又米國人は、人種問題に就ては歷史的背景の結果、頗る敏感であつて、人種の混血を怖れて居る。それは人種の優劣問題から來るのではなくして、寧ろ混血兒が遭遇する社會的不遇及此れより生づる社會的不安が、民主國を危殆に陷し入れると云ふ感じから來る事を釋明し、又、米國に於る產業の異常なる發達は、米人の生活程度を著しく發達せしめ、而も米人は此れを維持せんとする意嚮が強い事を指摘して居る。

二、ハワイ

ハワイのステートメントは、ハワイ大學教授ロマンゾ・アダムスに依て陳述せられた。そして其目標は、人種問題、殊にその文化的方面である。氏は、ハワイに於ては、數種の人種が狹少なる地域に居住して共同生活を營み、產業的商業的方面より接觸するのみならず、社交、教育、遊戲の各方面に於て接觸し、結婚に就ても約四分の一は異人種間又は異國民間の結婚であることを指摘し、かゝる接觸に依て、異人種間の理解が着々と進められつゝある事を說いた。勿論現在に於て、此の接觸關係は全然滿足すべき狀態にはないけれども、漸次かゝる方面に進捗して居るとした。ハワイに於る經驗は、太平洋を周る異人種問題の解決に對して光明を放つものである。太平洋諸國民間の接觸は、現時に於ては主として財政的若しくは商業的である。此種の接觸にあつては、その動機は利益であるが故に、稍もすれば猜疑心、恐怖心が惹起され、それが又、不德なる煽動政治家の利用する所となつて、人種的又は國民的偏見が煽られる事が多い。人種間の理解は、更により高いレベルの接觸を必要とする。藝術、文學、科學、哲學、倫理々想、宗教等の方面に於て、一層頻繁な接觸が保たれない限りは、異人種間の眞の理解

は達成されない。太平洋の如き廣大無邊なる地域に於て、かゝる廣汎な範圍に於ける接觸を、直ちに實現する事は困難であるが、かゝる方面に進める事に依て、初めて、正義と協同の基礎の上に太平洋の諸問題を解決する事が出來るのである事は、ハワイに於ける經驗の教訓であると論じた。

三、フイリッピン

フイリッピンのステートメントは、マニラの辯護士コンラード・ドベニテーズ氏に依て開陳せられた。そしてその主眼は、始より終に至る迄、フイリッピン獨立の要求である。米國政府は、一九一六年所謂ジョーンス法に依て强固なる政府が設立される事を條件として、獨立を約した。そして、フイリッピン人の解釋する所によれば、この條件は既に滿されて居るのである。然るに米國人の或る者は、その個人的利害から打算して、フイリッピン人には自治的能力なしと誤れる宣傳を爲し、或は確固たる政府（ステーブルガヴァメント）の意味を理想郷の政府の意味に曲解し、ジョーンス法に示されたる米國の約束履行に反對して居る。物質的利益の爲に、米國が名譽にかけて誓つた約束を破ると云ふ事は、米國の政治的理想主義に反するものであり、我々米國を敬愛する者の極力反對するところであると述べた。

四、カナダ

カナダのステートメントは、バンクーバーの評論家ジョン・ネルソン氏に依て述べられた。其重心は、カナダの移民政策の開陳であり、東洋移民禁止又は制限に對する辯明である。カナダは移民政策の根本として、支那人、日本人の渡來に反對する。此等の人種は、知的及道徳的資格、或は遵法心に於ては西洋人に劣る者ではないが、人種言語の差は、カナダの國民生活に同化する事を不可能ならしめて居る。從て一九二三年には、支那移民を全然排斥するに至つた。日本移民に就ては、日本政府の希望と日本國民の感受性に鑑みて、紳士協約で此の問題が解決されて居る。そして年々百五十人の勞働者の入國が許されて居る。カナダと日本は相互に信頼する事に依て此の問題が解決されて居る。この日本人移民の問題に現はれた相互的信頼は、此の調査會の基調であらねばならぬと説いた。

五、日本

日本のステートメントは、我代表の指導者であつた澤柳政太郎氏に依て開陳せられた。その基調は新日本の自由主義と國際主義との解說であり、この精神の國際化の提唱である。宗教の方面に於ては、各宗派が提携して社會的改善に盡瘁せんとする傾向があり、教育の方面に於ては、國際教育の必要が益々國民の間に認められてゐる事を說き、商業關係に於ては、日本の産業

化、富源の缺乏を說き、アジア大陸に於ける門戸開放、機會均等主義の維持は、かゝる狀況の下に於て、日本に必要缺くべからざる政策なる事を說いた。又人種及人口問題に就ては、人種問題が本會議の最も重要なる議題とならなければならない事を說き、人口問題は、日本に取つて最も重要なる問題であり、この問題の解決に就ては、日本內地に於ても、外國移民と日本の產業化に依てのみ解決し得べきものなりとの說と、農業技術の完成に依ても又解決し得べしとの二說ある事を指摘し、移民問題に就ては、日本は他國の領土に自由に渡來する權利を主張するのでなくして、人種に基く差別待遇を憤慨するのである。この點に就て、昨年夏、米國議會の制定した差別的新移民法に對しては、失望と憤慨が我が國民の間に存する事を說き、而も我が有識者は米人の正義公平な傳統に信賴して、この問題が兩者に滿足なる樣な解決さるゝ事を期待して居ると說き、カナダ、濠洲の移民制限に對しては、根本政策は東洋移民の制限に在るが、その方法は米國の立法に於るが如く、公然日本人を憤らしむるが如き方法を使用して居らないのは滿足である。勿論根本論としては、廣大なる土地を擁して、移住を欲求する民衆を拒絕する事が道德的に正當なりや、世界經濟の立脚地より、妥當なるものなりやは研究を要すべきものであるが、遺憾ながら此の點は、未だ實際政治の領域に入らずして、アカデミックな問題として論ぜられるに過ぎないと說き、最後に、日本に最近行はれた外國人土地法の制定、國籍法の改正に現はれたる日本立法の新精神を論じ、この自由主義的傾向は、日本の生活の諸種の方面に於て顯著となりつゝある事を說いた。

六、朝鮮

朝鮮のステートメントは、青年會主事申興雨氏に依て述べられた。その目指す所は、朝鮮人の立場より見たる日本の朝鮮統治の批判である。教育問題に就ては、日本の所謂同化政策に依て日本語が强制せられ、朝鮮人の個性と人種的特質とが漸次失はれる事は朝鮮人の希望に反するものであるとし、經濟商業關係に就ては、朝鮮銀行の政策が、日本の朝鮮滿洲に於る事業を扶助するのが主眼であり、爲に朝鮮人の事業は發達せず、朝鮮人對外國との商業關係の發達を不可能ならしめるとし、移民問題に就ては、東洋拓殖その他の團體の方針が、日本移民を保護し、朝鮮人を漸次滿洲方面に驅逐する結果に立入つたる事を指摘した。

七、支那

支那のステートメントは、世界キリスト教學生同盟幹事顧子仁氏に依て述べられた。その目標は必竟、關稅自主權の回復と

領事裁判權の撤廢とである。先づ中華民國確立後十四年間に於て、支那民族の國民的人種的自覺の發達がその最も顯著なるものであるとし、此れを表徴する事實として諸種の新運動、即ち民衆結社運動、新文化運動、國粹運動、銀行及產業の發達に基く內外人の競走等を說明し、支那の要請は、內部的には、教育獨立（教育を政爭の渦中より離脫せしめんとする事、）連省自治、婦人の地位の向上、社會生活及家族生活の改造が主たるものであり、外部的には、關稅自主權及領事裁判權の撤廢であると論じた。

八、濠洲

濠洲のステートメントは、メルボン大學講師スチーブン・ロバーツ氏に依て述べられた。其主眼とする所は、所謂白濠主義に對する辯明であつたやうに見受けられる。濠洲は地圖の上では頗る廣大であるが、その四割二分は不毛の地であり、三割四分は牧畜のみに適し、二割一分のみ白人の定住に適するのであることを述べ、而も農業牧畜の發達はその極限に達して居る事を指摘した。濠洲の移民政策は、生活標準と現在の文化程度の維持を主眼とし、此れを低下せしめんとする廉價なる勞働の排斥にある。そして國籍の如何を問はず、歐洲語の書取試驗の方法で排斥を行つて居る事を說明し、他方又、この移民政策の結果として、濠洲の產業の進歩が妨害されて居るので、この點に於ては識者が頭を惱まして居る。そして太平洋問題に就ては、善かれ惡しかれ、日本に就ては不安の念を抱いて居ると說いた。」

九、新西蘭土

新西蘭土のステートメントは、新西蘭土大學教授コンドリッフ氏に依て述べられた。このステートメントは頗る一般的概括的であつて、その主たる眼目を捕へるのに苦しむのであるが、新西蘭土が加奈陀、濠洲に比し、特に英政府と密接なる關係ある事を說き、東洋に多大の利害關係をもつ英國が、本會議に代表せられて居らない事を遺憾として居る。移民問題に關しては、新西蘭土の現狀に於ては、人種的問題を惹起せずして單に經濟的理由に依て制限が有力に爲され、かくしてアジアの勞働者は全然排斥せられて居る。そして外人の入國は、稅關大臣の自由裁量に依て爲され、實質上に於てはクオーター制度が行はれて居る事を述べた。

かくの如くにして、如何なる問題が各グループの興味を惹いて居るかゞ大體明かになつた。そして此等のステートメントの中に暗示された諸問題中から、諸種の題目が選定せられ、少數の會員より成る圓卓會議（ラウンド・テーブル）及全員を網羅した一般會議（ジエネラル・フオーラム）の二つで、會員相互の忌憚なき意見の交換が行はれたのである。

會議に於て最も會員の注意を惹いたものは、支那を中心とする諸問題又移民問題の諸相であつた。支那問題は、東洋の平和を脅かす禍根として最も重要なるものであり、移民問題は、會議に代表せられた米國と日本と云ふ二大强國の國際爭議の論點であつた關係上、全員の注意が、最も强く此の二つの問題に向けられたと云ふ事は當然であらう。然しながら、朝鮮問題、フイリッピン問題等に付て、余りに僅かの時間が充てられた事は私の遺憾に感じた所である。私は、主として移民問題に關する議に與つたのであるが故に、この方面の對議に就て、以下その說述を試みんとする。

三

移民問題は、太平洋政治問題中、支那問題と均しく、最も重要なるものの一つであることは疑ない。そして此の問題は、單に現在に於て日本對米國の國際的爭議の論點である許りでなく、問題の性質上、東洋諸國對加奈陀、米國、濠洲の問題であり、又或程度に於ては、支那對日本の問題である。又此問題は、單に其政治、法律的方面から觀察せらるべきでなく、人種、經濟、文化、宗教、生物學等、各種の立脚點より研究せらるゝ事を必要とする。然しながら、この會議に於て、以上の意義に於る廣汎なる移民問題が取扱はれたに拘らず、論議の中心となつたのは、日米間に於る係爭移民問題であり、然もその中最も高調せられたのは、政治的、法律的方面であつた。斯くの如くにして、日本委員は會議に於て最も主動的地位を占めるべく余儀なくされた。かくして日本委員は、原告の地位に在り、米國委員は被告の地位に在るやうな觀を呈した。此の方面に於る日本委員の活動は、大體下の諸點に此れを要約する事が出來る。

(1) 內部的には自由主義、外部的には國際協調主義を基調とする新日本の精神及びその實績の紹介、

(2) 日本の移民政策が門戶開放主義であり、人種に依る差別を置かざる事の說明

(3) 一九二四年七月の制定にかゝる米國移民法に對し、日本人は何故に憤慨するやの說明

(4) 移民問題の中心をなす同化問題に對する公平なる研究

(5) 國際社會の立場から見た各國移民政策の進むべき道の論究

移民問題に關する論議は、七月三日午後、移民問題に關する各國のステートメントで火蓋が切られた。日本の移民政策に關する陳述は大體下の如くである

日本の移民政策は門戶開放主義であり、無差別主義であつて

至極簡單なものである。即ち、

(1) 旅券又ハ國籍證明書ヲ所持セザル者
(2) 帝國ノ利益ニ背反スル行動ヲナス者又ハ敵國ノ利益ヲ計ル虞アル者
(3) 公安ヲ害シ又ハ風俗ヲ亂ス虞アル者
(4) 窃盗又ハ乞食ノ常習アル者
(5) 各種傳染病患者其他公衆ノ衛生上危險ナル病患アル者
(6) 心身喪失者、心身耗弱者、貧困者其他扶助ヲ要スベキ疑アル者

に就ては、地方長官に於て入國を禁示し得るのであつて、以上の規定に觸れない者は、自由に入國して國内何れの場所に於ても、營業又は勞働に從事する事を得る。日本では、人種や皮膚の色に依て差別待遇をなして居らない。只、條約、慣習等の結果として、日本内地に居住自由權を有せざる外國人に就て例外がある。そして支那人は此れに該當する。日支間の現行條約は、日本人が支那に於て、開港場以外では内地に居住する權を有しない。從て支那人も、日本内地に於て、條約上かゝる權利が認められて居らないのである。然し日本は自發的に、明治三十四年七月廿八日の勅令で、支那人に入國居住の自由を許可して居る。只支那人勞働者に就ては、幾分制限が加へられて居る。即ち所謂「勞働者」は、從前の内地雜居地以外に居住して勞働に從事せんとするには、地方長官の許可を要するものとして居る。然し、此處に所謂「勞働者」の中にも、家庭勞働者、料理人、給仕等を含まないのであつて、此等の種類の勞働者は、地方長官の許可なくして全國到る處に居住の自由を有するのであつて、行商人も同樣である。只震災の時、京濱地方の支那人約四千人が非常に窮困狀態に陷つたので、日本政府はその費用に於て、又彼等の希望に依て歸國せしめたが、暫くして彼等は未だ震災地方が安定にならない中に渡航して、多くの失業者を出した。其處で政府は「扶助ヲ要スル者」の法文に則つて、入國を拒絕した。然し此れは特例であつて、總して日本の移民政策は無差別主義である。

各グループよりも同樣なステートメントがあつて、之が基礎となつて、各國の移民法とその運用に就て比較研究が行はれたのであつた。今此等に就て詳説する事は此れを省略するが、要するに、加奈陀、濠洲、新西蘭士に於ても、移民政策の根本原理に於ては少しも米國と異る處なく、事實上、黃色人種は望ましからざる移民として排斥を行つて居るのである。只排斥の方法に就て、加奈陀に於ては、日本に限り特例が認められ、紳士協約で年々百五十人の移民が許されるのに過ぎない。又濠洲に

就ては、所謂書取試驗（ディクテーション・テスト）に依て、任意に其希望せざる移民を排斥して居るのである。或時、望ましからざるドイツ人の入國を拒絕する爲に、古代ギリシヤ語の書取試驗を行つて、見事落第させたといふ珍話もあつた。又新西蘭土に就ては、所謂特許制度（パーミツト・システイム）を採用し、事實上東洋移民の入國を拒否して居るのである。即ち、米國と此等英國の屬領との間に於る差異は、移民政策の根本原理に關するものではなくして、只その運用方法如何に在る事が、極めて明白に呈示せられた。日本と此等英國屬領との間に於て何等國際爭議を惹起せず、只米國とだけ紛議を來たして居るのは、此の運用方法の如何に在る事を知る時に、運用方法も國又際間の平和に就て、相當な考究を施されねばならぬ事が明かになつた。

日本人は米國新移民法の差別待遇に對して、抗議を申込むのであるが、此の同じ差別待遇は、此等の各地に於て實際上行はれて居るに拘らず、日本との間に何等紛議を釀さない事は、又注目に價すべき一點である。

四

日本人は、何故に米國移民法制定に對して憤慨の念を感ずるか。此問題に就て日本委員側より說明された要點は大體下の如くである。

(1)新日本の社會雰圍氣は、人格主義的傾向を特質とする。內政に於て、それは自由主義、人道主義の政策として現はれ、對外的には、それは國際協調主義となつて現はれて居る。普通選擧の實施、陪審制度の採用、行政の民衆化は其の表徵であり、又最も保守的であるべき裁判例に於てすら、財產法の範圍では、所有權、契約の自由、過失主義の責任論に制限が加へらるゝ事に依て、人格權の要請が認められ、親族法の範圍でも、又、婦人及小兒の人格的要請が漸次認められるに至つたのは、此の傾向の、如何に深く我が國民思想に喰入つてゐるかを示してゐる最も顯著なる例證であろ。對外關係に於ても、ワシントン會議の精神が尊重せられ、軍備は縮少せられ、シベリヤ、樺太、青島の撤兵が斷行せられ、所謂「廿一箇條」政策は、對支文化政策に依て置き換へられ、朝鮮の施政方針に就ても改善が加へられたのは、國際協調精神のあらはれである。

米國移民法が制定せられたといふ通知が日本に達したのは、かゝる新日本の社會的雰圍氣に於てゞある事を注意せねばならない。

米國の新移民法は、個人の善惡、賢愚、健康等を基礎とせずし

て、人種、皮膚色を基礎として入國條件を定めるものであり、それは人格主義的精神及國際協調主義に對する一大冒瀆である。幣原外相と國務卿ヒユースとの間に交換せられた外交文書の論點は、ヒユーズが、移民規律權は一國の主權の發動であつて、他國の干渉を許さゞるものであると說くに反し、幣原外相は、假令、移民規律權は一國主權の作用なりとするも、若しその運用が友邦の自尊心、國際的了解、又は一般國際禮讓を無視する場合には、外交的論議と調節とを正當とする形相を帶びるのであると論じたのであつたが、日本國民は國際法のテクニツクは此れを別とし、議論の精神に於て、ヒユーズの論法に感服の意を表することを得ないのである。

此の米國の移民立法は、右に述べた樣な日本に於ける自由主義の發達に對する一大打擊であつて、所謂軍國主義乃至汎アジア同盟運動等を助長せしめる結果を齎すかも知れない。

(2)日米間に於ては、一九〇七年締結された紳士協約があつて、日本は自發的に其移民を制限すると云ふ了解が、日米兩政府間に在つた。此の紳士協約は勿論、條約ではなかつた。そして米國々內法の問題としては、或は行政府の越權行爲と見られるかも知れない。然し乍ら、日本國民は、この紳士協約を以て神聖なる國際的約束と見て居つたのである。そして、苟くも日本が此の約束を破らざる以上は、合衆國は日本人排斥の立法をしないのだと理解して居つた。或方面では、日本は紳士協約を遵守しなかつたと非難する者があるが、此の點は事實問題であつて、合衆國政府の行政府、或は立法府に於て、此點に關する確實なる調查をなした事を聞かない。そして合衆國政府が排日移民法を制定したといふ事は、反面に於て、日本政府の廉潔を疑ふかの如き觀を呈した。少くも日本人に對してはかゝる印象を與へたのである。

(3)移民法制定に對して、議會の取つた方法が如何にも相手方たる日本を無視して、日本が忠實に履行せんとした紳士協約を、何等の豫告なくして排棄した事である。これは禮讓を重んずる日本國民の、不快とする遣り口であつた。假りに、米國議會は紳士協約を破棄して、移民法を制定する法律上の權利を有するものであるとしても、斯る方法に依り、此所謂權利を行使する場合、日本國民が此れに對して悪感を抱く事は當然ではなからうか。

(4)從來日本は、米國を、國際關係に於る兄として尊重して來たのである。そして內治外交兩方面に於て、米國を師としたのである。日本の小學校教育制度は、米國に範を採つた。監獄制度の改善も又、米人の力に俟つ所が多かつた。日本に阿片吸入

の慣習が輸入されなかつたのもアメリカのお影である。即ち、アメリカの注意で、米國との通商條約、即ち、一八五八年日米條約第四條第五項に、阿片取引禁止の條項を挿入した爲に、爾後の各國との條約に於て、同樣の條約が締結されたからであつた。又、一八六三年下關事件の際、米國が賠償金を返却して横濱築港改善に充てられた事、日露戰爭に際し、米國官民の示した好意、最近の震災の際に於る多大なる同情、米國宣敎師が諸種の方面に於る社會的貢獻等は、日本人をして、米國を尊敬すべき且親愛すべき兄と見て來させたのである。換言すれば、日本は米國を以て、キリストの精神を體驗する國家と見て來たのである。この國家にして此の立法を爲すといふ事が、日本人をして失望の念を起させるのに與つて力があつたのである。

(5) 此の移民法制定の報知が日本に傳へられたのは、恰も震災直後であつた。震災の爲に數萬の死傷者を出し、首府は灰燼に歸し、莫大なる財貨は失はれ、事業は萎靡し、日本國民の精神に一大打撃を加へて居つた際であつた。此の事實は、日本人の憤怒を擴大せしめた事情の一つである。

五

移民問題に關聯して最も根本的な問題は、國際關係に於ける主權と移動自由權との交渉の問題である。現在、世界の人口の分布は、偶然的事情に依て定り、世界經濟の立場よりすれば、必ずしも合理的であると稱する事を得ない。人口稠密、富源少き地域に居住する人民が、人口稀薄、富源多き地域に移住せん事を欲求するは當然の事理である。然るに一方、國際政局に於る既得權者は廣大なる地域を擁して、主權の名の下に新來者を拒否して居る。國際社會の立場よりして、此の問題は如何にして解決せらるべきであらうか。支那委員は此の點に就て、移動權は不可讓渡の人權であるといふ立場から、米國の新移民法に攻撃の矢を向けた。即ち、

二「住居を變更する權は天賦人權である。人民はその國家を離脫する絕體的權利を有する場合がある。この權利は、社會契約の性質から派生する理由に基いた權利である。もし人民が自國に於て生計が出來ない場合には、他國に於て之を求むるは疑もなく正當な事である。同樣に、移動の權利は自然權である。世界は人類共同の所有物である。如何なる國民も、他の國民が使用し得、又使用する事を必要とする土地を、不使用のまゝ持つてゐる事は正當でない。泰西の農業國に於ては、人口の密度は支那の三分の一にも達してゐない。一八六八年の日支條約に於て、居住及國籍の變更は、人間の固有にして讓渡すべからざる

權利であるといふ事が認められた。又、觀察、商業又は永住の目的の爲に、兩國民の自由移住の相互的利益を認めて居る。」

此の移動の「天賦人權」、或は、「自然權」なる文句は、十八世紀式の言ひ表し方ではあるが、兎に角、事實上、移住の要請が強く人類の一部に存し、而も此の要請は、合理的な要請であると云ふ意味に於て、此の支那委員の所說は眞理を含むものである。

然し又他方に於て、米國、加奈陀、濠洲は、國際法上、移民規律權は國內問題であり、主權の自由なる行使に依て定めらるべきものである事を主張し、此處に要請の衝突がある。

この點に就て日本委員は、移民規律の主權の存在を肯定し、而も尙、その行使は一定の原則に依て規律せらるべきものであると云ふ立場から、大體下の如き提案を出した。

移住の欲求は人間の本性である。食物、知識、風景其他を求めて人は移住を欲求する。而して此の欲求は、現今の如く交通機關の發達せる時代に於ては、地球の全部にまで及ぶ。此の移住欲求は、十八世紀の言葉を借りて謂へば、移住の「自然權」と名付くる事を得る。一國內にあつては、移住の自由は、內國人たると外國人たるとを問はず保障せられて居るが、國際的移住に至ると、此の欲求は國境に因て妨げられる。國境には高い萬里の長城が築かれて、他人の侵入を防いでゐる。換言すれば、移住「自然權」に對して、發見、征服其他の理由に依り、領土を占有してゐる人達に、新來者を拒絕せんとする欲求、要求即ち、「自然權」が存する。此の先占者の欲求、即ち國際政治に於る既得權者の欲求は、特に勞働者の關する範圍內に於て、移民規律の國家主權の名の下に、成定國際法に依て充分なる保護を受けてゐる。

根本論としては、一國の人が先占の理由に依て、新來者を拒絕する權利を有するや否やは疑問である。然し畢竟、我々は利己的な現實な世界を有りのまゝに受け入れて、只此より生ずる弊害を緩和する實際的手段を講ずる他はない。然うでなかつたならば、問題は混亂に陷つて趣く所を知らない。故に、假りに移民を規律する主權なるものが存在すると云ふ前提の下に、議論を進めよう。

併し十八世紀及十九世紀の法律家が、私有財產權を絕對無限のものと考へた樣うに、主權を絕對無限なるものと考へるならば、國際生活は耐ゆるべからざるものとなり、世界文化の爲にする國際的協力は不可能となろう。故に、移民に關する國家主權の行使に當つて、全人類の利益及要求を適當に考慮し、自國民のみならず他國民、又は他人種の感情、又は感性を、所謂主權

の極端な主張に依て害すべきものではない事を主張せんとするのである。

此の廣い見方からして、太平洋に面接する諸國移民法政策が向ふべき方針に就て、考察を試みんとするのである。移民入國の許可條件に關しては、下の諸原則を提議せんとするものである。

一、入國許可の條件又は基準は、客觀的且公開的たるべき事

二、國家平等の原則を無視せざる事

三、是等の條件又は基準の行使は、規則的たるべくして專斷的たるべからざる事

四、人種又は國籍の區別に依て差別待遇を爲さゞる事

五、是等の條件又は基準は、年齡、健康、教育、品性、資産等、個人的資格に基くべき事

既に入國を許可せられたる移民の地位に關しては、一面、先住者の欲求、要求即ち、彼等の最小限度の經濟的福利が、無數の移民者の渡米、又は安價な勞働の自殺的競走に依て脅かされないといふ欲求を顧慮しなければならなぬ。併し他方に於て、移民が額に汗して、自己の運命を開拓するを得しむるが如き公平な情況に置かるゝ事を必要とする。此等の二個の欲求、要求を調節して下の提議をなさんとす。

一、移民が新しき國に居住するに至つた後は、彼は先住者と等しき公平な經濟的及社會的取扱が與へられねばならぬ。

二、移民は、同一程度の賃銀を受くべきであつて、之に依つて、勞働市場の均衡が不當に攪亂せらるゝ事を防止すべきである。

三、其社會に於ける勞働條件の設定維持に協力すべきを許さるべき事。

四、公平なる待遇——經濟的及社會的——を受くる代償として、移民は成可く其社會の一般生活情況に同化すべき事。

五、新移民に對して與へらるべき政治上の權利に就ては、異つた方面から觀察することを要する。即ち、

(イ)若しも移民が一時的滯在をなす意志である場合には、移民を受くる國の政治に關與する事を許さるべきでない。蓋し此の場合に於て、移民は故國に忠誠を誓つてゐるからである。而して二重忠誠は望ましからざる現象であるからである。

(ロ)併し移民者が、永久に滯在する意志である場合には、移民を受くる國家は、市民たる資格を獲得する道を容易にせねばならない。

以上の提案は、會議に於て多大の論議を惹き起した。一面に

於て、以上の如き原則に依て、主權の行使が合理化される事が。國際社會の發達上必要なりとするものと、主權の行使を、現行法に於て認められざる是等の原則に依て制限せんとするは、警戒すべき事なりと論ずる者との二派に分れた。

六

以上述べた國家主權と、移動自由の要請の調節を基調とした移民政策の原則は、日米兩國間の、所謂移民問題と云ふが如き現時の係爭國際政治問題を離れ、國際人として、人口移動なる國際現象に對し、吾人が如何なる態度を取るべきかと云ふ方面より提唱せられたのである。先に述べたるが如く、日米間の移民問題の論點は更に狹いものであつて、日本政府は米國への自由移動を主張するものでなく、米國の移民規律權を容認し、只、新移民法第十三條(e)に於て、歸化不能外國人に付き、他の種類の外國人と區別して、入國の絕對禁止を規定し、その適用は必竟、日本人を目標とするものであるが故に、その差別的待遇に對して抗議を提出するに過ぎない。換言すれば、現在の移民問題爭議は、右の差別的條項撤廢に依て、大部分解決されるものであると云はねばならぬ。

然しながら、假りに右の條項は直ちに此れを撤廢する事が、米國政治の趨勢上、現在では不可能であるとしても、現在、例外的に入國を許可せられて居る者の取扱に付いて、日本人の不便とする諸種の問題がある。此等に就ても日本委員は充分に此れを說明し、米國委員に於て、此れが改正に就て努力されん事を希望した。此れを要約すれば下の如き諸點である。

第一は、米國に於て勉學せんとする學生に就てゞある。米國新移民法第四條(e)に依れば、十五歲以上の學生が、その指定し、而も勞務卿の承認した、特定學校に於て、純勉學の爲に合衆國に入國せんとする者は、所謂非步合移民として入國が許可される。即ち此等學生は、入國許可に先だつて、豫め先づ入學すべき學校を指定しておかなければならない。然し乍ら、日本人で米國へ勉學に行く人達は、特定の事項を研究せんとして行く場合が多いのであつて、米國に於て一般教育を受けんとして行く人は、我國の教育制度の完備した今日では、漸次減少しつゝある。斯る人達は、その研究せんとする事項に就て、特定の教授を賴つて行く事が多い。斯る場合、その教授が他の大學に轉職したといふ事が間々ある。又は、その目指して行つた講座が、一時中止されて居る事も間々ある。斯る場合に於て、その豫め選擇した學校では、到底その勉學の目的を達する事を得ない事がある。又、入國後、學校所在地の氣候、その他の事情が、

學生に取つて望ましからざる事を發見する事がある。此等の場合に於ても尚、最初定めた學校に居らなければならぬといふ事は不條理であるし、本人に取つても氣の毒である。從て留學生に對しては、一時、旅行者の資格に於て先づ入國せしめ、適當な時期に於て、學校の狀態を調べた上で、その選擇をなす自由を與へて貰ひたいと希望した。

それから又、第三條第二項に依て、米國に一時旅行をした學生が、入國後米國で修學せんとする場合に於ては、第四條(e)の手續を履行して、修學結了までは、滯在し得る資格が與へらる可き事をも希望した。

第二は、商人の妻に關してゞある。新移民法第三條の六に、所謂「通商條約ノ規定ニ依リ入國スル商人」の妻は、現在では、新移民法第三條ノ二に依る旅行者、遊覽者として、相當事情ある者は、六ケ月以上滯在の許可を出願する事が出來るのであるが、かゝる商人の妻に對しては、夫の滯在資格繼續中は、期間を延長して滯在を許可せらるゝ様に變更するか、或は又、第四條(D)に於て、牧師、大學教授に對して、同伴又は呼寄せの妻及十八才未滿の未婚の子女の入國を許して居ると同様の取扱を、通商條約上の規定に依て入國する商人に對しても適用すると云ふ主旨の改正を希望した。

第三は、再入國者に對してゞある。再入國許可に就ては、現在では地方移民局を經由して、ワシントンに出願する事になつて居る。ワシントンから其本人に達する許可證は、ホノルルの如きに於ては、少くも一ケ月以上を要する不便がある。故に、疑なき正當再入國者に交付さるべき再入國許可證は、その地方移民局にて發給する事を認むる事。又、新移民法施行以前に歸國して居つた者に對しては、再渡航意志を有したる者と見做して、以前に於て正當入國者たりし限りは、入國許可を與ふべき事。此點に就てシヤトルでは、再渡航者の日本滯在期間の如何を問はず、正當入國者たりし以上は上陸を許可して居る様うであるが、ホノルルでは、本人が事業を殘して居るか、或は又、財産を殘して居るか、少くも再渡航意志の放棄なき事を取調べて居る。斯る場合に於て、再渡航の意志を以て、一時歸國した事を米國官憲に立證する場合に於ては、新移民法實施前、各日本領事館にて發給したる再渡航證明書にて、その事を認むべき事。又夫の許へ再渡航して來る妻が、日本生れの子供を同伴する場合に、乳兒は勿論、少くも五六才位までは入國を許可すべき事。此點に就て、現在に於ても、生後數ケ月間までは許された事例があるが、少くもこれを延長して、五六才位までは同伴入國を許可さる可き事を希望した。

以上は、新移民の適用に當つて、日本人に對して特に不便なる諸點である樣うに見受けられたるが故に、根本問題である差別待遇廢止の解決を俟たず、直ちに運用上の改正を加へん事を希求したのである。

七

移民問題の諸相に就て、日本側の主張、或は說明は如何なる反響を他の會員、殊に米國からの會員に及したであらうか。此の問題は稍復雜であつて、單純なジエネラリゼーションを許さないのであるが、今此の點に就て、少しく私の印象を語らんとする。

移民問題の根本政策、即ち國家主權と移動自由權との調節を基調とした移民政策の改善に關する提議に就ては、面白い現象が見られた。會員は個人の資格に於て考へ、又討議をなすのであつて、何等、國家又は政府を代表するものでないといふ事が、明かに此の提議に對する反響に依て知る事を得た。若しも會員が、國家又は政府を代表するものであつたならば、所謂白濠主義を國是として居る濠洲、及此れと均しく東洋移民排斥を根本として居る新西蘭土、加奈陀、北米合衆國の會員は、此の提案に對しては、眞向から相共同して反對したであらう。然しながら事實は全く此れと反對であつて、濠洲のダンカン・ホール氏の如きは、此の提案に對して多大の同情を示し、國際社會の建設には、國家主權行使に關する慣行が漸次形成せられ、ついには國際法規となるといふ事が必要であり、それは國際法の歷史上、此れを見る事が出來るので、斯くの如き原則は、本會議に於て充分に研究する價値のある問題であるとした。又新西蘭土及北米合衆國の會員中にも、此提案に對し贊意を表し、又は此の方面に向つて研究をなす事の必要である事を認むる者も少からずあつたのである。然しながら他方に於ては、或は斯の如き提案は一個の理想論（ゴールデンルール）に過ぎずして、本會議に於ては、一層現實の諸問題について、力を注ぐ事を可とする者もあつた。又所謂國家主權を、絕對的最終的なものであるとして、移住自由權の如きは、一の空想に過ぎざるものである。國家主權に對して制限を加へんとする傾向は、極力此れを排除すべしといふ議論もあつた。又、米國のローエル氏の如きは、巧妙なる論理を操つて、太平洋の平和には、白人種と黃人種とが同一地域に於て多數共同生活をなす場合に於ては、恰も現在に於て黑人が一のカーストを形成してゐると等しく、東洋人のカーストが成立し、複雜たる問題を惹起し、かへつて衝突を來す恐がある。東洋人が、米國に眞に、生物學的意味で同化しうるや否や、又之が

望ましきや否やは未定の問題である。從て此問題が、積極的に解答された暁に於て、東洋人の入國を許すも時期後れたりとすべきでない。從て現在としては、兩人種は先づ分離して存在する事が、反つて兩人種間の平和を增進する所以であるといふ人種分離論の上から、間接に日本の提案に反對したのであつた。

此の原則的考察に就ては、全員協力して斯る方面に研究を進めるには、未だ尙早の氣味はあつた。然しながら、太平洋關係調査會の將來の研究の範圍には、恐らく此の方面の調査が漸次進捗せらるゝに至るであらう。

次に、米國移民法に對する日本國民の態度に就て、日本側から卒直に述べられた說明に對しては、米國からの會員は、充分之を理解したやうに思はれた。新聞電報を通じて米國に傳へらるゝ此等の點に就ての報道は、多くの場合に於て、餘りに皮相的であつた。從て日本人が何故に米國移民法に對して憤慨するやの點に就て、彼等の多くは充分なる理解を持つて居らなかつた。此の會議に列して初めて、此の問題に對する微妙なる日本の社會心理的背景を知りて、今更の如く驚いた人達も少からずあつたのである。殊に日本に於る人格主義的傾向、自由主義的傾向、國際主義等の說明は、彼等に耳新しく響いた形跡がある。

然らば米國人は、如何にして此の米國議會が行つた誤謬に對して、此れを矯正すべきであらうか。此の點に就て、米國側の會員の間に意見が諸種に分れた。

第一は、キリスト敎會關係の人達、即ち宗敎家に依て抱かれて居る考であつて、此れに依れば、移民法の差別待遇は一個の重大なる道德問題である、良心の問題である。斯る問題に於ては、成功、不成功と云ふが如き功利的考察に依て、吾人の進退を決すべきではない。よろしく吾人が正しきと信ずる所に向つて進むべきである。從て米國人は、右の差別條項を撤廢して、日本人をも步合主義に依て入國せしむる事に大々的運動を開始し、假令此の事業にして失敗に終るとするも、日本國民に向つて、米國民の眞意の在る所を示す事が我々の義務であると說いたのであつた。

第二は、大學關係、その他の人達に依つて提議された考であつて、米國新移民法の差別條項は、不都合であるといふ事を充分に認め、而も尙、米國の實際政治上、今直ちにこれが撤廢運動を開始するならば、かへつて排日運動を再燃せしむる事となつて、日米關係を惡化する事になるであらう。從て此の際我々の取るべき道は、右の差別條項はそのまゝとなし、只現行移民法の運用に就て、不必要なる入國障害を除去する事に努力するのが、我々の日本國民に對して好意を示す最も賢明なる方法であ

と說いたる。

第三に、加州勞働聯合會長シャーレンベルグ氏は、日本國民に對しては氣の毒ではあるが、東洋移民排斥は、米國勞働團體の多年の政策であつて、それは生活程度の差異を基礎として居る。我々は、東洋移民許可には絕對的に反對する。若しも敎會側が差別條項撤廢の運動を起すならば、勞働團體は、直ちに之に對し有力な反對運動を組織するであらう。然しながら、もしもこの問題は既に解決せられたる問題であるといふ事を兩國民が理解し、之に就て凡ての議論を中止するならば、我々は加州に在住する日本人に對する諸種の差別的立法を、漸次廢止する事に努力するであらうと論じた。

以上は、日本側の提唱が會議に惹き起した波紋である。それが將來、米國の內政に於てどういふ形を取つて現れて來るか、それは將來の問題であつて、我々の關知せざる所である。しかしたがら、最近に於て、會員の一員であり又東洋に關する權威として、米國輿論を動かす事に相當の力を有するジエレマイヤ・ジエンクス氏が最近紐育でなした演說で、その舊說を捨て、日本人及支那人に對しても歩合主義を適用すべしと主張するに至つたのは、頗る注目に價すべき點であらう。

八

以上は、ホノルヽ會議に於て論議せられた移民問題の政治的方面に關する大要であるが、此の會議に於ては、移民問題に關して屢々論爭の中心となる同化の問題に於ても意見の交換が行はれた。最廣義に於る同化の問題は、三個の方面を包含する。第一は、文化的同化の問題、第二は、人種的同化の問題、即ち生物學的に見た同化問題、第三、經濟的同化問題である。ホノルヽ會議に於て、此等三方面に就て意見の交換が行はれた。此等の諸形相に於る同化問題は、主として事實の問題であり、實驗の問題であるので、此の第一回の會議は、興味が、寧ろ政治的法律的方面に集注された結果として、此方面に就ての充分なる調査は完成せられなかつた。

第一に、文化的同化の問題に就ては、根本論から云へば、移民はその好む文化を選擇する權利があるので、必ずしもその移住して行つた國の文化に適應する努力をする義務は存在しないのであるといふ考へ方もあるのであるが、然し此の方面の根本問題は論議せられなかつた。議論は、移民はその移住國の文化に同化する事が望ましいことであるといふ前提の下に行はれたのであつて、論議された問題のは、中心米國に移住する東洋移民

は、果して米國の文化に同化し得るや、否やといふ點に在つた。此の點に就て最も好き貢獻を爲したのは、ハワイ會員であつた。ハワイは諸種の人種が狭少なる土地に共同生活を營むのであつて、斯る問題を研究するに就ては最も都合好き場所であるからであらう。ハワイ大學總長アーサー・ディーン氏は、多年ハワイ在住の此等各人種の青年を研究した結果、此の點に關して樂觀說を取り、日本人、支那人が同化し得ないといふ理由は少しもないといふ結論をしてゐる。ハワイで生れた日本人の多くは、日本に於る農民の親から生れたのであつて、此等の農民は日本の上流社會に屬するのではない。而も此等の青年は、智力に於て優秀な者が多い。ハワイ大學で優等生を調査した際に、親は無教育であつたに拘らず、子供が優等の成績を示してゐる者が多いといふことであつた。從て親の國籍、身分、教育よりも、むしろ環境といふものが知的同化に就て重要である事を示してゐる。そして、それは東洋人同化の可能性强き事を示すのである。又、ハワイに於る日本人の子が、果して合衆國に對して忠誠であり得るかどうかに就て、疑を抱いて居る人が可成り在るが、それは必竟杞憂である。日本人の性格は異常なる程度に、忠誠と云ふ德を有する事は疑ないけれども、その忠誠の發性は、その置かるゝ環境と米國人の態度如何に依て發現方法を異にするのである。從て日本人の子は、米國人の態度が正しいならば、米國に對して忠誠たり得る事に就ては少しも疑がない。即ち、道德的同化も可能だと信ずる。同化の問題に就て、寧ろ此等二代目の東洋人は米化し過ぎる結果として、親と子との間に思想の衝突を惹き起し、子は親を尊敬せず、親は子を理解せず、爲に家庭の平和を亂すといふ樣な事がある位である。殊に結婚問題に就て、子供の配偶者は、親に於て之を取り決めるべきであるといふ親の考に對して、子供は自ら之を選定すべきものであるといふ考から、衝突が起る事が稀でないと云ふ主旨の事を述べた。又、人種問題に就て造詣深きシカゴ大學の社會學者パーク氏も、同化問題を研究するに就ては、初代目と二代目との差異を充分に注意しなければならない。初代目に就ては同化は相當に困難であつて、この點は東洋移民だけでなくして、歐洲移民に就ても同樣である。親は、子供をしてその傳來の文化的思想に從はしめんとするけれども、その結果はいつも失敗に終つて居る。その失敗は、實は一箇の重大な問題であつて、「家庭の訓練」の問題として提供される。自分の見る處に依れば、問題は同化の困難ではなくして、反つて同化の余りに迅速に行はれる點に存する。その結果として家庭が破られ、不良少年を釀出し、一般社會の治安を亂すのであると述べた。之

を要するに、文化的方面の關する限り、必竟、同化は困難でないといふ事に大體の意見が向いておつたものといふ事が出來よう。只それは、二代目の子に就てゞあつて、初代に就ては困難が相當に在る事は疑ない。

第二は、人種的同化の問題であるが、問題の中心は、異人種間の結婚より生ずる混血兒の問題である。それは優生學上望しき事であるか、どうか。混血の生理的、智的、道德的特質は如何。此の點に就ては、意見が充分に熟して居らなかつた。そして、更に大に此の點に關する過去の研究を集め、且つ將來に於ても研究を要する處であるといふ事が認められた。ハワイ大學教授アダムス氏は、人種混合の性質を決定すべき科學的研究は、まだ充分に達成されて居らない。然しハワイでは、支那人とハワイ人との結婚は、その結果が良好であるといふのが一般の意見である。此等の混血兒は、一方に於て、支那人の事務の才、その他の資性を承繼し、他面に於て、ハワイ人の音樂愛好心、偉大なる體格を承繼して居り、且つ病毒に對する抵抗力を支那人の親から承繼するやうである。兎に角、ハワイ人と他の人種との間の混血兒は、人種混血の生物學的結果を研究するのには頗る適當な題目である。それは、ハワイでは差別的待遇及偏見が、是等の混血兒に對して殆んど存しないのであるから、是等差別待遇及び偏見から通常生ずる特質を、是等の混血兒が持つてゐないからであると述べた。又メルボン大學の講師ロバーツ氏は、南洋に於る混血の結果に就て、支那人とポリネジヤン及マリネジヤンとの結婚の結果は頗る良好であつて、若しも人種の差異が甚しくなく、結婚當事者が相應な人達であり、社會的差別待遇が存在しないと云ふ三條件が存する場合に於ては、混血は精神的にも、肉體的にも必要である樣うに見えると述べた。シカゴ大學の教授パーク氏は、混血兒の研究は、その資性を測定すべき基準に就て何等客觀的標準がないのであるから、從來の此の點に就て云はれた諸種の議論は根據に乏しい。又、混血の諸種の事實を集めて之を研究しなければ、此の點に就て何等の結論をなす事を許さないものである事を指摘した。之を要するに混血といふ問題に就ては、諸種の人種間、殊に白人種間に於て之を不可なりとする見解が、一般人の間に行はれて居る事は明白な事實である。そしてそれが、東洋移民排斥の一要因をなす事も亦疑ふ可らざる事實である。然し此の見解が果して正しき見解であるか、或は又、一つの偏見と見るべきであるか。それは、更に充分なる調査研究に依てのみ決定し得べき問題であるといふのが會議の意嚮であつた樣うである。

第三は、經濟的同化の問題である。換言すれば、移民の生活

程度と既住者の生活程度との差異の問題である。この點に就ても、根本論として、米國勞働者と東洋移民との間に、生活程度の差異があるか、どうか。生活程度とは何であるかの問題に就ても、幾分議論が戰はされたやうであるが、會議の大體の傾向から云へば、生活程度に於て差異があると云ふ前提の下に、議論が進められた樣うであつた。元來、東洋移民が米國に渡來する重な原因は、東洋諸國と米國との生活程度の差異であつて、それは、恰も水が低きに就くが如く、この現象は自然的現象である。この自然的傾向を阻止する爲に、各國が移民立法を爲すけれども、苟もこの差異が現存する以上は、有効に此の自然的傾向を防止する事が出來ない。從て問題は、如何にせば生活程度を平均する事が可能であるかといふ點に在る。此の點からして、東洋の産業化、産兒制限、保護貿易主義の緩和等の問題が論議せられた。然し乍ら、國内に在る移民と、既住者との生活程度を如何にせば調節し得べきかと云ふ問題に就ては、余り多く考へられなかつた樣うである。又、生活程度の差異の問題に關聯して、生活程度が低くとも、白人の競走し得ざる種類の職業のみに東洋移民が止つて居るならば、衝突は少いのであるが、此等移民は、漸次其地位が改善せらるゝと共に、商業その他各種の方面に於て、その活動の範圍を求めんとする結果、競走が起り、衝突に導くことが多い事實が指摘された。此の點からすれば、それは生活程度の問題を離れて、一般經濟競走者間に於る嫉視反目の原則に依て支配されて來るのである。

之を要するに、移民現象に伴つて諸種の困難な問題が伏在する。東洋民族と西洋民族とが、平和的關係を持續せんとするが爲には、全然相離隔して生存せざるへからざるものであるか、或は又、凡ての衝突原因を研究し、之に對する對應策を講じつゝ、兩民族が地理的にも相接觸混合に依て、世界の文化を建設すべきものであるか？、其處に一つの大きな問題が横はるのである。

（一四、十一、四、）

支那の關稅自主權と日本の對支經濟關係

堀江歸一

一、關稅自主權—支那關稅權に對する束縛—支那關稅問題の發展　華盛頓會議に於ける交涉—二、自主權に關する支那の要求—之に贊する日本の態度—英國全權の批評—三、支那提案の當否—國定稅則承認に對する我國の條件—關稅自主權恢復と支那の關稅政策—四、日支兩國間の協定稅則—協定稅則から經濟條項の協定へ—日支兩國協定稅則の基礎—結局は片務協定—五、關稅會議の支那に齎す效果—支那の鎖國經濟策—天然資源の開發—輸出禁制の撤廢—我國對支經濟政策の發展

一

關稅の徵收、賦課、改廢に伴ふ一切の權利——簡約して云へば關稅權なるものが國權の一部分であり、而して國家の財政經濟上に必要なる政策を運用する上に於て極めて重大なる關係を持つことは、私の絮說を要せざる所であつて、此權利の運用に缺くる所あつたならば、經濟策にも、財政策にも、共に大なる破綻を生ずることを免かれない。其一斑を述べんに、先づ財政上に於ては、第一、關稅の賦課に依つて、容易に國庫に比較的豐富なる收入が收められる、第二、內國消費稅の國內當業者に及ぼす負擔を緩和する目的を以つて、國內に於て消費稅の賦課されると同一種類の外國輸入品に適宜關稅を賦課したならば、自ら內國消費稅を增徵する餘地を生ずるが如き、經濟上に於ては、第一國內に於ては將來興起せんとする事業を保護する目的を以つて、外國から輸入される競爭品に課稅したり、第二國內に於て衰微する事業の命脈を維持する爲めに、之を壓迫する外國輸入品に課稅したり、第三特殊の國に對する經濟的關係を密接ならしめる爲めに、其國から輸入される物資に對して、關稅上特殊の取扱を與へたりするが如き、何れも關稅權の運用されるが重なる形態であつて、其如何なる形態を以つて、運用されるか

に依つて、一國の經濟的國運を左右するもの少なしとしない。而して關稅權の運用される形態の如何と云ふことが一國の國運に關係する所の深甚なる以上は、之を決定するに就て、一國獨自の意思に支配されなければならないのは勿論であつて、此點に就て他國の制肘統御を蒙るが如きことがあつたならば、一國の國權に對して、大なる損傷を加へられる道理であり、其加へらるるだけ、一國の經濟的國策を實現する障害と爲ることは、論を俟たざる次第である。

關稅自主權が獨立國の體面を尊重する點に於て、將た又自國の經濟財政上に有する或る企劃を實現する方便として、現代に於て重要視されるのは、誠に以上の理由に據るものであつて、我國が安政條約並に慶應二年の改稅約書に依つて外國の爲めに束縛された關稅權を恢復するに就て、明治初年以來約三十年間に亙り國民的努力を發したのも、偶然ではない。然し今日の關稅則は自主權が自國に存するの故を以つて、必ずしも他國の利害を度外視するものではなく、關稅自主權の行はれる傍ら、關稅の協定が國と國との間に行はれるを常とする。而して關稅自主權の下に、一國が互惠協定を趣意として、他國との間に相互對等の束縛を關稅權の上に加へたり、又加へられたりすることは、其國家自由の意思に基くものである以上は、自主權の實質を傷けるものではない、自主權の尊重される一面に於て、關稅互惠の主義や、關稅則に於ける協定制度の採用されるのも、亦之を諒とす可きである。蓋し互惠又は協定の下に、一國は自國の關稅權に或る束縛を蒙つたとしても、對手國の關稅權に同樣の束縛を加へて、以つて自國經濟上の利益を發展せしめ、一方に失ふ所を他の一方に得ると云ふ自信を持つからである。唯相互に交換された利益が飽くまでも對等双務のものであるかどうかを以つて、問題とする。

故に關稅自主權なるものは、一國の本來享有する權利であつて、他國から賦與されるとか、承認されるとか云ふ性質のものではない。唯支那の如く、開國通商の行はれた當初から、外國に依つて、關稅權を束縛され、其自主を喪失した場合には、聊か問題が異なり、自主權の恢復に就ては、必ず外國の承認を必要とするし、而して外國が之を承認するに就ては、

第一、對手國に於て、關稅自主權を運用するだけの完全なる能力を備へて居るか、

第二、對手國をして關稅自主權を運用せしめて、却つて其濫用に依つて、自他共に傷くるの虞れなきか、

第三、關稅自主權の運用が從來の狀況に比較して、餘りに隔絕した事實を現出せしめ、斯くて國際經濟の現狀に波瀾を生

せしめる危險なきを得るか。

第四、右の如き危險ありとすれば、之を回避する爲めに、關稅自主權の行はれる過渡期に於て、之に處する方策を必要とせざるか。

と云ふ諸點に就て、考量しなければならないのである。從來支那の關稅權問題に對して、關係諸國は頭から、自主權を否認し來つたのであるが、近年に至つて、聊か態度に變調を來し、此問題に關聯して、以上の四項を考量するに至つたのであつて、今回の北京關稅會議の如き、其顯著なる實例を以つて、見る可きものである。

以上の見地に基いて考へると、列國が支那の關稅自主權に對して、幾多の方面に亘つて、束縛を加へたことは、支那の方から見れば、不合理不公正の甚だしきものと云へるが、列國の方から云へば、其束縛の今日に至つたに就て、已むを得ざる事情があつたとも考へられる。今關稅權束縛の由來を考へると、此事たる、千八百四十二年の英淸南京條約に端を發するのであつて、此條約並に千八百五十八年英佛等の諸國と締結された諸條約に於て、總ての貨物に對する海關稅は從價五分を基礎として、算出された從價稅と定められ、爾後列國は支那と通商上の關係を結ぶに當り、總て此利益に均霑することゝ爲つたのである。而して是等の諸條約に於ては、稅額に定期の改訂を施す旨項の存したのにも拘はらず、單に千九百二年並に千九百十八年に於て、兩度の改訂を見たのであり、然も其改訂は單に輸入品の價格に關するものゝみであつて、稅率は幾年を經過するも、依然として從價稅五分と云ふ所に固着せしめられて居つたのである。關稅の輸入品に適用される率に就ては、輸入貨物の種類に依つて、高低の差の區々たるを免かれないが、尙ほ五分と云ふのは、稅率として最も低廉なるものであつて、之に次ぐは無稅あるのみである。而して輸入品が例へば奢侈品の如き內國民に取つて租稅負擔力の最も豐富なる物資であらうが、其能力の最も乏しき必要品であらうが、殆ど其別を問はず、總て一律の課稅を爲さしめるが如き、支那をして關稅に依つて、行はる可き財政上經濟上の企劃を放擲せしめるものに外ならない。列國としては之に依つて最低廉なる稅率の上に、支那に自國の物資を賣却するを得る販路を求め得たに相違ない、此利益の大なるものを棄て去るに忍びず、今日に至るまで、支那に對する關稅權の束縛を繼續して、渝らなかつた次第であつて、他の問題に關しては、利害の衝突を招き、犬猿も啻ならざるやに見られる列國が此一事に就ては、殆ど異身同體の狀に居り、一意支那を壓迫して、顧みなかつたことの如き、如何に列國の對支政

策が我欲的精神に支配されて、公正と條理とに缺くる所あつたかを示すものと云へる。

近年支那の惱とする所は實に財政の窮乏である。固より此點に就ては、支那自身に責め可き所のあるは、論を俟たないのであるが、尙ほ一方に諸外國が容易に關稅の增徵に依つて、國庫の便を謀るに拘はらず、支那に此方法を利用せしめること、關稅を利用して、國產に保護を加へ、以つて租稅收入の生ずる源泉を培養することは、今日の支那に取つて、最も必要とする所であるに拘はらず、此事の毫も支那に於て行はれざること關稅は從價五分稅を從量稅に換算して、之を徵收して居るが、其後世界經濟の大勢に伴ひ、輸入品價格の騰貴するに拘はらず、其價格の低廉なる時代に定められた從量稅を適用して居つたのでは、其從量稅は現に騰貴した輸入品價格に對しては、現實五分稅に達せず、遙に之よりも低きに居ることの諸點を目擊しては、支那たるもの、何條默して止む可きではない。旅順大連の回收とか、司法權の恢復とか云ふ問題よりも、實利害の痛切なる關稅問題に對して、國民の視聽の集中するに至つたのも、敢て偶然とは云へないのである。

然し關稅問題に對する支那政府の最初に要求したものは、必ずしも大なりとするを得なかつた。即ち支那は單に現實五分に相當する程度に、從量稅額を改訂する事を要求するものに外ならなかつたのである。此程度の要求であれば、列國は寧ろ之を快諾して、支那の便宜を謀るのが先進國の後進國に對する情誼であり、又斯くの如くして支那を經濟的文明の領域に誘導するを得る道理であるのに拘はらず、所謂先進諸國の橫恣にして、又我欲的なる、何處までも支那を以つて、諸國の產物の容易に賣却される販路たらしめようとする念を擲たず、現實五分稅に關する支那數次の要求を斥けた。殊に此間日本が終始關稅增率に反對する列國の第一線に立つたことは、今日に至るまで、吾人の苦々しく感ずる所である。何故に多年諸外國に依つて、關稅權に甚だしき壓迫を蒙り、之を回收するに就て、幾多の困難に遭遇した日本は自己の實驗に顧みて、支那に多大の同情を寄せ、支那を誘つて、關稅權を回收せしめることに、助力を與へると云ふ美しき感情と行爲とを示さなかつたのであらうか。之を示さゞるのみならず、却つて日本は常に之と正反對の所業に出でたのである。支那の對日感情の穩かなるを得なかつたのも、亦偶然ではない。斯の如く支那は關稅權問題に就て、列國の反對を受けたのであるが、支那としては斯の如くして止む可きものではない。千九百十七年日本其他聯合諸國の勸誘を受け、聯合諸國の一員として、支那は歐洲戰爭に參加するや、

共代償として支那の輸入稅を現實五分に引上げることに就て、漸く關係諸國の承認を經、千九百十八年の上海關稅改訂會議に於て、支那と諸國との間に、千九百十二年から同十六年に至る五年間の支那稅關に於ける平均輸入價格を標準として、從量稅額を算出する協定が成立したのである。

然しながら如上の改正は支那關稅問題に就て、支那に對して、少許の便宜を供へたものに過ぎない。歐洲戰爭中に於ては勿論平和恢復の後に於ても、世界を通じて、物價の高き事實の依然たるものあり。支那に於ける輸入品の價格亦此例に漏れざる以上は、曩に現實五分に改訂された從量稅は再び五分以下の從價稅に相當するに至らざるを得ない。斯くして支那から稅額改訂の要求の起つた際、關係諸國の間に種々の交渉が行はれたが、當時恰も華盛頓會議の開催に迫つて居たので此問題の決定は總て同會議に讓ることゝなつた。而して華盛頓會議に於て、支那政府代表者の要求した所は

一、關稅權の完全なる恢復

二、右の實現されるまでの最高稅率を協定し、支那は其範圍内に於て、輸入品の種類に應じて、稅率に等差を設けること。

三、差當り千九百二十一年一月から、輸入稅を從價一割二分五厘にすること

の三項であつた。其前巴里講和會議に於ても、支那全權は領事裁判廢止、外國租界返還の問題と共に、關稅自主權問題を提出し來つた事歴の存する其上に、今又華盛頓會議に於て、同一主張の繰返されるのに接した。斯くて關係諸國は此問題に關して、支那の意嚮の如何に熱烈であるかを看取するに至つたのである。

然しながら關係諸國は支那の關稅權恢復の如きは、殆ど眼中に置かざる態度を以つて、之を一蹴し去り、獨り第三項に就てのみ、英、米、日、佛、伊、白、蘭、葡、支九個國の間に於て、所謂九國條約の規定成立し、結局右條約に於て、支那の關稅權に就て、大體左の如き協定を遂げたのである。

第一、輸入稅に就ては、現實五分の即時改訂を爲し、四年後に再度の改訂を爲し、更に其後每七年を期して、定時の改訂を爲す。

第二、所謂裁釐加稅の問題を解決する。即ち釐金廢止を條件として、支那の關稅の一割二分五厘まで增率されることを許す。此主義は以前から定まつて居つたが、九國條約亦此事を認め、特別關稅會議の召集を豫定した。

第三、唯釐金廢止の實現するまでの暫定的處置として、一般輸入品に二分五厘、奢侈品に五分の附加稅を認め、其實施

期限、使途、條件等に關する取極は是れ亦特別關税會議に於て、之を爲すことゝした。

唯右に定められた特別關税會議の召集が遲延したのは、佛支兩國間に金フラン事件の爭議あつて、九國條約の批准を見るを得なかつた爲めであつたが、右事件の解決すると共に、同條約は今夏諸國の批准を了し、結局今回の關税會議となつたのである。

二

故に前述の經過から云へば、今回の關税會議に於ける議題は豫め或る範圍に限定されて居る。即ち裁釐加税の實行方法、右の行はれるまでの暫定的處置たる附加税率の適用時期、附加税收入の使途並に條件は即ち是れであつて、是等諸種の問題にして議了されゝば、今回の會議は其効果を收めたものであり、關税權恢復問題の如きは、他日は兎に角、今日に於ては、華盛頓會議に於て消滅した儘と爲つて居るのである。

然るに開會の劈頭に於て、支那の代表者が關税權恢復に就て、堂々たる要求を試みたのは、聊か九國條約の下に召集された會議の議題を無理矢理に推擴げた觀なきを得なかつた。尤も會議の開會の前から、支那が此種の要求を宣明する態度に出ではしないであらうか、支那としては何れは廢棄されるまでも、一旦は高遠なる理想を掲げた方が後日の交渉に便利であると云ふ考の下に、斯る態度に出ではしないであらうか。斯る場合に國際關係の現實を度外視して、抽象架空の言論を事とする合衆國が斯る支那の要求を支持しはしないであらうか、而して他の諸國が之に對して反對の態度を取つたならば、忽にして會議の決裂を來しはしないか、會議の圓滿なる進行を謀るには、支那が關税自主權を要求した場合に、國列が之を以つて華盛頓會議以來豫定された項目以外のものとし、他日の問題に充てることは兎に角、今回の議題以外から除却するを必要としないであらうかと云ふ諸點は頻に關係諸國の間に論評された所であつた。

然るに會議の開かれるや、支那政府の代表者が關税自主權を要求する意を述べたのは、世間の風評通りであつて、何等異とす可きものを見ないが、從來支那關税の增率に對しては勿論、現實五分税の實行に對してすら、常に熱心に反對して、事を半途に沮止することを怠らなかつた日本政府が其全權委員をして支那の求める所に賛成せしめたのは、誠に破天荒の事實であつて、一時中外をして啞然たらしめたもの、誠に故ありとす可きである。日本政府は從來支那關税を成る可く低廉なる率に据置かうとする傳統的政策を排し、又國內事業家の低率關税を維持せしめようとする熱望を斥け、支那の關税自主權を承認したの

は何故であるか、抑も亦支那が自主權に依つて、關税に增率を施した場合に、其我國に及ぼす打擊を輕微のものたらしめる成算を有するものであるかどうか。關税自主權は結局支那に與へられるとしても、之を與へるに就ては、或る條件の附帶するものなければならない、我國は之に就て如何なる條件を付せんとするものであるか、種々の問題に接せざるを得ない。列國の態度の不定である際に、卒先支那の關税自主權に賛意を表した日本の全權は是等の問題に對して、如何なる意見を懷抱するものであるか。英吉利の全權マツクレー氏は華聖頓會議を無視する支那の提案には反對である旨を述べたと云ふことが傳へられる。(十月三十一日東京朝日新聞夕刊所載北京特電) 此事を表面から云へば、華聖頓會議の決議を離れて、日本が支那の關税自主權に賛成した態度を以つて、輕躁とすること丶爲る。果して我國の態度は此種の非難に値するものであらうかどうか、吾人の一考を要する所である。

此點に就ては、私は往年の我國條約改正に於ける日英兩國の關係殊に日本に對して、英國の取つた態度並に方針を回想することを禁ずるを得ない。日本の條約改正は税權と法權との恢復を主眼としたものであつたが、特に税權の恢復に伴つて、困難があり、而して其困難は日本に對する自國製造品の輸出に就て、利害關係の重大なる英國に集中するものと認められた。當時英國の官民は日本を理解し、日本に好意を寄せると稱されたに拘はらず、關税權の一點に至つては、飽くまでも自國商業上の利害を尊重して、假借する所を示さなかつた。斯くて第一回の條約改正に於ては、日本に對して、自國の重要輸出品の殆ど總べてに對して、低廉なる率の片務協定税則を設け、第二回の條約改正に於ては、當時日本の國力は日露戰爭の後を承けて、著しく伸張し、又日本と英國とは同盟國の關係に居つたに拘はらず、關税問題に於て、英國の日本に臨む所は峻嚴なるものであつて、結局表面は双務の協定としたが、英國は或る日本の物資に對して、課税せざることを約定したに對して、日本をして英國の重要輸出品に對して、依然自國に有利なる協定を結ばしめた。而して其間日本の關税自主權を承認するとか、日本の關税權を尊重するとか云ふが如きは、片言隻語と雖も、英國政府代表者の口から漏れなかつたのである。然も第一回條約改正當時、日本は英國が片務協定を承諾したことに就て、大に滿足したのであつて、後日締結された日英同盟條約の如き、其源に遡つて考へれば、此當時から釀成された日本の對英感情に基くもの少なしとしないのである。之と比較したならば、日本が今回支那の爲めに、關税自主權を提唱したことの如き、支那に對

して、殆ど前古比類なき好意を披瀝したものであつて、誠に日支兩國の關係に於ける一大事件として、特筆するに足りる。往年大隈内閣の下に、時の外相加藤氏が駐支公使日置氏をして日支協約を締結せしめるや、爲めに支那官民の感情を傷け、後年に至るまで、日支國交上の一大障害を以つて目された。然るに今や加藤氏、首相の職に居り、日置氏亦關税會議に於ける我國全權と爲り、支那の最も要望する關税自主權の承認を宣明して、支那人から少なからず感謝されたと云はれる。加藤日置の兩氏は之に依つて、兩氏に對して、支那官民の懐く往年の悪感を一掃し、又前年軍閥の使嗾に依つて、支那に經濟的搾取を試みようとした汚名を雪ぐを得たと云へるであらう。然も斯る兩氏の立場は兎に角として、我國の斯る態度を敢てしたことは、果して我國自身に取つて、如何なる利害關係を生ずるものであるか。此一事亦吾人の一考を要する所である。

私の如き從來列國が支那關税增率の要求に接して、之を認容するに卑吝なる狀を目撃し、一方に列國の所爲を責めると共に、支那に同情を寄せて、渝らなかつたのである。然しながら支那に適當なる範圍の下に、關税率の增徵を認容することゝ、現狀を無視して、一躍關税自主權を承認することゝは、全然別個の問題でなければならない。蓋し關税自主權の下に、一國が關税を賦課徵收し、而して事の完璧を得るに就ては、國内行政權の統一を必要とする、然も今日の支那に於て、此一事の缺けて居ることは、著明の事實であつて、現に關税會議の開催される傍ら、他の一方には權力の爭奪を目的とする兵亂が國の一部に行はれて、熄まざるが如き、假令ひ關税會議其ものゝ進行には差支を及ぼさないとしても、支那自ら關税自主權を運用する能力に缺くることを自白するものではあるまいか、支那が此目前の事實を等閑過眼に付して、自主權の回收を標榜し、聲明して、以つて他に望むのは、支那一流の外交術として、首肯されるかも知れないが、日本が逸早くも之に贊成した眞意は那邊に存するか、又斯る態度を表明した結果として、如何なる利害關係を後日に生ずるか、抑も亦斯く早く支那をして關税自主權を行使せしめることから生ずる影響に對して、如何なる善後策が講ぜらる可きものであるか、共に吾人の研究を要する所である。唯此間支那が關税自主權問題を唱出して、假令ひ原則上に於けるに止まるとしても、列國の贊成を得ようとするに至つたのは、支那に取つて、大なる外交上の成效とす可きである。

三

固より支那の關税自主權回收には、支那自ら或る條件を付し

て居る。即ち（一）自主權に基いて制定される國定税則は民國十八年一月一日以降實施すること、（二）右時期までに釐金を撤廢すること、（三）釐金撤廢に至るまでの暫定辦法として、普通輸入品に對して、五分の付加税、酒烟草の如き第一種奢侈品に對して三割、其他の第二種奢侈品に對して二割の課税を爲すこと、（四）國定税則に於ても、濫に税率の加重を爲さゞることの諸點は支那が關税自主權回收に伴ふ條件として、又自主權回收に至るまでの過渡期に於ける施設として、中外に宣言する所である。民國十八年一月から國定税則を實施すると云へば、今日から起算して、僅々三年二月の歳月を剩すに過ぎない。此短き期間内に於て、今日雜然たる名目の下に、種々の方面に亘つて賦課され、然も中央並に地方兩政府に對して、重要の財源と爲れる釐金税、常關税、沿岸貿易税、輸出入子口税を撤廢し、之に代る可き收入を他の方面から調達して、以つて政務の履行に何等の遺漏なからしめるを得るかどうか。掲げられる所の目的の餘りに大なるに對して、準備の期間頗る短かく、加ふるに準備の方法の餘りに簡單なるは、吾人の一驚を喫せざるを得ざる所である。即ち支那政府の提案を以つてすれば、釐金撤廢までの暫定辦法として、普通輸入品に對してすら五分の付加税を課し、奢侈品に對しては、二割乃至三割の課税を爲さうとするのである。果して然らば往年マッケー條約に於て、所謂成產加税の條件として認められた輸入税率一割二分五厘の制限よりも、餘程の高き平均率に當るのみならず、同條約を考量して、華盛頓會議に於て成立した九國條約の認めた一般品に對する二分五厘、奢侈品に對する五分の附加税に關する規定の如き、全然顧みられざる次第である。斯の如くして支那は關税を通じて增收を收め、徐に釐金を撤廢しようとする。而して其撤廢された曉に、施行される國定税則は必ず釐金撤廢に基く收入の減損を償ふに足るまでに、高き税率を含むものであることは論を俟たない。支那は税權恢復の後に於ても、濫に税率を引上げざることを聲明し、以つて關係諸國をして安んずる所あらしめようとする。若しも斯る聲明を以つて、能く外國をして信ずる所あらしめたならば、誠に恰好の辭柄とす可きであるが、果して支那をして無謀なる税率の加重を愼ましめるを得るかどうか、疑なきを得ざるのみならず、支那自身の無謀とせざるものが諸外國に取つては、無謀のものと目せられるやも、亦測り知るを得ないのである。現に支那政府が今回の會議に提出する目的を以つて、編成した國定税則案として、傳へられるものを見るに、

一、國定税則。普通税、最低税の二に分ち、最惠國並に互惠國には、最低税則を適用し、他は普通税則に依り、輸入貨

物の標準に徴して、稅金を課する。

二、普通輸入稅則。奢侈品二割五分乃至五割、普通品一割五分乃至二割五分、必要品一割乃至一割五分、

三、輸入最低稅則。奢侈品一割五分乃至三割五分、普通品一割乃至一割五分、必要品五分乃至一割、

とあるに據れば、必ずしも支那自身の標榜するが如き低廉なるものでないことが了解される。殊に從來の稅率の低きものから、右の程度に躍進して、尙ほ之を以つて高からざる稅率であるとするが如き、詭辯に類するの嫌なきを得ないのである。

支那が將來適當なる機會を捉へて、關稅自主權の恢復を主張し、又恢復の曉に、之を運用するのは、獨立國の面目から云つて、必要の措置であつて、吾人の可なりとする所である。然しながら此問題は往年一度び巴里會議に提案され、華盛頓會議に於ける再度の提案と爲り、兩回共に排斥された事歷の昭々たるものがある。而して北京關稅會議は實に華盛頓會議の決議を實行する方法を議定することを眼目とするのである以上は、此會議は既に華盛頓會議に於て、否決し去られた自主權問題を提出して、其決定を求めるが如き、聊か筋道に於て、違つたものなしとしない。支那が此事を問題にしようとするのは、外交上の掛引であつて、其今日の如く一個の案件として、特別委員會の審議に付せられるのは、支那に取つては、成効とす可きであるが、如何に此事が處置されるであらうか。日本の支那に致した贊成の如き、結局原則としての贊成に止まり、其以上に何等實行の機運を作り出す力のないものであつたならば、始め支那人を喜ばしたゞけ、後に至つて、彼等の反感を買うに至りはしないであらうか。日本の全權が率先關稅自主權に贊成の意を明にし、多年の慣習たる英米追隨の外交から、日本獨自の外交に一轉した事實を示し、流石に東洋の外交舞臺に於ては、日本自ら指導の任に當ることを現はしたのは聊か痛快とす可きであるが、果して能く首尾を全うするだけの成算があるかどうか、他日の問題とす可き所である。

日本政府は支那の關稅自主權を認めるに當り、自主權の運用を支那の希望するが如く四年後の近かきに置くものではあるまい。現に日置全權が關稅會議第一委員會に於て、支那の關稅自主權に關して發表したステートメントに據れば、同全權は日本の關稅自主權獲得の歷史を擧げ、日本が千八百九十四年列國との間に、改訂した條約は調印の日より五年後に始めて、効力を發生し、以後十二年其効力を存續したことを述べ、支那の場合に於ても、之と同樣の例を倣うことを正當とすると云ふことを述べたと傳へられる。果して然らば日本は支那に關稅自主權を

與へることに賛成するに相違ないが、其之を實現する時期を十數年の後に置き、然も釐金廢止を條件とすると共に、支那自ら國定稅則を苛重なる程度に引上げずと云ふことに信賴を繋がうとし、更に國定稅則に對しては、關係諸國の同意を必要とし、加ふるに國定稅率の引上に備へる爲に、關稅上の協定稅則を設け、三重四重の保障を置かうとするもの丶如くである。思ふに關稅自主權の運用に堪へて、而して之を濫用するに至らざるまでに、支那の國情に改善を見るには、四年を以つて、足らざることの勿論であるが如くに、十年十數年の時期を以つてして、尙ほ之に充てるに足りるや否やは、何人と雖も、今日正確に判斷を下すに苦まざるを得ない。而して一旦關稅自主權の承認された以上は、國定稅則は支那政府一個の意思に依つて、決定せらる可きものであつて、外國は協定稅則を通じて、國定稅則の影響を緩和するの外に、道はないのに、國定稅則其もの丶決定に對して、外國に於て容喙干涉を試みんとするが如き、自主權承認の表面に對して、矛盾するもの甚だしと云はざるを得ない。若し其れ關稅自主權恢復の後に於て、支那が關稅率に無謀の增率を行はずと云ふ支那自身の聲明を信ずるが如き迂濶の甚だしきものであつて、私を以つて之を見れば斯る聲明の如き、一顧の價値なしとするを憚らない、今日世界經濟上の大勢を見るに、保護關稅に依つて、貿易上の障壁を設け、斯くて自國の產業を發達せしめようとする政策が到る所に行はれ、自由貿易の如き、辛うじて英國に其殘骸を存して居つたのであるが、其れも種々の形態に於て、潤色されざるを得ざるに至つたのである。日支兩國の關係は從來動もすれば圓滑を缺き、支那に排日の氣風の盛なることは、明白の事實であるが、政治、經濟、社會其他の方面に於ける政策なり、施設なりに就て、支那の就て學ばんとする國は即ち日本であつて、日本の制度法令の支那に依つて採用され、又日本人の思想の支那人に浸潤して居るものの少なからざることは、吾人の驚嘆する所である。然らば日本が近年頻に貿易上に保護政策を行ひ、國產の獎勵を必要とし、或る方面の物資に就て、國民をして國內自給を行はしめんとして、一意關稅率の增徵に力めるに於ては此事が直接間接に影響を及ぼして、支那をして保護關稅政策に出でしめざれば已まないであらう。大正四五年の頃我國に於て、大隈內閣が國產獎勵說を唱へて、得々たるや、其說は早く支那に傳はり、支那の中央地方政府をして盛に外貨排斥、國貨推重を皷吹せしめ、其結果は凝つて、時々日本の物資の支那に於て排斥される形を以つて、現はれ、國產獎勵說を唱出して日本政府は殆ど天に向つて、唾するに異ならざること丶爲つた。當時私は北京に客遊

し、街路到る所に右の趣意を宣傳した貼紙のあるを見て、日本人の對支言論の輕卒にす可からざるを感ずると共に、日本人の思想の支那に感染することの速なるを信じたのである。元來支那人には一國内に跼蹐して、自給的生活の下に、經濟を營む窮屈なる考へはあるが、一歩を進めて、國際經濟上の關係を共通にすると云ふような公明なる經濟思想の懷抱されて居ることが認められない。貿易上に於ては、輸入を惜んで、輸出を愛する、金銀の國内に吸收することの多きを以つて、國富の增進を告げ得たりとする、原始的產業から產出される天然資料は勉めで多く國内に留保して、國民の求める所を滿たしめようとする。是等が即ち支那人本來の經濟思想であつて、年と共に其頑固と爲るを認められる。其排他的と爲り、自足自給的と爲るも、亦異とするに足らないのである。

斯の如き思想の下に、彼の如き事實の行はれることの歷然たる場合に支那に與うるに關稅自主權を以つてすることは、支那としては保護政策を自由に實行する便宜を收めるものであつて、此上もなき好都合に相違ないとしても、支那に輸出貿易を營む諸國の立場より云へば、一時の打擊——然も急劇なる變動から生ずる打擊は何としても之を防ぐを得ないのである。殊に今後支那の保護關稅に依つて、國内に起らんとするものは粗製工業であつて、其製造品と競爭する輸入品に對して特に保護關稅の適用されることの明白なる以上は、品質劣等なる粗製の物資を支那に輸出するもの丶大なる日本の如き國が支那の關稅增率に依つて、影響を蒙ることの多きを知らなければならない。故に日本として、此種の影響を回避せんとする此上は、一方に支那の爲めに、關稅自主權を承認すると共に、他の一方に日支兩國間に稅率を協定し、更に進んで支那をして日本の爲めに、或る種の經濟的條項を協定せしめることを必要とするのであつて、此種の協定が如何に行はれるかは、當面の關係に於ては、今回の關稅會議に臨んで、日本の全權が一旦聲明した支那關稅自主權承認の後を善くする所以であると共に、永遠の關係に於ては、日支兩國經濟的交涉の如何に發展するやを示す指針となるのである。

日本の對支輸出が我國の輸出貿易全體から云つて、重要なる地位を占めることは、今更說明を要しない。而して個々の輸出品に就て之を見るも、輸出總額中、其對支輸出に係る部分が如何に大なる割合を占めるかは、大正十三年の統計に於て、

	輸出總額	對支輸出額
水產物	二二、八六三千円	八、八八八千円
精穀	二八、八六三	二七、一九九

石炭	二二、三九三	一二、八〇九
木材	一三、六七六	四、七二〇
綿織絲	一〇九、六一〇	四〇、八八三
綿織物	三二六、五八七	一三七、七二一
莫大小製品	二二、〇二〇	一、〇四四
紙類	一五、五七六	八、〇五二
硝子製品	一二、七三五	三、一四〇
鐵製品	一二、八〇五	四、〇二八

と云ふ數字に依つて、窺はれる。故に綿織物、綿絲其他の重要輸出品に對して、支那が遠慮なく高率の國定稅則を適用したならば、我國對支輸出に大なる打擊を及ぼさゞるを得ざることゝ爲るのであるから、是等重要輸出品に對して、支那をして現行稅率と略ぼ異ならざる程度に於て、協定に服せしめることは、我國の望む所でなければならない。然も一方に支那は我國に如何なる物資を輸出するかと云へば、大正十三年の統計に於ては、

	輸入總額 千円	支那よりの輸入 千円
豆類	六〇、八八九	一二、一一二
油粕	一〇三、六四五	一八、三九六
棉花	六〇五、二七四	七一、一五一
苧麻	二五、三六八	一〇、八三五
羊毛	八八、〇四〇	一、一六二
石炭	二九、一六七	七、四五三
鐵鑛	一一、五五九	七、八一六
木材	一二九、〇七二	三、八五六
麩	一四、九三〇	一二、七八六

を數へるのであるが、如何せん是等の物資たる、我國に於て、本來無稅輸入を許容す可きものに屬するのであつて、隨つて支那に特殊の取扱を與へるとすれば、將來課稅を爲さゞることを約定するに止める外はない。當然課稅せざるもの、課稅す可からざるものに向つて、不課稅を約定した所で、得るものゝなきや、論を俟たない。此實質上に於て、得る所なきものに向つて、支那が或る種の輸入品に對して、稅率協定の束縛を受けるとすれば、名稱に於ては、双務的協定であつても、實質に於ては、片務的協定たるに過ぎないことゝ爲る。斯くては日本の支那關稅自主權に對する承認は有名無實のものであり、支那に空名を與へて、實利を奪ふ嫌ありと云ふ感を支那人に懷かしめる。日本の關稅自主權承認を喜ぶ支那人は結局一時の糠喜びに終らざるを得るであらうが、吾人の疑を狹む所である。

五

華聖頓會議以來の行掛りから考へれば、今回の關稅會議に於て、支那の爲めに謀つて、最悪の結果と爲つても、現實五分稅

の外に、一般輸入品に對しては、二分五厘、奢侈品に對しては、五分の附加税が認められるであらうし、更に局面が有利に展開すれば、マッケー條約并に之を認めた九國條約に依り、釐金廢止を條件として、關稅率一割二分五厘の引上が期せられる次第であつたのであるが、會議の劈頭に於て、支那の代表者が關稅自主權を要求し、如何なる意見に基いてか、日本が之に贊成したことは、支那の爲めに、偶然にも望外の結果を誘致するに至りはしないであらうか。固より英米兩國の此問題に對する態度は未だ判明するに至らないが、既に對支貿易に就て、利害關係の最も深厚なる日本が支那の爲めに、關稅自主權を承認し、支那亦此點に就て、熱烈なる希望を有する以上は、英米兩國と雖も、之を斥けるに難く、結局或る條件を付して、之を認めるに至るであらうと想像される。唯問題とする所は條件の如何であつて、片務協定を支那に課するに於ては、支那に取つて、大なる實質的利益を目前に與へるを得ない。目前に何等の利益を收める能はずして、一方に將來自主權の收められる見込みの付いた爲めに、種々の條件を付せられる。此一事が支那人をして自主權の承認を德とせず、寧ろ幾多の束縛を加へる口實とするを以つて、之に反感を有するに至らしめる所以である。

然しながら如上の議論たる、單に目前の出來事に就て述べたものである。將來の狀勢を考へたならば如何であらうか、假に今回の會議に於て、原則としてだけであつても、支那の關稅自主權が關係諸國に依つて、承認されるに至つたとしたならば、巴里講和會議や、華盛頓會議に於て、蹂躙されたものが今回の會議に於て、始めて蘇生し、復活し、支那に對して關稅權の將來に向つて、發展し、向上す可き目標を示したことゝ爲る。支那に取つて、是れ程好都合の事が此會議を通じて現はれようとは、支那は勿論諸外國の想像しなかつた所であらう。即ち日本の支那關稅自主權に對する援助的聲明が列國をして支那の自主權要求を拒絶する際なからしめた次第である。玆に於てか我國民の內には、日本こそ支那に對して、大なる利益を與へたものであるとし、支那人が此事を了解したならば、必ず之を德として、日本に酬ゆるであらう、酬ひないまでも、日支兩國の善隣關係は此事より生ずると考へる者もあるようであるが、私は之を以つて、日本人の自惚れ根性の甚だしきものと認めざるを得ない。如何にも關稅自主權の第一聲を發した外國は日本であるが、之に關聯して幾多の條件を付し、其れ等の條件に依つて、自主權を實質的に皆無に近からしめて、尙ほ支那人に一種の恩惠を賣ひようとする、私の認めて以つて誤まりとする所以である。

更に今回の關稅會議を機會として、支那の關稅率は或る程度の増徴が認められる、更に釐金撤廢を條件として、關稅自主權が與へられ或る種類の物資に對しては、協定稅則の束縛が加られるとしても、結局支那の爲めに關稅に増率を施し、財政上に、國産保護の上に、其利用さるゝに至るは、必ずしも遠しとしない。此際に私が支那の爲めに、關係諸國の爲めに、將た又國際經濟全體の爲めに、要求する所は支那が固陋の經濟思想に左右されて、關稅權を利用し、以つて鎖國經濟の實を擧げるに勉めはしないかと云ふ一事である。支那が鎖國經濟を實現する目的を以つて、或は外國に物資の輸出されることに禁制を加へたり、或は外國資本の移入を制限したりした例は既往に於て、稀なりとしない。米の如き從來其輸出を禁ぜられて居つたし、鐵に就ても亦民國四年の特准探採鐵鑛暫定辦法並に民國七年の鐵鑛公司監督權限章程を以つて、或は鐵の輸出を禁止し、或は鐵鑛の採掘に外國の資本並に技術者の加はることを禁止した。是等は何れも人爲的に内國に於ける天然資源の供給の不足することを防ぎ、以つて或は自國民の食料を豐富にし、或は自國に工業を盛ならしめるの用意に出でたものと解される。支那の經濟思想の如何に固陋を極めるかは、此一事に依つて、之を知るに難しとしない。關稅自主權の賦與は更に此點に一歩を進めしめる所以と爲る。故に私は關係諸國が協定稅則に依つて、支那に於ける關稅自主權の適用の鎖國經濟を實現する方便に供せられる勢を防ぐことを必要とする以上は、同時に天然資料の開放又は其輸出を自由にする保障を支那に付せしめて、以つて支那を國際共通經濟の圏内に導くの更に必要なることを信ずるのである。從來日支經濟の提携とか、聯合とか云ふことは、屢々一部の人士に依つて、主張された。然も今や支那に關稅自主權の與へられ、而して其無理解に、或は或る邪念を以つて、運用されることは、却つて日支經濟上の關係を疎隔するに至る虞れの極めて大なる場合には、私は協定稅則の制定から、更に經濟係項の協定に向ひ、以つて日支經濟上の關係を密接ならしめる工風を講ずることの緊切なるを認めざれば、已まないのである。

支那政府の編成に係る國定稅則案中、輸出稅に係る規定を見るに、

競爭品無稅。原料品稅七分五厘乃至一割二分五厘。保護品一割二分五厘乃至二割。穀物糧食輸出に關する稅率は時に從ひ、之を定め、、財政部は命令を以つて、臨時之を變更する

とあるが如き、如何に支那が蒙昧なる經濟思想の下に課稅に依つて、天然資料若しくは原始的産業の産物を國内に留保するの希望を懷くに熱心であるかを語るものであつて、私は日支兩國

經濟上の利害に訴へて、右の如き輸出稅は或る期間は從來の如く五分の稅率を以つて、繼續せしめるも、其以後に於ては、之を全廢し、同時に特殊の場合の外に輸出に制限禁止を行はしめざることゝするの必要を認める。卒先支那關稅自主權を承認した我國としては、一方に此程度の代償を收め、關稅自主權の運用に依つて、我國の對支輸出上に蒙らんとする損失を此方面に於て賠還しなければならないことゝ考へられるが、果して如何なるものであらうか、私の一個の問題として、掲げる所である。

更に支那關稅權に關聯して、其行政權を支那に回收すること、關稅增收額の使途を如何にす可きやと云ふこと、其收入を保管する機關を如何にするやと云ふことに就ても、自ら問題を惹起す。既に關稅自主權の支那に與へられる以上は、關稅行政權亦當然支那政府に掌握せらる可きものであつて、多年英國の培養し、維持し來つた自國を中心とし、他の關係諸國を協力者とした稅務司制度は斷絕し單に關稅收入の外債の擔保に充てられることとの關係から、外國人を稅關行政の顧問に任用する程度の關係を存するに止まるものと認めなければならない。關稅收入の保管銀行に支那銀行を加へることも、亦當然の處置と爲るであらう。若し其れ關稅の增收額を如何に處分するやと云ふことに就ては、今回の會議に於て、相當に議論を惹起す種子と爲るかも知れない。然し議論の紛糾するのは、各國が自國一個の利益を目標とするからであつて、若しも諸國が公正なる見地に據つて、問題を解決する態度に出でたならば、必ずしも事の錯綜せざるを得るであらう。關稅が外債の擔保に充てられて居る關係から云へば、其增收を以つて、外債の整理を行ふのは、當然であるが、左ればと云つて、支那政府の財政窮乏に關する事實亦之を閑却するを許されない。要するに適當の割合を定めて、兩者の間に分配するの至當なるを見るであらう。

最後に私の一言したいのは、我國工業の對支移動に關する問題である。嚢に述べた通り、協定稅則に依つて、一時我國の對支輸出品に對して、支那の課する輸入稅を制限するを得たとした所で、其協定たる片務のものたるを免かれない。支那は何處までも自主權の精神に基いて、斯る片務の協定を打破し、自國の欲する儘に、稅率を加重することを企てゝ已まないであらう。然らば我國の對支輸出品は今後常に支那關稅の增率に就て、脅威を感じ、安んずる能はざるに至る。我國が工業の面目を一新し、恰も現在の英國の爲すが如くに、精巧品の製造並に輸出に努力した所で、永き期間の後には、矢張り支那關稅政策の犧牲と爲らざるを得ない。玆に於てか我國工業の一部を支那に移し、支那に供給する物資は支那に於て製造するの方針に出づる

ことを必要とする。此場合に支那の勞力と原料とを利用し、之に日本の技術と資本とを加へて、以つて支那に販路を維持することは、日支經濟提携の見地から云つて、事の宜しきを得たものと認められる。固より此場合に日本の資本家が其資本家特有の精神を發揮して支那の勞働者を虐遇し、以つて其間に利益を貪らんとするが如き方法に出でたならば、過般上海に於て出現したと異ならざる爭議や、混亂を見ることは勿論であつて、資本家として對外企業を經營するに當つて、大に戒めざる可からざる所である。而して我國工業の一部分を支那に移植した後に、內地の工業に生じた缺陷を補塡するには、資本の潤澤なる供給を必要とし、此點に缺くる所あつたならば、徒に內國工業の規模を縮少するに終るの結果と爲る　從來內國の對支事業關係者は一意支那の關税權を束縛して、税率を低廉ならしめることの外他に望む所を持たなかつた。今後は協定税則に依つて、依然有利なる地位を占めんと欲し、此點に於て、政府を督勵しようとする次第であらうが、一度び公會の席上に於て、我國政府の代表者が自主權承認を言明した以上は、到底片務不對等の協定税則に固執するが如き、許され可きものではない。我國として支那に與う可きものは之を與へ、支那から收め可きものは、之を收め、其間に我國として對支經濟關係の發展を謀らなければならないのである。

最近改訂出版した拙著「國際經濟と國民經濟」第五章に對支經濟政策に就て卑見が述べてある。本論文と併せ一讀されたい。

以上執筆した後、偶々配達された十一月二日東京日々新聞夕刊を見るに、北京電報として、支那財政家の間に、日本の支那關税自主權承認並に互惠税率採用に關する提案に對して、悲觀説の行はれつゝあることを揭げて居る。悲觀説の根據を要約すれば（一）自主權の實現までに十七箇年を要し、其間二分五厘の附加税に制限されては、日本に取つて有利であるが、支那の得る所、極めて少なきこと、（二）自主權實現までの暫行期間內に、差等税等を設けるとしても、日本の對支輸出品は必需品多くして、奢侈品少なきを以つて、是れ亦日本に有利であること、（三）支那の國定税則に對して、關係諸國の同意を要するのは、一方に自主權を與へて、他方に之を奪うものであること、（四）支那から日本に輸出する物資は棉花、豆粕の如き免税品が多いから、互惠税則の下に於ては、支那は日本からの輸入品に對して、課税に困難を生ずることの四點に概括される。然らば是等の事たる、私が曩に日本の自主權承認、之に伴う條件が如何に支那に迎へられるか、結局支那人に取つて有名無實のものと爲りはしないかと論じた所と符節を合はすが如き次第で

あつて、私は日本の自主權承認に關する聲明が外交上に幾何の好結果を齎すかに就て、愈々疑惑の念を深うせざれば、已まないのである。（十一月二日夜認む）

右執筆後、東京日日、東京朝日兩新聞の北京電報に北れば、英米兩國は釐金廢止に至る暫定稅則として、最高一割二分五厘を認める議を決し、又差等稅率を用ひず、總ての物資に一率の課稅を爲すの意であることが傳へられた。關稅自主權恢復の如きは、假令ひ架空の事件ではないとしても、現實即時に支那に利益を與へるものではない、暫定稅率を七分五厘に制限され、幾年かの後に自主權を恢復するを得る約束の下に立つよりも自主權恢復の約束はなくとも、目前に於て、一割二分五厘の課稅を爲すを得るを以つて、支那に取つて、便利であるとするであらう。而して差等稅率を排して、一律の稅率が英米兩國に依つて、主張されるのは、即ち精巧品を有利なる地位に置いて、粗製品を不利なる境遇に居らしめ、日本の物資に對して、英米兩國の物資を優勝者たらしめんとする英米兩國の奥の手の漸く外部に現れ來つたとす可きである。日本たるもの、能く當初の主張を徹底せしめるを得るかどうか、關稅會議の我國に取つて、次第に困難を及ぼしつゝあるの狀は明に之を看取するを得るのである。

軍事行動による社會統制とその崩壞

長谷川如是閑

軍國階級が、社會の統制に於て、支配的地位を占めるに至つた事情に就ては、私は既にそれを、いろ〳〵の角度から觀察した。（本誌に於ても嚢に「倫理及び法理の基底としての生活」並に「二元社會に於ける文明の成立と崩壞」等の論文で、その問題に觸れた。）この一篇は、それを「行動」の方面から見て、軍事行動そのものの性質が、軍國的支配と結びついて、一般的に優越的地位を占めるに至る過程と、さういふ變質的現象が社會進化によつて崩壞する過程に就て考察しやうとするのである。

こゝで軍事行動といふのは、國家といふ特殊の體系を組成するに至つた組織的武力の行動をいふのである。それは個人の場合の『腕力』と同じやうな力が、群的に、社會的に、發動するに當つて取つたところの經路であるが、さういふ力が群的に働く場合の事實を知るには、先づ個的に働く場合について觀察せねばならぬ。

人間に限らず、すべて生物は、その生存の鬪爭に於ては決して所謂體力にばかり依頼するものではない。生存の鬪爭

といふことを生物間の爭――或は同類間の、又は異類間の――とすると、その爭に於て優勝する方法にはいろ〳〵ある。生物學者が『自己保存』又は『護身』と呼んでゐる生物の生活現象は、生物に於けるその方法が殆んど發達した人間の方法に譲らないことを示してゐる。それは皆防禦の方法として發達したものであるが、同時に攻撃の方法に於て同様の發達を遂げてゐることを證明するものである。防禦の點に於ては、動物は殆んど人間の場合を凌駕するほどの――少くともそれに劣らぬほどの――方法をもつてゐる。最近の而して最大の人類戰爭であつた世界戰爭について見ても、その防禦の方法を類別すれば大體、下の五種である。即ち(一)は器械的防禦で、例へば裝甲、保壘、鐵條網の類である。(二)は藥物的防禦で、毒瓦斯の類である。(三)は視覺的防禦で、所謂カモフラージの類、(四)は威嚇的防禦で、砲、城砦、軍隊其の他の武器、人員等を擬裝して、敵を威脅する類である。(五)は詐術的方法で、プロパガンダ、僞報、密偵の類である。然るに、生物の防禦方法について生物學者の擧げてゐる事實は、右の五つの方法のすべてを網羅してゐる。即ち、種々の動物の持つてゐる鱗甲、殼、針、棘、毛、皮膚等は前掲(一)の器械的防禦に相當し、又(二)の藥物的防禦は――人間はたゞ毒瓦斯の外は顯著のものを持たぬが、――生物に於ては、有名なヘピリ蟲や鼬の放屁等を始め、特に個體の犠牲に於て種の安全を防護する方法として、身體そのものに毒物を藏するものがある。ハンメウ、毒蝦蟇、河豚の類がそれである。(三)の視覺的防禦に至つては、所謂カモフラージは、人間が却つて動物のそれに學んだのであつて、生物學者のいふ保護色、ミヽクリー、マスキング等が人間の手本となつたのである。(四)の威嚇的方法も、動物には、丁度中世期の武人の裝身具と同じやうな色彩形狀を備へた威嚇的體裁を生態的に備へてゐるものがある。甲蟲や鹿、水牛、等の角は武器としての効用の外に、その形相の威嚇的であることを特徴としてゐる。又毛蟲、芋蟲、蝶、蛇類、鷲、獅子、その他に於けるやうに、色や羽毛やの威嚇的なものもある。殊に生物學者が Terrifying と

砕してゐる方法は、生物が或る場合に威嚇的形相を示すのである。例へばシャチホコ蟲といふ蛾の幼蟲が、敵に會ふと、その頭部を、鬼の面のやうな形に變化させるが、その面と見へるものは悉く僞物で、恐ろしい兩眼、鼻、口等はすべて眼でも口でもないのである。これは延封時代の甲やそれに附屬する假面、馬裝に用ゐる假面等と全く同じ効用をもつものである。種々なる防禦法のうち、生物に於て人間の場合ほど完全してゐないのは、たゞ（五）の詐術的方法である。これが人間に於て特に發達してゐる防禦法であるが、然し動物にも或る程度までこれがある。即ち前に擧げた保護色、ミヽクリー等が既に詐術的方法であるが、特に Terrifying は實際具有してゐない力を恰も具有してゐるが如く見せる方法の一種であつて、しかも、その方法が、敵たる生物の特殊の經驗に依賴してゐる點で、人間の場合の詐術と最も密接した性質のものである。又ミヽクリーの一種で、或る蜘蛛は、形を蟻に似せるため、八方に張つてゐる足を特に前後に延ばして蟻の足のやうに見せ、前足を蟻の觸角のやうに頭部に浮動させて、さうして蟻の巣に侵入して、蟻の蛹蟲を取るものがある。又蜘蛛や蛾に、死を裝つて防禦に備ふるものもある。動物も形態的にはいろ／＼の詐術的方法をもつのであるが、殊に今揚げた蜘蛛や蛾の例の如きは、單に形態的に欺くに止まらず、動作的に欺くのであるから、人間の場合の詐術に近いのである。

右の防禦方法の例でも明かである如く、生物は、その鬪爭に於て、一般的に一定の方法を備へてゐる。人間の場合も、實はたゞそれの進化したものを有つてゐるに過ぎないのであつて、決して特異の方法を人間だけが具有してゐると考へてはならぬ。攻擊に於ても、人間の攻擊力は、他の動物に比して到底比較にならぬほど發達してゐるが、然しそれは悉く器械と組織の發達である。一般生物に於て、形態的又は生理的に備つてゐる方法を――即ち身體的に備はつてゐる方法を――人間の場合はその心理的發達による叡智の作用に基いて作られた道具によつて完成せしめたのであるが、その

道具の作用は、全く、生物の形態を以てする作用と同じ範圍を出ないのである。鱗甲や爪牙や角や嘴の放屁やが、甲冑や劍や鉄砲や毒瓦斯のやうに進化したが、それら兩者のもつ機能は全く同一である。しかも極めて細かな部分までが同じ範疇に屬してゐることは、如何に發達したカモフラージも畢竟、尺取蟲や蝶類や虎や豹やのミヽクリーやマスキングやと同じ機能を働いてゐるに過ぎないやうなものである。

個體の防禦——攻撃も亦積極的の防禦である——は畢竟個體保存に缺くべからざる形態的又は行動的現象である。闘爭は、それ故に生存過程に於ける積極行動として、それの能力を失つた生物は滅亡せざるを得ない。しかも此の闘爭の形は、生物の進化に伴つて變化するものである。所謂、生存を爭ふ方法は、動物同士の喰ひ合ひ嚙み合ひから人間の毆り合ひ、斬り合ひ等までは、一括して初歩的の方法であるが、心理作用の發達に伴つて腕力的闘爭は計畫的となり、更らに制度的となつて、知力や經濟力やの爭ひと進化する。武力的闘爭は、それ自體に於て既に知的、制度的方法の幾分を含んでゐるが、根本的に腕力的であることを特徴とする。

個體は體力や精神力を以て自己を防禦するが、元來、この防禦力は決して如何に堅牢な體力や心の力やをもつたものと雖も決して絶對的ではない。云ひかへれば如何なる個體も、個體としては滅亡の運命を免れない。從つて如何なる生物も、個體として生存を持續せずに必ず種として保存される。即ち、個體は一定の時期に死滅するが、其の個體の裡にある種の系統が絶えず新たな個體を生み出して保存される。謂はゞ生物は、單獨に保存されずに數で保存されるのである。

一つの生物は、縱にその系統に於て數的であるが、横にその現在の生存に於てもやはり數的である。個體が保存されるには、必ず數の力に依賴する。個體が弱ければ弱い程、數に依賴する事も大きい。數が少なければ少い程、個體の大

きさと强さに依頼せねばならぬ。が、一般生物界を見渡せば、個體の大きさと强さに依頼するものよりも、數に依頼するものが遙に多い。要するに、總ての生物は、何程かの程度で、必ず數に依頼して生存する。從つて、如何なる生物も必ず群的に生存する。群的とは即ち數によつて生存する場合の組織である。云ひかへれば、如何なる生物も必ず組織を持つ。

組織は元來動物にあつては生存行動の組織である。動物に於ては、生存とは行動の連續である。無行動の生存なるものは、動物に於ては考へられない。何となれば、生物を組織する細胞の生存が環境に對する運動によつて始めて持續されるといふ狀態にあるものが動物なのであるから、動物の生命は運動にある。尤も生物は總て動的である、たゞ植物のやうに、極めて緩漫な運動をとるものと、動物のやうに迅速な運動をとるものとの差があるのみであるとも謂はれる。植物でも、バチルスのやうに殆んど動物的に運動するものがあるが、それは元來動物と植物との間に、確かな限界がつけられないといふ事である。植物でも既に多少動的であるから、一般の動物に於て、行動が生存の唯一の過程である事はいふまでもない。動物が群的に生存する組織といふものは、從つてこの行動の組織に外ならない。人間も、また決して例外ではない。人間の群生活は行動の組織である。（生活が心的に偏すると、往々群を必要としない狀態に陷る事のあるのは――例へば宗教家の隱遁、又は哲學者の孤獨のやうに――即ち群が、行動の組織である事を說明してゐる）心の共通、云ひかへれば、群に於ける一致した心、『集團心』とか『社會心』とか呼ばれるものは、實は、群的關係行動の與件たるに過ぎない。群行動の關係がなくなれば、集團心も、社會心もなくなる。

されば、總ての行動には組織がある。前に述べた生物の個體保存の防禦的行動は、之れを個體的に見たのであるが、一定の生物は、必ず一定の同じ方法をもつてゐる。即ち、生物の生態が一定してゐるやうに、その行動が一定してゐる

のである。この一致は、即ち生物が群棲する先決問題である。總て一定の行動をもつ生物は、悉く群棲するとは限らないが、群棲する生物は、必ず一定の生態と行動とによつて統一されてゐる。群棲は、生態の一致からは必然には來るものではないが、行動の或る程度の一致からは、必然に生まれざるを得ないのである。云ひかへれば、稍復雜な關係的行動は必ず群棲と一致する行動である。行動の孤立から、行動の組織に進めば、必ず特殊の効果をその行動が用ふる事となる。それが即ち群行動である。

生物の防禦並に攻撃に於て、最も力強いものは、即ち組織を持つ群的狀態のそれである。而して、その最も發達したものは、人間の軍事的組織である。あらゆる行動が、人間に於ては組織的となるうちにも、軍事行動の組織は、殊に有力に發展すべき條件の下にあつたのである。

二

人間の社會の組織が、如何なる行動に於て、最も有力に發展すべき性質をもつかに就ては議論もあるが、それは、歷史的には、鬪爭の組織が最も有力であつたかの如く見える。その事は、或は、戰鬪の行動が、人間の能力並に心の働きを極端に利用すべき必要をもつといふ所からも證明され、又或は、軍國組織が人間の歷史に於て、最も偉大な、最も完全な組織として、第一着に完成された事からも、證明されるかのやうに見える。言語の發達の如きも、戰鬪行動に於ける合圖、激情等を有力の起源と考へるものもある。然し、生存の組織が、戰鬪に於て最も有力であるといふ見地は、實は、唯人間の心理に刺戟の強く感ぜらるゝものが、最も有力な現象であるかの如くに考へられる意識の傾向によつて誤られてゐるのである。戰鬪の行動の緊張的、即ち危急存亡的である事は、人間に極端な反射運動を起させる、從つて激

情を起させる。それが行動の特殊の發展を促す事は事實である。然し、人間の行動の組織は、必ずしも壓縮された短い期間の壓迫によつてのみその成立が刺戟されるとは限らない。緩漫な、長い期間の生存の必要は、より堅固な、より永久的な組織の動機となる。生物が組織の最も發達した効果を擧げるのは戰鬪そのものよりも外の生活に於てである。營養行動、生殖行動等は往々、戰鬪を惹き起すが、然し、その營養、又は生殖そのものの組織として、極めて發達した組織的行動、即ち社會的行動をもつに至るのである。戰鬪の組織しかもたぬ社會といふものは、決して發達した社會とはなり得ない。軍國組織といふものも實は、その華々しい効果は、單に軍事行動に依つて持ち來たされたものではなく、平和な生産行動が、所謂軍國文化の實質を形作つてゐるのである。戰鬪行動の組織はたゞそれを挑發し收穫し享樂する組織に過ぎない。

けれども、特に人間社會に於ては、軍事行動の組織は、單なる戰鬪行爲の組織たるに止まり得ない事情がある。その事情を研究すれば、戰鬪行動の集團が、社會的優越を占むるに至る事情が判明する。

戰鬪行動は、生物に於ても、決して單純な物理的重力關係にのみ依賴してはゐない。即ち單に體重とか、筋肉の强さとか、角や、牙の鋭どさとかのみが、戰鬪行動に於ける決定力ではない。前にも云つた如く、生物は一般に相手方に恐怖、疑惑、斷念、躊躇等を起さしめる方法をもつてゐる。之れは動物の戰鬪に於て、既に心理的効果が利用されてゐる事を示すものである。云ひかへれば、動物の戰も、幾分心の戰ひを含んでゐる。この戰鬪に於ける心理的効果といふものが、特に重大に人間社會の戰鬪に於て働くのである。

一般動物の場合にも、心的効果は敵方の心の作用を利用する事と、自分自身の心の作用に依賴する事との二方面があ

る。例へば前に擧げた、鯱鉾蟲の Terrifying の場合にも、敵がある形相を具へたものを、恐るべき敵であると考へる經驗的の心の狀態を具へてゐる事を利用すると同時に、鯱鉾蟲自體に於て、實力をもつた敵に對し、敢えてこちらの實力で對はずに、威嚇的の形相を現はして、敵を壓迫するといふ叡智作用をもたねばならぬ。アメリカのある昆蟲は何ら毒を含んでゐない針を、非常に有毒の針であるかの如く見せかけて、人間をさへ欺いてゐるのである。アメリカ土人は、その蟲を非常に危險な、ガラガラ蛇 (Rattle-snake) よりも恐れてゐるといふ事である。即ち、さういふ昆蟲でさへ敵を欺瞞する叡智を、高級の人間と同じやうにもつてゐるのである。一般にさういふ叡智が、特に戰鬪によつて發達した事は事實であるが、必ずしも戰鬪のみが、さういふ叡智を生むものでない事は、種々なる生產行動に於て、其生產行動を怠つたもの、或はその行動を妨げ、又はその道具を汚損したものは恐ろしい神罰を蒙むるといふ迷信の今日迄殘つてゐる事によつても察しられる。いづれにしても、戰鬪行動は、敵と當方とが、心的關係に於て優越を爭つてゐる事が、體力その他物理的力で爭ふ事にも決して讓らない事は明である。

人間の鬪爭行動は、それ故に力の爭ひであると同時に、心の爭ひである。殊に、人間の爭ひに於ては、結極、心の優越が爭ひを決定する。所謂『心服』が最も決定的の勝利を持ち來す條件であると認められてゐるのはその爲めである。從つて戰鬪に於ては、力が最後の決定力をもつた場合にも、その決定される狀態は心の重力關係である。蓋し、生物の爭ひと、人間の爭ひとの顯著な差異は、後者に於ては爭ひの決定が鬪爭者の間に統一關係を持ち來すといふ點である。蟻の戰鬪のやうに、やはりさういふ統一關係を持ち來すものもあるが、然しさういふ關係の最も發達したものは人間のそれである。而して、さういふ統一關係を圓滿に持ち來すには、物理的强制のみによる事は出來ない。必ず其處に或る程度までの心の壓迫が必要である。從つて、人間の爭鬪行動の組織、即ち軍事行動に於ても、力の壓迫と同時に、心の壓迫を組織的に

企てる事になる。之れは原始部落に於ける闘爭に明かに現はれてゐる。

原始部落の闘爭は、必ず平常群生活の協同の行はれてゐない集團の間に實行される。此時代に於ては、群生活の協同を統一する心の狀態は、所謂共同祖先の信仰である、其の祖先は、自然物であつたり、動物であつたり、人間であつたり、神であつたりするが、その最も初步的のものは所謂トーテムである。即ちトーテムの一致が、群生活を統一する意識狀態であるから、このトーテムの統一のないものの間にのみ戰爭が起る。而かも戰爭の結果は、結局戰闘者同士が、一つの群に纏められるといふ結果になるから、自然、トーテムをどうするかとふ事が問題になる。此の場合に、必ず勝利を得た方のトーテムが支配する事に歸着するが、どうしてさうなるかといへば、征服された者が、勝利者の生活に統一されるが故に其トーテム信仰に一致するのである。さうして初めて戰爭が共目的を達する事となる。從つて戰闘行動の初めから、トーテム信仰の征服といふ事が企てられる。迷信による群の統一――共同祖先の信仰による統一――を以つて、被征服者を統一しやうとする事業が、必ず軍事行動の途連れとして働くのである。武器をもつてする征服は、同時に信仰を以てする征服でない譯に行かない。白人が黑人を征服しようとする場合には、先づ布教によつて優越神の成立を企て、然る後、武器の壓迫を加へるのも亦その筆法である。

其處から軍事行動は、當然一つの精神運動として現はれる。前に云つた如く、この精神運動は、對外的に敵に對するのみならず、內部に對する軍事行動の精神として、堅固に成立する事が必要である。この內部的の信仰が成り立たない時には、その迷信は、決して對外的の力をもつ事は出來ない。從つて戰闘行爲は、人間に於ては、精神的の動機が恰もその前提であるかの如くに意識される。征服事業が、祖先神の命令であると感じる事は、あらゆる民族戰爭の意識であるが、それは實は、榮養、生殖その他の必要によつて起る生物學的生存運動に伴ふ迷信であつて、一定の行動に緣起す

る心の働きに過ぎない。即ち、この心の働きが先きに起つて戰爭が次いで起るのではなく、先づ戰鬪行動が衝動的に起つて、然る後にそれが意識に反映して、右にいつたやうな迷信的心の狀態が起るのである。軍事行動は、生物學的戰鬪行動が運動を起すのであるが、それが意識に反映して、迷信的軍事精神が次いで働くのである。所謂軍國的精神はこの過程によつて發生したものである。

三

民族は、決して共同祖先を事實上もつてゐる譯ではないが、然し、あらゆる民族的集團は、必ず共同祖先の迷信をもつ。之れは迷信ではあるが、共同生活の群を統一するに最も力強い意識の狀態である。それは、人間の生活協同の衝動が、先づ生物學的群、即ち種の群から始つてゐる事、他の生物に異らないからである。種は即ち母體と娘體の連續であつて、所謂親子關係を基本とする。この母子の關係が生活協同の最も最初の形である。即ち血統による關係が最も最初で、そして最も力強い協同生活である。從つて、群が澤山になつた場合にも、その澤山の人間の間に、最も堅固な關係が成り立つと考へさせるものは、是等の人々が、皆血統の續き合ひであると信ずる事である。この信仰が、何よりも統一を力づける。從つて何等血統の關係のない者同志でも、共處に密接な生活の協同が始まると、軈て血統の續き合ひを容想するに至る。ソリダリティーとフラタニティーとが、常にくつつき合つてゐるのもその譯である。何等血緣關係のない者が、兄弟の盟といふ事をするのもそれと同じ理由である。

そこで、軍事行動の場合は、一般生活行動の場合と同じく、やはり、その戰鬪行動の協同關係に於て、極端に祖先神の命令を高調するのである。元來、共同祖先又は共同神の信仰は、強ち、戰鬪から出たのでなくて、寧ろ生産分配の關係

から出てゐるのであつて、共同で獲物を集め、共同でそれを消化する統一關係が、先づ血統の續きから起つた爲めに、一般さういふ共産生活の統一に於て、共同祖先の信仰が起つてゐるのである。戰鬪行動は、之等の生存過程に於て、極めて緊張した一時期を劃するものであるから、從つてそれに伴ふ信仰も緊張せざるを得ないのである。即ち民族的感情は軍事行動に於て最も緊張するのである。然るに、民族的生活に於て必然である感情が最も強く現はれる行動は、逆に民族の意識に反映して、最も強い刺戟を與ふる事となる。是れ、軍事行動が、一般生活行動を凌いで、最上級の民族的集團の行動である如く意識せられる所以である。

所が、それはたゞ意識の錯誤であつて、事實生活の協同を統一してゐるものは、戰鬪行動ではなく、生産行動なのである。民族的生活の繁榮は、決して戰鬪行動それ自體によつて持ち來されるものではない。エヂプトの文化も、ソロモンの榮華も、軍國的統一の結果には相違ないが、その文化といひ、榮華といふものそれ自體は、悉く廣い意味の生産行動の結果から成り立つてゐるのである。軍人の持つ劍、王侯の住ふ宮殿でさへも、決して戰鬪行動が造り出したものではなく、一に生産行動の賜である。而も、かやうな生産行動の果實は、これまた一に生活の密接な協同に基づいて出來たのであつて、協同なしには一切これらの收獲もない。從つて、軍事行動ではない是等の生産行動の協同が、如何に重大であり、又復雜であるかゞ思ひやられる。而かも所謂民族精神は、この生産行動の協同を意識する事が出來ないで、軍事行動のそれのみを顯著に意識するのは、たゞ、その感覺に依賴した錯誤である。道德も、法律も、哲學も、生産行動の協同心を意識する事が出來ないで、一に軍國的行動の協同心だけを見出してゐたのは、道德も、法律も、哲學も、この民族的に錯誤した意識に基礎してゐたからである。

軍事行動が、特に民族精神を重んずる理由は、右に述べたところによつて明かであるが、而かも、心の統一は、所謂『制

度」の形で現はれた場合に始めて完全に集團的となる。制度は或は意識的に、或は無意識的に、一定系統の行動を强制する心的態度である。軍事行動の精神が、前に云つた事情で强く支配する結果、社會的統一を支配する制度が、甚だしく軍事行動の系統に傾くに至る。法律、道德、宗教から、言語、態度、衣服、住宅一切の文化的現象が、軍事行動の本質に强く影響された形で現はれる。無論、かゝる場合に於ても屢々云つた如く、その文化なり、又社會的生存そのものなりを支持する行動は、軍事行動ではなく、生産行動なのであるが、當時の社會意識は、さういふ事實を發見しないで、軍事行動に刺戟された感覺に依存して、全く錯誤的に組み立てられる。それが即ち軍國的精神であり、その精神と協同して一切の文化組織を組み立ててゐるのが即ち軍國々家である。だから之れを喩へれば、軍國精神は一種の酩酊狀態である。酩酊者は、事實彼れの生存を支へてゐるものは、彼自身の生産行動であるに拘らず、酩酊心理によつて、酒のみが生存の動力であり、酩酊狀態が、最も理想的の心的生活であると考へるやうになるのである。

四

軍國精神は、心理的には酩酊である事上述の如くであるが、然し、軍事行動それ自體は、極めて重大な生存行動であつて、その信仰狀態が、酩酊的であるのと正反對に、その行動が、確實鞏固であらねばならぬことは、又極端である。蓋し、前に云つた如く、生存行動の最も緊張した、所謂危急存亡的のものが即ち軍事行動であるから、その個々の行動なり、その統一組織なりは、極端に引締られた、殆んど行動の精髓をそれに見出し得る程の確かさと、重要さをもつて現はれて來る。所謂眞劍の行動である。如何なる怠け者も、如何なる無頓著者も、仙人も、デカダンも、軍事行動の發動の瞬間に於ては、本能的に眞劍になるのである。而して、この眞劍味に、その組織が確實に適合してゐればゐ

る程、立派な軍事組織が成り立つのである。軍事行動の眞劍味は、それが精神的の値打ちをもつてゐる事は決して拒なれない。

然らば、軍事行動の組織は、その行動並に組織に於て、社會的行動並に組織の精髓として現はれて來る事もまた必然である。從つて、軍事行動者の偉大なるものが、人間の最も偉大なるものとして現はれる。之れが人間意識の最も初步的な狀態である。尤も、それは必ずしも原始的の意識ではない。原始的な人間は、生活行動の偉大な管理者を、最上級の人間としたのである。原始部落の長老は、腕力その他の戰鬪力に於ては、無論若い者には及ばないが、部落の營養行動並に生殖行動の管理者としての機能の爲めに犯すことの出來ない優越者として、神に近い人間と崇められたのである。而も、さういふ生存行動の組織は、部落の接觸による戰鬪生活が始つてから、その機能を戰鬪の優越者に讓らざるを得なくなつたのである。

戰鬪の優越者と雖も、決して腕力の優越者ではない。所謂軍國精神の心的統一の中心である事が、一層重大の資格である。神話の英雄神のやうに、腕力も、精神力も一樣に優越な軍國的偉人は嘗てなかつた。それは、彼れが、腕力そのもの丶優越者ではなくて、腕力の組織に於ける優越者でなければならないからである。

軍國組織に於ては、そこで、腕力は只の道具となつてしまふ。組織を統一する行動の一致は、もはや強制力では持ち來たされなくなる。軍國組織は、組織外の隷屬民を、結局物理力で壓迫する組織であるが、單純な物理力が働くのは、創設の時期に於てである、總て軍國組織も亦、所謂心服を持ち來たす眞實の努力又は欺瞞的の努力を用ひなければならなくなる。同時に、軍國組織の內部關係に於て、生存組織の內部關係に於けると同じやうなソリダリティーとフラタニティーとが、制度的となつて堅固に支持されなければならぬ。それには、人間社會に本質的な、協同の行動に伴ふ精神狀

態が支配せねばならぬ。

而かも、軍事行動が、最も緊張した生存の闘爭である爲めに、その組織が極端な形式的完全狀態に進むのである。完全といつても無論、他の生活行動の組織に比較しての話であるが、如何なる軍國々家に於ても、軍事行動の組織は、あらゆる他の行動の組織をぬきいでて、比較を超越する位進んでゐないものはない。それは一つには軍事行動そのものの性質による事であり、又一には軍事行動の集團が、階級的に全社會を支配する事の結果である。

軍事行動が、あらゆる生活行動に比較して完全の域に進む事情に就ては、右に云つた後の事情、即ち軍人が支配者であるといふ事情が第一原因をなすものであるが、然し軍事行動そのものの性質上、行動の優越性をもつ傾向が含まれてゐないならば、決して軍國的支配が、歴史に遺したやうな狀態で成立する筈がない。そこで、次に軍事行動の性質に就て考へて見なければならぬ。

一般に、ある行動が、生存上有力に成り立つ爲めには、二つの基礎條件がある。一つは本能傾向の力強さ、即ち無意識的能力であるが、他の一つは、意識的、即ち意志作用による行動の選擇である。軍事行動は、それが本能的に力強い事は既に一般に認められてゐる事實である。そこで軍事行動の組織は、この力強い本能に基礎する意志傾向をもつた組織である。而して行動に於てこの二つの關係がどう現はれるかといへば、一つは筋肉的の發動となり、一つは指揮命令となる。個人の行動に於ても、第一に筋肉が強くなければならぬと同時に、それを働かせる統一的の力、即ち意志が強くなければならぬ。筋肉作用と意志作用とが、共に鞏固に存在し、而して二つのものの關係が最もよく符合する場合に行動が甚だ有力となる。

其の關係は、行動が組織的となつた場合にも同樣である。筋肉の組み合せが、群的に働き、意志の組み合せが、また群的に働くが、やはり、群的意志と、群的筋肉とが、共に力强く、且つ一致符合せねばならぬ。軍事行動に於ては、前者を支持するものは所謂訓練であり、後者を支持するものが規律である。故に軍事行動の組織は、規律と訓練の組織である。

ところが、意志作用は內的關係であるから、迷信的心理や、制度的心理となつて、その心的運動を統一する方法をとるだけで、その手段は、軍律を始めとし、一般軍國々家の法律、道德、宗教、哲學等の諸制度並に學問となつて發展するが、どこまで行つても內的發展であつて、外的にそれが働き出したところで、それによつて出來上るものは書物位のものである。之れに反して、行動の組織に至つては、一切が外的である。一擧一動が、空間なり、時間なり、物體なりと交涉を生ずる。訓練はこの行動の統一であるが、然し行動が右のやうに、悉く外界または外物との交涉である爲に、訓練といふ事は一に外的條件に依存せねばならぬ。其處から軍事行動の驚くべき範圍の擴張が惹き起されてくる。

第一に、軍隊組織が、この行動の空間的關係並に時間的關係から生まれてくる。軍隊は今の軍人が講釋してゐるやうな、精神の組織ではなく、行動の組織である。軍人が、空間的に動かないものであるならば軍隊は生れない。即ち宗教團のやうな精神團ではない。行動が斯くして組織化すると同時に、この團體は、何を目的とするかといへば、攻擊及び防禦であつて、攻擊及び防禦は、始めに言つたやうに、或ひは機械的であり、或は生態的である。生物に於て機械的な防禦攻擊の機關が生まれるやうに、人間の軍隊に、攻擊及び防禦の武器が生れる。而してこの武器に相當した生態的條件が具らなければならぬ。即ち武器に相當した筋肉の訓練が行はれる、更らに之に次では、之等の武器並に筋肉の效用を完全にする組織的方法が必要となる。即ち、それは筋肉並に武器に關する科學と、それらの一切を支持する經濟即ち

軍備の科學とである。故に之を總括すると、軍事行動は、（A）團體の訓練（B）筋肉の訓練（C）武器の發明（D）運動並びに武器の科學及び（E）軍備の經濟である。即ち軍事行動の組織には、意志作用、筋肉作用、並に智的作用、之れを要するに、人間の心的並びに行動的の一切の根本的なるものを要求してゐる譯である。

なほ、軍事行動の組織に於ては、その精神的行動并に組織を完うするが爲めには、常にこれを動用狀態に於て保たねばならぬ。恰度動物の生活が、運動の系統であると同じやうに、軍隊の生命は運動にある。この運動狀態は無論やはり運動の道具によつて制限される。それは即ち交通機關である。輜重もこの交通の一態樣である。そこで更らに前に擧げた軍事組織の内容に（F）交通が加はる。而かも、軍事教育の之等の内容は一に經驗的のものであるから、軍事の發動に關する過去の經驗が、行動そのものの内容に關してのみならず、その行動の歴史を探究する事が必要となる。恰度哲學を研究するのに哲學史が必要であるといふやうな意味で、軍國の歴史が軍事行動の組織の最も重大な經驗となる。そこで更に、（G）歴史が組織の内容に加はる。要するに（A）より（G）に至る軍事組織の經驗的内容は、一般生活行動の經驗内容の全部を含んでゐる譯である。

軍事行動の組織が、生活行動の内容と、全然形式的に一致するといふ事は、軍國的支配を完成するに極めて有利な事實なのである。云ひかへれば、軍事行動の完成は、形式的にそのまゝ生活行動の完成と一致するのである。この事實は、前に擧げた（A）より（G）に至る内容に就いて少しく考察すれば直ちに明らかとなる。

生活行動も、やはり筋肉的、精神的訓練を基礎とし、その兩者の働きが組織的に統一される事を條件とする。生產行動の組織に於ては、それ故に、筋肉の發達、その運動、及びそれに伴ふ心的修養、並びに協同動作の組織的統一が出來上つてゐないものはない。管理作用、動作の統一並に職業的集團の精神等は、軍隊のそれよりも寧ろ恒久的に、且つ堅固に形造られてゐる。更らに、道具の發達に於ても、生產行動の道具が、武器に劣らず發生する。然しながら、社會を統一する階級の行動が、生產行動でない爲めに、軍國組織の物質的並びに精神的要求に應じたものだけである。例へば、食糧をつくる組織的行動、即ち農業は　最も近代に至る迄は、殆んど數千年間進步しないといつてもいゝ位幼稚な程度に壓迫されてゐた。之れに反して、軍事行動並にそれの要求する武器その他に關する生產組織は著しく發達して、數千年前の昔に、既に發達の頂點に達してしまつたものもある位である。農具が、最近代までは、何處の國でも依然として、原始的の鋤や鍬の程度を出なかつたに反し、刀劍その他の武器はその實質に於ても、その文化的發達に於ても、農具などとは較べものにならぬ程早くから立派に完成されてゐた。

それと同じ事は、心的經驗に於ても認められる。軍事行動の精神、軍國組織に伴ふ制度習慣等は、既に數千年の昔、大軍國々家が出來上つたと同時に、後の文明國も企て及ぶ事の出來ない位立派に完成された。軍國階級の道德、哲學、規律といふやうなものは、その後も千年前の軍國々家のそれを凌ぐ程立派なものは決して出來ない。要するに、總て軍國的のものは、軍國的支配の完成とともに發達し、一切の生產的のものは、極端に壓迫されたのである。それは、生產階級が、軍國階級の奴隸だつたからである。

けれども、軍事行動の組織は、それ自らの發達に於て、前に言つたやうにあらゆる人間的行動の形式を包含してゐ

た。その團體訓練に於て、哲學を要求してゐたやうに、その筋肉訓練に於て、生理學、心理學、美學を成り立たしめ、武器、輜重、交通に於て、物理學、化學、經濟學等を成り立たしめ、又特別の歴史を作つて經驗的事實の蓄積を豐富にした。之れを要するに、形而上學、精神科學、自然科學等のあらゆる文化的經驗が特に軍事行動の組織を機緣として成り立つたのである。

軍事的訓練は、行動の相互關係、即ち、行動管理の極端の狀態を機械的に必要としたと同時に、精神的にも必要としたものであつて、一言で云へば、軍隊に於ける人的關係は、社會に於ける人的關係を極端にコンデンスしたものである。だから、社會がある人的關係を實現しやうとする場合に、軍隊的であることが一番その目的に適ふといふ事になる。從つて軍國主義的命令服從の關係が、恰も理想的の關係であるかの如く形式的には思はれる。

筋肉運動にしても、軍事行動の最も完全な機械たるやうに組み立てられた筋肉は、實際人間の筋肉狀態としても最も完全な形式を具へる事となる。農民の筋肉狀態は、實質的には完全ずべき傾向をもつが、その形式は所謂意識目的によつて整へられたものでないから、決して人體美を現はしてゐない。之れに反して軍人の筋肉は、一つは軍事行動の意識的運動の爲め、一つは所謂生態的威嚇機關として威風堂々たる事を必要とするので、意識的に、作爲的に、殊更じみた人體美を造りあげる。それは作爲的な形式美に陷り易いが、一般の美感を誘惑するには充分である。從つて軍人が人體的に讃美の的となる。藝術家が人間美を表現させやうとすれば、無意識に軍人的典型をとるのもその故である。(近代に至つてさういふ美學は崩壞したが、それは軍國組織の衰頽に伴ふ生活意識の回復である。)

武器の發達が、如何に人間の科學的要求を刺戟するかは、最も原始的な武器が、既に立派な科學的構造をもつてゐる事によつても察しられる。刀劍、槍、弓矢、その他原始的武器の構造は、極めて些細の點に至るまで、恐しく科學的で

ある。最も原始的の武器のブンメラングが驚くべき科學的發見であつたやうに、如何に原始的な武器でも、その精密な科學的意識による目的をもつた構造は驚くべきものである。刀や槍乃至弓矢の構造はその長短から、そのカーヴ、全體の釣り合ひ、重力關係その他に至るまで、少しでも無意味な變更を加へれば直ちに不完全となる位精密に科學的に企てられたものである。原始農具、漁具、その他の生産用具も、總て嚴密な科學的條件によつてゐる事は驚くべき程であるが、然し、到底武器の完全さには及ばない。生産用具が武器よりも發達したのは最近代の事であるが、それは總て軍國組織の衰頽に伴つて始めてさうなつたのである。數千年の間は、軍國精神が他の生活精神にぬきんでて精練されてゐた如く、武器、その他の軍事的必要品が、他の生活用具をかけ離れて發達してゐたのである。

經濟組織並に交通組織に於ても、軍國的必要に關係するものは、やはり最も完全に發達した。之れは強ち昔の軍國々家の成立を見ないでも、後れて興つた軍國々家のそれを見れば明かである。日本の如きも、道路鐵道等は、明かに先づ軍事行動の目的を以つて完成された。所謂、殖産興業は、先づ軍事的必要から出立した。今でも軍事に關する一般の必要がなくなれば、多くの工業は衰頽すると考へられてゐる。科學の研究に至つては、日本は近代的資本主義の影響を受けてゐるので、軍事的よりは、一般社會的要求を充たすべく發達したが、それでも國家的に莫大な費用をかけて研究され、奬勵されてゐるものは、悉く軍事行動に關係するもののみである。營利的には決して日本に存在する見込のない製鐵事業のやうなものも、軍事行動や組織の片割れとして始めて日本に興り、現に存在してゐるといふ次第である。

殊に、生活行動の一切の方面に於て、近代文明に遲れてゐる日本に於て、漸く世界文明國の水準に達し得たものは軍事行動だけである。その精神方面に於ては日本は寧ろ先進であるが、技術方面に於ては鎖國のために恐ろしく立ち遲れ

たにも拘らず、どうかかうか所謂強國の仲間入りをする事が出來る迄に發達した。體格に於ても、軍人のそれだけが、文明人の體格に最も近く接近しつゝある。

次に、經驗的智識に於ても、日本に於ても稍完全に蓄積されてゐるのは恐らく軍事行動の方面であらう。即ち歴史の最も完全なるものをもつてゐるのは軍國社會の歴史である。縱に古今の經過、横に現代の狀勢に就て、比較的確實に豐富に、その資料を蒐めてゐるのは軍國機關だけである。所謂死んだ學問は他の方面に於てもかなり蓄積されてゐるが、現在の行動に當面して、直ちにそれを左右するやうな、生きた經驗的材料を、最も豐富に備へてゐるものは、やはり軍國機關である。

之等の事は、總て傳統的に、軍國々家のもつてゐた特徴であつて、要するにそれは社會の統轄者が軍國階級であつた事の結果である。明治以來の日本が、同じくさうであつたのも畢竟、封建國家の崩壊に當つて、指導的地位をとつたものが、やはり軍人階級だつたからである。從つて、社會は軍國階級を中心として展開したのである。あらゆる特權、あらゆる利益は、即ち軍國階級の獨占に歸し、從つて、最も完全した行動並にその組織をもつものは、軍事行動のそれであるといふ事になつたのである。

六

斯樣にして、人類の社會は、數千年間軍事行動の組織を中心として組み立てられ、發展して來た。けれども、かやうな組織が、人間の組織に絶對的であると考へるのは軍國々家の哲學である。社會を統轄する組織がどんなものであらねばならぬかといふ事は、決して、絶對的には定められぬ。一國の歴史としても、そんな事は決定されて居らぬ。また、或

る時代の狀態としても、總ての社會が、軍國的組織を中心としてゐるものではない。生産行動の組織は一層有力に、如何なる統轄狀態の下に於ても、殆んど一貫して存在してゐた。さうしてその生産行動の組織だけが、確實に、社會的生存を支持して來た。これが心的狀態に反映して、農民心理、職人心理、その他一般生産者の集團心理をもつて、堅固に社會的集團を基礎づけてゐた。長い間の軍國國家の生活に於ても、決して軍事行動のみが、從つて軍人精神のみが、社會人の行動並に心理を占領してゐたのではない。寧ろ數から云へば、社會人の大多數は、非軍事行動の集團、從つて、非軍事的精神の集團心を支持する事によつて、社會的生存を持續してゐたのである。要するに軍國組織、軍國文化、軍國精神といふやうなものは、一般社會人が着せられてゐたよそ行きの着物に過ぎない。社會人それ自體の生活行動並に生活意識は、その晴れ着に煩はされないで、それ自身の素朴的な本質を持續してゐたもの程、堅固な社會人として、より強い生存を支へる事が出來たのである。一般生産階級が、その素朴的の性質を失へば、軍國々家そのものは成り立たない。社會的頽廢が、民族的退化をもち來すの外はないのである。

たゞ統轄者が軍人階級であつた爲めに、それらの生産集團は、その心の狀態、その行動の組織、その行動の手段、道具、並に生活享樂に於て、甚だしく發展の經路を塞がれてゐたのである。ブンメラングが弓となり、弩となり、銃砲となり、その銃砲が日一日と發達したに拘らず、農具が、數千年來同じものに停滯してゐたのは、一方に於て、それらの階級の一切の生活が、極端に壓迫されてゐた事を如實に示してゐるのである。

然しながら、この壓迫は、他方に於ては、生産階級をその社會の文化的頽廢から遠ざける豫期しない効果となつたのである。生産階級の素朴的な心の狀態、原始的な行動の體系等は、自ら彼らの組織を、文化階級の頽廢的の組織と全く別物として保存せしめた。從つて文化狀態は、定期的に崩壞し、文化人はその度毎に悲慘な破滅狀態に陷る事を免れな

かつたが、生產階級は、さういふ向上と墮落に幾分煩はされたにも關らず、その素朴的生活の集團を、單純な、原始的な狀態で、支持する事によつて、進歩のない、然しながら堅牢な存在を續ける事が出來た。

ところが、生產階級の原始的素朴の組織並に行動を、徹底的に攪亂せしめたものは、近代の產業革命であつた。それまでの生產階級は、所謂封建的奴隷であつたが、その素朴的な組織そのものは、封建國家もそれを犯す事が出來ないで、生產階級の集團と、封建的軍國々家とは、ある意味の對立關係を保つてきた。甚だしく壓迫された時には、一揆をもつて之れに反抗し、その對立關係を支持せしめた。然るに產業革命は、封建組織に替るに、機械的の產業組織を以つてする事となり、封建奴隷は、生產組織の機械的組み立てに於ける奴隷となつた。云ひかへれば、軍國奴隷は、產業奴隷となつた。前者は、軍國に於ける奴隷ではあるが、生產行動の主人公であつた。生產組織に於ける主人は奴隷自らであつた。然るに、近代奴隷は、生產組織に於ける奴隷、いはゞ人格が生產機械の一部に過ぎないものとなつた。生產者は、たゞ、機械に對する補助機械に過ぎなくなつた。汽罐に石炭を投ずる勞働者は、自働的に石炭が投入される機械の代りを、人間が勤めてゐるに過ぎない。

此の革命的變化は、自ら社會的統一の中心に變化を與へる譯である。封建時代の生產階級は、軍事行動の目的の爲めに生產しても、兎に角、生產組織の主體として生活行動を系統的に組み立てゝゐた。從つて彼らは、產業の支配者に隷屬するのではなく、軍國的掠奪者に隷屬したのであつた。之れに反して、近代奴隷は、生產組織に於ける奴隷であるが故に、生產組織の統轄者に隷屬する。之れを逆に云へば、多數生產者を統轄するものが、軍事行動の集團ではなく、產業の主人公であるといふ事になつたのである。社會人は軍人に隷屬せしめられる事から、資本家に隷屬せしめられる事

にたつたのである。

この事情が、軍事行動による社會的統轄に對し、徹底的の打撃を與ふる最初の段階である。上に述べ來つた如く、近代以前に於ては、軍事行動の集團が支配したが故に、一切の生活行動は軍事行動を中心として發展する外はなかつたのであるが、從つて、あらゆる文化現象が、軍國文化を主調としてゐたのであつたが、さういふ狀態を成立せしめる根本の事情が、崩壊をはじめたのである。社會は、軍事行動の支配者によつて統轄されずに、産業集團の支配者によつて統轄さるゝに至つた。そこで軍國精神は權威を失つて、經濟心が代つて支配するに至つた。總ての行動は、鬪爭に基づけられたのと反對に、鬪爭そのものまでが、産業的支配の一手段に過ぎない事となつた。鬪爭の形而上學、鬪爭の哲學、鬪爭の科學が、最上位を占むる事を得なくなつて、産業組織の絶對存在が要求する經濟心の形而上學、經濟心の哲學、經濟現象の科學、生産用具の科學、生産組織の科學等が、之れに代つて勃興した。

軍國的統一の社會は、かくして崩壊する順序となつてゐるが、それに伴つて、一切の文化現象が、軍國的基調を離れて、資本主義的となつた。法律、道德、宗教、藝術等の總てが、軍國時代のそれに較べて著しき變化を起しつゝある。けれども、この軍國々家と經濟國家との地位轉換に於ては、現代は猶ほ過渡的狀態を示してゐる。これを世界的に見て、目下は猶ほ資本主義中心の世界の完成期にあると見なければならない。唯、確實な事は軍國々家が崩壊の過程を進んでゐるといふ事である。

（終）

東大を去らんとする 鳩山秀夫論

思想的にも方向轉換を望む

片山哲

一

鳩山博士が今度東大教授の地位を捨てゝ、在野法曹界に投ずるといふ報道は、各方面に可なりの興味を與へた樣である。博士としては豫定の行動であつたかも知れないが、法學界の氣運が、遂に彼をして方面轉換を餘儀なくせしめたことを考へると、博士の教授辭職問題は、實は東大法學界の思想的分野とその歸趨を雄辯に物語つてをることを感ずるのである。

博士が初めて大學の教壇に立つて民法の講義をしたのは、たしか故川名教授の補講として物權法の講義をした時であると聞ひてゐる。當時法學界の麒麟兒として、若き學生達に多大の期待を受けてをつた彼れは斷切れのいゝ、明快なる口調を以つて、難解な物權理論を何の苦もなく、痛快に說き來つた手腕とその頭腦に對しては、何人も驚嘆措く能はざる所であつた相である。その當時はたしか、明治四十四、五年の頃で、獨乙法學が全盛を極め、概念法學の將に最高潮に達せんとするの時期であつた。由來大正七八年の交まで、彼れは教壇に於て、或は雜誌、著書に於て、細に入り微に渉る解釋法學の論法を以て、他人の追隨を許さゞる優越せる獨歩の地位を保つて來たのである。ところが、思想界、否法學界に於ける動搖は、遂に概念法學派にも及び、其學風も段々と、瑣微論的研究に終始するの悲哀をつく〴〵感ずる樣になつて來たのである。博士に依つて代

表せられ、支持せられる同學派も遂に東大法學界に於て昔日の優位を保つこと能はざるの運命になつて來たのである。今回の辭職問題はこの間の消息を明かに示してゐるものと看取しなければならぬ。

□

東大には社會法學を說き、或は自由法學を唱へる牧野、穗積、末弘の三博士がある。各其の特色をもつて、獨自の地位を有することは勿論であるが、概して三博士は同じ方向に驅する學者である。處が鳩山博士に至つては全然別個の方向に進み、他の軌道を步みつゝある學者である。例へば、牧野博士は專門の刑法學に飽き足らずして、近時民法、或は一般社會法學の範圍に突入し「民法基本問題、法律に於ける進化と進步」等其他數種の著書を出して思想の豐富なることを顯はしてゐることは言ふ迄もない所である。穗積博士は又講演に於て、雜誌に於て、國際問題、婦人問題、教育問題等を論じ、「離婚制度の研究」を著はし、親族法、相續法解釋以外に、其の蘊蓄を傾けてゐる。末弘博士に至つては、民法の講義以外に多才多能を發揮し、勞働法制の研究に從事し、「農村法律問題、法窓閑話」を著はし、帝大セツトルメントを經營してゐるなど、夙に人の知る所である。之に反し、我鳩山博士は常に民法の研究に沒頭し、一路民法總則とか、民法債權各論とかのみ突進してゐるのである。民法以外の論文を書かなければ、又それ以外に筆を染めやうとはしない。唯僅かに「震災後の法律問題」「婦人問題と民法」「本年一月日々新聞所載」とがあるけれども、これとても民法の範圍を出でず、又解釋論の延長としか受取れないのである。博士の筆端、否思想は社會評論家、或はヂャーナリストには全然適當しないのである。此の點に於て博士は前記牧野、穗積、末弘の三博士には一籌を輸せなければならない。

しかしながら彈力性なく、融通性に乏しき博士の文章、思想は、反面に於て純眞なる民法學者たらしめるに充分にして又必要なる要素と爲つたのである。ヂャーナリスチックに所々方々に色氣が多かつたならば、到底今日の民法學第一人者たるの地盤を築き上げる事が出來なかつたであらう。側目もふらず、一路民法學の蘊奧へと邁進し、我法學界に於て古今獨步の地位を贏ち得た事は、彼としては當然の歸趣でなければならぬ。加ふるに細微なる技巧と、水も洩さぬ論陣に至つては、到底穗積、末弘二氏の及ぶ所ではない、實に博士は論理の雄將である。

□

論理の雄將も時代思潮には抗することが出來ない。自由法學の勃興は概念法學の凋落を促し來つたからである。博士の辭職は総ての宿望であると言ふかも知れぬが、事玆に到らしめたことは、時代の潮に流された社會現象の一つであると見なければならない。又、止むを得ざる氣運である。しかしながら博士を目して、たゞの概念法學者と見るのは大なる誤りである。試驗管を振り〱しながら條文の適用を研究し、顯微鏡を覗きながら、法理を探究し來つた其の細微綿密なる態度と努力には、多大の敬意を拂はなければならぬ。築き上げたこの土臺は、他日何等かの効果を發揮し得るものであることを信ずる、否、發揮することを希望して止まないものである。博士が一作年歸朝後發表した論文に「債權法に於ける信義誠實の原則」といふのがある(法學協會雜誌十三年一月號より所載)。堂々たる大論文であるから、一々之を紹介することが出來ないが、右論文中に於て博士は「信義誠實法學」なるものが、自由法學と並び唱へられるべき、法學上の大原則なる旨を力說してをられる。正義、公平、信義、誠實なる觀念は法律學上重要なる地位を占むべきものなることを、特に信義誠實の原則は我債權法を支配すべき基本觀念なることを強く主張してゐる。殊に震災後のバラック建設問題、保險地震約款の問題等につき權利の濫用は法の保護を受けるべきものでないことを詳述してゐる。而も得意の緻密綿を吐くが如き論法を以て、取引の法的債權關係を說き來り說き去つてゐる。その精巧と努力に至つては、さすがに民法學界のオーソリチーなる事を推賞するに躊躇するものは無いであらう。

□

「信義誠實法學」の提唱は、たゞに法學上のみならず、社會的にも價値多き好論文である。又近時に於ける法學上のよきテーマーたる事を失はぬ。しかしながら、惜しむらくはそれに餘りに純法律的であることである。勿論純法學の學究雜誌へ學術論文として發表したものである故學術的なることは當然である。然しながら、社會的、思想的方面へ今少しく開展し、其羽翼を延ばしたならばといふことを思ふ。今直ちにそれを希望するのは無理かも知れない

大科學者も、もとは試驗管を振つた、顯微鏡も覗いた。しかしながら何時までも顯微鏡と首つぴきでもあるまい。今迄地味にコツ〱作り上げた健實なるデッサンの上に雄々しく飛立たなければならない時が來るであらう。法學者も、哲學者も、社會學者も同じことであらう。玆に於て我等は、博士に切望して止

まぬことが澤山あるのである。行き詰つた解釋法學の講壇を捨てゝ方向轉換をやつたのであるから、この機會に思想的方向轉換をして貰ひたいのである。更に雄大に、更に思想的に、尙更に社會的に、その鋭利なる學力と學究的態度を向けられん事を切望して止まぬものである。「信義誠實の理論は私法上のみならず公法上に於ける大原則である」と看破して居るならば、これを思想的ターニング・エポツクとして新天地へと展開せられんことを勸めるや切なるものである。

□

博士の大審院判例批判は權威あるものとして可なり世間の注目を引いた。今度は立場が違うけれども、博士の提出する上告理由は朝野の視線を集めるに充分であらう。技工論戰の時代は既に過ぎ去つて、堂々の陣を張り思想的に戰ふべき時代が來つてゐるのである。大審院は既に信義誠實の原則が我法律上の大精神であることを認めてゐるとはいふものゝ、個々の問題になると、なかなか左樣でもない。男女間に於て、勞資間の雇傭取引問題に於て、地主小作人の耕作權の問題に於て、動ともすれば「信義誠實の原則」が反古にせられやうとしてゐるのである。博士は故に「信義誠實法學」を提唱してゐるのである、それは論理の遊戯であつてはならない、實戰に於ける鋭鋒でなければならぬ。故に講壇を去つて街頭へ乘り出したのであるから、「信義則」を眞つ向に振りかざされんことを願ふものである。裁判所に於ける老大家連は、或は自由法學を目して法律生活の安固を害し之を破壞する恐るべき一種の流行病であると目するであらう。同樣に、又信義誠實法學をも自由法學と並ぶべき流行病と診斷して終うかも知れない。博士は之に對する反駁論を次の通り述べてゐる、「併し余は信義誠實の原則に從ふが爲めに法律生活の安全を害すといふ危惧は寧ろ机上の空論であつて、實際上さして心配に値すべき結果を生ずるもので無いと信ずる（中略）所謂文化規範を研究し、生きたる法律を研究し、社會法學の研究する所に從つて信義誠實の原則を適用することは今後法律の發達に貢獻する所以であらねばならぬ（前記論文一月號參照）」と。行き詰つたる在來の天地が解放せられたことを感ずる、健闘を切望する所以である。

□

教授を辭して辯護士となつた諸博士は、今迄は大抵、老大家連であつた。地位の問題からか、或は健康の問題から辭職する方が多かつた。鳩山博士の場合は全然其の趣を異にしてゐる。

趣が變つてゐるだけ、それだけ法學界のみならず、一般社會に投ずる波紋は大きいに違ひない。博士が辯護士になるといふことは辯護士界に對して、たしかに一つの清涼劑を投じたものである。辯護士の品位を向上せしめ、辯護士の主張をして學術的ならしめ、眞面目ならしめる意味に於て、辯護士界は誠意を以て博士を迎えなければならぬであらう。而して、何時までも民法學者の權威として博士を遇し、更に自由なる研究と發表をなす機會を與へなければならぬ。この好機をターニング、ピリオドとして概念法學より徹底的信義誠實法學へ突進せられんことを切望して止まぬものである。

卓越せる法律技師

赤松克麿

一

法學博士鳩山秀夫氏は、我國法學界の有する概念法學の金看板である。かつて石阪音四郎博士によつて、殆んど完璧の域に達した概念法學の塑像は、鳩山氏の妙技によつて、更に一段と磨きをかけられた。概念法學は一種の技術である。成文法の文字的構成によつて豫定された一個の概念を至上命令として、それを論理的に數學的に展開して行くところに頭腦の明晰と精緻とを誇る概念法學者は、一個の優秀なる法律技師である。此の意味に於て、我が鳩山博士は、我國法學界に於て最も卓越せる、技神に入る底の法律技師である。或は氏は、我國法學界空前のそしてまた絕後の法律技師かも知れない。

概念法學には哲學がない、社會科學がない。そして創造がない、進化がない。それは世のうつりかはりに頓着なく巍然と中空にそゝり立つ中世の古城である。國家至上主義的な官僚主義的な時代には、此の頑固な、獨斷的な形式法學にも歷史的使命はあつた。特に我國のやうに傳統勢力の根強く植えつけられた政治組織に於て、概念法學は永く我物顏に法學界を支配して來

た。そして此の家傾の學派に對して反抗する自由法學乃至社會法學の新氣運が起つて來たのは、つい近頃のことである。自由法學乃至社會法學は法律の社會化であり民衆化である。それは概念的法律構成を、高踏的な獨善的な帝座から引きづり下ろして、時代思潮の流れに浮べんとするものである。階級鬪爭が行はれ、普通選擧が實施され、勞働黨が生れやうとする時分に概念法學の礎石のゆるぎ出したのは當然である。我々はむしろ自由法學乃至社會法學の蹶起のおそきを憾む位である。

自由法學乃至社會法學のチャンピオンは、牧野博士、穗積博士、末弘博士である。そして今や帝大の法學界は、自由法學及社會法學のチャンピオンによつて、生々潑溂たる新風雲が捲き起され、さしも頑丈に築き上げられた概念法學の樓閣も、次第に蒼古な沒落の色調を帶びつゝある。法學界に於ける概念法學の運命は、また我が鳩山博士の學者的運命を語るのではあるまいか。尤も、最近に於て鳩山氏の思想的轉換の傾向が多少示されないでもない。例へば昨年發表された「信義誠實の原則」といふ論文の如きは之れである。しかしながら鳩山氏は今後其の異常なる天分を傾到して、法學の新天地を開拓する氣力を持つて居るだらうか。私にはどうもさう考へられない。氏の示した最近の新傾向は、其の豐かなる才分が、何んでもひと通りはやつてのける技能を示したに過ぎないものであつて氏が概念法學に於て樹てたと同じ功績を自由法學又は社會法學に打ち樹てることを豫示するものではないやうである。第一、博士の頭は比類稀なる論理的精緻を示しても、其處に哲學がなく創意がない。概念法學の權威が自由法學の權威に飛躍するには、そこに越え難き溝が横つて居るのではあるまいか。第二、博士の性格が今後、生一本な學者的軌道を辿つて行けるかどうか疑問である。近く大學の講壇を去つて辯護士界に入らんとする博士の生活傾向を見て、私は益々その感を深うするのである。

二

鳩山博士を學者として見れば、前述の通りであるが、一個の人間として見れば、多藝多才な通人である。氏は碁もやれば將棋もやる。ゴルフもやればダンスもやる。また柳暗花明の趣味についても中々隅に置けないといふ。かくの如く實に趣味が多方面であり、そして何をやつても可成りの所まで熟達するといはれて居る。すなはち極めて器用な、近代的な、そして貴族的な趣味の人である。氏の性格は順境に伸びた人に通有であるところの、善良た御坊つちやんらしい鷹揚さを備へて居る。氏を親しく知る人は、誰もが氏の性格から流れ出る親切さと快適さ

とを稱へたいものはない。畢竟するに、鳩山氏は、人としては善良た、多才た、貴族的快樂兒である。

鳩山秀夫、穗積重遠といへば、そのむかし帝大の二秀才として並び稱せられ、大いに前途を囑目されたものであるが、兩氏とも順風に帆をあげて着々健鬪を重ね、今日に於ては、何れも押しも押されぬ學者的地歩を法學界に築き上げるに至つた。こうして轡をならべて來た二秀才の一人は、今や學界を去つて實社會に投ぜんとし、他の一人はあくまで講壇を守つて學者的軌道を歩み續けやうとして居る。論理の俊敏に於て鳩山は穗積に優り、思惟の彈力性に於て穗積は鳩山に優るのであるが、學者としての資性からいへば、鳩山は遂に穗積に及ばざるものゝ如くである。性格上の偏倚性も限度を越しては困るが、學者として成功するには、或る學者的偏倚性を必要とする。此の意味に於て、多藝多才、八面玲瓏の性格の所有者は、學者としての生涯を全うするには支障を來たすやうに思はれる。帝大開闢以來の秀才と謳はれた鳩山氏が、學者としての前途の望すくなきを感ぜられるのも、こうした性格の點に、原因があるのではあるまいか。鳩山氏が人間として才彈けて居るのに反し、穗積氏は溫厚篤實、英國紳士の風である。敢て天才的な閃きこそないが、質實な敦厚な歩み方をする穗積氏にして若し長壽を保つならば、やがては帝大總長ともなり、また其他の顯職に就くかも知れぬ。鳩山氏の嚴父和夫氏と穗積氏の嚴父陳重氏との生涯は、或る程度に於て、此の二秀才の前途を暗示するやうにも感じられる。

三

鳩山氏の令兄一郎氏は、秀夫氏よりは輪廓の大きい人物だといふことである。秀夫氏の言を藉りていへば、一郎氏は大臣級の人物であるといふ。そして令弟は辯護士界に入つて大いに令兄を援けるといつて居るさうである。兄弟の情濃やかなるを察すべきである。一郎氏は現在政友本黨の幹部として政界に重きを爲して居るが、秀夫氏よりは重厚の風があり、人物の器も大きいやうである。秀夫氏が辯護士界に入れば、斯界の學者として重きをなすのは當然であらうが、世俗的なる成功率に於て、一郎氏には一籌を輸するであらう。かつて秀夫氏が歐洲に游んだとき、外務省の委囑を受けて、外交關係の會議に臨んだことがあるが、語學は出來るし學問はあるし才氣もあるので、大いに重寶がられ、石井大使などは氏を是非外交畑に迎へたいとの懇望があつたといはれて居る。このあひだも山川條約局長の後任として、鳩山氏を迎へやうとする外務省方面の意向があつた

が、それも石井大使の推挽によるのだといふ話である。しかし鳩山氏は之を拒絕した。蓋し鳩山氏が外務省官吏としてどれだけ伸びるかは疑問であつて、氏がそれを拒絕したのは自らを知る賢明の策だとの評がある。要するに鳩山氏は、今後辯護士として斯界に重きをなし、一方令兄の政治生活を援け、自らは大した野望を抱かず、一個の善良な才人、通人として心のまゝに生を樂しんで行くことが、氏の將來に取るであらう大體のコースではあるまいか。

我々無產階級の戰線に立つて居るものから、大學敎授や辯護士を見るとき、人によつて親疎の度合ひのさま〳〵なるを感ずる。或る人々は殆んど我々の戰線に參加して居り、また他の人とは、我々の戰線より遙か遠方の地點に立つて居る。鳩山博士の如きは、我々とは可成りの距離のある所に住んで居る人である。私はまだ一度も親しく博士の謦咳に接したことがない。私はたづねられるまゝに、無遠慮に、遠距離の展望觀を述べたまでゞある。妄評の段は謹んで多謝する次第である。

軍教反對同盟に於ける學聯の役割

早大學生　長島又男

歴史の唯物辨證法的説明に對して、勇敢に論駁を加えるのは常に支配者階級であり、事實に於て此の説明を裏書きするのも亦、支配者階級そのものである。資本主義崩壊期に於ける支配者階級は、從來自らを擁護せんがために造り出したあらゆる思想的武裝を彼等自ら解除して、此處に其の本來の姿を一般大衆の眼前に現はして來る。我々は此の支配者階級の×××××××、十月十五日小樽高商軍事教官鈴木某なる者の立案による想定にまざ／＼と見たのである。

然し我々の標的は、單に一佐官輩により立案された想定に非ずして、此の片々たる傀儡の背後にひそむ支配者階級の狡智なる、、そのものである。

○

我々は先づ事實の觀察から初めよう。

小樽高商に「○○○○を敵とし」「天狗嶽の天險により、肉飛び、骨碎け、鮮血滿山の紅葉と化す」といつた樣な悽慘なる想定の下に、國内の無産階級を彈壓する體育の鍛錬、精神の修養を、白晝公然と實行した事實起るや、先づ最先に小樽港三千の鮮人積荷人夫はかの記憶も未だ生々しき震災當時の回想から本能的に、軍事教育の正體の奈邊にあるかを感得し、悄然と立つたのである。次いで小樽勞働組合、政治研究會支部等も此れと呼應して宣言書を發表し、演説會を開催し、學校當局の狼狽も必死の緩和運動も其の効なく、問題は到底僻陬の寒地に閉ぢ込め得ぬものとなつてしまつた。かくして情報一度中央に達するや、其波紋は忽ち擴大して、十月二十八日協調會館に於ける都下各勞働團體、朝鮮勞働總同盟、一月會、政治研究會、自由法曹團、無産青年同盟、學生社會科學聯合會の糺彈演説會となり、更に十一月一日日本無産青年同盟關東青年同盟創立大會の「軍國主義的軍事教育反對の件」なる議案――此の議案は當日此れを議題としたならば、當然大會解散の口實を與へ、同盟成立に

支障を來すことを慮り策戰上撤回されたのであるが――となつて現はれ、最近に到つては軍教問題對案のため、關東組合會議の召集されんとする形勢にまで展開し、正に我國無產階級運動の有力なる鬪爭題目たらんとしつゝある。

○

顧つて思ふ。ブルジョア階級及び其の代辯人たる××及び×××は何が故に體育鍛練、精神修養なる詭辯を弄してまで、かゝる軍事教育を行ふ必要に迫られてゐるか。單に精神修養云々が主眼であり、此度の如き想定――その後續々と現はれて來る事實はあるが――は一佐官、然も陸軍當局の言を籍りるならば、軍事教官は部內の優秀將校の山であるが、かゝる輩の犯した一誤謬(?)に過ぎなかつたか。それとも意識的計畫的な企圖の下になされたものであるか。此れを吟味する必要がある。

○

帝國主義は其の典型たる資本輸出、それに伴う植民地―半植民地の××、それの必然として起る××××なき各國ブルジョアジーによる海外領土の再分割――帝國主義戰爭を生產する。然るに一方又帝國主義の崩壞的矛盾は、國內無產階級解放運動に熾烈なる拍車を加へ、海外×××及び××××に於ける民族解放運動により意識的なる運動目標を與え「帝國主義は無產階級〇〇の〇〇」である、「××× ××××× ××」の標語を、勞働階級は資本攻勢の事實に對して切實に欲求するに至る。

帝國主義の基礎を脅する此の國內及び國外無產階級運動は、支配者階級の如何なる詭辯にも拘らず、ますゝゝ其の勢力を增大する。此れこそは來るべき帝國主義戰爭に於て、ブルヂョアジーの〇〇となり「××××××」××××××××××××××××××ある

あらゆる思想によつて無產階級を麻痺せしんとせしめんとせるブルジョアジーの企圖は、無產階級の不斷の力強き抗爭によつて斷ち切られた。今や無產階級は支配者階級に對する一大脅威として現はれた。支配者階級は、彼等の思想的武器を捨てゝ自ら力を以て武裝せねばならなくなつた。××××××××××××!此れブルヂョア階級の軍事教育を要望する理論的又、實際的根據である。而して此の現實の事實は、眞に彼等の云ふが如く內憂外患に備えんがためである。外患とは××××××――××××××××××――のために全國民を總動員することであり、××××××××××××××

××××××××××。

然らば支配者階級は何が故に學生に對して先づ軍事教育を施行したか。何が故に、學生を先づ選んで自らを防禦するための武裝軍を編成せしめんとしたか。

○

資本主義社會の基本階級ブルジョアとプロレタリアとの中間に浮遊し、やがてはプロレタリア階級に沒落すべき運命を有する中間階級は、帝國主義時代に入つては、自らの地位の沒落にも拘らず、尚昔好かりし日の夢に憧れてゐる。ブルジョアは嘗ては勞働力の××と、資本の確保とを永久化せんがために、中間階級を利用し、此に温き寢床と口に甘き餌とを與へることにより、完全に自己階級の番犬たらしめた。而して此の大量生産工場として學校は增設されて來た。然るに資本主義の矛盾たる經濟恐慌、失業者は、漸く此の忠實なる番犬から其の寢床と好き餌食とを奪つて行く、此處に中間階級の沒落が生じ、その影響は直接に其の生産工場たる學校に於ける製品の生産過剩を來し、此の經濟的基礎の動搖は、その思想に反映し種々なる思想を生産する。然も中間階級のこの社會的性質より生産された思想は、反動的である。ブルジョア階級が此の彼等に取つて有力なる一群に、盲目なる筈はない。ブルジョア階級は此の中間階級の反動的性質を利用し、嘗てブルジョア擁護のため、元的に生産され、その任務を果して來た中間階級を、今や更にブルジョアのため××××××としてゐる。即ち觀念に於てはブルジョアイデオロギーの亡滅に惱まされ、生活に於ては無産階級的水準への低下を强要されつつある學生群に、巧みに食ひ入つて彼等の生活を不安ならしめる責任は、無産階級及び其の一翼を成す無産學生の危險なる行動なりてふ鬪爭的思想を注入し、彼等を驅つて、ファシズム運動を釀成せしめんとする意圖こそ××××××目的である。この故にこそ、學校をして商品製造工場より××××××へ轉化せしめ學生をして「來るべき日」に準備せんがための青少年軍事教育てふ全國民總動員の口火たらしめた所以である。

○

ブルジョア階級の×××××たることを拒避せよ！ブルジョア階級の欺瞞を剔抉せよ！無産階級解放運動の一翼たる全國學生社會科學聯合會は小樽高商の同志より該想定並びに詳細なる報告を受取ると共に、直ちに詰問書を小樽高商校長宛に發送し、高商學生に對しては、別に學聯の名を以てするアッピール

を郵送した。更に十月廿一日文部當局に決議文及び質問書を提出し、其の責任ある答辯を要求したが、文部當局は左の如き返答をなしたに過ぎない。

一、文部當局は該想定を穩當なりと認めるや否や――不穩當なりと認む。

二、是認するとせば其の論據如何――

三、手落ちなりとせば教官に對する處置如何――答辯の限りに非ず。

四、軍教に對する當局の今后の方針如何――從前通り。

此の答辯によつて我々は何を見る。想定を不穩當と認め、然も尚、教官に對する處罰の有無を明白にせず、更に軍教を今后も尚從前通り行ふと。即ち換言すれば、「やゝ奇拔すぎる想定」だから、これをなまぬるいものとして、今后も同様の方針の下に施行すると。これが當局の言明である。敢て問ふ。當局は尚、精神修養云々を口にするの勇氣あるや否や。

ブルジョアは、常に其の行動を詭辯的言辭を以て隱蔽する。それは彼等少數者の支配を、永續化せんがため、多數の中間階級を味方とし、更にプロレタリア階級をも欺瞞せねばならぬからである。そして此の醜なる馬脚は、今や軍教の正體となつて横つた。

此のブルジョアの常套的手段を監視せよ。更に迫る××××××××××××。

見よ！體育云々の美名の下に又しても行はれつゝある全國的スポーツの「奬勵」を！

○

かくして學生軍事教育反對同盟中に於て、吾が學生聯合會に課せられたる重大なる役割がある。それは此の如くにして支配者階級が、意識的に先づ學生群に植ゑ付けんとするファシズムの種々に對して、徹底的に抗爭する任務である。そのためにはファシズムの苗床たる全國各學校に、組織的警戒網と闘爭網とが隈なく張られねばならぬ。

更にも一ツの重大なる任務がある。それは、資本主義の平和的發展期に於て、ブルジョア自からの必要に迫られて蒔き散らしたる自由、平和等の自由主義的種子の發芽に對して豫防することである。此の小ブルヂョア的イデオロギーは、學生運動に多分に此れを包含する故、軍事教育反對同盟中にも其の危險性は豫期し得らるる。此れに對して、學聯は常に軍教の階級性の剔抉に意を注がねばならない。我が學聯は此の反軍事教育聯盟中にあつて、此の自由主義的立場、平和主義的立場への運動の逆轉を防止し、軍教反對運動をして、背后の傀儡師帝國主義の牙城への肉迫たらしめ、全無產階級軍の結成をなすために、軍事教育問題を其の重要なる一闘爭題目にまで發展せしめねばならぬ。

死刑を待つ心

古田大次郎

前記。古田君は讀者諸君も知つてゐる通り、去る十月十五日午前八時二十五分に、市ケ谷刑務所で、一回の控訴もせずに、靜かに死刑の執行を受けた。罪名は『殺人强盗、爆發物取締り規則違反』である。彼が去年の九月十日の未明に、蛇窪の隱れ家でむざむざと捕つて以來、恰度、一年と三十五日の後であつた。その間、彼は獄中で頻りに筆を執つた。そして、書き上げたものに「感想錄」が三十三卷、「思ひ出」が十六卷、外に「小阪事件に關する參考書」が一册ある。いづれも實際に素晴らしく優れた人間記錄であり、そして、古田君であつてこそ始めて書き得たものだと、私は信じてゐる。そして何れも近く何處かの書店から出版したいと思つてゐる。ここに採錄したのは「感想錄」の第一卷と、第三十二卷の殆ど全部だ。だが、ことわつて置きたいのはこの二卷が全部の中で最も優れた部分だと、必ずしも云ふ事は出來ない事だ。唯第一卷は入獄當時の古田君の氣持が好く出てゐるし、第三十二卷は死刑宣告後の彼の面目が如何にもくつきりと現はれてゐると云ふ點で、特に對立的な興味を讀者に與へるだらうと思つたから採つたまでだ。次手に云つて置くが、「感想錄」の第三十三卷は死刑に服罪した後の手記であると云ふ點で、法規に從つて刑務所からどうしても私達の手へ渡してくれない。實に殘念だが、仕方がない。(江口渙記す)

第一卷

九月十日の未明、電報の空際に叩き起されて、のめのめと警視廳に引張られた村木君と僕とは、交る交る嚴重なお取調べを受けた後、檢事局におくられた。檢事局の厄介になつたのは、今度が二回目である。最初は、大正十年十二月の末、例の社會主義同盟發會式當夜の建物破毀事件の嫌疑で、區の檢事局に呼ばれた事である。その時のは、あのやうな小さな事件ではあつたし、おまけに、只の嫌疑だけだつたから、取調べは極く簡單に濟んだ。係りの檢事は、一木喜徳郎の息子だといふ男で、若い好男子だつた。一木檢事は、僕を釋放するに當つて、「これから余り過激に渡らぬやうにしたまへ」と訓戒した。その時その言葉は、妙に胸に響いたが、永い年月の間に、つい忘れて終つたのは、一木君に對して、少少濟まないやうな氣がする。

被告學については、至極智識のうすい僕は、檢事や、警察官の取調べに對して、何んでも正直に白狀しなければならないと考へて、飛んでもない事まで喋言つて終つた。が、司法官だつてあながちに、化石的な人物ばかり揃つてはゐない。僕の馬鹿正直なのを見た檢事は「此奴、まだ、うぶな被告だワイ」と考へたか如何か知らぬが、親切に話しかけてくれて、僕に、前の言葉を取り消すやうにといふ謎をかけた。その謎を解いた僕は、今更ながら僕の氣の利かぬところが氣づいて、恥しくもあつたし可笑しくもあつた。それから、その檢事は、石田三成の故事を例にして僕を訓戒した。僕は、御安心なさいと答へた。死ぬ位ならば、何んの今迄愚圖愚圖してゐるものか、つかまる時、舌でもかんで死んで終ふよと、僕は腹の中で笑つてやつた。

警視廳の留置場に、十九日つながれて、九月二十九日の夕、小雨の降る中を、村木君と僕とは、外の新入諸君と一諸に四人自動車に乘せられて市ケ谷刑務所に向つた。僕の見知つてゐる、毒毒しい赤錬瓦の門は、多分大地震で壞されたのであらう。コンクリートのすがすがしい、洒落たものと變つてゐた。刑務所と名を變へたからには、門まで體裁を作らなくては氣が濟まないと見える。雨は、もう止んでゐた。

門の外で僕達は、細につながれたまま、ゾロゾロと虱のやうに、自動車を降りて、水たまりをよけながら、門の内へ這入つて行つた──のでなくて、實は、引きずり込まれた。今一歩で門の内といふ時に、僕は、これが娑婆の土の踏み納めかと思ふと、妙に心細かつた。さぞ、しよんぼりと、憐れ氣に見えた事だらう。

僕達一同は、それから、いゝ加減あちこち引廻された後、奇體な室につれて行かれた。（この邊はあまり悉しく書かない。刑務所の規則に違反するさうだから。）そこで僕達は、娑婆で着てゐた着物から猿股まで綺麗にぬぎすてて、素裸となり、尻の穴迄檢査された揚句、うす汚い青色の獄衣を着せられた。これで立派な囚人が、一人出來上つた譯である。村木君も、皆と同樣の囚人姿になりすましました。小男の村木君が、うすつぺらな青着物をつけた格恰は、痛痛しい程に身すぼらしかつた。しかし、村木君は元氣だつた。少しばかり顏がむくんだやうに見えたが、大して弱つてもゐなかつた。頭はまるで百日鬘（かつら）のやうで、青白い顏に、無精髭がボソボソと生えた樣は、昔の武士が永らく閉門を仰付けられてゐましたが、今日やうやつと許されましたといつた體裁だつた。二人は、着物の襟にぬいつけられた、番號札を指さして笑ひ合つた。

大分、おそくなつてから、僕達は、點呼を受けて、めいめいの部屋に引きとられた。村木君は、布團を小脇にかかへて、「では失敬」と言ひ捨てたまま、階段をスタスタとあがつて行つた。壯健な姿の村木君を見たのは實にこれが最後だつた。(その後一度村木君と會つたのは、面會に呼び出された際、控室で落合つたので聲はきいたが、顏は見なかつたのである。)二人の肩には、殺人未遂、爆發物取締罰違反、及び、建造物損壞といふ、至つて長たらしい罪名が、しかつめらしい顏をして、乘つかつてゐる。

三疊の獨房に、興奮した身體を横へた僕は、少時してから、氣を落ちつかせて四邊を見廻した。

「たうとう來て終つたのか!」

僕はかう獨言つた。そして苦笑した。それから、暗い電燈を見上げたり、壁を見廻したり、お膳を開けて見たり、物珍しい氣持で室内を験べて歩いた。先輩諸君の獄中記を拜見してゐた僕は、愈々、實際にそのものに打つかつたのだと考へて、言ひ知れぬ感慨にうたれた。僕は、ホツと溜息をついた。そしても一度氣を落つかせて、凝然と考へ込んだ。

深山にゐるやうな靜かさだ。時折、その靜かさを破る人聲が二階のどこかでする。呑氣さうな聲である。その聲が聞えたためか、大して淋しい氣も起らなかつた。けれども、その人聲が絶えると、一里四方には人ッ子一人ゐない所にでもゐるやうな、淋しいといふよりも、異様な物凄い感に打たれた。僕は、又、不思議さうに、電燈を見たり、闇い窓外を見たり、冷たく光る壁を見たりした。

その夜の眠りは、思つたよりも安らかだつた。眠りに落ちる迄は、父の事、兄妹の事、友人の事が、後から後から思ひ出されたが、床について三十分もしない内に、何もかも忘れて眠つて終つた。その夜の夢に何を見たか、今、僕の記憶にはない。しかし、たしかに何かの夢を見た。何故、憶えてゐなかつたか、と、殘り惜しい氣がしないでもない。一層の事、戀人の夢として置かう。この生活を美しく彩どるために。そして、逝いた戀を記念するために。

後になつて聞いた事だが、こゝに來て最初の十日計が、一番淋しい氣持に捉はれるものださうだ。僕もたしかにさうだつた。正直に言ふと、後悔に似た氣持さへも抱いた。一番よく思ひ出されるのは、何んといつても、親の事、兄妹の事だつた。友達甲斐のないやうだが、友達の事は、大阪に苦しんでゐる中濱達の事も、こゝにゐる和田君や村木君の事も、あまり思ひ出されなかつた。氣にはかゝつた。濟まないとは思つた。けれど

も、その時の僕にとつては、友に對するなつかしさは、自分の肉親――殊に小さい妹達を慕ふ心と比べて、殆んど問題にならなかつた。僕は、何故、自分丈好きな事をやつて、妹達の事を考へなかつたかを悔いた。自分の肉親と、穏やかな氣質の兄や、年老いた父と、笑ひ合ひ扶け合ひ愛し合つて小さな世界を作つて生活して行つたら、外の事なぞは如何なつても構はない、友人からあなどられやうが、嘲笑されやうが、そんな事はどうだつていゝ、と痛切に考へられた。この時の僕なら、小さい妹に對する愛のために、惜しむ所もなしに、眞理さへも拋ち得たに相違なかつた。眞理さへも犠牲に出來る、他の事は――――自分の功名心や安樂を欲する心などは、喜んで棄てる事が出來たに相違なかつた。僕は胸の中で泣けるだけ哭いた。耐へ切れなくなると咽び聲が口から出る迄に哭いた。僕は呆然として一日、窓外の青い空を眺めて暮した。

最初の夜が明けて、翌日の晝の事だつた。運動から歸つて來て見ると、差入の辨當が來てゐた。それは、江口渙君からのだつた。僕は、それを知つたとき、計り知れない感謝で胸一杯になつた。急に泣きたい氣持に襲はれた。前に、あれ程世話になつた江口君、面倒も見てくれ、慰めてもくれた江口君。來るとすぐよくも手早く世話をしてくれた、散散迷惑をかけたのに、と思ふと、僕は江口君の志がうれしくて耐らなかつた。僕は泣き出して終つた。そして、泣きながら、辨當を喰べた。涙は、頬を傳つて、ポタポタと飯の上に落ちた。僕は、飯の味も何も解らなかつた。その時の氣持は、今でもハツキリと思ひ起す事が出來る。

僕の父は、僕の事件を、隨分心配したらしかつた。警視廳にゐたとき、根岸特高係長は僕に「君のお父さんは大變心配してゐるよ。輕るはづみな事をしなければいゝがと思つてゐるがね。何分、昔氣質な人だから。」とおどかす積りでもなかつたらうが、話した事がある。それを聞いた時、僕は流石にドキツと胸を打たれた。白い毛が、近頃急に增したやうに思はれる父の顔、涙をたたえた父の眼、最後に別れた時、持病の腎臓炎が少し悪いと言つてゐた、心持むくんだやうな父の顔、それらが僕を叱るやうに恨むやうに、凝然と見つめてゐるやうな氣がした。僕は、非常な不孝を犯したやうに思はれて、心が責められてならなかつた。が、僕は、氣強くも、それを抑へつけた。けれども抑へれば抑へるだけ、僕の胸は痛くなつて來た。

「許して下さい!」

僕は、冷たい床にひざまづいて、かう父に詫ひた。許して下さる!僕はさう、うれしく心に思つた。僕は目を閉ぢて首をた

れ、手を組んだまゝ、長い間、祈つてゐた。

けれども、僕は、父のこの心配も、時が必ず消してくれるものだと考へて、いくらか安心してゐた。人間は、一つ事を、いつ迄もいつ迄も思ひなやめるものではない、時が、その悲しみを消してくれる。父だつて、いつかは思ひ諦めてくれるに違ひない。一人兒ではない、まだ小さい妹もある、それらを思つて辛らい事だらうが、僕の事も諦らめてくれるにちがひない。僕はかう考へて安心した。父は手紙にも言つて來た通り、死に勝る苦しみをした事だらう。泣きもし、怒りもし、恨みもしたらう。父はたしかに僕を怒つてゐた。親を忘れた不孝者だと怒つた手紙を寄せた事もある。父、たしかに恨んでもゐた。安靜だつた家の生活を暗に沈めたのは、お前だと、血を吐くやうな文句を書いた事もある。それを讀んだときの僕の心は、嗚呼、筆には盡されまい！　僕は、唯泣いた。泣いて父や兄妹に謝した。その時計りではない。それから後も、思ひ出す每にいつも泣いてゐる。現に、是を書いてゐる今、少し心をゆるめると、涙で見る眼が霞んで終ふのである。

ああ、簡素なれど穏やかにして樂しかりし我が家庭よ！　母を失つた悲しさを、やうやく忘れかけた賑はしき家庭よ！　それを、一朝にして暗に沈めて終つたのだ。再び、淋しい悲しい家庭として終つたのだ。年老ひて病める父、僕の事件以來、急に身體を弱めた、たゞ一人の兄、年端の行かぬ二人の妹、嫁して平和の家庭を作つてゐる姉――その姉は去年の夏、最愛の男子を失くしたのであつた――彼らはどんなに僕を恨んだ事だらう。けれども、僕を恨み切れないであらう。恨みながらも、僕のために悲しみ、僕のために泣いてくれる事だらう、何も知らぬ妹は、いつかは僕が家に歸つて來るものと考へてゐるのだ。無理もない。自分の運命を覺悟した僕ですら、如何しても、妹とは永久に別れるのだとは考へられぬ。いつかは屹度、可愛い妹に會ふ事が出來る、前のやうに樂しく、山に野に妹の手を引いて遊ぶ事が出來ると思はれて仕方がない。氣休めに思ふのではない。無理に想像するのでも勿論ない。動かしがたい將來の事實として、不斷に僕の胸に描かれてゐる。不思議である。馬鹿馬鹿しい事ではある。がしかし、その思ひは消えた事がない。妹も僕と同じ思ひなのであらう。尋常四年生の未だ覺つかない筆で書いて送つた妹の手紙に、「兄さんお正月には、きつとかへつてゐらつしやいね」としてあつた。僕は妹の心を思ひやつて、それから先を、如何しても讀む事が出來なかつた。

心地よく澄んだ高い秋の空や、輝く陽や、靜かな風や、色づいた木の葉に、僕はしみじみ秋の喜びを知つた。有島武郎君

が、死ぬ前に一度、秋の空を見たいと言つた心持ちが、よく解るやうな氣がした。「死なば秋」と。かつて上司小劍も述懷した。僕は、運動に外に出ると、いつも淋しい沈んだ氣持になつて部屋に歸つた。

『此頃の朝寒夜寒に、どう暮してゐるか、何かにつけて君の事が偲ばれます。靑い空や輝く日を見ると、外に出たい君の心は、十分にお察しします。美しい空や太陽を見ると、僕も鵠沼の事を思ひ出します。犬を連れて、君と二人で海岸を散步した時の事が、まざまざと思ひ出されます。太郎を連れて、藤澤の犬醫者に行つたり、七里ケ濱を磯づたいに、大佛を見に行つたり、海岸の川を、はだしで渡つたりした時の事が、まだ昨日の事のやうに思はれます。そして、中濱君は大阪の牢屋に君は東京の牢屋に、僕はかうして郊外にゐるかと思ふと感慨無量です。』

篠塚にゐる江口渙君が、この手紙を寄せてくれたのは、秋の央、十月の末の事だつた。この手紙を讀んだ時、僕は、江口君の親切や、中濱その他の友達戀しさや、又、過ぎし鵠沼での愉快だつた生活などを思ひ起した。いつもならば、この位の事で大して心も動かす事はなかつたらうが、すつかり意久地のなくなつてゐたので、僕はその手紙を讀みながら泣いて終つた。意地も張りも、僕のうちには、すつかり失くなつて終つたのである。水にしたした紙のやうに、僕の心は弱く、そして全ての事に鈍どくなつてゐた。だから、ともすると泣きたくなるのであつた。

牢獄の春は靜かであつた。死の如く、嚴そかに靜かであつた。嚴そかに、そして靜かに、囚人の春は來たのであつた。歌ふものもない、笑ふものもない。稀に笑ふものも、それは淋しさであつた。自暴であつた。若しくは狂であつた。ここにゐるものは、皆、この三つのものを心に持つてゐる。あるものは、聖者になる。あるものは悪人になる。そして、あるものは、狂者になるのだ。

外では、小さく紙鳶があがる、かすかに羽子板がひびく、梅の花は白く薫る。正月だ。餅を喰はなくてはならないと思ふ。

子供の時、僕は餅が嫌ひだつた。大福を買つて貰ふと、中の餡だけ喰べて、餅の上皮は喰べなかつた。お正月には、僕獨り御飯で濟ました。「お前は變つた子だことね」と、よく母に笑はれたものである。それが少し大きくなると、不思議に餅が、大好きになつた。お正月は、只餅をたべるだけが樂しみだつた。餅がなくては正月らしくない。歲暮らしくもない。餅をたべるから正月らしい。餅をつき、餅を切るから歲暮らしい。ここにゐては、歲暮の氣分は味はへない。せめて餅をウンと喰べて、ウンと正月氣分になつてやらう。から考へて僕は、餅を澤

山注文した。持てあます程注文した。そして、脹になる程喰べた。大方まだ腹に殘つてゐる事だらう。餅腹のまま地獄とやらに行つて見たい。

僕は今年二十六になつた。人生の央を過ぐる事、正に一年。僕は、二十五の年を永久に失つたのが惜しい。「三十までは生きたくない」と、中濱はかつて嘆じた。「五五の春、その春に死んで見たい」と、僕は彼を顧みて微笑んだ。二十五歳で死ねば僕は永久に二十五歳である。人生五五の春。何と云ふ美しさ、何と云ふ淋しさ、何と云ふ心好さだ！　けれども僕はそれを永久に失つて終つたのだ。思へば實に殘念である。中濱もさぞ口惜しからう。何故ならば彼は、三十迄も生きなければならなくなかつたから。

S子さんの事は、時時夢にも這入る。淋しきままに、思ひ浮べるは彼女の幻影である。彼女を夢見た朝の淋しさよ。僕はひしと自分の胸を抱いて、彼女戀しさに思い耽つた。僕とは六つ違ひであるから、S子さんは今年二十になつたのだ。妙齢だからどんなに愛らしくなつた事だらう。しなやかな身體、粧らないでも白い顔、愛くるしい眼、赤い口唇、けれども僕には、今、幻があるだけなんだ。

彼女の事を思ふ毎、僕はいつでも、何故彼女のために一切を犠牲にしなかつたかと悔ゆる。彼女と一緒にゐたなら、貧乏な生活は何かあらう。彼女と僕との、清純にして寂寞たる小さき生活を、僕は涙ぐみつつ憧憬せずにはゐられない。それは良い、時折僕は、正直に告白すると、彼女のためならば僕の良心を賣つてもいいとさへ思ふ。良心を捨てて、僕の唾棄して止まない生活に迄這入つてもいいとさへ思ふ。噫恥づかしく、又、恐ろしき誘惑よ！

けれども僕は、若し、僕が今の生活外に生きたならば、果して彼女を戀したか如何かを疑ふ。たとへ戀しても、今のやうに清く熱烈であり得たか如何かを疑ふ。斯心に生きて、始めて斯戀を得た。この世界に生きて、始めてこの戀人を得た。僕は疑ひもなく斯く信ずる。たしかにさうだ。僕の心が強く清いときに、彼女は火のやうに僕の内に燃えた。彼女が僕の内に燃えるときに、僕の心は、磨いた鋼の如くに強く、且つ清かつた。實に、彼女は、僕の愛らしき護身の神だつた。

僕は先に、僕が彼女と共に生きるならば、どんなに卑しい生活――眞理に背いた生活、良心を裏切つた生活――をしてもいいと言つた。亦、裸裸な告白である。けれども僕は思ふ、若し僕が世俗的に生きたなら恐らく彼女を戀しはしなかつたであらう。僕は彼女を戀せずに、他のより美しきより賢こき異性を求

めた事であらう。彼女は美人といふには縁遠い、けつして醜い人ではないが、とりたてて美しい容貌ではない。彼女は身體が弱い、やせた人だ。肺が丈夫には見えない。腺病質かとも思はれる。その上、彼女の家では、女の子は皆、左利なのである。彼女もさうだ。彼女の妹もさうだ。僕は彼女の左利なのを醜いとも厭はしいとも思はない。却へつて可憐さを增すだけだつた。羽根をつくにも左でつく。僕は、これを知つてから、左利といふことが妙に注意を引いた。生理上どんな害があるか、遺傳するものなのか、そんな事迄氣になつた。母親のものは、男の子が引繼ぐ、僕の近眼がさうである。僕も近眼である。が、姉も妹もなんともない。だから僕と彼女とに兒供が出來たら、男の兒に左利が遺傳するかも知れないなどと、餘計な事迄考へた。眞面目に考へたものだつた。

それはいゝが、彼女は、かうした欠點のある娘である。だから僕に世俗的な欲望があつたら、彼女なぞは見向きもしなかつたであらう。愛するなぞいふ氣は起らなかつたらう。それが、何故、今、僕に忘れ得ない人となつてゐるのかと言へば、彼女と僕の亡き母との關係である。彼女を戀したのは、丁度、僕の母の死ぬ時だつた。母の死を僕は、いつも忘れる事が出來ない。母の死と彼女の戀とは、悲しくも結びついてゐる。僕の心の内に。だから、彼女を忘れる事が出來ないのである。それのみか僕は、母を知らない人を、父母を知らない人を、戀人として愛する氣が出來なかつたのである。彼女は實に、僕の理想的の人だつた。

彼女は、今、人妻である。二十歲の彼女は最早娘ではない。けれども僕の記憶では、彼女は永久に淸い處女である。可憐な娘である。僕は不斷に彼女を愛し、彼女の幸福を祈つてゐる。妹の話によると、彼女は「赤ちやんを生む」のださうである。あの弱い身體で、產は無理だらうと思ふと餘計な心配もしなければならぬ。S子さんが赤ちやんを生むなんて、まるで夢のやうな氣がする。

實に、彼女こそは、僕の愛らしき尊き靈魂である。朽ちざる永遠の憧憬である。死の刹那迄も忘れ得ぬ淸純な夢である。僕は、彼女の幻影に微笑ながら眠るであらう。

第三十二卷

九月六日。日曜日。曇

二、三日見ないと、運動場の草が驚ろく程大きくなつてる。羨ましく思つた。

菊も大分育つた。が、花はまだまだだらう

○

事は東京大阪京都の三都に跨り、被告は、合して二十余名に及び、内検事の死刑を要求されたもの、九名の多きに達した。僕達の今回の事件が、遂に一人の犠牲者をも出さないなんて、…呆氣なさ過ぎて、情けなくなる。一面から言へば官憲が僕達を輕んじてゐるのだ。涙の出る程口惜しい事ぢやないか。

　輕んぜられてもいゝだけの事を、僕達はしてゐるつて？さうだ。それは確かだ。外の場合の事をいふのではない。僕の事を言つてゐるのだ。又、愚痴を繰り返すやうだけれど、僕がもう少し強くあつて、そして注意を怠らなかつたら……。さうだ！、、、。

○

久し振りで雀の聲を長閑に聞く。僕が死んでも啼きつゞけるだらう。

　早く、百舌鳥が鳴くやうになればいゝ。

○

　宵の明星、空低く輝く。

　　九月七日　月曜日。宵。

秋の朝のやうに爽やかだ。

死ぬならば——いつも死ぬ事計りでアタドいやうだが——今朝のやうな時にと思ふ。

○

外はまだ仲々暑い。

しかし吹く風は、何といつても秋の風だ。空も、——水晶のやうに透き通る空も、何處となく秋の色を見せてゐる。

今日僕は何故か、郊外の井の頭附近の景色を思ひ出した。

○

古河三樹松君から長文の手紙。

古河君は、彼の大逆事件で死刑になつた、古河力作君の弟である。同君が兄上と監獄で別れた時の悲しみは、やがて僕の妹達が味ふ悲しみだ。さう思つてつい泣かされた。

　　九月九日

○

早いものだ。愈々明日になつた。待ち遠しい氣がする。不思議な程心は穩やかだ。

近頃になつて、僕はやうやく、死の安らかさといふものが

るやうになつた。

○

近藤憲二君に會つた。

大阪の哲君は盛んに得意の文筆を揮つてゐるさうな。もう小說の三つ、四つも出來たと云ふ。彼の文章も久しく見ないが、相變らず、アノ、とかげが尻を振つて飛びはねたやうな、勢のいい文字を書き擲つてる事だらう。

彼の文章は簡明にして鋭利、獨得の長所が人を惹きつけて仲仲讀みあかさない。

一度あの恰好のいゝ字で書かれた手紙を讀みたいものだが、それも永久に出來なくなつて終つたのだ。

○

曇りだつたので、今日は大變涼しかつた。

去年はまだまだ暑かつた。陽のカンカンあたる六疊の間に寢そべつて、村木君といろいろの話を交はした、あの蛇窪の家がなつかしい。

○

囚はれて初めの内は、まだ何日か妹達と遊べる氣がした。それが大變慰さめになつた。日數がたつて行く内に、その氣もいつかなくなつて終ひ、妹達に逢へても逢へなくても構はなくなつた。そんな事は如何でもよくなつた。

今日、今になつて、始めて、永久に妹達と逢へなくなるのだと知つた。之が一番心を痛める。

夜八時半、雨蕭條と降るを聞きつゝ記

九月十日（曇）

「死刑の宣告を聞きにゆく日。

寶文集の「逆徒の死生觀」を見ると、誰かが、手紙にかう書いてゐる。僕も、その文句を眞似て見たくなつたのだ。

○

九月十日！

去年の今日、朝早く、寢込みを襲はれて村木君と僕は、他愛なく警視廳に擧げられて終つたのだ。

早いもので、もう一年經つた。因緣の深い今日、刑の宣告を承はりに、さア出掛けるとしやうかな。

畜生！變に氣がソワソワして、まるで試驗發表を見に行く中學生のやうだ。及第は解つてゐるが、見ない内は安心出來ない。

歸監後

名判決だ！

僕はかう彌次らずにゐられなかつた。全く豫想通りの、いゝ判決だ。僕の死刑、和田君の無期、倉地君の十二年、新谷君の五年。これなら誰が見たつて無理だとも言ふまいし、安過ぎる

とも言ふまい。和田君の生命が助つたのは、僕も殘念だが、當人も殘念だらう。だが倉地君のには安心した。隨分心配したのだが、十二年ならいゝ。全く僕は重荷をおろしたやうな氣がする。有難い。

○

死刑の宣告は、「實に靜かな氣持で聞けた。僕も、思つたより度胸がある。裁判長の宣告理由を述べた中に、頻に「虛無主義」だとか、「無政府主義」だとか、後者はまだいいが「虛無主義」なんて、之を看板にした當人にもよく解つてゐないやうな變つた文句を亂發した。○○○○○○○○。殊に『虛無主義は外の社會主義とは異なるものだ。』とか、當人も詰らぬ事を言つたものだが、之を御叮嚀に判決理由の中に並べる人の氣が知れぬ。又、僕が、『無政府主義運動の軍資金は須らく○○○○○○○○○○からず。』なんて、言つたかどうか忘れたが、こんな事迄引張り出さないでも好からうに。○○○○○、隨分賑やかになつたし、又、「虛無主義」なる言葉が裁判の記錄に載つたの○○○○○○。」

○

だが、東京の比較的輕かつたのを思ふと、大阪の方の諸君に氣の毒な感がする。六人の無期や、田中君や仲君の十五年など、實に××××××である。東京だつたら、こんな事はなかつたらう。さう思ふと、あの諸君が不運だつたと言はねばならぬ。演鐵君や河合君などは兎に角、外の若い連中が氣の毒だ。口では如何な元氣な事を言つてるか知らぬが、心の中は、乾度寂寥に滿たされてるだらう。

○

豫ての覺悟だつたから、宣告を聞いた後も、怖ろしい事も淋しい事もない。實に靜かな氣持だ。靜かだけれど、呆とした灰色の夢の中にひたつてゐるやうな氣がする。世間が。世界が、急にうすぼんやりして來た。

しかし判決が思ひ通りだつた所爲か、大變愉快だ。僕は今迄、死刑を他の人にも觸れてゐたのだから、若しさうならなかつたら、嘘をついたやらで恥づかしくなるし緊張した氣分が弛んで來るし、大變な、詰らない事になつて終ふ。それが思ひ通りになつたのだから、威張る譯ではないが、心が踊り踊つてるやうで、嬉しくてならない。

夢のやうな氣持も、今は大分ハツキリして來た。

○

後の生命は、幾日あるか、幾十日あるか解らないが、出來るだけ勉強しやう。本も讀まふし、書きもしやう。

今日は、加藤一夫君が來てくれたので、僕達の思想を批評して送つてくれるやうに賴んだ。これも硏究の一つだと思つて。

刑場に呼び出される迄、この感想錄を書きつゞける。

○

假監（裁判所にある囚人監房）で和田君に會つたとき、和田君は、物も言はずに突然手を握つて「しつかりしてくれ」と言つた。僕は「うん。」とだけしか言へなかつた。そして、固く手を握り返した。

法廷を去る時も、今度は外の二人とも握手して別れを述べた。新谷は「すぐ、つられるのかい？」と言ひながら、例の通り苦勞のない笑ひを浮べてゐた。

皆の意見もさうだが、永のお別れの時は、是非會つてユックリ話し合ふ考へである。監獄にも賴んでおいた。それから、死ぬ迄に寫眞を撮つて貰ふ事も賴んでおいた。記念に殘すための寫眞である。それには、執行のすぐ前が一番いゝと思つてゐる。しかし、生憎その頃、髭のボソボソ生えた、汚い時では一寸閉口する。昔でも討死の時は、綺麗に髭を剃るのが定まりだ。僕も、是非さうしたい。そして、マア、人並な面を後迄殘しておきたい。これは、今、こゝで賴んでおく。

○

山崎君から速達で自分は辯護人控訴をする積りだと言つて來た。つまらぬ眞似をする。和田君も僕も、判決に少しも不滿はない所だに。好意は解るし、嬉しくも思ふが、止めて貰ひ度い。

九月十一日

昨夜の眠りは、さすがに淋しかつた。眼のさめた時、何ともいへぬ心細さを感じた。でも大變に靜かだ。

蟋蟀が、朝になつてもまだ鳴いてる。僕もあの蟲とオンナジだ。蟋蟀も屹度、死ぬ迄鳴きつゞける積りだらう。僕も斃れる迄、筆を止めまい。

昨日、面會場で布施君と話してたら、机の下で蟋蟀がないてゐた。

○

昨日、自動車の內から、外の景色を眺めて、これが見納めかと思つたが、別に變つた感じも起らなかつた。和田君を突ついて、如何だいと聞ひたら、同じやうな事を答へた。

これは、多分、皆が揃つてゐて、元氣好くゐられたからだらう。一人ぽつちだつたら、屹度淋しかつたに違ひない。浮世の見納めといふ事が如何な感じを惹き起すか、一人だつたら解つたかも知れない。惜しい氣もする。

○

和田君の無期が問題になつた。輕すぎて、和田君に可愛さうといふのだ。僕も、出來る事だつたら、和田君と一緒に死にたいから、同君が控訴するやうだつたら、お相伴をする積りだ。

○

今日、父がやつて來て、控訴しろといふから、面倒になつて、今言つたやうな事を話して胡魔化してをいた。

○

肉親のものに會ふ程厭な事はない。僕は會ひたくないから、來てくれなんて一度も頼んだ事はないのだが、向ふも會はぬ方が、却つて諦らめがいゝだらうに。

○

父や兄などゝ別れるのは、淋しいとも何とも思はぬが、只妹達と別れるのが悲しい。

○

控訴權放棄――○○んていふ文字は、書くさへ厭だし、○○○なんて思ふのは、馬鹿げ切つた事だが、この際我慢しなくてはならぬのだ――をまだしない所爲だらう。ハツキリと死の覺悟をきめる事が出來ない。從つて、随分呑氣だ。愈々死刑を待つとなつたら、こんなではゐられまい。その代り、いろいろ面白い事に出會はすだらうと樂しみにしてる。

愈々となつてから、遺言狀を書かうし、お別れの手紙も出さう。約束通り、「勞逝」にも最後の原稿を書かう。遺言狀なんて、大袈裟だが、書く程の事はありはしないが、世間並みに、また少々芝居がかつて書いて見やうと思ふ。これを書くと、非常に心が落付くものらしいから。

九月十二日（晴）

晝間は何とした事もないが、夜の眠りは流石に安らかでない。別に變つた夢を見るではないが、眠りが醒めた時に、實に名狀しがたい淋しさを覺える。恐怖といつては當らない。無限の淋しさに沈んだ心とでも言ふべきだ。

これも一つは、キツパリと死刑を承諾してゐない爲に違ひない。腹を決めてゐない爲に違ひない。中途半端な所にマゴマゴしてるからに違ひない。愈々綺麗に覺悟を決めた時は、實に澄み切つた氣持になれさうだ。死の恐怖は、今案外にも殆ど覺えない。却つて早く死ぬ時が來れば好い位に思うてゐる。

○

江口渙君夫妻が來て呉れた。久し振りだ。本當に嬉しかつた。

「君の棺は、菊の花で飾つてあげやう。」

と言つて呉れた言葉が、不思議に忘れられない。

○

マコちやんと、野枝さんの叔父さんとが態々九州から僕達に會ひに來て呉れた。

マコちやんは、尋常二年だそうだ。僕は家にゐる妹を思ひ出す。

○

和田君の控訴はやめたそうだ。これで一切は確定した。僕はこゝ數日の中に、「死刑囚」として取り扱はれるやうになる。死は、そうなれば何時迫つて來るか解らないだ。

一切は終つた。が、別に心に衝撃も受けない。至極穩かだ。江口君の言つた通り、行きつく所へ行つて終つた今日、何の苦もなく悶えもなく、安らかに生命の終るを待つてゐる。

九月十三日（日曜日）

全てに打ち克つたやうな嬉しさを覺える。

○

實際、僕は何處に取柄があるのだらう？　考へると全く悲觀する。時々、自分程愚かな、能なしは世界にあるまいと思つて、一層死んで終ひたくなる。——どうせ近々死ぬのだけれど——生きてゐるのが厭になつて終ふ。

「思ひ出」を讀み乍ら、何度こんな考へをした事だらう。

○

死んでからも、世の中のことを見る事が出來るやうな氣がする。

それも、遠い遠い所からだ。遠い遠い所から、豆粒のやうに小さい人間や、玩具のやうな家などが、チヤンと見えるやうな氣がする。

○

大空や、樹や、家などを見ると、永久にこれらと別れて終ふことが淋しい。が、考へれば考へる程、死といふものが不思議になつてくる。解らなくなつてくる。

○

まだ一度郊外の野道を歩けさうな氣がする。

だが、本統は、永久に出來ないのだ。

たしかにそうだ。だが如何しても、そうは思へない。

九月十四日

厭に、永久にと言ふ。だが、その言葉の意味は、ハツキリ僕にはわからないのだ。只、言つて氣持がいゝから、ヤタラに使ふ。それだけなのだ。

○

布施辯護士から、ハツキリ外界の諸君の意見を聞くことが出

來た。控訴は、殆んど一人の反對もなしに、中止したがいゝとなつたさうだ。有難い。僕は感謝の念を禁ずることが出來ない。外の三人も同樣だらう。

檢事の控訴もないらしい。さうなれば、愈々、この三、四日のうちに、三君ともお別れだ。この世では、もう會へなくなる。一人、暫くの間、こゝに取り殘される僕は淋しい

○

妹達に、會はうか、會ふまいか。布施さんとも相談したが、今日は何方ともつかず別れて終つた。今夜一晩、ユツクリ考へるとしやう。これが今の僕には、一番の重大問題なのだ。

だが、實を言ふと、マコちやんに會つた所爲か、末の妹には是非會ひたいやうな氣がする。

九月十五日

昨日の重大問題は、つい眠つて終つて、まだ、解決をつけてゐない。

また、今日一日トツクリ考へることだ。

○

近頃、死ぬ時は夕方であつて欲しいと思ふやうになつた。以前は、朝の内にと思つたのだが。

葬る時も夕方がよい。墓は夕陽がよくあたるやうにして欲しい。

○

岩佐君が來て、是非妹達に會つて行けと言ふ。さう考へてゐた所だから、遂會ふ事に決めた。

○

布施君から、大阪の河合君の手紙を見せて貰つたが、實際どんなに皆が淋しかつたか、充分想像がつく。若し僕がさうした境涯にをかれたら……。考へるだけでも恐い。

今迄、安閑としてゐたのだ。本統に皆に濟まなくなる。でも、よく辛棒してくれた。

○

山崎辯護士、加藤一夫氏に面會。

○

花には散り時がある。人には死ぬ時がある。僕の一番いゝ死に時は今だ。これは誰でもが認めてくれる。

それ計りではない。もう僕は歳を取るのが厭でならぬのだ。二年長生して二六になつたのが殘念でならぬのに、又一年延ばされては堪まつたものぢアない。

如何考へても控訴は、眞平だ。檢事奴、助けると思つて僕をこのまゝすぐ殺してくれゝばいゝ。それ計り祈つてゐる。

○

九月十六日

大杉君の命日だ。僕は今日まで生きられゝばいゝと思つてゐたが、まだまだ生命がある。

○

今日もいゝ天氣だ。しかし、死ぬには余り明るすぎる。前には午前十時頃に死にたいと言つたが、朝の内は、如何も苦しいケバケバし過ぎる感じがして厭だ。矢張り、夕方がいゝ。今日の夕方なんか、實によくなりそうだ。

○

心配することもなし、悲觀する事も、恐がる事もないから、別に頭の疲れる譯がないのだが、十日からこの方、晩は實際よく眠れる。いつもよりか、眠たい位だ。變つた夢も見ない。過去の、これと言つて特別になつかしい事も出て來ず、家のもの達のことも出て來ない。平々凡々の夢ばかりだ。

○

山崎さんからの手紙で、愈々檢事控訴はないと解つた。大安心。

これで、萬事決つたのだ。

○

豫想通り、いゝ夕方だ。

しかし、死ぬには余り淋し過ぎる。

贅澤なこと計り言つてゐる。なら、何時がいゝのだらう。朝は落ちつかないから厭、夕は淋しすぎるから厭、まるで女の子が駄々を捏ねてるやうだ。

○

ヂレツたい程、心が呑氣で死といふものがどんなものか解らない。呑氣だといふと、さも大悟徹底したやうに見えて、法螺を吹くナイと彌次られもしさうだ。ポカンとしてと改めやう。ポカンとしちやつて、何が何やら解らぬといふ方が確からしい、これもまだ、未決中だからだ。愈々死刑囚となると、かうも行くまい。

○

九月十七日

元正進會の綿引君と面會。

愈々今日までだ。明日から、他の三君は赤になる。僕は灰色だ。いつ、永遠に消えるとも解らぬ灰色だ。人並みに見る浮世の光も今日限り。思へば、一寸淋しい氣もする。

○

自分の死ぬ事計り考へてゐる所爲でか、今日、古川君に會つ

細井和喜藏遺著

出版界を震駭せしむる奴隷の生活記錄成る見よ我工場生活の悲痛の解剖を！

本書は著者が十五ヶ年の深刻なる體驗を基調として數百萬男女工の奴隷生活の苦惱、糜亂せる其肉慾横行を題材とせる社會小說。曾つて從順であつた一奴隷は近代的社會意識に眼ざめ、玆に全工場奴隷を悲痛なる奴隷苦より救出せんとし、階級戰の最前線に立つて勇敢に戰ひ、遂に刃折れて悲壯にもその死骸を解放途上に横へた。彼が血と、汗と、涙でかいた此一篇は惻々として人に迫る。眞に此書が社會に、人生に必ずなくてはならぬ書であつたことを誰しも首肯く。そしてかかる不思議な悲慘な世界のあつたことは實に一の驚異である。敬虔なる一犧牲者の尊き文獻は襟を正しくして一讀すべきだ。

て、昨日追悼會をやつた。』と聞いた時、誰のか解らなくつて、僕達のにしては莫迦に早いなアと變に思つた。で、「誰の追悼會？」と聞き返した位だ。

大杉の死を決して忘れた譯ではないのに、余程頭がどうかしてゐると見える。」

○

倉地君と新谷君とに、檢事控訴があつた。マンマと不意打を喰つた形だ。

如何企らんで控訴なんか××××××××××××××××××××××××××××××××。もつと、もつと俺達を苦しめようとするのか。何といふ憎い奴原だらう。

○

明日にも和田君は他所に行く。僕は遠からぬ内に殺される。後に殘る二人は淋しいだらう。僕達も、何となく心細い。同志の落ちつき場も見ないで死ぬのは辛い。が、もう仕方のない事だ。

○

雨が――何と言つても秋だ。淋しさうに降つてゐる。降れ、降れ、もつと降れ。そして、僕の心をズンと沈ませろ。

○

時事新報に出たといふ、僕の「法廷手記」は、山崎君が大凡僕の氣持はどんなだらうと察して、新聞屋に話したものだ。殉教心云々と書いてあるが、こんなキザな言葉を大びらに口にする程、僕はお目出度く出來てゐない。決して、僕があんなものを書いたのでない事を、御叮嚀に辯つてをる。

○

寒い位凉しくなつた。寢心地のいゝだけは有難い。

浮世の夜よ。左様なら、だ。

附言

未決中の感想記は、この第三十二冊で止めになる。これからが、本當の「死刑囚の獄中記」だ。

最初、この感想録は二十五冊位で終りになるだらうと思つてゐた。處が裁判の延びたのと一緒に、僕の生命も延びた。それで、まだまだ、十冊位余計に書けさうになつた。何冊位で止めてをかうかと、いろ〳〵考へたが、矢張り何か因緣のある數でないと氣が濟まない。生れ年と同じ數――僕は明治三十二年生れだ――にしやうと思つた。第三十二冊までは未決中の分、後一冊は既決になつてからの分と、かうしたら面白からうと思つた。それで、十七日までのは、この第三十二冊の内に收めることゝした。」

後の一冊――第三十三冊目は、何枚書けるか、今の所不明だ。極く薄い儘で終るか、それとも厚くなるか、僕は解らぬ。只、今迄書いたうちで、一番値打のあるものとなるのだけは確かだ。

法學博士 堀江歸一著

國際經濟と國民經濟

（訂正增補）

定價貳圓五拾錢
送料廿六錢

經濟上の行詰りは世界的である。何故に經濟上かくも行詰つたかを知ることが刻下の最重要であり、又明日の光明を認むる所以である。堀江氏は斯界の第一人者にして觀察の正確、鋭敏なる一頭地を拔く。本書を一讀して大衆諸君が國際經濟及國民經濟の病所を知りて適應なる策に出でらるることを切望す。殊に本書の半部は今回悉く訂正せられたるものなれば新刊と云ふも過當にあらず。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



女優志願者

鈴木氏亨

大阪にカフエーがはじめて出來かけたころである。

その頃私には、女が熟れた果實のやうに見えてゐた。一日の終りが來て、紅い、明い灯の下で——白いシートの上に置いた透明なグラスで、黄金色した液體を、樂しむやうに眺めながら——身をとろかす甘い酒を、舐めるやうに口にすることは、どんなに愉快だつたらう……そこには、熟れた色づいた果實が、甘ずい芳香を發散して、捥ぎ取つてくれる、園丁を待つやうに、私の前にも、魅惑そのものゝ女が立つてゐたのである。

あゝ夜！美しい灯と、酒とうら若い女と、カフエーと——私はそれをどんなに禮讃したことであらう。その時分の私は、サラリーの全部をそこに注ぎ込むことを決して忘れなかつたのだ。嚴正な白日の下に悔はあつても、夜がくると心はそれ等のものに妥協せねば收まらなかつた。それに、カフエーは私の心の頽廢ではなかつた。健康そのものであつた。カフエーへ私を見出すと云ふことは完全な一日の存在の祈りであつた。救ひであつた。私はそこで毎夜のやうに魂と肉體の洗禮をうけた。

その頃のことである。

大阪中の島の、渡邊橋の附近に新らしいカフエーが出來た。恰度中央郵便局の後の方になつてゐたところである。花屋旅館の手前だつたと思つてゐる。私の職業が新聞記者だつたので、「好奇」が絶えず心を支配してゐた。ある日編輯局で、「おい、こんばんいゝところへつれて行つてやらうか!?」と同僚のKに呼びかけられた。私は直ぐ變つたカフエーの、未見の女を想像した。

「行かうよ！」

私はかう叫んで、

「行かうぢやねえか！」とKに甘えるやうに促したのである。

私達のテーブルは恰度その女の持場だつた。

女は、どこか大阪の女とはちがつた趣味を持つてゐた。衣裳の好みとか、頭髪(かみ)のものなどに、幾分華美で、高雅な味のものを附けてゐた。五月のことでセルの單衣を着てゐたが、それもただ單に處女らしい好みと云ふだけではなしに、何處かに落付いた、つゝましさを秘めた柄のものであつた。

それよりも、私達を惹きつけたのは、彼女の背のすらりとして、高いことゝ、眼が魅惑的なことであつた。切れの長い眸と、うるんだ睫毛であつた。顏はどつか關西地方の人によく見る、なだらかな曲線美の、まる味を持つてゐたが、眼丈は、どうしても關東人、ことに東京の女を思はせた。

女――久美子と云つてゐたその女は、私達の酒の酌をしながら、その時まで默つてゐた私に、

「貴方、何を考へてゐらつしやるの。考へたり、冥想したりすることは森の中が一番いゝわよ。」と微笑みながら云ふのであつた。

その言葉は、よくなれた東京辯であつたが、何處かに關西人の訛りを持つてゐた。

私はこの時、少し變な女だと思つた。殊に大阪のカフエーには珍らしい程、はき〱した、明るい女だつたので――。

「僕が、何か考へてゐるやうに見えるんですか、僕が！僕は何も考へてはゐませんよ。貴女の、大阪の市(まち)では見られない、好みやたしなみに感心してゐたのですよ。」

「まあ、憎くらしい。そんなに冷評(ひやか)すものではないことよ。隨分ね！」

女は私を睨いて、輕く打つ眞似をした。

「よ、よ、よ、もてるんだね！僕一人はどうなるんだ。」Kは頓狂な聲を出した。

「ほんとうですわ、この方隨分ヅルですわねえ」女は、それまで見のがしてゐたKに、ふりまくやうな愛嬌を浴せた。

「男つてものははじめての女の前では、正直なもんだよ。隨分ひどいね。僕を不良少年にして了つて、酷いよ。」

私は怒つて見せた。

「男つて、初對面の女の前では、正直らしい僞りを見せるもんですわ、ねえ貴方！」

彼女は、杯を手にしてゐたKの顏を覗き込むやうにして、同意を求めた。

「贊成！贊成！」

Kは杯を高くさしあげて、から叫んだ。

「こん度は、僕が一人ぼつちにされて了つたね。」

私も負けてはゐなかつた。

「ほうら！どう、この方も私に賛成して下すつたわよ。貴方ばかりだわ、そんな天邪鬼なことをおつしやるのは、随分いけずねえ。」

「だつて、戀するものには虚僞(いつわり)も眞實ではないか。戀は盲目だよ。戀するものから羞恥と云ふものを奪つたら、戀は地上の石ころのやうに、索漠たるものになるではないか。僞りの中の眞實を搜しあふところに戀の歡喜があるのではないか。高價な眞珠の一つを搜すことの冒險は、戀の完成への努力だよ。だから男が初對面の女の前に見せる虚僞は、ほんとうの虚僞ではないよ。眞實が姿を變へた虚僞だよ。」

「随分うまいのねえ。私言ひ負かされて了ふわ。その口でいゝ人を泣かすんでせう……」

女はさう云ふと、何か思ひだしたやうに帳場の方へ行つた。

室は明るかつた。しかし、その明るい室からは、聰明といふ心の窓がみんな閉されてゐるやうであつた。

女と酒への陶醉！快樂への燃焼！さうしたものに進まうとする泥醉者の魂のみが目醒めてゐた。

私もKも、かうした雰圍氣の中に、一刻でも多くつかつてゐることを喜んでゐた。そして、ちびり〳〵と杯を口に當てゝ味ふては、夜があわたゞしく流れて行くのを惜しんでゐた。

「お二人とも何か考へ事でもしてゐるの。默つてゝさ、もつとはき〳〵なさいよ。私はこれからお二人のお友達になりませうよ。ねえ、いゝでせう。それともいや？」

彼女は、いつのまにか二人の前に立つてゐた。そして、私の手をとつた。彼女の手はしなやかで、ぬくみを持つてゐた。女は私の手を輕く握りしめると、一度靜かにふつた。私も同じやうにふつた。

女はKと、同じやうなことをした。

こんな風にして、私と彼女との交渉が開始されて行つたのであつた。

私は女の明るさに、する〳〵と惹きつけられて行つた。全く、彼女は、大阪のカフェーには珍らしい型(タイプ)であつた。

それに、その頃カフェーと云ふものが、宵の星の如く、ぼつり〳〵街に開業しはじめた頃なので、物珍らしいものに憧憬してゐた私は、先驅者のやうな誇を持つて毎夜のやうに出入してゐた。だから少しでも變つた女を發見することは、鑛脈でも掘り當てたやうなもので、勇敢な、熱意を持つて、通ふのだつた。

それから、そのカッフエーの、女主人のあいその好いのも、私達の荒むだ生活になつかしみを與へてくれたからかもしれない。明るさと、媚びと、甘い言葉と、微笑の上に、自分と云ふものを空しくする青春時代には、さうしたものに墜つて行くのは自然ではあるが、私達のカフエーへの耽溺は、まるで泥濘の上へ錢の錘を置いたやうなものであつた。

それに、そのカフエーの居心地のいゝことも、一つの原因であつた。その家と云ふのは、地下室のやうな落付きを持つてゐて、わい／＼云つて、一晩過すにはおあつらへ向きに出來てゐたから。

私は、大した障害のない限り、夜がくると屹度そこに姿を見せてゐた。

私の新聞社では、私が、久美子に心酔して了つたと噂し合つてゐた。

「齋木は卒業するまでは通ふよ。だが彼は決して秀才ではない。彼はいつでも落第生さ、恐らく彼は青春時代を殆んどドロツプしつゞけるであらう！」

社内の利巧ものは、こんな風に評判してゐた。だが、私は女を慕ふ私自身の心に媚びてゐた。そして、くそ眞面目になつて女との會合を樂しんでゐたのだ。

私がカフエー・ギムナアド（忘れてゐたがカフエーはギムナアドと云つてゐた）へ通ひ初めてから、彼女久美子の崇拜者は、いろ／＼に變つて行つた。新らしいもの好きの大阪人にカフエーと五色の酒とは、私同樣の憧憬を持たせたであらうし、お店者、ぼんち、會社員、非似詩人、文學青年などのグループはそれからそれと新らしくなつてゐた。

そして、又彼女の素性に就いての噂も、いろ／＼に立つたが、結局誰もその正體をつかんだものはなかつた。

カフエーへ行くものにとつて、ウエートレスとの特別の親交を見せびらかすことは、愉快なものであるが、それよりもその女の過去を知つてゐることも、快心なことであつた。

私が、カフエー・ギムナアドに行つて、久美子を知ると同時に、注意深い眼を拵へては、彼女の過去を語らせやうとしたものゝ、要愼深い久美子は、いつもそれを徒勞に終らした。

「あゝ、何と云ふ強い女だらう！」

私は、彼女が過去に澤山の秘密を持つてゐることを、推量せずにはゐられなかつた。

「私、どんな理想を持つてゐるか知つてゝ？」

私が、彼女と大分親しくなつてからであつた。ある夜、遅くなつて、グループが歸つて終つてから、突然こんなことを云ひ

出した。
私には、彼女が單にウエートレスで終る女でないことは、前から睨んでゐた。さうかと云つて、好い客をとらうとする程、甲斐性のある女でもなかつた。で、女優！かなと思つた。女優！彼女には、それに該當する資格が充分にあつた。
「女優！それともお妾！」
「あーらいやだ。お妾だなんて、人を馬鹿にしてゐるわよ。」
「ぢや女優ならいゝぢやないか。」
「さうね、女優！」
彼女は、頸を曲げて考へ込むやうな表情をして、何か思ひ當ることのやうに、しばらく凝としてゐた。
私は、彼女のこんな風に、思ひ入れでもするやうな様子を見た時、
あゝ、これなら女優になれると思つた。彼女にはいゝ表情がある。確かに舞台(ステイヂ)に立てると思つた。
「貴方、私の噂を聞かない。こゝへくる人達は、みんな私を變な目で見てゐますのね。若い人達は、私から何かをさぐらうとしてゐますのよ。そして、私にいろんなものをくれるの、着物だの、指輪だの、リボンだの、紙入れだの、何か義務とでも心得てゐるやうなのよ。そして、親切に可愛がつてくれるの。疑ですわ。ですけど、私は誰も信じないの、みんな恐ろしいわ…………。何か縄を一つ宛持つてゐるやうなのよ。私だつて理性があるわ。さう見す／＼あんな人達に乘じられないわ。ですけれどねえ。私に一つ困ることがあるの、それは私のいちばんいけない缺點なのよ。私はそれがあるために、こんな眞似をしてゐるんだわ。あなたどんなことかわかつて、えつ！わからない、私云つて了ふかしら、よさう／＼つまんないわ。………もうこんなことよしませうね。あなたもう、何も召しあがらない。お酒は！日本酒？洋酒？またいつものコクテル？ゆつくりしてゐらつしやらないとんばんは、いつまでも置いて上げるわ。」
胎風の正體がどつかで消えて了つたやうに、肝腎のところへ行くと屹度、それはそらされて了ふのであつた。私はかうして幾度彼女の正體を摑まうとして、失敗したかしれない。
ある日、私は見知らぬ人からの手紙を受取つた。表面には齋木様として、私の姓だけが書いてあつて、裏にはK子と女名前が書いてある、小形の淡紫でおもだかの模樣のある封筒である。私は激しい心臓の鼓動を覺え、小手先に輕い痙攣を感じながら開封して見た。一通の手紙が入つてゐた。

「血だ！」
私は思はずから叫ばねばならなかつた。
「何と云ふいたづら好きな女だらう！」それは全く血で書いたと云つてもいゝ程、黒ずんだ、玉蟲色のとき紅で書いたものであつた。そして、文句と云ふのは、

宵には星が美しく輝いてゐます。
地上の輝かしい少女子のために、
聖い杯を捧げにゐらつして下さい。
今夜よ！屹度ですよ！
私はとき／＼こんないたづらがしたくなるの。ゆるして下さい。」

K子

餘りに幼稚なセンチメンタリズムである。私にはカメレオンのやうに刻々に變つて行く彼女を、始めて發見された星座のやうに、いろ／＼に解からうとしたのだ。だがどうしても謎の女であつた。

私は、酒と女色とに陶醉してギムナアドを留守にした。四五日してからのある夜、社の用事がすむのを待ち兼ねて訪づれると、どうしたのか久美子の姿が見えない。いつも私の顔を見ると、桃色に彩つた頬に笑くぼをつくつて、微笑を見せてくれるはずの彼女が、その夜に限つてどうしたのであらう。私は淋しさを感じながら、テーブルを前にして、倉庫のやうなカツフエーの中をすみ／＼までも眼をすえたが、何處にも彼女の姿を見ることが出來なかつた。私はがつかりした。幸福に羽毛が生えたやうな氣がして、魂の微苦笑を禁じ得なかつた。だが、そのことをおかみさんや、他の女給に聞くことは、私に誇（プライド）を傷けさした。

私は隱し切れぬ憂欝を、なるべく心の底へねぢ込まうとして、どんなに平靜に裝はふと努めたことであらう。だが、それは立派な徒勞であつた。

久美子といつも親しさを見せてゐる、ゆみ子が、おあつらひを聞きに來た時、私は遂う／＼決心した。

「久美子さんはどうしたんです。今夜は見えないぢやないですか？」私には、それは生命のかけがひを要求するやうなものであつた。

「久美子さんですか、東京へ歸るとか、家へ行くとか云つて、昨日こゝから暇を貰つて行つて了つたわ。」

ゆみ子は、うるささうに云つて、さつさとコック部屋の方へ入つて行つた。

「それつきりかへ。」私の心は、その後につけ加へて貰ひ度い、たつた一つの言葉を待つてゐたのだ。だが、今夜に限つてそつけないゆみ子の態度には、私にわからぬものがあつた。

私は、淋しい、やる瀬無い思ひをしながら、一杯のコーヒーを呑むと、戸外へ出た。

私は新聞社内の空氣のうちで、いちばん緊張してゐる時の場面を愛してゐる。何か大事件がその都會に起つた時、ざわめき立つ編輯内部の光景は、私に筋肉の張り切つた時の如き快さを與へる。それは私達にとつての一日の糧で、クライマックスである。

ある日私は、意外な事件を見出した。それは松竹合名會社が女優學校を起して、第一期の練習生を募集したのに際會したのであつた。その日は恰度東京や名古屋、大阪などで募集した女優志願者が、島の内の笠屋町にある松竹の假養成所に集つて來ると云ふのであつた。編輯室は異樣な感激を作つてゐた。私の心は湯浴みした後のやうな爽さと、勇躍とを覺えてゐた。

B記者がその係りで松竹の事務所に出張してゐた。勿論演藝記者もそこに姿を見せてゐたに違ひない。私は社内で各自の想像から生れる會話と、募集した女優の噂話に耳を傾けてゐた。

「みんなで七人だけだと云ふぢやないか。」二十才代から頭が禿げだしたと云ふ社會部長が云つた。

「質は悪いとか云ふことだな。随分いろ〳〵苦心して募集してゐたのだが、みんな低能兒で駄目だつたと云ふことだ。どう云ふものか女優志願者には低能兒が多いさうだねえ。」社會部の編輯をしてゐる、酒の匂ひを絶やしたことのないUと云ふ男が云つた。

「松竹の仕事だからねえ。單なる商賣政策に過ぎないんだよ。だから錄なものは集まりこはないさ。」

筆と腕と足でもう五萬圓の金を積んでゐると云はれて、衆望の中心になつてゐるT編輯長が云つた。

かう云ひながらも、編輯室ではB記者がどんな報導を齎らすかと云ふことに期待をかけながら、一刻も早く彼が歸社することとを待ちこがれた。それに何よりも女優達を寫しに行つた寫眞師の歸りが、彼等の興味を唆つてやまなかつた。私もかうした境遇を味ひながら同僚のB記者を待つてゐた。

B記者は歸つて來ると、いきなり

「いゝ女はゐませんよ。あんなのを女優にするなんて、松竹もどうかしてゐますな。」

と云つて、女優の名前を書いた——勿論藝名である——印刷物や、今日の始業式の光景などを話しだした。

「どうだ寫眞はうまくとれたかな。」社會部長はその話を聞きながら、職掌柄心配さうに訊ねた。

「みんな一所に撮つたやうだから、……一人〱の顔を撮つたんぢや、ものにならないんだ。」

B記者は、期待を背かれたつまらなさに、さう言つた。

「をい給仕！寫眞部へ行つて出來上つたら、直ぐ見せるやうに云つておいでよ！」Y社會部長はもどかしさうに給仕に命令した。

——（女優志願者）——

私は出來上つて來た寫眞を見た時、異常の驚きに打たれた。

「久美子だ！たしかに彼女だ！」私ばかりではない。Kまでが同じやうな驚きに打たれてゐるのを見て、私は思はずかう叫ぶところだつた。

殊に特徴ある顔立ちが、明確に彼女であることを思肯かせた。

私はカッフェーで失はれた彼女を、女優として新らしく發見した歡びよりも、男性に取圍れて、ちやほやされる彼女の今後の生活を、輕いねたみを持つた胸で迎えねばならなかつた。

私はその晩、見知らぬレストランで强い酒を飲んだ。

女優！それは彼女のいたづらだらうか。それとも、本心だらうか、……しかしまた、さうなるのが必然の徑路でもあるやうに思はれた。

「女優！彼女の未來に幸あれ。」

私はたつた一人、淋しい祝杯を擧げた。

私がある日、A警察の用事を濟まして、河蒸汽に乘らうとして、川口の三軒家の浮待合所で、蒸汽の來るのを待つてゐた時であつた。

私の前に一人の女を見た。私は女がケバケバしい服裝をしてゐるのに驚いて、注視すると、それが何處かに、見覺えのある顔であることを記憶から呼び起した。

「さうだ久美子だ」私は、一人でほゝゑんだ。

「まあ齋木さんどうしたの？」久美子も、私を發見して、なつかしさうに近寄つて來た。そして、私のすぐそばへ腰をおろした。

「これから警察本部まで行くんだ。」

「さう、私も河蒸汽に乘るのよ。一所に乘りませうか……齋木さん私のことを知つてゐるでせう。」

女は私に同意を求めるやうに媚びを見せた。そして巧みに、

おづ〳〵した目ばたきをした。

「松竹へ入つたことだらう、あゝ知つてゐるよ。」

「あなたはどう思つて？」

「いいぢやないか。僕はかげながら賛成してゐたんだ。」

「さう、ぢやうれしいわ。」

二人がこんな會話をしてゐるうちに河蒸汽が來た。私達は二人で乘つた。私は女と窓際に向ひ合つて腰を下ろした。川口に碇䑸してゐる船の中を、かきわけるやうにして蒸汽が進んだ。初夏の陽光が溫かに水をてらして、船底のあたりで、まどろむやうに水が淀んでゐた。白い水鳥が頻に飛んでゐる。

「あなた、私がカフエーにゐたことを秘密にしてくれない。」

女は突然哀願するやうな調子で、私に迫つて來た。

「だつて、あのことを知つてゐるのは、僕一人だけではないぢやないか？」—私は女が妙なことを云ふと思つたので問ひ返した。

「ですけれど、あなたは新聞社にゐるでせう。それだから、ですわ。」

「ぢや、僕を恐れてゐるのかい。………僕はそんな恐い人間ぢやないよ。恐ろしい人間は世間に澤山ゐるが、僕なんかは君に忠實なるものゝ一人だよ。」

「さう、そんならいゝわ。ですけど秘密よ。屹度ですよ。私こまることがあるんだから………。」

「いゝよ。わかつたよ。」

私は、どうして彼女がこんなに、私に秘密を强要するのか。不思議でしやうがなかつた。だが彼女の願ひを憐んで入れることにした。

「そして、君の舞台（ステージ）での名は何と云ふのだい。」

「御園富士子つて云ふのよ！どうぞこれから贔負にしてやつて頂戴ね。」

女は、私に、すべてを許してやらうと云ふやうな嬌姿を見せてゐる。そして私に憐みを求めるやうな眼をしてゐる。

私は女を憐んだ。そして、河蒸汽が警察本部前に着くと、彼女一人を殘して上陸（あが）つた。女は道頓堀まで乘つて行くのだと云つてゐた。

その間に一年ばかりたつた。

御園富士子——彼女の名は急に有名になつて來た。新聞の演藝記者は彼女に媚びた記事を掲げだした。彼女を射落すと云ふことが、大阪での、若いぼんちや、遊蕩的紳士の好奇心を唆

つて、彼等仲間での興味と誇りの中心になつて來た。ことに第一回の試演が開催される頃になると、さうした噂は新聞の三面を賑はさずにはゐなかつた。そして若い動搖し易い青年の心には、試演の日がもどかしく思はれだした。

彼女からは私宛に刷りものが屆いた。それはこんど舞臺に立つと云ふあいさつであつた。そして、私にはペンの走り書きで、特によろしくと書き加へてあつた。

私は、彼女の手紙を見るとさすがにうれしかつた。そして、世間の人氣が彼女達の上に集つてゐるのを見て、一人でほゝゑんだ。けれどもそのほゝゑんでゐる心の底には、不安がをりの如くこびりついてゐるのを見遁すわけにはいかなかつた。

さうした不安を見出す毎に、私の胸は騷ぎだした。私はその度び何か贈りものをしやうかと思つた。花輪――それとも指輪――腕時計――しかしそれ等は私にとつては可也大きい負擔であつた。少くとも社會部の一探訪にとつては――

それから私は、彼女が有名になつて行くたんび、幾度自問自答したことであらう。

「私は彼女を戀してゐるだらうか。戀！戀！これが戀か！」

しかし、その後私は、河本汽での場面（シーン）を想ひ出して、私丈に許してくれさうな彼女の心を！そつと抱きしめて、微笑むのであつた。そして私は、辛うじて心の平安を保つてゐた。

そのうちに、試演の日がやつて來た。私には又手紙が來た。それは單に、試演の舞臺に立つから私にも見に來てくれと云ふのであつた。私は彼女が私をすてずに、かうして度々手紙を書くのを感謝した。

私はある日、美しく裝飾された試演劇場の前を通つて、はじめて私の彼女に對する憧憬が、淡い雪のやうなもので、てんで問題にならぬことを知つたのである。

先づ何よりも私を驚かしたことは、彼女に對する贈物の非常に多いことであつた。H生よりとか、HOよりとか、匿名の花輪や、樂屋鏡や、座蒲團などの贈物が、劇場の前に、彼女に媚びを賣るものゝ如く溢れる程列べられてゐるのである。そして彼女に對する人氣は、沸騰し切つてゐるのであつた。感動し易い、神經質のファンは、この上彼女に何を捧げるか、わかつたものではない。私は憂欝を感じだした。私などは到底彼女に對して、熱愛などを持つ資格がなかつたのであつた。

私はこゝでも自問自答した。

「私は彼女を、ほんとうに戀してゐるのだらうか！」

街での、花柳界と、多くの若い人達との噂は、女優の試演の

上に集つてゐた。そして御園富士子の艶種は、殊にかうした事件ばかり捜し出して掲げる新聞の、三面をまでも賑はしはじめた。

彼女はHと云ふ有名なデパートメントの支配人と遊び出したとか、巨萬の富を持つてゐるD貿易商の息子を手玉にとつてゐるとか、M會社の重役と彼女が南地のある茶屋で密會してゐたとか――等、等、そして、彼女が可也おきやんで、いたづら好きで、いろ〳〵な悪戯（わる）さをして、彼女のファンやパトロンを苦しめるとか、そして彼女は、すべてのファンを彼女の近くまでおびき寄せながら、最後の一つ手前のものまでは許すが、それからは何人にも許さないと云ふこと、彼女の堅い操持などを報じてゐた。

私は、これを讀んだ時、心強さを感じた。彼女としては當然かうなくてはならない。彼女にはかうした力を持つてゐねばならぬ筈だ。とさへ考へたのであつた。

私は幾度、彼女を訪問しやうと思つたことであらう。そして私は、彼女等が試演をしてゐる當時、BX座の裏口のあたりをどんなに歩いたことであらう。私は初めて戀するものが、經驗するやうに、相手の女に自分の想ひを傳へることも出來ず、私の意志を表示することも出來ず、女の家の門口や、女が姿を現はしさうな附近をうろ〳〵するやうに、何度樂屋の附近を歩いたことであらう。

間もなく、私に、彼女から試演の成功を知らす手紙が來た。

ある晩、それは試演がすんでからしばらくしてからであつた。私は、彼女をレストランで見た。長橋北詰の西へ入つた狹い家であつた。もう夏のことで、對岸の茶屋の灯が、黒ずんだ水の上を明るく染めてゐた。

彼女は、背の高い、色の白い、遊びに馴れた、若い男と二人であつた。男は凝つたうすものに角帶をしてゐた。彼女は私が入つて行つたのも知らずに、快活に話しあつてゐた。

男はビールを呑んでゐた。彼女は小鳥のやうにしやべつてゐた。私はこのごろ彼女が益々美しくなつて行くのに心をとめずにはゐられなかつた。私は二人を見るとかつとした。レストランを出やうかと思つた。しかし餘りに變なので、心を落付けて椅子に腰を下した。私も冷いビールを云ひ付けた。私は汗でじく〳〵になつてゐた。私は時々二人の樣子を盗視した。

二人の話をしてゐるのが、私にははつきり聞えて來る。

「ふうさん。こんど京都へ遊びに行かうやないかい。」

「行くはよう！あなたの行くところなんならどんなところでも

行くはよう。」

「ほんまいかいな」

「ほんとうですわ。ですけれど、あなたのいゝ人を見せつけにつれて行くなんて云ふなら、私はいやだわよ。」

「私は京都から宇治へ廻ろか、それとも三條から大津へ出て、石山でも上らうかと思つてんね。あほらしい。誰がだん？」

二人の話と云ふのは、こんなたわいもないものであつた。私は彼女が人なれた調子で話してゐるのに輕い妬みを感じた。私はなんだか、急に不快になつて來た。そして彼女に何かを見せつけられてゐるやうな氣がして、堪へられなくなつて來た。

間もなく、彼女と若い男とが立ち上つた。私ははつとした。

「あら、貴方でしたの！」彼女は、私を發見して驚いてゐる。

私は默つてゐた。

「ごめんなさい。私いまこんなところになるのよ、遊びにゐらつしやい。屹度ゐらつしやいよ。」

さう云つて、彼女は、私に名刺を渡して、さつさと出て行つて了つた。私は一枚の名刺を握り占めたまゝ、彼女の後姿をぼんやり見てゐた。私は悲しかつた。

こんな風で、私は彼女に戀をうち明けることも出來ず、さうかと云つて彼女を路傍の人として見ることも出來ず、私は初終いら〱して暮してゐた。私は檻の中に入れられてゐる獸が一日中ぐる〱その中を廻つてゐるやうに、彼女の周圍を遠くから、眺めてゐるに過ぎなかつた。私は戀には臆病であつた。

そのうちに、彼女は立派な女優になりかかつてゐた。

その後も彼女の噂を度々耳にした。彼女は男から男へと移つて行くらしかつた。彼女は男の間で、女王のやうに振舞ふてゐることも聞いた。そしてその噂の中で私が秘かに歡んでゐることは、彼女がまだどんな男にも許してないと云ふことであつた。それが私に異常な心强さを與へた。

ある朝、私は郊外に彼女を訪ねた。若い小娘のやうな女中が出て來てとりついだ。

「未だやすんでゐられますから、しばらくお待ち下さい。」と云つて、私は彼女の書齋のやうなところへ通された。

室には小さい朱塗の机や、衣桁、姿見、花輪、本箱、等が雜然としてあつた。そしてその本箱の上には、可愛い陶器の西洋人形の大きいのや、小さいのや、それから變つた形の人形や、木彫の人形等が整然と列べられてあつた。赤い字で大入とか滿員とか肉太の字で書いた大入袋が、室の壁に賑はしくはられてあつたり、彼女が最近扮裝した、ナイトの大きい寫眞が、これ

も壁の一方へピンで止めてあつたりして、室は多感な色彩で交錯してゐた。

それに、燃えるやうな緋縮緬の座蒲團が、室を女王のやうに占領してゐるのが、私の眼を殊に奪つた。四疊半位の狹い室で、一方が障子になつてゐて、それからほんのり明るさが入りこんでゐた。

私はそこで、室が持つてゐる艶めかしい異香をかいだ。三十分ばかりすると彼女が入つて來た。女は化粧してゐなかつた。しかしあかるい聴毛と、長い瞼は、決して私を邪魔者と思つてゐぬことを語つてゐた。彼女は毛髪を無雜作につかねてゐたが、それが決していやしくはなかつた。それに彼女が來てゐる綿の大きい袷も下品には見えなかつた。何處かに明るい、華やかな、滿された生活を忍ばせた。

「しばらくでしたわねえ。よく私のところがおわかりになりましたのねえ。」

「えゝ」

さう云はれて、正面(まとも)に見られると私ははづかしかつた。そして急に、彼女を見ることが出來ず、堅苦しさうに坐り込んだまま、あつけない返事をした。

「大變な評判で、結構ですね。」私はやつとこれ丈云ひ得た。私は決して皮肉ではないつもりでゐた。

「えゝ」彼女は、うれしさをかくすやうであつた。

「いろ〳〵お世話になりますわ。」彼女は他人行儀らしく云つた。しかし、何處かに自分の誇(プライド)を傷けられまいとしてゐる要意があつた。

「僕は、あなたのフアンの一人ですよ。」私は彼女の妙に犯し難い、つゝましさを見ると何を云つたものか惑つた。

「さう〳〵、いつかあなたとレストランで會つたきりですわねえ。私、あなたに感謝してゐるのよ。」

「どんなことですか。」

私は努めてさう云つた。だが、私は彼女と自分との間に、非常なへだたりが出來て了つたことを知つた。私は、彼女が社會的に一歩〳〵踏み出して行つた結果が、かうした溝を作つたことを思ふと、私には深い憂欝があつた。私は永い間彼女と會ふ時を胸に描きながら、こんな場面(シーン)を持うとは決して想像もしてゐなかつたのだ。そして虚名といふものが、女をこんな風にまで導いて行くのかと思ふとぞつとした。彼女は少しでも感激を持うなどとは思つてゐなかつたやうだ。

私は初めてカフヱー・ギムナアドであつた頃の彼女！それから河蒸汽であつた時の彼女！そして現在の彼女！を想ふた。

戀！私のエゴイズムよ。彼女は風にゆられる木の葉の如くも思つてゐないではないか。私は彼女の冷さに鞭打たれやうとして來たのか！

「私達は、こんど旅へ行くのよ。名古屋から九州の方へかけて、しばらく田舍廻りをするのよ。それから歸つて來てまた大阪で芝居をするわ。——ですけど、女優なんてつまらないわよ、ある場合には自分と云ふものを無くしなければならないんですもの。ほんとうに厭なことがあつてよ。」

彼女は、私にお世辭らしく云つた。

「旅！旅は面白いでせう。」

私は所在なさに青年らしく云つた。私の胸に描いてゐたある繪の構想は滅茶々々に破壞されてゐるのだ。散々に踏まれてゐるのだ。私は深い幻滅を感ぜずにはゐられなかつた。

私は間もなく辭した。

それから數ケ月の後、私は彼女が松竹から拔け出して東京へ走つたことを知つた。——私は驚いた。あゝ私は彼女の成功を祈る犧牲球に過ぎなかつたのか！しかし、私は、彼女が何かを求めてゐるのが、はつきりわかるやうな氣がした。

七年が過ぎた。

私の身の上にはいろ／＼な變化があつた。私はもう獨身ではない。二人の子の父となつてゐた。そして私達は東京に移り住んでゐた。

私は東京に來てから、いろ／＼と職業を變へた。そのうちに多少の安定を得て、昔からの好きな文筆に從事することが出來た。しかし、ここで一寸斷つて置かねばならぬことは私達の七年間の推移についてである。その間に私の境遇はいろ／＼に變り、私の周圍にもさまざまな現象が湧いたが、それを長々と書くことは、餘りに煩はしいから廢す。だが、もう大阪にゐた時のことは殆んど忘れてゐたと云つて好い。

ある年の暮れの一夜であつた。私は大晦日の雜踏を見ながら、京橋を渡つて元の讀賣新聞社の前を尾張町の方へ進んでゐた。震災前のことで、兩側の高い建物や、店頭は華やかな電飾で、しつかり化粧してゐた。そしてそれらの光の流れの中に無數の人がうごめいてゐた。

私は左側の人道を歩いてゐるうちに、不思議に見覺えのある女の顏を、あわたゞしく動いてゐる光の巷の中に發見した。私はその女が誰であるかすぐわかつた。私はほゝ笑みながら、男と連れ立つてゐる女と、通り過ぎやうとした刹那、その女の名

をうつかり口をすべらして、呼ばうとしてゐたのであつた。女の名が口まで出かゝつて、中途で咽喉へひつかゝつてゐたと云ふ形であつた。

それは、久美子の御園富士子であつた。それにしても、夜の街頭の灯の中に見たのではあるが、何と云ふ時のいたづらか。彼女の顏には白粉がこつてりと塗つてあつたにかゝはらず、生氣がなくなつてゐた。あの昔の若さを失ひかけてゐたのだ。

私は彼女が通り過ぎると、突嗟に彼女のあとをつけて見やうかと思つた。好奇心がむら〳〵と湧いて、異常な冒險心が起きたが、その夜の寒さを想ふと、勇氣も挫けて、もの靜かに、二人でつれ立つて歩いてゐる彼女の後姿を、幾度となくふり返へらさした。——そして、大晦日と云ふ現實の強い力は、私の想ひ出を彼女の追憶から、冷い現在への把握に呼び戻して了つたのであつた。

數時間の後には、私は彼女との邂逅のことも忘れて了つた。

それから、又數年がたつた。

私は、生き死の病に罹つた後だつたので、靜養するために、ある温泉場に行つてゐた。

初秋のことであつた。高原の秋は空が高く澄んで、爽かな氣が病後の私に快さを與へた。毎日、朗な天氣がつゞいて、澄明な空氣は、病弱な私を健康へと導いた。私はその温泉で名もしれぬ草花などに愛を持つやうになつてゐた。

私は幸福であつた。好きな時間に湯浴みをして、散歩したり、寢込んだり、讀書したり、自由な時間を過してゐればよかつたのだ。

私は本に讀み倦きると、妻や子供に與へて手紙を書いた。それが濟むと遙かに蒼空に連つてゐる、連山の頂きを窓越しに眺めて、再び健康を取り返へすことが出來たことを感謝してゐた。私は人生に新らしい望みが芽生えてゐた。

ある日、私はこの温泉で、偶然、ある女と邂逅した。私は偶然そのものに畏怖した。そして、私は偶然が人生に存在してゐることに感謝した。砂漠の中の疾風（ストーム）のやうに、魔術の恍惚のやうに、何處からとなく湧いて來て、私に劇的なシーンを見せてくれた偶然よ！私は汝に感謝する。

久美子は産後であつた。彼女の美貌は花瓶か何かのかけらのやうに滅茶〳〵になつてゐた。艶を失つた目の緣には小皺が生じて、頬には輝きもなかつた。色あせた毛髮——すべてが彼女の老ひを語つてゐた。

彼女も私との邂逅を歡んでゐるらしかつた。私は、彼女に結

婚をして子供が二人あると云ふことや、東京で働いてゐることと、病後の靜養に來てゐると云ふことなどを話した。

「ですけれどもおしあはせで結構ですわ。」彼女の切れのいゝ目には、何處かにまだ魅力が殘つてゐた。

それから私は、彼女が東京に來てどうした生活をしてゐたのか、十年と云ふ生涯を世間へ名も出さずに、今日までどうして暮して來たのかを訊ねた。

「もうそれ丈は聞かずに置いて下さい。私は女優にもなりました。田舍廻りもしました。しかし大阪にゐた時のやうなことはありませんでした。それにお話しにくいやうなことにもでくわしました。そして最後にはまた女給になつたのでした。それから私はお話しにならない程苦勞しました。ほんとうに私と云ふものは夢を見て生きてゐたのです。私は一人の男を知ると、直ぐ厭になるのです。他にもつと好きな男があるやうな氣がして男から男へと移つて行つたのです。けれどもみんな駄目でした。私は遂う／＼姙娠して了つたのですもの。」

こゝまで話してくると、彼女の顏には急に暗影が浮んだ。

「その頃私は銀座のカフエーにゐました。私はある大學生と親しくなりました。さう、私よりも年が七つか八つ位少なかつたでせう。私はその大學生と戀に陷ちて、姙娠して了つたのです。その大學生のお父さんは陸軍大將で男爵でした。家は原宿の方にありました。私は、はじめて女としての變つた生理的な兆候をしりました。そして私は姙娠するとその大學生が厭になつて來たのです。ほんとに妙ですわ、あんなにお互に好き合つてゐたのに、私は姙娠した丈で、男が嫌ひになつたのですもの。私は姙娠を呪ひました。私はいつまでも若くて、輕々として一人でゐたかつたです。私はいろ／＼に惱んだ揚句、その大學生……Kさんです。Kさんと相談して、ある産婆の家に置いて貰ふことにしました。そして私は恐ろしい企みをしたのです。それは出來るだけ不養生をして、子をおろすと云ふことなのでした。それまで毎日のやうに來てゐたKさんはそれから、ぱつたり來なくなりました。私は不安でした。男を嫌ひながらも、私としてはKさん一人を賴りにするより外にしやうがなかつたのですから、Kが姿を見せなくなると私は直ぐ身の廻りのことや、姙娠中のけいひにも事をかくので、急に心配しだしました。でも大變親切な産婆さんだつたので、私はKさんのくるのを待つてゐました。ところが月末になると、金は送つてくれますがやつて來ません。私は結局この方がいゝと思つてゐるうちに、それもぱつたり止つたのです。私は荒んでゐました。そして容易に自分と云ふものを失ひ得るまでに、自棄になつてゐ

たのでした。ある日私は死産をしました。あゝ想ひ出してもぞつとします。………私はどうかしてゐたのです。男へのつら當てに、ある晩、自動車で原宿まで行つてKさんの門の前へ、死兒を棄てゝ來たのでした。それがいゝことにはKさんの家の女中が見つけてお母さんに話してくれたもんですから――Kの母は内々私との關係を知つてゐたのです――世間へも知れずにすんだのでした。が、それから私とKとの關係が父さんの耳に入つて、正式に別れることになつたのです………もう私もこんなお婆さんになつて了つて、衰へて了ひました。いつまでも夢を追つて若い華やかな生活を送りたいと思つてゐても駄目ですわ。もう私は夢なんかみたくとも、見られなくなつて了つたんですもの………」

彼女の目には涙があつた。涙は頬を傳ふて下へ落ちた。彼女はそれを拭はふともしなかつた。

「私のからだで清いものは涙だけですわ。ほゝゝ………涙だけよ！もう、よしませうね、昔の話しでもありませんわ……ほんとに私はつかれて了つたのですもの。」

私は默つて聞いてゐた。彼女は進むべき道を進んで來たのだ。私も通るべき道を通つて來たのだ。そして私も彼女も人生の秋に入つてゐる。

私は彼女に同情していゝのか、彼女を冷な目で見ていゝのかわからなかつた。すべてが自然であつた。

空――紺碧の空は、朗らかに高鳴りして、溫な小春日の太陽は、地上を邊際もなくてらしてゐた。

「これから、ほんとうにお友達になつていたゞけるかもしれませんわ………ほゝゝゝ。」

彼女は淋しく笑つた。

林道

前田夕暮

誰かゐて木深き山の夕かげに木を挽く大鋸の音静なり

ほそぼそと空に揺れゐる梢みれば夕日ごもりに木を伐るらしも

夕凪ぎの落葉林のあかるみに木を伐る人の影動きゐる

夕凪ぎのあかき光に浸りゐて黄葉の匂ひしみじみとかぐ

椚林くらきなかよりいでたればこの山毛欅山の光しづかなり

落葉木の木肌あかりの夕さればいよいよ親し焚火を思ふ

冬山のこの落葉木はしんしんと碧落のもとに光りたるかも

一もとの裸木ぞ光る向山の伐採などの見つさみしけれ

冬されば山のにほひのかそかなり風に揺れゐる裸木の梢

しづかなるこの深山木の香に匂ふ冬のゆふべを木を挽きてゐる

傍に焚火をしたり國遠くさかりて山に木を挽くならむ

たまたまは里商人の山深く物賣にくるなつかしさはも

くろぐろと風呂敷負ひて物賣の山ふかく入る時雨する日を

物賣の親子なるらし林道を風呂敷黒く負ひ行くがみゆ

炭竈の火けあかりに照らされて言葉かけゆく物賣人は

夕されば火口あかりに照らされて人と人との立話かも

ひそひそと粉炭篩ひたる女子の顔のよごれの朝のしたしさ

炭燒の娘にうまれたるあはれなり生爪剝しこらへたるかも

くろぐろと馬もぬれたり炭負ひて人もぬれつつ山くだり行く

山に來て言葉すくなくなりにけりおのれ一人を守りかねつる

みちのべの焚火かこめる人々のなかに割り入るなつかしさはも

ひそひそとこの山かげに炭木伐る鉈の光りの夕さむくして

山々にうつろふ朝の日の光この谷底におよばさるかも

弱々とさす谷底の短か日に干したる襯衣のいまだしめりゐる

向山の朝焼あかく人と馬とつづいてとほるもはや冬なり

朝早く言葉かけゆく人のあり障子のうちにねながらにきく

ことことと障子のそとを行くトロの音さむげなり大霜のあさ

厨べの土間にぬれたる大束のねぶかをまたぐこのあしたなり

どかどかと馬通り行くおとのして水霜ふかし大霜の朝

炭焼は炭竈のへに家居して冬の夜寒をこもらひにけり

耕餘乃小吟

結城哀草果

折に觸れ

栗の蟲をひねもすつぶしつかれたる眼にあかし夕燒のそら

桑畑の畦間に秋の陽はてりてかそけきかもよ蟲のなくこゑ

秋雨の降りつぐ宵は妻として蠶のへやの火をまもりつる

しとしとと雨の降る夜のこほろぎはあまたは鳴かす畝のべに鳴く

わが妻と山田の早稲を刈るときになりにけるかも雁なきわたる

繭ぐるま妻とし挽けばおのづから睦むこころのわきにけるかな

ひとあまた群れてとよめく繭市場にわれと妻と來て繭賣りにけり

磐城のやまに朝夕たつけむり炭燒く秋となりにけるかも

炭はこぶ山家の馬は曳き出され茱萸の太枝に繋がれにけり

湯殿山參拜の折々

山かぜは峽の稻田へ吹きくだりつひに河瀬の音とかはれり

山峽に一夜ねむると目をつむるひまもとどまらぬ谷がはのおと

この山に夕の飯をかしぎをるをみなを見れば妻しおもほゆ

火をふりて湯殿の山に入りゆかむ人のもろごゑ今ぞきこゆる

うつしみのわれにこの朝みゆるもの白雲のへに咲ける紫陽

岩の面をすべりとどろく山みづの飛沫にぬれてそよぐ草叢

いつしかもひとつ飛び來し山蜂はみづの飛沫に打たるるらしも

山の驛の日ぐれの道は石高しわれくたびれて躓きにけり

狼へ！

（わが勞働）

（三）

藤森成吉

四　織物工場

これは、今年の冬の最中にやつた勞働だ。場所は、遠州濱松邊と考へて欲しい。

「豚飼ひ」以後、私は少しばかりの原稿仕事や、退つぴきならないフェビアン協會の地方講演や、故郷信州の講習や、又數年前から引きつづきのいろんな研究の殘りや、そんなことで、どこへ働きに出かけてゆく暇もない日を送つてゐた。それがひとまづ片ついたところで、私は自分の都合から鐵工場へ行かうと思つてゐた。ところが、あちこちへ知人の手をとほして頼んでおいた口が、みんなうまく行かない。もう不景氣の影響が、次第に濃くなつて來たのだ。

で、豫定を變更して、東京近傍に紡織の口を求めやうとした。が、いろんな借名書類は今度はすつかり出來てゐたが、口の方がなかなか手間取れる。一方、私の方は切りつめ切つた時間だ。ぐづぐづしてゐれば、いろんな豫定がみんなズルズル押し流される。で、思ひ切つて、或る傳手によつて遠州——日本木綿織物の大中心の一たる——まで飛び、そこの織物工場で働いて見やうと決心したのだ。

出かける時は、勿論先方に確かな口の見込みをつけて出かけた。ところが、濱松へ着いて見ると、「賴うだおかた」にマンマと背負ひ投げを食はされた。宿屋に幾日もゐ、それから或る床屋の二階に室まで借りたところでの、その轉變だ。私はすつかり面喰つてしまつた。

一方女房は、子供達を連れて汽車でやつて來る。……彼女は、今度又一緒に働くつもりで——ただし別の、所謂整理工

場と云ふ方でだが——私の方の寓所がきまり次第、あとから立つことに約束してあつたのだ。勿論こつちの急變なぞ知らないので、四十度近い熱を起してゐる一人の子供を抱き、むづがる幼い方をおぶつて、睡眠不足のよごれた疲れ切つた顔形で、プラツトフオームへ降り立つ。

で、早速醫者へ連れてゆくやら寢かしつけるやら、又一方では口の心配をする。その口がやつとこさ見つかつたが、さて場所がすつかり變つたので、再び寓所を見つけて、病兒を抱いて引つ越すやら、……實際大騷ぎだつた。

私の働くところは兎に角それできまつたが、引つ越してしまつた爲めに、今度は女房の働く場所から離れてしまつた。

整理工場と云ふのは、カレンダアだのシリンダアだの、じかぐりロール、又はしぼりだのと云ふ機械——みんな鐵製で動力を使ふ、殊に最初の機械なぞは高級なものだ。——を使つて、一旦織りあげた布にいろいろ手を加へる工場だ。平たく薄くしたり、ケバを燒いたり、光澤をつけたり、糊をつけたり……。

それには、勿論かなり大きな工場、小さな工場、さまざまある。女房は、子供を連れて行つても仕事の出來るやうな、小さな、家族的工場へ入るつもりだつた。が、今云つたやうに急に事情が變つてしまつたので、とうとう働けず、私だけやることになつた。

織物工場とはどんなところか。これも知つてゐる人が案外尠くはないが。そこで生産された織物を、始終自分の身體へつけてゐながら。——精々就業中の工場を參觀させて貰つた位の知識に過ぎなくはないか。が、その程度では、何一つわからない。

そう云ふ私も、この勞働に從ふ一年ばかり前、例の細井君の紡織工場ドキユメント「女工哀史」の草稿をよんで、非常に動かされ、且つその方面の知識を獲た氣もちでゐたが、實際經驗して見ると、機械の名前やら工程やら勞働時間やら、一向うはの空でよみ流してゐたことがわかつた、一方から云へば無理もないことだ。何しろ見たこともない機械や器具だから。——が人間の理解の淺少さと云ふことを、つくづく考へさせられる。

で、その意味から——と云つても、これも亦そもそも無益かも知れないが、——一とほり工場の模樣を述べる。

私の働いたのは、瀬戸邊にあるやうな大きな紡織工場ではない。が、その邊では、かなり大きい方だつた。一體遠洲は、泉州、尾州なぞと共に屈指の木綿織物生産地でありながら、割合大きな工場がない。中工場又は小工場の群在地だ。

このことは、生産額はべつとして、それ自身大體資本主義發達の幼稚の過程にあることを示す。實際その工場設備も、經營ぶりも、從つて勞働者の待遇や勞働者自身の自覺なぞも、まだすべて初歩の段階にある。で、大都會の紡織工場の虐待なぞとはちがつた、又一種奇妙な、むしろ奇怪な、半封建的氣風が殘存してゐる。それは普通一ぺんの勞働統計や勞働理論では、決してわからないことだ。

生産品から云つても、實は遠州は幾分進歩に取殘されてしまつた感じがある。新製品は、大抵後進の、又お隣りの尾州あたりから出る。切角技倆のすぐれた女工がゐても、その待遇を充分にしないため、尾州あたりの廻し者に端から引ツ張つて行かれる。一方、時代に伴つて絶えず研究を重ねてゆく、と云つた知識的向上心が資本家にない。それらのため、遠州物と云へば一般に「安からう、堅からう」の云はば數でこなす方針になつてゐる。得意先も、關西や東海道の本筋にはない。大體東京以北、即ち東北地方に限られてゐるらしい。

もつとも、それには大巾、小巾の差違もある。これもあとで一寸書いておくつもりだが、なまじ古くからの生産地だけ、時代が移り、交通關係が延び、尺物がメートル物に變り、小巾物が否應無しに大巾物に取つて代られるやうになつた現在、又將來では、かなり設備のうへの當惑、又困難の事情もあるらしい。汽車で濱松を通過する旅客は、おそらく誰でも氣がつくだらう。その意外に、如何に澤山の煙突が立ち、又工場特有の澤山の建物がつらなつてゐるかを。更に驛を降り立つて市街を歩けば、如何に織物關係のいろんな店が軒をつくかにおどろくだらう。が、その機業中心地の大體の形勢は、まづそう云ふ過渡期にあるらしい。

とは云つても、さすがに古くからの場所だ。又有名な「型染工場」なぞの所在地だ。着物のがらなぞには、すぐれた物がどつさりある。女房は勿論、私のやうな、元來そんなことに無頓着な人間でも、街を歩くと思はず眼をとめるやうな着物にたび〳〵出會ふ。それは東京なぞでは、三越その他の專門部へ行つてもとても見つからないやうながらだ。或は探したらあるかも知れないが、あんなに日用風に、安く手に入れて誰でも着ては決してゐない。

少々話が曲つたが、さて私の働いた工場は、蓋し遠州のこれとしては代表的な一つだつた。悉皆煉瓦建てで、その中が、準備部と織機部の二つに分れてゐる。

私の働いたのは織機部だが、順序として一寸準備部の方を書けば、第一に綛糸卷きだ。合全部をそう呼んでゐるが、それは片

側二十一個の木管を挟んで、(お碗と云はれてゐる圓い金物が、つまり二十二あるわけだ)少女二人づつが作業する。だから一列四人の、六列位ある。

その次に經糸巻きの台。これは、見た人は誰でも知つてゐやうが、木製のボビンへ經糸を卷きつける機械だ。ボビンの數の割にして、木管よりは少女の數が少い。

その次は整經機だ。これは、一寸屏風形に三角にひらいた、大きな高い物が向ふに据ゑつけてあつて、その兩方外側面の三十本づつの縱棒に、十四個宛ボビンが懸けてある。だからつまり八百四十本のボビン、八百四十筋の糸が引ッ張られることになる。

その澤山の糸が、こつち側の金屬製の整經機へ鏑められて、動力によつて大きな糸卷へ整然と卷きつけられてゆく。一度ハンドルを握ると、一千近くのボビンが、キユウ〱、キユウキユウ、呟くやうな音を立てゝ獨樂のやうに一齊に廻轉し、八百四十の眞ッ白な糸が(この工場では無地を織つてゐるのだ)、水の流れるやうに、ゴトン〱と水車の如く音を立てる整經機へ吸收されてゆく。その美事さ。秋水と云ふもおろか、銀河が動くか、又は白金の蜘蛛の大きな巣がきらめくか、とばかりの、何とも云へない美しさだ。近代の工場に新しい美がある、なぞと云はれるが、これなぞは、女性的と云はば云へその最も美しい物の一つだらう。

その機械が三台位据ゑつけてある。が、それを扱ふ女工は、一台に一人だ。この仕事は無地を織る工場では決してむづかしくはない。むしろ、最もらくな仕事に思はれる。が、縞物や模様物を織る場合には、全工場中一番困難な、熟練を要する仕事になるさうだ。

なほ云つておきたいことは、八百四十本の糸と書いたが、又誰でもさう云つてゐるが、實は正確にそれだけはない。いつもの念入りの癖から、私はそれを端から數へて見た。が、どうしても十本位は足りない。で、そのことを事務員の一人にたづねると、

「おや、そうかね。そんなことはねえわけだが……」

と、彼はやつぱりあるやうな顔つきをしてゐた。これは、わざととぼけてゐたのだ。明々白々なかう云ふとぼけかたが、今の資本社會ではどこでも平氣で云はれてゐる。彼は勿論知り切つてゐたのだ。經糸八百四十本と稱して、然もその幾本かを減して、その重量を糊の分量で巧みにごまかして不當利益を貪らうとすることは、どこの工場でも公然の秘密になつてゐるのだ。

さてその次は綜絖に糸を通す仕事だ。綜絖はすべて針金で出

來てゐるが、これを臺へ引つかけて、二人の女工が兩側から對ひ合つて仕事する。座業だが、まつたくの根氣仕事だ。何しろ、例の大糸卷きの八百四十本の端を、みんな針金の眞ん中の小さな穴へくぐらせるのだから。

その次に、糸取車。これは一人の老婆が昔ながらの古ぼけた糸取り車を廻して、卷き足りない木管の糸などを、集めてまとめる仕事だ。

準備部は大體それだけにして、織機部へ移る。

これは一切力織機、即ちパワールウムの仕事だ。力織機そのものについては書かない。又詳しいことなぞ知りもしない。何しろ、その機械を男工として完全に扱ひ、又修繕することが出來るやうになるには、いくら勘くとも半年はかかると云はれてゐる。つまりそれだけ經たなければ、一人前の男工にはなれないのだ。それほど複雜な機械を扱ひ、又長い面倒な仕事をして、さて受けるところの賃金は實に安い。それはあとへいつて書く。

とにかくこの機械――この工場では、豐田式と云ふ小巾機械を使つてゐた。――が、工場の中に百六十八臺並んでゐた。つまり一列四十二臺づつ、四列の大縱隊になつてゐるのだ。その一列に七人の女工がゐる。一人の女工がだから六臺づつを受け持つてゐるのだ。その六臺は、仕事の都合のいいやうに、三臺づつ互いに規則正しく對き合つて、眞ん中に女工がゐる。彼女等は、まるで母親が子供の世話を見るやうに、その動力で廻轉してゐる六臺の機械の一切の世話を見なければならないのだ。

長いヒ(シヤツツル)が、まるで矢のやうに飛びちがつて横糸を織る。ステツキが動き、ピツカアが顫ふ。それと一緒に縱糸が次第次第に動いて、織られた布が絶え間なくジリジリ下部の布卷き棒へ卷き取られて行く。

そのシヤツツルの入れ替へ、ごみ掃除、機械の廻轉の加減や故障の注意、等等等。……が、何より重大で、又つらいのは、縱糸の切れたのを發見する事と、すぐにつなぎ合はせる事だ。何しろ絶えず激しく廻轉してゐる。台と糸の數は多い。少しうツかりしてゐると、すぐどれかが切れてゐる。敏捷な、又熟練した女工は、その斷れ目がシヤツツルの動いてゐるところまで來ないうちに、すばやく發見して、廻轉のまま細い糸をつないで了ふ。

もし一本でも斷れたまま横糸に織り込まれたが最後、早速その機械の廻轉をとめて了はなければいけない。そしてそれだけの横糸をむしり取つて、あらためて織りなほさなければいけない。

わづか織りかけた位ならいい。が、何寸となく織り進んではじめて氣がついたりしたものなら、切角の横糸へしがみついて一生懸命むしり取つても引きちぎつても、容易なことでは取りきれない。間が惡く、そのうちあつちでもこつちでも切れはじめたり、横糸がなくなつてシヤツツルがとまつたりする時のいら立たしさ情なさ。何度となくそう云ふ樣子を眺めて、見ていながらでさへ私は憂鬱になつてしまつた。

實際女工に取つて、何がつらいと云つてそれほどつらい事はないだろう。織りあげは渉らぬ、氣はあせる。そうかと云つてそのまゝうツちやれば、見す見すキズ物になつて罰を食ふ。

もつとも、ここにも裏がないことはない。慣れた圖々しくなつた女工なぞは、一本や二本のキズなら、その金具で引ツかいて、スキを取りつくろつて織つて行く。工場では、又キズに注意することをいつも第一に警告してゐるが、布取りの男工が持ち出すか、見廻りの時發見するなら格別、わかりはしない。取り引きする相手もわからない。あと買ひ取つて使ふ人間が、いざ裁ち縫ひする爲めひろげた時はじめてわかる。そんな布は、そこから切れやすく、又見ツともない。だから、むざむざ切り取りでもするよりほか仕方ない。かう云ふことは、勿論延いては工場の信用にかかはる事だ。だから、出來るだけの注意はどこの工場でも忘れてゐない。が、この工場のかうした織法の場合にはそんなことは云ふべくして行はれない理由は、あとで書く。

とにかく、糸の切れることは不可抗力ではないか。何の原因にしろ、そう云ふ丁度切れやすい縦糸にぶツかつた女工は災難ではないか。……そう私が事務員にきいたら、「いや、無暗に切らすのは、やつぱりその女が下手だからだ」。と云ひ返された。時節によつて、無暗に切れる時がある。そんな時には、どの糸卷きの糸も一齊に切れる。だからムラに切れてゆく場合には、やつぱりその受持ち女工の腕の爲だ、と云ふことだつた。もつとも、誰かが故意にその糸卷きの糸を切るやうな場合は別だが。

さて、そうやつてどの位一日に織りあげるかと云ふと、一台につき平均一卷き位（と云ふのは布取りのことで、六反に當る）だから、一人受け持ちの六台分では、總計三十六反位になる。が、勿論實際は、工女の技倆その他で大分ちがふ、一日二十何反位きり織れない者もあれば、五十反に及ぶ者もある、但しこれは一日〳〵ちがふので、今日二十何反の者も明日は三十五六反織るかも知れず、反對に昨日五十反あげた者は、精々今日は三四十反きり織れない。これは、布取りで定るので、織り布が進捗

してゐるから當然の話だ。（布取りのことは次に書く）。

然し普通の工場では、決してそんなに織れるものではないさうだ。今私のところにゐる、幇て長く織物工場にゐた人なぞに話したら、びつくりしてゐた。いくら熟練工でも、平均一日一台で六反織れば大したもの、一日五十何反なぞ云ふのは、よつぽど亂暴な、たゞ量でこなすやりかただらう、と云つてゐる。

さて私達男工は、云はゞその女工達の一切の世話をするのだ。と云へば、あたかも製糸工場の男工のやうに、女工の腰巾着みたやうに思はれるかも知れないが、男工の仕事には、なかなか女工なぞには出來ないものがある。それは、機械や器具の修繕一式をやることだ。たとへばシヤツツルの削り直し、ピツカアの取換へ、ステツキの修繕、ゼンマイなほし、機械分解、等々――工場の片隅、三十馬力のモオタアのうなつてゐる傍に、だからまるで小さな鍛冶屋のやうないろいろな棚や、道具が揃つてゐる。何か故障が起きれば、女工達はみんなそこへ飛びつけて修繕して貰ふのだ。まるで半分鐵工見たいだ。實際普通の鐵工場の職工なぞより、彼等の方が一とほりの機械の處理は明るく、又巧みだ。

が、私のやうな新米には、勿論そんな眞似は出來ない。で、私はおもに布取をやつた。

布取と云ふのは、例の力織機の下部の布卷き棒を、頃加減を見計つて取りはづし、卷きついてゐる布を解き、それを端から、傍の布取り台へ取つてたゝむ仕事だ。

布取り台の說明なぞは略き、とにかく木製の台で、引ツ張てどこへでも運べるやうになつてゐる。その上の横桁へ、ちよつと帽子掛けに似た變な恰好の鋭く尖つた釘が、三本突き出してゐる。その左の釘から順に右へ、次は逆に右から左へ、ドシドシ布を張り重ねて行くのだ。八返り張れば、丁度二反の長さになる。二反取りの時はそれで切り裂いて、四つに折りたゝんで傍の台板の上へ載せておいて、又新しく取ること二回。都合三回分六反で一卷と云ふ。

そのあいだも、機械はドンドン織り進んでゐる。で、取り餘つたゞけの布は、又布卷棒へ卷き返して、もとどうり機械の下部へピタリとくツつける。

取りかたは、決して二反取りに限らない。六反取りだの二反三丈だのと云ふやりかたもある。六反取りの時は、六反分一つづきに布取り臺へ張るのだ。二反取りでさへ、一見きはめて簡單な仕事のやうに見えてその實慣れない者には仲々うまく行かないのに、六反取りなぞになると、張る數も多くなつて忘れる。面白くはない。[illegible]の[illegible]きへはいつては[illegible]。さてゐつ

と力一杯釘から引き抜いて四つにたたまうとすると、忽ち型がくずれて端がぐたぐたになる。これをなほす面倒臭さ。そのあいだに、ほかの機械の布は何の斟酌もなくドッドッたまつてゆく。私は時々泣きたくなつた。

布のたまるのがなぜ怖い？、それは取り切れなくなるからだ。

ここで一寸勞働時間を云ふと、朝七時から夜の七時まで十二時間勞働だ。もつとも、十二時から一時まで、午飯をかねた休憩時間がある。が、朝飯晩飯は、みんな時間外に食べる。つまり正味七時から七時まで（日の永い半年間は六時から六時まで）で、機械の掃除やら後始末やらは、一切時間外にやらなければいけない。だから、それだけ勞働時間が延長してゐると同じことだ。

男工の方でも、二三ケ月に一度位はモオタアの分解掃除をやる。――何しろ夥しい綿屑で毎日工場ぢう一杯になるので、それだけ急速な回轉をしてゐながら、一遍モオタアを分解すると、まるで灰のやうに重い埃が一杯つまつてゐる。――こう云つた仕事は、すべて否應無し時間外にやらされるのだ。

ちよつと脇道へそれたが、その長い勞働時間に、一體何反取ればいいか私は考へてみた。と、一人平均三十六反と見て、一列七人の女工の布を全部取らなければいけないから、二百五十反餘りになる。これが最小限度だ。實際は三十六反平均以上なのだ。それを正味十一時間に割り當てれば、平均一時間二十三反、つまり十五分ごとに一卷き（六反）づつ取らなければ濟まない。熟練した男工（これも若い者に限る）なら、勿論出來る。が、私なぞはどうしても二十分はかかる。隨分慣れてのち、やつとどうやら十五分で取るか取らないまでには漕ぎつけたが。

が、この計算も畢竟空論だ。如何に私でも布ばかり取つてゐるわけではない。そのほかに、シヤツツルの入れ替へも少しは手傳ふ。邪魔なゴミでもあれば拂つてやる。出來れば、糸つなぎの助勢もしなければいけない。又毎晩もう六時すぎ位になれば、受け持ちの女工の取り布へ、一々代印又は本名の染のゴム印を捺して廻つて、反數を計算して事務所へかつぎ運び、一方その時分から工場の片隅へかかる黒板の女工の名の下へ、一々チヨオクで、反數を書きつける用事がある。

だから、布取りだけに全部の時間を費してはゐられないのだ。なほそこへ持つて來て、機械は人間の都合のいいやうに氣を使つてはくれない。丁度海岸の夕凪ぎのやうに、貯らない時にはどの機械の布も碌々貯らない。一卷き分見當でなければ、棒をはづしてはいけないのだ。で、仕様なしに少しぶらぶらほかの手傳ひをしてゐると、さア今度は、前の取返しに一度にたま

つて來る。どの機械の梳も機械の梳も、一時に布でふくれあがる。何しろ四十二台だ、一つを取つてゐる暇には、ほかの奴がもうどうにも仕樣なくなる。

　布がたまるのがこはい、とはそこの事だ。いくら汗みづくになつて飛び廻つたところで、布取り台と取ッ組んだところでもうそうなつては追ッつかない。その時のみじめさ。實のところ、もう前何回かの勞働によつて、少し位の筋肉仕事では私はおどろかなくなつてゐた。何も遊んでゐやうとも思はない。が、いくら一生懸命取つたところで當然取りきれないやうな、骨折り甲斐もなく張り合ひもないやうな、そんな仕事はいやだ、としんから思つた。

　一方、私には一つの試練と念願の心がある。一體自分が、いろんな實際勞働で一人前にやつてゆけるかどうかの。――その希望の前にも、私はがッかりして了つた。ここへ來て、とうとう一人前の勞働者になれる進級資格を失つてしまつたか？

　そこは仲間だ。私が夢中になつて、寒中汗だらけになつて飛び廻つてゐるのを見て、ほかの方からいつも應援がやつて來ては、毎日どうにかかたづいて行くことは行つた。が、それは勿論何の慰めにもならない。そして私は憂鬱にさへ陷つた。

が、これはあとでわかつたが、決して私の無能力に歸さなくてもいいことだッたらしい。むしろ、明白に資本家の責めに任すべきことらしい。歸つてから、そのことを例のAに話すと、彼は彼によつてびつくりしてゐた。普通の工場では決してこんなに無暗に一人に取らせるものではないそうだ。

　私のゐた工場でも、實は私が行つてから二三日して、いろんな不平から、織布部の若い男工が二人急にやめてしまつた。そのほかにも仲間が四人ゐた。彼等は、布取り以外例の修繕その他一切をやる。だから、私のやうに一列の布取りにかかり切りではない。で、手助に、女工がいつも一人か二人、列の「見廻り」に廻されてゐた、

　つまり、手不足のところへ私は出ッくはしたのだ。それにしても、その不足を平氣で棄てゝおいた、おどろくべき粗製濫造の資本家よ。どこへ行つても新米の運命かも知れないが、あの過重さには、今思ひ出してもたまらなくなる。

　そのほかにも、いろんな慣れない苦痛があつた。毎晩仕事を濟ませて寓居へ歸つて行くと、私はその日のことを女房に話したが、それを自ら「新馬鹿大將失敗の卷」だの「奮闘の卷」だのと呼んでゐた。「今日は、實に新馬鹿大將大奮闘の卷だッたよ」と云つた調子に。

　そんなにでも云はなければ、實際やり切れない時があつた。

簡單きはまる仕事に見えながら、布取りほど私をまごつかせたものはなかつた。切角親切のつもりのシャツツルを入れちがへる。反取りをまちがへる（取りすぎ、又は取り足らずに裂くのだ）殘り布を取りはじめたり、不足布を幾度となくはづしたり、又殘り布を卷く時、まちがつて裏に卷いてやりなをしたり、そのまゝ見ツともなくぶらさげておいたり、布取台の鋭い釘を、絶へず手や腕へ引ツかけて血を出したり……

一たい私のやうな人間は、人の躓かないやうなことでも、一度は必ず躓く。そして初めて、自分のたしかな知識と經驗を養つてゆくと云つた種類の人間だ。ぶこつで、丹念で、鈍根的なのだらう。そう云ふ滑稽な失敗は、だから私に取つては、そのまゝ血となり肉となる、非常に貴重な經驗だつたにはちがひない。が、正直のところ隨分つらかつた。

おしまひには、私もあらゆる點でずつと器用に、敏速に、又正確になつた。六反取りのコツもおぼえて、型がかなりくづれないやうにもなつた。

ついでに記したいことは、織物工場特有の音響と塵埃のことだ。

準備部のほうも、木管でもボビンでも整經機でもすべて動力で廻轉してゐる爲め、かなりな音響がある。が、機械部のそれと較べれば問題にならない。實にそれはおどろくべき音だ。何百本の縦横のベルトの廻轉、モオタアの唸り、それに加へて各織機の聲高い呼び。たとへ百六十八台でも、それが一堂にこもるとたゞ轟然たる物すごいひゞきだ。何かゝなり高い物音をさせても少しもわからない。よつぽど大聲を出しても、傍の人間の耳へ通じない。何か女工達から云はれても、初めのうちは皆目聞えない。だから織物工場の女工は、普通の時でも大聲で話すことを以て有名だ。

仕事のあいまを見て、そとの便所へ馳けつける。その時ビシンと硝子戸を背後に閉めても、まるで大瀧の落ちるやうな音がそとへ聞へてゐる。一日働いてゐれば、家へ戻つて來ても耳ががアンと鳴つてゐて、翌朝まで鳴りつゞけだ。初めみんなから、なに四五日經てば慣れて鳴らなくなる、と云はれた。そして四五日經つと、もう何ともないだらう、ないだらう、と訊かれた。何ともないどころか、幾日經つても恐るべき耳鳴りはやまない。とう／＼工場をやめるまで鳴りやまなかつた。勿論慣れては來たものゝ。

ところが細井君なぞにきくと、豐田式はいい機械で、まだ音の少いほうださうだ。工合の悪い機械なぞになると、とてもたまらない噪音だと云ふ話だ。もつとも、大巾機械になると

反つて音が尠いとか。

かう云ふ中で、若いうちから何年も働いてゐると、聽覺の方は一體どうなるだらう。こまかい音樂のリズムなぞは聞えなくなりはしないか、と細井君にきいたら、いや、自分なぞ、子供の時からずツと紡織工場で働いてゐたせいか、耳が少し遠くて困る。修練の足りないせいもあるだらうが、音樂の面白味なぞちつともわからない、と云ふ返事だつた——。

もう一つの塵埃のほうは、準備部も織機部も變り無く、まるで雪のやうに煙のやうに濛々と舞ふ。そいつが頭から身體から所構はずふりかかり、眼でも鼻でも口でも所嫌はず入る。だから、毎日眼が澁くなり、鼻の穴がゴミでつまり、痰が始終出る。仕事をやめてしまつた後でも、痰はしばらくやまなかつた。出るからいい。出なかつたら、呼吸器管におそるべき障害を與へることは火より瞭かだ。始終働きつづけてゐる女工、又男工達が、その爲めどの位身體に害を受けてゐるかは、何人もすぐ肯けやう。

危險も隨分多い。何しろ澤山のベルトが、おそろしい力ではためいてゐる。「ベルトに注意すべし」、「就業時は、必ず黑の作業着を着ること」、「毎朝髮を固く結ふこと」、なぞの大字の貼り紙が、工場内のあつちこつちの壁に貼りつけてあるのを見ても知れる。又男工の仕事の一つに、はづれたベルトをかける早業がある。全工場の機械の運轉をとめない爲めに、ベルトの先きを梁上の廻轉軸へ拋り投げて卷きつかせ、あとで下の輪へかける。これはまつたく危險千萬な、ほかの工場では絕對やらない眞似だそうだ。そのほかさまざまな危險、又姉妹工場の紡績工場に於けるそれ等について詳しく知りたい讀者は、細井君の「女工哀史」をよみたまへと云ふ。

なほ仕事のつらさについて書けば、これは工場設備の問題だが寒中絕對工場へは火を入れないことだ。

遠州と云へば、讀者は冬もなほあたたかい國を想像するかも知れない。如何にも、夏蜜柑の黃色の實が累々と冬を飾つてゐる位、あたたかい國だ。その溫度が、又織物の仕事に大へんいいと云ふ話だ。が、それにしても、二月時分はやつぱり寒い。殊に今年は寒さがきつかつたとか云ふが、雪も何度も降る。毎朝氷が張る。工場の中にゐても、時々は手先きの感覺がなくなるやうな日があつた。なのに、ただ早朝の就業前、食堂の火鉢で手を炙せるきり、何の防寒設備もやつてゐない。

工場内は、何しろ下はコンクリイトの叩き、周圍は煉瓦の壁、天井は斜面の硝子窓だ。そこへ持つて來て、扱ふ物はすべて鐵だの木だの廻轉してゐる糸だのばかりだ。殊に準備部の小さな幼年工に至つては、冷たい鐵棒なぞを絕えずじかに握ら

なければいけない。然も迅速に。（その忙しさは、實際見てゐて涙ぐましくなる。まるで身體に暇がなく、又糸わくについてゐる重りの分銅なぞは、鐵鑄物で隨分な重量である。それをはづしたり掛けたりしつづける幼年工よ！）

だから、彼等の手はみんなひびとあかぎれだらけだ。中には割れて、赤く肉の見えるやうな手さへある。が、そんなことで休んでなぞは勿論ゐられない。

冬寒いやうな工場だけに、夏は又暑い。（まるで自然界への防備が出來てゐないのだ。殊にベルトなぞの發熱のために、眞夏なぞたまらないさうだ。

それらは勿論能率に影響する。工場の壁に、去年一杯の勞働能率の統計表が貼つてあるが、それを見ると、一月二月、並びに七月八月が最低能率で、五月頃と九十月頃が最大能率を示してゐる。それには、勿論正月の休みやら盆の前後やらの影響を見逃せない。が、寒暑から來る影響と衰退をも、どうして否めやう。會社の常務自身そのことを認めてゐるのだ。それでゐて、何の施設もしないのだ。

更に職工の待遇について書いて見ると、女工男工共、ほとんど、すべて寄宿舎へ收容してゐる。（女工は、準備部二十六人位、織布部三十人位。男工は、七人位、この中には糊つけ場の人數も含む。糊つけ場についてはあとで書く）。勿論、男女別々の寄宿舎だ。食事だの仕着せだの、夜具だのは、一切會社で持つ。無論夜具なぞと云つても簡單なものだが。

各別の寄宿舎の模樣なぞは一切略き、試みに食事の點だけ書いて見やう。

それは實に簡素なものだ。飯は半分挽割麥を混じてある。朝は、その冷飯のポロポロした奴へ湯をぶつかけて食ふ。おかずは香々だけ。味噌汁さへない。「知らずや資本家よ！」と云つてきかせたくなる。統計によれば、味噌汁は機械女工に取つて欠くべからざるもので、朝のそれの多少又濃淡によつて、一日の織上げ量に著しい差を生じる、とまで云はれてゐるではないか。

おかしいことに、晝飯へ來て初めて汁がつく、實に、いつも定つて大根か菜ッ葉だ。味つけに煮干でもチヨッピリ入つてゐれば、上出來の部だ。それと香々、香々は三度々々つくところが面白い。夜は、又野菜物の煮つけか何かだ。人參、牛蒡、大根、蒟蒻、昆布と云つた種類の——資本家は、どこへ行つても概ね菜食主義を信奉してゐるらしい。ただし自分にではなく、使つてゐる職工達に對して。……もつとも、稀には魚らしい物もつく。海岸から何里と離れてゐない土地でありながら、煮魚と

か三杯酢の鰯とか油揚とか。

食べて了ふと、めいめいフキンで拭いて、テエブルの自分の抽出しの中へ收ひ込み、次の時には又そこからテエブルの上へ陳列する。私も三度々々それをやつた。

麥飯については、全職工のあいだに不平がある。麥は總體すべく／＼して固く食ひにくい。押し麥ならまだいゝ。割麥のやうなものを、そのまんま米に混ぜて炊いて食はせるなぞと云ふのは、そも／＼野蠻きはまる沙汰だ。あのフオークやナイフの原始的食器を使ふ西洋人でさへ、麥粒はチヤンと粉々に潰して、ふくらせて、丁寧に燒いて食ふではないか。況んや職工達の場合には、時間を出來るだけ短く食ふ。ぐづ／＼してゐれば一人仲間はづれになるばかりでなく、仕事におくれたり、休み時間がなくなつたり、いゝ事は一つもない。だから、私なぞから見れば、ほとんど嚙んでゐるかどうかさへ疑はれる位の食べかただ。そう云ふ人間達に對しては、出來るだけ嚙みいゝやうな食物を考へるのが當然ではないか。なのに、最も食ひにくい主食物を考へて平氣でゐる資本家よ。それが、卿等の所謂經費節約のつもりであるか？

覿面、職工達のあいだには胃腸の惡い者が端からだ。もう一つは肋膜だ。それは勿論他の原因にもよるが、長くゐる者ほど第一に消化器疾患に罹つて、營養不十分的青い顏をしてゐる。それが果して能率に影響しないか。畢竟の算盤においても利得になるか。何か旗日や祝日には、まるで御馳走のつもりで會社は珍しく白い飯を出す。と、職工達は大よろこびで食ひすぎて、あと又腹をこはす。

から云ふ生活と勞働狀態で、彼等の所得はどの位か。月二回の定休（第一、第三日曜）を除き、他は一切休まないとして、食事や寢泊りの會社持ちの費用を一切略いて、あと一月七圓から十七圓位までが女工の貰ふ給金だ。男工の方はそれより多く、二十圓から上になる。

そのほかに、賞與がつく。たとへば織機部女工なら、その一月分の織りあげ反數によつて（これにも實際は著るしい不公平が附隨してゐるが、書き切れないからしばらくやめる）、月初めにはまるで學校の成績順のやうに表が發表される。それに從つて、最高三圓位から、最低五十錢位までの小遣を貰ふ。その功名慾と小遣のたのしみから、女工達は一生懸命になつて反數をあげやうと競爭する。そこが資本家のワナだ。いろんな形式でこれはどこにでも行はれてゐる競爭手段だが、その經營心理を考へると、ちよツと唾でも吐きたくなる。

男工の方も、賞與としてべつに月二三圓位貰ふ。たゞし、前

月一杯の計算で順位も手當も決まるので、金を貰ふのはみんな翌月の初めの日の夜だ。

毎朝早くから晩くまで働いて、（冬なぞは、電燈の光で働きはじめ、又電燈が點つて何時間かしてやツと工場を片づける）私はつく〲時間の長さに感心して了つた。勞働時間の總體についてはいづれあとで書くつもりだが、この時間と、勞働程度に對して、この給與は果して適當額だらうか。

その計算は割合簡單に出來さうだ。人數と云つては、前述の男女工のほか、事務員が三人、賄部の一切の世話をする老人夫婦だけだ。この株式會社及び工場は六年前の創立にかかるが、その時一台の力織機が百八十圓位。建物その他一切の費用を引ツくるめて、一台割宛四百圓位の計算に當つたさうだ。もつとも今はもツと安くなつてゐ、又大巾機械なら、倍の幅に織れながら一台宛七八百圓で濟むとの事だが、今の小巾機械でも、まだこの先き二十年位は充分使へる頑丈さだ。

さて又綿布の相場は、私が働いてゐた時には一反一圓あまりだツたが、去年の夏七月、あまりの下落で一時閉鎖休業をしなければいけまいかと云つた時分には、七十五錢乃至八十錢位だつたさうだ。そいつが、景氣のいい時には、いきなり二圓七十錢位に飛びあがる。米なぞと違つて、何と云ふ相場の變動のはげしさだ！その背後には綿糸の相場がある。綿糸が高くなれば、勢ひ反物の方も引きあげなければ割に合ず、そのあいだの見越しや手控えや貯藏なぞが、事業家の最も頭を惱ませる仕事の一つらしい。

が、ともかく、景氣のいい時はどうなるかと云へば大正八年頃の頂上には、職工の食費その他一切を支拂つて、なほ職工一人當り一日十圓づつの純益を會社に生んだ、と云ふすばらしさだ。だから今でも、一年ぢうに二三ヶ月景氣がよくさへあれば、結構收支が償ふと云はれてゐる。

つまり職工の日給や費用なぞは、相場の變動その他の經營の前には、から問題にされないのだ。だから、職工——殊に男工達はみんな抵な不平を持つてゐる。この工場の女工達は、近所の地方の家が多く、云はば嫁入り前父兄達の生活の補助をする爲め一年間づつの契約で、大抵半年分前金位で働きに來てゐる。つまり賞與だけが稍々彼女等自身の所得にすぎなく、いろんな苦しい算段も要るのだが、一生を縛られるわけではなく、——それは從來の女工の一般傾向で、勞働運動その他に至大な關係を持つ一つだが——どうにか我慢の仕樣もなくはない。が、それを一生の職業にしなければならない境遇に置かれた男工達には、深刻な嘆聲がある。今更ほかの職業に變る思ひ切りも足場

はなく、然もこの仕事の先きに見込もない。」

「考へると、つくづく馬鹿なことをしたものよ。鍛冶屋にでもなつてたらなア……」。

それは、彼等の偽らざる愚痴だ。

が、ほかの小さな工場なぞに較べれば、まだこの工場のほうが増しだと思ひ返してゐる。例の工場法の適用を受けない小工場では、この千九百二十五年の現在でも、まだ毎朝四時頃から夜の九時頃まであはれな職工達を働かせてゐる、と云ふおどろくべき事實が厳存する。おどろくべきより、怖るべき野蛮さだ。日本國民の常識を疑はれてもいい問題だ。

搾取といふ言葉は、今經濟學的に概ね勞働賃金のそれの意味に使はれてゐるが、實際はそれだけではない。なるほどそれも大きな一つだ。が、それ以上に、勞働者達はあらゆるものを搾取されてゐるのだ。殊に日本での重大な一つは、時間の搾取だ。進んだ國民ほど時間を大切にする。これほどの暴虐な時間的搾取、と云ふよりむしろ竊取を平氣で許してゐる日本人は、一たい進歩した國民の資格があるだらうか。このことについてはなほあとで書くつもりだが、なぜ日本の社會問題研究者や勞働運動者達は、この「時間搾取」の事實を第一に呼號しないか、私は諒解に苦しむ者だ。

職工については、まだ健康、風紀、資本家の悪辣手段なぞについて書きたいことが幾らもある。殊に遠く東北地方、たとへば秋田青森あたりからの工女を雇つてゐる工場主に至つては、その父兄親族達の注意を完全に免れてゐるのを奇貨として、虐待酷使至らざるなき事實を耳にしてゐる、然も彼等女工達は、どこにも訴へるところを持たないのだ。その人間の自由を重んずることを知らない事業家達の頭に至つては、遠く封建世界ののものらしい。

が、ひとまづ切りあげて、書き残した糊つけ工場について一言記そう。

それは、名全白稀綿糸に糊をつける工場だ。が、織機部や準備部とは少し離れて、べつに地面を占めてゐる。勿論分業的に、獨立に糊つけだけで營業してゐる工場もある。が、この會社のは附屬的なそれで、そこには男工一人と、一人の女房とが働いてゐる。

まづ釜へ熱湯を沸して、糸束を煮る。それは、糸を丈夫にする爲めと、糊つきをよくする爲めだ。ただし煮るのは三十番なぞの細い綿糸だけで、太い綿糸は決して煮ない。そのあとで、糊の井のなかへ入れて揉んでしぼる。糊は生麸とヘットを混合したものだが、その濃さが仲々むづかしい。しぼつたのを、一

種特別な角へ引つかけてなほよくしぼり、台などへのせておいて、又糊むらをなくす爲めにひねり、最後に杖で五六十遍も萬遍なく叩く。これは糊の固まつたのをほごす爲めだ。これから澤山の竹竿へ引つかけて天日で乾す。

冬は二日位も乾くのにかゝるが、時候のいゝ時は半日位で足りるさうだ。そいつを三百カナづつまとめて一マルに束ね、その澤山のマルを手車へ積んで倉庫へ運んで行つて、階下に收つておく。と、準備部の少女達が、運んで持つて行つては仕事するのだ。

事務所の人間達も、たゞ事務ばかり取つてゐるのではない。工場から運んで來て積みあげた織物を、六十反づつ一束にする。そしてケバだの糸屑だのを奇麗に鋏で切つて、一梱づつにして、ちやんと馬力で積み出せるやうにする。反物は、すべて一度濱松で檢査を受けなければならないのだそうだ。

以上で大體の記録を終へたが、一寸こゝで附記しておきたい興味は、その邊の遠州地方の言葉の、信州、ことに私の故郷の諏訪あたりの方言に、著るしく相似點を持つてゐることだ。

たとへば、諏訪方言の、だで、づら、づ、ないんね、等の語尾が、そつくりそのまゝこの地方でも使はれる。たゞアクセントが少しちがひ、又ほかの言葉が混り込んでゐる。それは、横に東海道で他地方と連絡してゐる土地がらを考へれば、當然すぎる話だ。

一體靜岡縣の言葉は、伊豆にしろ、大島（これは縣下ではないが）あたりにしろ、ひどく信州言葉に似てゐるのを感じて、かつて私は、一種の火山系でつらなる山脈線と云つた連結があるのではないか、と書いたことがある。が、今度この土地へ來て見て、それは一つに諏訪湖を源とする天龍川の古來からの上下交通によつてゐるに相違ないことがわかつた。

方言ばかりでなく、ちよつとした小話でも酷似したのがあつて、おどろかされたことがある。冬の晴れた日、工場の午休みに、はるかに國境の壁をかたちづくつてゐる蒼々とした信州の山々を眺め、一種なつかしい方言を耳にしながら、やがて信州へ行つて勞働する計畫を胸に浮ばせて、私は時々いろんな氣もちに浸つた。

明後日のユートピヤ

ユトピヤ獄

堺利彦

私は近い中に正味六個月ばかりの入獄をする事になつてゐる。そこで課題のユートピヤも、矢張りそこの事にして考へて見る。

六個月の入獄、その長さから云つて、如何にも手頃で、理想的である。それをその他の點に於いても、いろ／＼理想的にして考へて見る。

三疊の板の間の獨房、眞中に一疊敷の胡坐、あれはあれでよし。疊を敷いて貰ひたいとも、四疊半にして欲しいとも考へない。一尺五寸に二尺五寸くらいの小机、あれは責めて少しばかり擴大して欲しいのだけれど、マア我慢して置く。禁錮の事だから作業はなし、毎日その小机で本を讀むのが唯一の仕事。場合に依つては筆記も許されるだらうから、さうすれば使ひなれた萬年筆でノート・ブックにでも何か書きつける。然しそれも誰から催促されるではなし、いつまでに書きあげねばならぬと云ふではなし、そして衣食の心配は全く無いのだから、何しろ氣樂千萬な理想生活に相違ない。

然し寒さはこたえる。我がユートピヤ獄に於いては、あれだけはぜひ何とかして貰ひたい。と云つて、ストーヴをどん／＼たいて、アイスクリームが飲みたくなるほど暖かくして見れと云ふのではない。汽車の中のスチームの様に、夜中に汗をかいて目をさますほどにして見れと云ふのでもない。只、手の甲や首筋をノベツにこすつて居ないでは凌がれないと云ふほどの寒

さを、何とかして呉れないかと云ふだけの事である。

そこで先づこの願ひだけは叶つたとする。兎にかく甚だしい寒さ、寒さの刑罰だけは免かれたとする。次は食物。これも刺身が食ひたいの、鰻飯が食ひたいのとは決して云はない。否、トンカツの一皿だつて、決して望みはしない。只、（若い人なら、あの四分六飯でいゝから兎にかく腹一パイ食はせてくれと云ふだらうが、私としては分量に望みはない）、只、大福餅の夢を見たりするほど糖分を缺乏させて呉れなければ、それで宜しいとしておく。

そこで食物の事も先づ好いとする。あとは何だ。散歩がしたい。私は今度、ロシア語を少しかぢつて見たいと思つてゐるから、朝飯が濟めば先づそのロシヤ語の獨修でも暫らくやつて、それから少し手ごわいドイツ語の本でも讀んで、その邊でチョット息ぬきに散歩がしたい。御規則の運動は毎日一回、十分間か二十分間だが、あれはチト殘酷だ。せめて一時間づゝ二回にして欲しい。（私の理想は非常に低い。）

それから散歩が濟んで晝飯までの間、日記でもつけるか、隨筆でも書くか、反譯でもするか、兎にかくペンをいぢくつて時を過す。昔し巣鴨で『白面の戀』と題する、短篇小說の大傑作を書いた事があるが、今度も又ひとつ、それに劣らない大傑作でも拵へるかな。

晝飯後にはこのごろ習慣の『一睡』をやる。それから日本文か英文かの輕い讀み物をする。永い一生にツイ讀む機會を得なかつた『水滸傳』と『戰爭と平和』でも讀まうかと考へてゐる。堅い方の讀み物では、ランゲの『唯物論史』、エンゲルスの『アンチ・ヂユウリング』などを胸算に入れてゐる。こゝに書物の種類の制限といふ問題があるのだが、ユートピア獄には、そんな事は假りに無いものとしておく。

次に又散歩。同じくせめて一時間。この散歩の時、庭はき、草むしり、草花の蟲とりなどやらせて呉れると、申分がない。散歩が終ると、知りあひの囚人をその監房に訪問する。或は自分の監房でそれの訪問を受ける。いろ／＼雜談をやる。茶があれば猶いゝが、それはマア無くてもいゝ。碁盤はぜひ欲しいな。夕飯までの間、邪魔のはいる氣遣ひはなし、心置なくパチリ／＼とやる。そんなついでに、外國語など教はつたり、教へたりするのは大に好い。朝鮮語なども少しかぢつて見たい。

夕飯後に、モ一度散歩をしたいのだが、それは遠慮しておく。夜は又何か輕い讀み物でもして、かしわ餅でごろりと寢る。

私は猫が非常に好きだが、あいつをぜひ連れて行きたい。そ

んな無茶な事が、と云はれるかも知れないが、昔しベーベルにカナリヤの籠を持つて入獄したぢやないか。况んや私のはユートピア獄の事だ。構ふもんかつ、こうすると、私は毎晩、必ず猫を抱いて寝る事になる。おゝ何と×××ユートピア獄の生活よ!。

明日のユートピア

村山知義

明後日のユートピアを考へることは餘りに怖しい。

そこで、せいぜい明日のユートピアの御面體を拜ふことにしよう。

機械に叩き起こされる。一分一秒の容謝もない。しかし私自身が人間機械なのだからこれはちつとも苦しいことではない。

私の部屋は完全に私一人である。誰とも話をする必要がない。

ベル、押す、洗面の道具が現はれてくる。濟む。

ベル、押す、朝飯が現はれてくる。濟む。

昨夜のニュースを聞く。床の赤いカーペットを綠色のに變える。天氣がいいから窓を小さな六角形にする。床の平面をいろいろの高さに變えて見る。

それから工場に出掛けてゆく。路はわざと歩いて行く。途中ずつと新しく考へついた踊を踊つてゆかうためである。かつて「やがて人々は往來を歩くにまでリズムの美をとり入れるやうになるだらう」と云つた人があつたが、今では一人殘らずそれをやつてゐるのだ。

工場では從業前、皆で揃つて、怖しかつた困難時代の紀念歌をうたふ。指揮者は困難時代に偉大なる功績を立てた藝術上の一樣式、構成派——今では我々は非常に異つたものをその名の下に理解してゐるが——の物凄い台の上に立つて指揮する。無數の汽笛が我々のパイプオルガンである。

私は紡績工である。

工場の外觀も内部も形成藝術的要素が今日は驚くべき變化をしてゐる。きつと郊外の組合の連中の仕事であらう。私は所々、細い部分の結果を述べながら、ブラボーと叫ぶ。

機械にとりかかる。全力を盡して働く。少しも苦しくはない。先にも云つた通り、私自身が人間機械なのだから、これは殆んど遊戲をしてゐるやうなものだ。汗が快く全身から迸り出す。

それが一時間續く。するともうおしまひである私はまだどうも働きたりないので猶三十分間殘業する。

シヤワーを浴び着物を着換えて工場を出る。

太陽がさかんで元氣がよい。昔てHEXEどものよろめき歩いてゐた道路は塵一つをもとどめないやうに拭ひ清められてゐる。これは全く鏡と異らない。人は自分の心が底の底まで常に足下に映し出されてゐることを感じる。それ故に人々の聲は殆んど不必要なまでに大きく高くなつてしまつて、町中が大歌劇場のやうである。

私は「形成藝術家委員會」に行く。そして勞働服の形の改良、東南劇場のこの次の演出に協力すべき形成藝術家の抽せん、橋梁課から廻つて來た七つの橋の形の審査、中央執行委員會から廻つて來た「明後日のユートピア」の文書的記述に依つて造るべき形成的模型のデザインの製作等にいそしんだ。

ベル、押す、晝飯、済む。

讀書する。私は近頃非常に歴史に興味を持つてゐる。殊にあの困難時代の歴史を讀むことは殆んど我々現代人の義務であると思ふ。我々は確に非常にあらゆる點で驚くべき發達をとげたが、あの當時の人々が持つてゐた、我々が殆んど想像し難い數多くの不思議な性質の中に、何やら、人間が絶對に失つてはならないものがあつたに違ひないといふやうな氣がする。私は家へ物思ひに沈みながら歸る。

△△孃が訪ねて來る。昔は男と女とは根本的に異つてゐたのださうだ。着物まで、髮の毛まで異つてゐたのださうだ。私はその當時の人達を憐む。そんなことのために、今我々が享樂してゐる、微細な、リファインされた「女」のよさを知ることが出來なかつたに違ひないからだ。

現在では誰だつて、ちよつとした努力では男と女の區別をつけることは絶對に出來ない

△△孃を送り出しながら東南劇場へ働きに行く。今度の劇に出演すべきさまざまの動物共が猛獸から家畜に至るまで、いろいろの車で運搬されてゆく。古い劇場の形は廢止されて、自由に分割、上昇下降、廻轉、滑走すべき廣大な新しいアムフイシヤタアが今では用ゐられてゐる。

丁度劇場の正面に着いた時に、アンジエラスの鐘の音が澄み切つて響いて來た。

私は慄然として止まつた。

甚だしい勢で今や再び民衆の上に迫りつゝある原始基督教のことを思ひ出した。そこで私は頭の毛をむしりながら劇場の中へ足を踏み込んで行つたのである。（終り）

無蜒茫沈

辻　潤

「明日」が永遠に來ないやうに「明日のユウトピヤ」も永遠に來さうもなささうである。

「ユウトピヤ」は最非とも「今日のユウトピヤ」でなければならない。

しかしいつでも「ユウトピヤ」を見ることの出來るものは幸福だ。「明日のユウトピヤ」の爲めに今日の勞苦を耐え忍ぶことの出來るものはまことに幸福人である。

夢見る人にのみ唯だ「ユウトピヤ」は存在する。

人間は昔からたへず「ユウトピヤ」を夢みて來たのかも知れないが、未だ嘗て「ユウトピヤ」が地上に出現した試しはなかつたやうだ、つまり人間が「ユウトピヤ」などを夢見る必要がなくなつた時が「ユウトピヤ」の出現した時なのかも知れぬ。

私は「ユウトピヤ」に就てあまり興味を持つてはゐない。だからまだ「ユウトピヤ」に關する書物なども滿足に一冊も讀んだこともなく、勿論持つてもゐない。昔、ベラミイと云ふ人の書いた、「Looking Backward」と云ふ本を讀みかけたこともあるが、あまり興味がなかつたので途中でやめた記憶がある。著者はソシヤリストでその本には社會主義の實行された世界が想像されて書かれてゐるのである。有名なモアの「ユウトピヤ」近頃誰れも知つてゐるモリスの「どこにもない處からの新聞」なども未だに讀んでゐない。

支那人の書いた本を見ると、現世はいつでも末世澆季で、ユ

ウトピヤは未來にはなく、何時でも古へにのみあつたさうだ。

太清の始めは和順にして以て寂寞、質直にして素朴、閑靜にして躁しからず、推して故なく内に在りて道に合ひ、外に出でて義に調ひ、發動して文に成り、行決して物に便に、其言は略にして理に循ひ、其行は倪にして情に順ひ、其心は愉にして僞らず、其事は素にして飾らず――――だとか

古の人は氣を天地に同じうし、一世と共に優遊す、この時に當りては慶賞の利刑罰の威なく、禮義廉恥設けず、毀譽仁鄙立てざれども萬民相侵毀し暴虐する莫きこと、猶ほ混冥の中に在るが如し。――だとか

明堂の制は蓋ありて四方なければ風雨も襲ふこと能はず、寒暑も傷ふこと能はず、遷延して之に入り、民を養ふに公を以てし、其民は樸重――――忿爭せずして財足り、形を勞せずして功成り、天地の資に因りて之と和同す。是故に威厲しきも殺さず、刑錯くも用ひず、法省いて煩はしからず、故に其化神の如し――――だとか、すべてから云つた牧歌的なユウトピヤで、いつでも麒麟が現はれたり、鳳凰が飛び出して來るのである。

末世の時相はどうかと云ふと、――

上は取ることを好んで量無く、下は貪狼にして讓ることとなく、民は貧苦にして忿爭し、事力勞して功なく、盜賊滋々として並び興れ、上下相怨み、號令行はれず、執政有司は道に反ることを務めず、其本に矯拂して、其末を修むるを事とし、其德を削薄にして其形を曾累して、以つて治を爲さんと欲す。以て彈を執りて鳥を來し、梲を揮りて犬を狎らさんとするに異なるなし、亂乃ち愈々甚し。

「ユウトピヤ」の方はまことに夢のやうな話だが、末世の方は現代にあてはめて考へてもたいして假空どころか、そのままの感じがするのである。

しかし、現代人が若し夢みるとすれば、こんな非科學的な牧歌的なものではなく、所謂西洋人の發明にかかる科學的と云ふ奴に相異ない。

こんな風なことを云つたり、考へたり「ユウトピヤ」が來るとか來ないとか論じてゐる間にブルジョジイと云ふ現實の立派なユウトピアンはチヤント御自分樣だけのユウトピヤを享樂して御坐るにちがひない。「ユウトピヤ」を夢見る人間はいつも懐に金のない貧乏な空想人の仕事なのかも知れぬ。

明日は知らず、今日は「金」がユウトピヤの横の鍵であり、縱の鍵である。「金」さへ握れば自ずから其の人間に「ユウトピヤ」が出現するのだ。恐らく現代人にとつてはこれ以外のユウトピヤは考へ得られないかも知れない。

倫敦の社交婦人が當日の夜會の服裝を飛行器で巴里に求め、ゐながらにして數千里を離てた戀人の溜息をラジオによつて聽くことが出來るといふやうなことを恐らく「ユウトピヤ」の到來であると信じてゐる人間が多いのであらう。仄聞するところによると、日本でも近頃、飲料水をわざ／＼ウインから取りよせて飲んでゐる人間もかなりあるようである。世界一清涼飲料ウイーンの水なるものがどんなにうまいものなるか、僕などの與り知るところではないが、恐らくそれを取りよせて飲んでゐる人間の心理はユウトピヤンのそれに近いのではなからうか？

しかし、我々貧乏人にとつてはこの世はまことに恐ろしい地獄である。文明は至極便利重寶なものである――但し「金さへあれば」である。一錢不足しても電車へは乘れず、病氣になつても醫者にはかかれず、働きたくつても仕事はなし、學問をしたくても學校には行かれず、結婚をしたくても自由に出來ず、等々々と數へ立てれば際限がない。

夢のやうな「ユウトピヤ」の出現はともかく、少なくとも萬人に生活の難がなくなり、各自がその才能によつて仕事を得、老幼がおしなべていたわられ、貯金などをする必要がなくなる時が來るなら、それが帝國主義であらうと、社會主義であらうと、なんであらうとかんであらうと私はかまわないと思ふ。しかし、諸君、大地震はまた何時來るかも知れないのである、太陽はいつ衝突するかも知れず、ペスト、コレラ、ジフテリヤ、レプロシイ、の諸黴菌はいつ絶滅するとも見當はつかず、××は何時××するかも知れないのである。それでなくとも飛行器は墜落するものであり、自働車は轢殺するものである。汽船は沈沒するものである。銀行は破産し、會社は潰れ、教師はデタラメを教へ、醫者は處法を誤り、妻君は家出をし、子供は河へ落ち、役所は馘になり、原稿は賣れなくなり、斷髪美人が發砲し、革命家が何時資本主義にならないとも限らないのである。

かう考へて來ると「金」がユウトピヤのシンボルだとばかり勿論いい氣になつて納まつてもゐられなからうと思はれるのである。

昔、キリストは「天國は近づけり、悔ひ改めよ」と說いて歩いた。天國と云ふのはやはりユウトピヤの一種だと思ふが、「天國は汝の衷にあり」と云つてゐるところを見れば、基督はやはり現實的な天國を意味してゐたのではないらしい。釋迦も無上菩提の正覺を得たと云つて喜んだのも極樂が地上に出現したと云ふ意味ではなかつたらしい。

私のやうな人間にとつては「ユウトピヤ」が來ることは勿論結構なことだと思ふが、來なくつても別に悲觀はしない。そん

なことより明日食ふ飯の心配の方が問題である。帝劇や三越などは在れども無きが如く、ウインの水とやらも別段飲んでみたいとも思はず精養軒で飯を食ひたい氣も起らず、金殿玉樓にねて見たいとも思はない。

　ではどんなことを夢想してゐるかと云ふと――往くとして遂げざるなく、至るとして通ぜざるなく、生も以て志を枉ぐるに足らず、死を以て神を幽ふるに足らず、屈伸俛仰し、命を抱いて蜿轉す、禍福利害、千變萬紾するも、孰れか以つて心を變へしむるに足らん――これは昔の支那の理想的人物で眞人とか至人とか云はれる人間なのださうだが、こんな風な人間に若しなれたとしたら、それこそ自分にとつては誂へ向きのユウトピヤンで、さぞ氣樂になれるだらうと考へるのである。

　この「心境」に到達すれば、明日を待たずとも「今日」迄にユウトピヤンになれるわけだが、この世の中は自分ひとりだけの世の中ではないからさうは問屋で卸してくれさうもない。

ユトピアンとして

加藤一夫

明日のユトピア！

　問題の提出者は必ず、餘りに空想的でない、來るべき社會の現實的理想鄕は何であるか、と云ふことをその主眼として居るに相違がない。ところが僕は、ユトピアンではあり得ても、現實的にそれが直ちに可能であるか何うかと云ふことには頗る自信がない。僕があれ程純眞な（とまあ自分では思つてゐる）熱情をもつて社會運動の渦中にとび込んで「自由人聯盟」を創設した時でさえ僕は決して黄金世界の出現を信じて居なかつた。僕等の運動はたゞ、餘りに苦しい現狀からの離脱であり、その破壞にあつたのである。で、つきつめて考へるなら僕はやはり、社會は何うの、組織が何うの、と云つた樣なことよりも、僕が社會を何う見るか、人生を何うみるか、そして僕がその社會及

び人生を何う處理して行くか、何う征服して、何う生活するかといふ事の方が僕の問題になるので、社會を何うしようと云ふ事はやはり本質的ではなくなる様である。何故なら、僕は一體、餘りに東洋人的な性格や思想をうけつぎ過ぎて居るためか、宇宙人生の空である事を感じすぎるからでもあらう。僕はよく「自我」を語るが、しかしそれすらも根本的にはその自分なんてものを信じて居ない。僕が自分を感じるのは、自分以外に他人や他物があるからであり、自分に五官六感があるからであつて、即ち佛教者の言葉をかりて云へば五蘊假和合して居るからであつて、實はそんなものさへ幻であると感じて居るのだ。たゞ、それにも拘らず、それが事實であるから、或は事實となつて居るから、そこでその自分を何うしようと云ふ考へ方が起つて來る。そしてその自分を何うしようかと云ふ事からだけ社會の事が問題になる。そしてつい社會問題も論じて見たり、社會運動をして見たりする様になる。

では僕のユートピアは何麼ものであるべきであらう。第一に僕は自由を要求する。いや自分自身を要求する。だからその世界では支配はない。それから生活上の不安や不足はない。またどんな義務も負はされてはならない。僕自身また、人の評判なんかを氣にするやうな事では駄目だ。いや、さう云つた社會では評判なんてもので人の價値を量つてはならない。さういつた社會で一番尊まれるのは、自分自身をどんなによく實現し得たかと云ふことであつて、眞のエゴイストこそ最も尊ばれなければならない。そしてそのエゴイストがどんなに彼自身を立派に生き得たか、人の價値はそれで定まるであらう。即ち、彼は何よりも藝術家でなければならぬ。藝術家と云つても、今日の謂ゆる藝術家の如く、藝術を商賣と考へて居るやうな紙の蟲でなく、その生活全體を藝術とするものでなければならぬ。

まあさう云つたものがその基調である。が、さう云つたことを基調として世界が果して明日實現するか何うかと云ふことはそれは何とも判斷が出來ない。しかし人々が先づ、さうした虚無觀に徹底するやうになれば必ずしも不可能ではない。少くとも或る人々の社會ではそれは可能である。

しかももつと現實的に考へると何であらう。何しろ五枚や六枚で僕の「明日のユートピアム」を語ることは困難だが、兎に角僕はかう思つて居る。今日の社會は云ふまでもなく資本主義制度の世の中である。産業革命が先づ英國に起つて、大きなそして精巧な機械が出來、それが遂に今日の如き大工業と世界都市とをつくつたが、そしてまだ工業の發達しない國から盛に搾取して一大富國となつたが、しかし工業は決して英國にばかり榮え

たのではない。やがて直きに獨逸にも佛蘭西にも米國にも榮えて來た。たとひトルストイやカアペンタアが何歟に西洋文明の侵略について警告するところがあつても、日本は勿論、印度や支那にすらもこの工業が芽生へ物質文化が滔々として流れ込まうとして居る。そして世界は今や、その隆盛になつた資本主義制度、資本主義制度のためにだん／＼と疲弊しつゝある。で、これはやがて早晩、何うしても壞滅しなければならぬ、日本の國では、田中政友會總裁が産業立國を高調し出したが、それは寧ろ世界の大勢から云つて遲そすぎたと云はねばならぬ。工業が榮え、農村が疲弊して、百姓をやるものがだん／＼となくなつて行く。農作物のための土地が惜しげもなく荒らされたり住宅地とされてしまふ。で、食物を他の農業國に仰がうとするが、それ等の農業國もやはり産業化してしまつて居る。そこで第一食糧に困つて來る。不必要な商品と贅澤品とのみが增える。そしてその結果は當然資本主義國家の破滅とならねばならぬ。がそれに代るものは何であるか。ロシアはコンミユニズムを施行しようとした。しかしそれもこれも資本主義の延長に過ぎないのだから、この大勢を救ふ力とはならない。で、再びまた重農主義の世の中が出現しなければならない。それが明日の世界である。さてその明日の世界をどれだけユートピアナイズすることが出來るかだ。第一に世界統一の夢が破れねばならぬ。第二には中央集權制度が力を失ふ。そして多分××××××は委員を選んで經濟界を整理するだらう。一日二三時間の勞働は誰しもしなければならぬであらう。もつともそれは今日のブルジョアと同樣、學者、思想家、藝術家等は初めはいやがるに相違ない。しかし一日二三時間の勞働は却つて彼等の健康のためによいことを知つて喜んでやるやうになるだらう。科學は無論排斥されはしない、しかしその科學はもつと實用的になるだらう。器械も、今日の如く人を奴隷とするやうな器械でなく、人がそれを自己の必要のために用ひることの出來るやうな、彼の創造的、藝術的、全人格的欲求を充すに足るやうなものが發明されるであらう。それは二三時間の勞働時間の餘分を用ひて人々が自分で研究し發明するであらう。無論、そんな實用的なことばかりはしないだらう。直ちに應用の出來ない學問をする人達のグループも出來るだらう。藝術家のグループも出來るだらう、そしてその時虛無思想家は、また、エゴイストは、非常に容易に彼自身を生きるであらう。いや、彼とばかり云つて來たが、無論女も同樣に、もつとも明るく自由に彼女を生るであらう。さし當り、僕が今住んで居る井の頭公園あたりは、今日以上に大つぴらにそして喜ばしく美はしく若き男女のための樂

園になるであらう。丁度エデンの園のやうに。しかしこんなことを云つて居ると餘り空想的な、だから明日のユートピアではなくなるから、これ位にして御免を蒙り度い。

我がユートピアの片影

新居格

ユートピアでは現在のやうに食ふ心配がないのだから、毎夜熟眠をする。夢なんか見たことがない。朝はそうした熟睡から冴々した氣持で眼覺める。泥棒なぞのない社會だから、雨戸がない。空氣が戸外から全夜を通して適當に交流してゐるのだから、部屋は寢呼吸でちつとも濁つてゐない。ベッドの上で開かれた瞳に映つるものは、青々と茂つた綠葉と、赤、白、紫、黄その他さま〲の花である。それが硝子戸越に見へる。洗面して、寢卷を『トルストフカ』のやうな着物に着替へる。それから『自由國朝報』と云ふ新聞をもつて、朝の散歩に出かける。散歩ではあるが同時に、共同食堂に出かける譯でもある。道は敷石道なので氣持がいゝ。道の兩側には花が植つてゐるので、日比谷公園の花壇をもつと〱綺麗にしたやうな側を通ることになる。新聞は著しく現在のそれと違つたものだ。第一面の廣告がない。あつた所で商業主義的のものではなく、例へば某氏著『文學思想研究』とその目次を示した位のもので何日から公共圖書館で閲覽が出來るとあるだけ。今の新聞にある『案內』の所には『營業』『電話金融』『貸借』『被雇度』なぞと云つたのがあるが『自由國朝報』にはそんなのはない。富豪の娘の結婚や、名流の士のすべつたのころんだのと云ふ記事(これは富豪とか名士とかがもうないのだから)を特別扱にしたりする醜態はない。財產に基づく犯罪記事なぞは無論ない。學藝欄、スポーツ記事、面白いが上品な出來事だけが報道され、趣味的なものの一切の記事はある。例へば音樂會、芝居、映畫、展覽會、競技とか云つた風のものが。

朝食后小憩して、午前中みんながそれぐの勞働をするのが原則だが、午后と夜とはそれぐ勝手に時間がつかへるので、みんなは朝の新聞で見たところの、そして自分の好みに從つて時間を費やすことになる。午前の幾時間が人類生活に必需的な生産をする。汎勞働の世界。午後と夜とは各個人が完全に解放された個性を創造的又は享樂的な時間のうちに用ゐる。

で、僕は午前中の筋肉勞働を終へると入浴して圖書館に行く。みんな入場料の要らない素敵に清潔なそして適當な設備だ。今の錢湯のやうな變なペンキ畫でなく、本當にいゝ繪を美術的天才がかいてある。譬へてみると、シャヴァンヌの『浴みせる女』とか、ルノアールの『浴みせる三少女』とかと云つた風の繪とか『ニンフとサチイル』なぞを題材にしたやうなものでなければ勞働讃美の『勞働者の夢』と云つたやうな何しろ素敵にして快い藝術的な繪がかゝつてゐる。男女は混浴だが道德的進化なり審美的觀念が發達してゐるから、今の世間の連中が考へるやうな變なことにはならない。一浴して圖書館へ行くなり自宅の書齋なりで机に就く。讀みたいものをよみ書きたいことを書く。毎日二時間づゝよみ且つ二時間づゝ位書けば澤山だ。

後は愉快に遊ぶことにする。なるたけ人間らしく生きることだ。と、思つて高圓寺から省線（そんな名ではないが）に乘つて銀座に行く。銀座には電車はもう通つてゐない。地下なり、裏通なりを走つてゐるからである。行路樹が西側に整列してゐる。行人は何れも清楚で感じがいゝ。生き生きした顏色をして男も女も綺麗である。女はエロチックで楚々としてゐるが一體上品で男も男性美を持つてゐて、快活である。

舊時代にあつた意味での店舖は銀座にはもうない。それらは自由社會人の製作にかゝる製作品の展覽會と云つた意味で陳列されてある。他は自由社會經營のカフエーや活動寫眞館、美術館、劇場、音樂堂、舞踊場、講演會堂等がいくつもある。何處へ這入るのも勝手で、且つ無料だ。カフエーでは紅琲、紅茶、各種の酒があつて隨意にのむことが出來るが、酒は愉快な氣持をたすける程度で、醉ふまでは飲まさない。又自由國人は飲みもしない。誰が誰とでも愉快に話してゐる。人々は決して人見知なぞはしない。誰もが誰もを隣人の如くに、また友人の如く思つてゐるからである。若かい男は老人に向つて『あなたの青春の夢をきかして下さい』なぞと云ふ。老人は莞爾としてそれに答へる。誰も威張る奴はない。中央執行委員だの、首領だの、況んや自分だけが領袖であるやうに思つてゐる變な奴なんぞはゐない。利川計り考へて、タクチックばかり考へて自分が思想もない癖に、他人に思想がないなぞと云ふいゝ氣なぢいさんは

ゐない。自由社會國の人間は純粹で、すつきりして、氣持がいゝことゝ限りがない。萬事が藝術的で、詩で、同時に極めて科學的で、その國人はあてこすりや、まづい皮肉や、自稱ユーモアや、與太を飛ばさない。すべてが自由でしかも自律的に適度なリズムを持つてゐる。誰もが自分の氣持を尊重すると共に、他人の氣持を尊重する。事程左樣に人皆が聰明で叡智で、探智的で、快活で、察しがいゝ。

そうしたユートピア國の銀座には夕刊賣もなく、緣日商人もなく、廣告ビラも落ちてゐず、尾張町の街角の交番もなく、十二月が來ても社會鍋もなく、歳暮の賣出しもない。街は清潔、人は清純、服裝は清楚、いゝころ加減に街を引上げて無賃の地下電車で歸つて來る。その電車には廣告の代りに、名畫がかゝつてゐる。運轉手はたゞ一人（切符切りなんかゐないのは云ふまでもない）それが頗る美術的な感じのいゝ服裝をしてゐる。午后、若くは夜働く人達も矢張り午前中に働く人達と同じ時間で必ずしも同じ時刻にならないから彼等の創造的活動を妨げない。

どこにも自由と快適とがある。その國には權力意識は絕對にないことが何よりも喜ばしいとされてゐる。以上が我がユートピアのホンの一片である。

理想空想誇大妄想

山崎今朝彌

○

明日限りの御約束で四五枚の原稿快んで引受ましたが、昨日で編輯を濟ませ今日御約束を果たし明日より校正にかゝる豫定の所、昨夜の『現代心解剖』の會が祟つて一夜中眠られず、お負けに、新案特許、解放時評合評會の席上で倒れた儘の編輯長が、今、愈々肺炎と決定アレヤこれやで到底御期待に副ふようなものが書けつこなし、小生としても折角御贔負の御用命に不

肝心のものを差上げたくはなし、又私が書かなんだ處が改造が少しも迷惑する譯でなし、旁々以て御斷り申上る次第不悪。其代り次回には岐度御用命相成度此段緊く御願申上候。

○

斯うは書き、封筒にも入れて見たが、改造の原稿を斷わるなんて第一冥利を知らない話だ。第二に改造が僕なんかに原稿を頼むは商賣敵を超越して襟度を示したものだ、それをコセ〳〵ビク〳〵大事を取るなんて、余りに雅量が無さ過ぎる。そこで飯でも食べて何か書く事にする。

○

ユートピア——理想鄕——理想——空想——妄想——誇大妄想——狂——。成程蒸し出鱈目でもよい譯だ。空想妄想なら僕が毎日、夜となく晝となく年柄年中やつてる事だ。特に今日なんかは理想的に空想的妄想的だ。一つ又『解放』でも空想妄想するとする。

○

雜誌もよいが月末が無かつたら尚よかろふ。紙は持て來る、印刷はして來る、金はまとめて拂はれる。困る事は原稿を斷る事だ。もう斷ふ處がなくなつた。併し少し仰山に云へばよい原稿は一つもない。五萬部刷ると生産費と廣告費で一部二十錢なら出來る。二五の一萬圓が元で、賣上は假りに安く八掛の八割と見積つても一萬六千圓の六千圓は丸儲けだ。正月號は創作に全力を擧げて小川未明、藤森成吉、秋田雨雀、新居格、守田有秋、宮島資夫、水守龜之助、加藤一夫、中西伊之助、前田河廣一郎の十勇士がペンを並べて創作界に大革命を起す豫定で執筆してくれるといふから恐ろしく物すごい位だ、テツキリ當局の資金と睨んで與信所まで手を廻した警視廳は又大騷ぎするだらう。尤もアレは僕のカラカイも悪かつた。獨りでカラカツて獨りで喜んで獨りで心配すると云ふ譯だ。敵討に内閣を無視して發禁は懲り〳〵だ。アー桑原〳〵。しかし雜誌屋が當れば知らぬ間に貴族院議員になつていると云ふ事は滿更嘘でもなさゝうだ。さうなつたら可笑なものだが仕方があるまい。無産階級の諸君は又何か言ふだらう。其れは又其時の事だ。有産階級の悲哀しとも云ふ奴？　其れを藤田大學長の奴。先達て僕が折角内務大臧大神の御伴で岩崎家まで御成に成つた時大神の前で、雜誌は早く見切を付けたがよいと、親切に忠告してくれた。大神最初はキヨトンとして居たが段々考へたと見へ歸宅してから大

に油を取られた。藤田君計りでない世の紳士諸君に悉く注意を乞ふ。言行を愼んで須らく國家の秩序を維持すべし。内亂をボツ發させるような事はして貰ひたくない。尤も藤田君にはまだ打合せがしてなかつた。流石堺利彦君は先日電車の中で大に解放の發展を羨んでくれたと、歸宅してから國家安康家内安全。マサカ改造を盜つて内亂を起させるような惡戯をする惡人はあるまいから安心だ。其んな人間があれば其れはキツト泥棒もスパイもする人間だ。が殘品には弱る。殘品が何時も内亂の基だ。之れこそ秘くす譯に行かぬ。冗談ではない。之れが二月分も三月分もタマつたら何處に置くものだろう。殘品もだが先日の會で誰かゞ、稿料の出ない雜誌は何時か潰れるに極まつてる一度や二度は義理でも書くが、其れを商賣にしてる者が何時までも續く理由がないもし同志だ仲間だといふのでロハの原稿を何時迄も書く者があるなら、其雜誌は同志雜誌、仲間雜誌だ、同志仲間と普通人間とは趣味も興味も違ふ、同志に興味あり面白味ある評判のよい雜誌なら、其れは一般の讀者には歡迎されない、一二月は元の解放と思ふて買はせられる者も、今に全く別物だと云ふ事で誰も買はなくなる。其れに八方美人は逐に八方塞りだ、既に其徴候も徐々見へ出したではないか。と云つたつけ。其れがそうなら大に悲觀して仕舞ふ。僕は又世間で解放の復活は改造の打擊だ强敵だと評判するから、今にキツト買潰しに來て下さるかと思つて居たに。しかし、何、何んでもない、球の置様でドンナ算盤も出る。結局は悲觀か樂觀かだ。極端も極端は一致する。イクラ一つ事を繰返しても同じ事だ。もう止さう。其れに制限の枚數も突破した。(十一、二)

ある刹那

ささきふさ

露の湯をあび、虹の衣をつけ、香油の流れにのぞむ――ルシアンの水彩は豐かなものです。がさうした感覺的乃至繪畫的快

感のモザイクは、何となくテイーンズの夢といつた空ぞらしさが鼻について、現在の私がユートピアと呼ぶべくあまりにかけ離れた氣が致されます。尤も、ユートピアを原義通り No-where と解していいなら別ですが。

ウエルスの "Dream" は見やうによつては現實に即してゐるともいへませう。が彼は現代の社會的欠陥を難ずるに急で、それらの問題が三千年後の世界でどう解決せられてゐるかといふことは、一向明記してゐません。これも No-where の迷霧に葬り去らるべき夢だと私は思つて居ります。

いつたい經濟學者や社會主義者達がユートピアの題下に實現しようとしてゐるおほかたの改革は、一見現實に即してゐるやうで、その實我われの心の現實とは全く沒交渉なもののやうに私には思はれます。そして心の現實に觸れない問題は私にとつて何らの意味もなさないのです。

私のいふユートピアは――私がかうありたいと願ふ境地は……例へば、私は結婚を前に、一日兄と外出を共にするとします。歩きながら兄が突然こんなことをいひ出すとします。

「麹町の家にゐた頃ね――」その頃私達はまだ小學校の初級生でした。「二人でお濠の土手にはちすの花をとりに行つたことがあつたね。」

「そんなことがあつたかしら。」

「その時、何でだかあんたが僕を怒らせてね、僕は怒つてあんたの小さな靴を上からぎつと踏んでやつた。そしたらあんたは泣きながら僕に御免なさいといつた。」

「まるで憶えてないわ。」

「さう、僕は今でもよくひよいとその時のことを思ひ出す…………」

また、ある深更私は自動車の迎へを受けて、危篤の母の枕頭に坐るとします。死んだやうに瞑目してゐる母が、人びとの立つた隙にふとかすかな眼の光りを見せて、かう私に私語しかけるとします。

「あの、あれ、ね。心配しないでもよござんすよ。どうせ私は要らないのだから。家のことに使つておくれ。死んだらおかたみです………」

私のユートピアはかういつた場合――人間の善意が善意と交響する場合、或ひは一の善意が他の善意に征服せられる場合、また、一つの感激が形の上のあらゆる約束から我われの心を遊離させる刹那に、忽然私の内部に湧くのであす。

他の機會に私は私のユートピアを、勞働が道樂に變質する場合―― Labour=Laziness の境地に於いて見るといつたこと

があります。これも善意が善意と交響し、善意が善意に征服せられる刹那の一現象と考へることが出來ると思ひます。

私のいふユートピアの通性は、それが何れの場合に於いても偶發的で且つ刹那的であるといふことです。だからそれぞれの場合に永續性を求めることは——或ひは、それぞれの場合を秩序的に羅列させることは、やがてユートピアをユートピアでなくすることになるかも知れません。

此刹那が偶發的であることそのことは、人間の立てるスキームが到底十全なものであり得ないといふ事實を裏付けてゐます。つまり我われの企圖の完成せられる刹那は、同時にその企圖にかけた期待の裏切られる刹那でもあるわけでせう。私が私のユートピアに何らの形をも與へ得ない所以も此處にあります。現に私は、私自身には確かに內在してゐる個個の刹那を書き記してみて、書き記されたものが書き記さうとしたものから去ることあまりに遠いのを歎いてゐる始末です。

私はよく里見弴氏の御作の中で、私の書き表はし得なかつた此刹那に行き遇ふ氣が致します。私はとうから一度とつくり氏のまごころの御說をお聽したいものと思つて居ります。それが、現在の私には心の現實に則して居りながら同時にまた心のプロセスの埒外を泳いでゐるとしか思へない此刹那に、ある種のスタビリティーを與へるものであれば、とも思つて居ります。

ミレーの夢

麻生久

Y兄

久し振りに君の手紙を拜見。懷かしく二三度も讀み返した。『近頃のお前は何を夢見てくらしてゐるのか』との君の質問、さて僕はその質問に何と答へやう？

御存知の通り社會運動と云ふ一つの仕事に自分の生活を投じてゐる僕の事だ。お前のユートピアは何だと眞正面からきかれ

ゝば、それは一日も早く、僕等の希望してゐる理想の社會を此世に創ることだと答へるよりしかたがない。

だがまあ、そんなおきまり文句だけでは君は滿腹して呉れないだらう。そこで色々考へた末、つい此頃ほんとに見た一つの夢を君に書き送る事にしやう。夢は自分の心の中に氣がつかずにひそんでゐる希望を意識の上に説明する道具だと云ふことをきいたが、僕の見た夢も、恐らく心の底にひそんでゐて氣がつかずにゐるユートピアを説明して呉れたのだらう。

その日と一日中仕事の事であちこち駈け廻つて、夕方僕は櫻田本郷町から日比谷に行くあの大通りを一人で歩いてゐた。何か知らつきつめた氣持ちで運動の事を考へながら歩いてゐる間に、ふと僕は自分の心に非常な寂寥を感じた。何かしら澄みきつたやうな淋しさが全身全心を占領したやうな氣がした。僕は不意にめさめたやうな氣持ちになつて立ち止りながらあたりを見廻した。するとその時僕の心も肉體も瞬間的に、

あゝ秋が來た！秋の日暮方が來た！

と云ふ氣持ちでいつぱいになつた。

つい此間まで青々と繁つてゐた廣い大通りの兩側の並木の枝には、早くも黄に染まつた枯れ葉が淋し氣に夕方の風に顫えてゐるではないか。大通りの上を蔽ふ高い澄み切つた夕方の空には、灰色の薄雲がところ／＼に流れて町は次第にうす黒に暮れて行く。電車が走る。自動車が疾驅する。自轉車が行き交ふ、おゝ町々には明かるい電燈の光りが賑やかにとぼつた！けれ共、けれ共、夕暮れの秋が淋しくおだやかに、その冷たい空で町を蔽ふてゐるではないか！

秋が來たんだ！秋が來たんだ！あゝ田舍が戀しい！稻が黄色くうれて、山々が紅葉に染まる故郷の田園が戀しい！

僕は其夜歸つてから、ミレーの畫集…僕がどんなにミレーを愛してゐるかは君もよく知つてゐる…取り出して、その中からあの落穗ひろひと羊かひの二つを選んで書齋の壁にはりつけた。そして僕は寢床の中から長い間それを眺めがら色々な空想に耽けつた。久し振りに僕の心はこつぴどい闘爭的な氣分からはなれて淋しい靜かな、そして又非常に平和な氣持ちにふんはりと包まれて何時の間にか心地のいゝ眠りにおちて行つた。

暮れて行く山の麓に一軒の百姓家が見える。その百姓家が僕の家だ。家は遠く、晩秋の日暮れ方の薄靄が廣い／＼平野を蔽ふて、家はその廣い平野の彼方に黒く沈んでゐる。僕は今日朝から刈り取つた稻をかき集めては束にして今漸く小積みにし終へて腰をのばしたところだ。

うす闇に蔽はれた三四枚むかうの田の中に黒い小さな影が動いてゐる。僕は鎌や何かをそろへて家路につく用意をしながらその小さな黒い影の方を向いて呼んだ。

『坊主よ、歸るんだよ』

すると小さい黒い影は直ぐに立ち上つて一寸こつちの方を向くと元氣よく一目散に駈け出して來た。そして駈けながらせいつぱいの聲で叫んだ。

『ちやんよ。うんと拾つたよ』

『おゝ、うんと拾つたなあ、いゝ子だいゝ子だ』

僕は片手にいつぱい落穂を握つてにこ／＼してゐる坊主を抱き上げた。

『さあ歸つてご飯だよ。かあちやんが待つてるよ』

『かあちやん待つてるかい』

『うん待つてるとも。坊主を待つてるよ』

子供は僕の肩の上でぴよん／＼身體をゆすりながらうれしくてたまらぬやうに叫んだ。

『これかあちやんに見せるんだよ』

そして片手の落穂を肩の上で元氣よく振り廻した。

僕は心地のいゝ疲れと、思ふやうに仕事のはかどつた滿足とで平和な氣持ちに飽滿しながらのつそり／＼と薄闇に包まれた田の面を家路についた。

子供が肩の上で又しても元氣よく叫んだ。

『ちやん、まんまんさんだよ。兎さんがゐるんだよ』

何時の間にか月が澄みきつた高い夕の空にあがつて夢のやうにやはらかに平野の上を照してゐる。

『うん兎さんのまん／＼さんが出たなあ』

『兎さんの耳は長いんだらう』

『うん長いよ』

『どうして長いんだい』

『それはなあ、かあちやんのぽんぽにゐる時になあ、椎の實をたべたからだよ』

『ふん……椎の實を食べると何故長いんだい』

『うむそうだなあ、そりやきつと椎の實が長いからだらう』

子供は僕のこたへを考へ込むやうに暫時だまつておとなしくしてゐたが今度は不意に大きな聲でうたひだした。

夕燒け小燒け

あした天氣なあれ。

そして又一生懸命に肩の上でぴよん／＼とはねあがつた。

『あぶないよ！』

僕は思はず叫んだ。とそのひやうしに僕はすつかり眼をさま

された。

壁にはミレーの畫が電燈の光りに照らされて田園の秋の靜かさと平和とを畫面にたゞよはせてゐる。僕はもう一度眼をつむつて今見た懷かしい夢のあとを追つた。

あゝもしも僕の生命のあるうちにそんな世の中が來たら、僕は外に望みはない。再び土に還つて、自分のたましひがあこがれてゐる平和な自然な百姓の生活をやりたいものだ

Y君笑つちやいけない。これが僕の近頃夢見てゐるユートピアさ。終り。失敬、

お金を不必要とする世界

相馬泰三

私のユートピア、そこでは、物を賣つたり買つたりすることが法律で禁じられてゐます。道德的にも、所謂商取引を不正なこととしてゐます。だから、實際生活の上に於て、金錢は全く不必要なものになつてゐるのです。ただ、骨董好きな人達の間で多少の權威と價値が認められてゐる位なものです。骨董物などをたねに、守錢奴の子供たちが貨幣のやりとりをしてゐますが、これは見つけられれば、むろん、警察へあげられてしまひます。

私のユートピア、そこでは、お金の苦勞がなくなつたので、人々は一般に、非常にゆつたりしてゐます。サギ師が居なくなつたので、サギにかかる者もありません。富豪もなければ貧乏人もないから、下らない激昂もなければ、反感もなければ、爭議もなければ、それから、あの見つともない高慢ちきやお追隨といつたやうなものも、すつかり跡を絶つてゐます。人々がお互ひに、かうして一しよに混り合つて生活してゆくことを心の底から悦び合つてゐます。

私のユートピア、そこでは、人々は、われ〳〵の社會に於けるとは反對に、すべてのことを良心の命ずるがままに行ふことと

を恥辱とはしてゐません。從つて、あらゆる施設は眞の便利と親切の結晶であり、藝術は卑俗と淺薄とから足を洗ひ、教育家は嘘をつく心配がなくなり、取つてつけたやうな體面をつくる必要はありません。

私のユートピア、そこでは、軍備を必要とするやうな考を抱つ人がゐなくなり、罪人が減り、さしもに執ねく數多くの人々を惱まし續けて來た神經衰弱が根絕してゐます。そのために、人々の容貌はとみに見あげたものになつてゐます。ただ一つそこでも今の世と變りのないのは、自殺者の多いことでありま す但し、その原因について調べてみると、その九十九パーセントまでが、人生無爲の煩悶のためであります。それは、つまり、お金を儲けたり、お金をためたりするほかに何も考へることもなければ何もすることもないといふ祖先の性質が遺傳してその人達をして生存の意義を根本的に疑はしめるためであります。(完)

人間性發揮の試驗國

岡本一平

明後日のユートピアとは物憎き課題である。これを現實の時間のあさつての上に建つ夢想的理想鄕と解すればあまりにあさつてが鼻の先に迫り過ぎて夢想を働かせる餘地が無い。これを近き將來の夢想的理想鄕と解すれば明後日といふ文字が象徵するへうきん皮肉な詩味を失落せさせ陳套な政論家の頒布小冊子の標題めく。これを準備整ふた後の極樂國と解すれば、遊園地の宣傳ビラの宣傳標語だ。これを一つ日を距てゝ辿りつく常春國と解すればお伽話でも始めなければ答にならない。明後日のユートピア、それは把不住なる哉。

把不住の儘鵜呑みにして明後日のユートピヤらしきものを述べる。

世界の國々の金持ちが人類の使命に目覺めその餘力を擧げて

提供して人性研究の協會を拵らへる。土地を南米あたりに買込む。世界の國々より人間の選手を選拔してその土地へ送る。人間の選手とは何だらう。人間性の一分が特に發達した人間である。既に人間性といふ。善惡良否の規準は撤廢される。性の欲する儘に振舞ひ得る者にしてその力强きを目出度しとする。あらゆる人間性である。偷盜姦淫の癖もいゝ、放蕩無頼もいゝ。極端な懷疑主義者もいゝ。孝行娘もいゝ。節婦もいゝ。君子長者もいゝ。享樂主義者もいゝ。樂天家もいゝ。變態性慾家もいゝ。センチメンタリストもいゝ。見神求佛の徒もいゝ。貪食漢もいゝ。愛猫家もいゝ。戀愛病患者もいゝ。拜金宗の信徒もいゝ。現實回避者も亦これ人間性の一部だ。靈媒者千里眼もいゝ。山師もいゝ。法螺吹きもいゝ。道化ものもいゝ。耽美者もいゝ。唯理遊奉者もいゝ。唯心主義者もいゝ。木食上人もいゝ。良妻賢母もいゝ。徹底した平凡人もいゝ。企業好きもいゝ。カルタ好きもいゝ。蕩婦淫婦もいゝ。キネマ・フアンもいゝ。探偵もいゝ。饒舌家もいゝ。おしやれもいゝ。小心ものもいゝ。童女型の無垢の女もいゝ。瑞々しい青年もいゝ。發明狂もいゝ。骨董癖もいゝ。權力好きもいゝ。支配慾强きもの亦いゝ。薄情もの亦いゝ。なまけものよし。精力濫費家よし。お人善しよし。鬪爭好きよし。無抵抗主義者よし。等々。

そしてこれ等の人間性の選手を蒐めてその長技を發揮させる爲めに最新最便の設備を整へる。

例へば泥棒選手の爲めには忍ぶべき闇、秘密に捻ぢ切るべき扉と錠前、適當な熟醉の醉漢、盜まるべき金庫とそうして中に紙幣束。總てこれ等を人造的に然も迫眞の境にまで巧に施設する。

斯くの如く性能性癖を何の顧慮なく擅にし得る生活を彼等に繼けさして行つて一年二年五年十年とその經過を專門家〳〵に觀察研究さして行く。彼等の特性がいよ〳〵發達すれば設備も亦改良を加へて行く。これで彼等の性能性癖が萎痺減退すれば設備の施設も手薄にする。

この國は人間性の天國である。人間の選手はいやが上にもその所謂人間的なるものを增長さして行ける。若し增長するものとしたならば世界の人類はこの國に於て高調した人間の管絃樂を害毒の餘沫を受くる事無しに安穩に聽き得る。若しこの國の如き設備組織によればその住人の人間性の所謂善美の側に屬するものは發達し所謂惡醜の部に屬するものは消滅し行く結果を觀る事にならば移してもつて世界各社會の設備組織の好參考材料とする事が出來る。

若し善は惡によつて研かれ美は醜によつて競い出さるも相對

的の法則を飽まで自然が固執するとならばこの國の如き設備によらば人間性を増長もせず減退もせず、中正にしてまた別種の一人間性を生み出す事があるかも知れぬ。さすれば人類の一大發見だ。」

人間性のあらゆるものはみな實在の一々の威神力である。一として捨つべきものは無い。一色一香これ道に中る。たゞその用途の適不適により功不功に分れる。といふ、この人世最後の歸結の大乘的解明は東西の苦勞した偉大な藝術家思想家宗教家等のみな一致して落付くところであるがその悟感をわれ等凡人の機能に感覺させるには眼前の實例をもつて示すに越した事は無い。

今この國の組織を大乘的解明の如くならしめ、どろぼう活きて働く時決してどろぼうたらず戀愛病患者時を得ば生命の使徒である自然本有（ほんぬ）の作略を演出し示す舞台たらしめたならばわれ等如何に直接よりの感銘に啓發される處が多いだらう。

明後日のユートピアをひよつとしたら出來るかも知れぬしひよつとしたら出來そうで出來ないかも知れぬ夢想的理想郷だといふ風に解釋して答への夢をかく說く。

牛の王様

作　純

私は學校を出ると社會的な――――例へば會社員とか辯護士とかいふやうな――――職業をもつて、しかも常に何か高雅な夢を描きながら生活をつゞけた。夢みることなくして生活することは出來なかつたのである。然し私は余りに高い夢をみ過ぎた。そして私の場合は夢を夢と知らずに余りに端的に余りに率直に實行した。

そのために私の社會上の生活は破れた。同時に凡ての夢も破れた。重荷と脅迫と妄想に驅かれて私は絕望の淵に落ち込んだ。私は心の中樞を打ち碎かれたように放心した。

然しさう云ふ時も、私は心の隅に秘かに小さな夢を抱いて居

た。そしてそれは段々成長した。

青い空。

社會秩序から遠く離れた孤島。

小鳥の巣のやうな小屋。

私は都會を逃れて山を歩いた。峨々たる峯に立つて私は銃を擬した、刃金のやうに冷たく空を貫く響が一瞬間私を醉はせた、然し野を見よ、颯々たる風に枯草は地に伏してゐる。木々はあらわなる白骨のやうに曝されてゐる。村落の蔭から際立つてゐる白壁の輝きは痛々しく眼に泌みとほる。

峨々たる峯よ。おさらば。私は闘志をなくしてゐるのだ。

私は余りに廣い空間を恐れた。私は山の峡の狭い宿を愛した。そこに身をかくして青い静かな空を眺めた。

谷底――眠れる谷底。私の妄想を吸ひとり絞りとるやうな静寂をもつ谷底。

私はさういふ谷底が屹度どこかにかくされてゐるに違ひないと思つた。私は峯を傳つて山から山へ乗り移つた。木かげに伏して奥深い谷を探した。

谷へ下りて見る。滾々と水の流れる音が落葉の下からきこえて來る。澄んだ音だ。丸みのある音だ。地底の音だ。私の荒れた心に一滴のうるほひを與へてくれる。

樹々は音もなく、蔽ひかぶさつて私を守つてくれる。蘚苔に吸はれた物静かな日光、不思議な静けさと安息が四邊を支配する、私はそこで時ならぬ時を過ごすことができる。

或日私はとうとう美しい谷底を見つけた。まつたく素晴らしい谷だ。谷といつてもみじめな谷ではない、見失はれた静かな奥深い溪谷にかくされた山腹の斜面だ、かくされたといつても日陰ではない。此處では林や街道や山路が陰であり、見逃がされぬ溪谷の斜面が一杯の日を浴びて輝いてゐるのだ。その斜面は溪流からは斷崖によつて支持されてゐて土地は高燥である。この溪谷を繞る多くの高い峯をこえて青い大空が廣々と開け、日は此處にその光を集注するかのやうに見えた。

私は森林に入つて杉や檜や松を伐つて來た。本能に従つて巣を作るやうに私は小屋を組み立てた。

私には妻と子供があつた。彼等は解放された小鳥のやうに青空の下で嬉々と戯れた。未來も因果も故郷も思ひ出もみんな山によつて隔てられたか、或は地底の静寂に吸ひとられたか。

私は食を山に求め、川にあさつた。その間に明日を憂うる心が段々消えて行つた。遠くから盤面の碁石を見るやうに物の秩序が整然と見えて來た。二年の間かうして過ごして來た今、私はやつぱり夢を描いてゐる。そのユートピアは今の自分の生活

をもととしてゐるもので、更に完成された形のものだ。

それは私だけの此生活を、甚だ消極的にではあるが、或社會的な意味をもたせることだ。それには先づその獨立した經濟に確固たる基礎を與へることが必要になる。

私は三十頭餘の牛を飼ふ。草の野山に繁茂してゐる間にそれを養ひ、成長させては賣るのだ。それには全く他に利用の方法のない土地を見つけなければならない。集約的な方法を一切避けてなげやりにしても、收益に關係のない處でなければならない。未だ人の入つたことのない、そして廣さに於ても限界のない處でなければならない。そんな處があるか、私はいくらでもあると思ふ。土地の上には人が利用してゐる面積よりも人の利用してゐない面積の方が廣いのではないだらうか。

私は奥多摩から秩父の山へ入つて行く。山壁に圍まれた廣い盆地を見つける。丸木を伐り倒して要所々々に柵を作る。風をよけて一番日光と濕度の集中しさうな所へ一つの台地を作り、地べたからいきなり生え拔いた屋根を作る。これが私の住家である。急勾配の厚い大きな屋根の陰影は莊重に素朴に荒い山にうつる。その傍に原始的な牛小屋を作る。ぶなの森から谿水も引いて來る。用水池も掘る。

さてそこで三十頭の仔牛を放す。かれ等は森林や草地のなかを何處となく歩き廻る。

私は木を伐り倒すことに忙しい。

秋の末には私は成育した牛をつれて里へ出て行く、歸りには一頭の乘牛に澤山な食物を積んで山を越える、そして雄大な美しい冬を殘りの牛と共に冬籠りする。

春、雪がとけると私は仔牛を買ひに出かける、山の雜木の若芽はほの白く、或は薄紅く山の荒い肌を包んでかすみ渡る、赤い肌からかげろふがのぼる。

夏は雜草を刈つて乾草を作る、冬の間の牛の食料にするのだ、草いきれの中で汗みどろになる、手は草の葉で傷だらけになる、然し月を浮べた据風呂の中で湯にひたる時どんな勞苦も消えてしまふだらう。

かうして原始的な一つの經濟が築かれて行く。そしてそれは親しい人々の最後のかくれ家としたい、そこで新らしい英氣が養はれ、新らしい鬪志が燃やされる。私は待ちもうけはしないが、さういふ人々の來ることを樂しみ、そのために自分の生活の餘力をたくはへて行きたい。

夢を捨てた

生方敏郎

誰も然うだらうが、私は子供の時から、幸福を求めて止まぬ性質であつた。私は母の膝の上を最も幸福な場所として、自分一人で其處を占領しやうとした。そして幸ひにも私は末子であつた爲めに、他の兄弟たちを押しのけて、自分一人が全く母の膝を獨占し、その萎びた乳房を六歳の春、幼稚園へ通ふやうに成つても、まだ我物としてゐることが出來た。子供としての私は幸福だつた。ただ病身であつたのが、その完全な幸福を傷けたのであつた。

私の小學校時分に於ける幸福は、菓子を食べることと自由に友達と遊ぶことだつた。私には好い友達が與へられた。私は昔話（今いふお伽話童話）を語ることが上手だつたので、同級生から愛せられ、仲好友達が多かつた。だから小學生時代も幸福だつたが、胃がひどく弱いので好きな菓子を澤山喰べることを、兩親から制限された。その爲め完全なる幸福が味はれなかつた。で、大人に成つたら澤山菓子を食べたい、とそればかり願つてゐた。

私は十三四歳ごろから讀書に非常な幸福を覺えた。そして是非學問がしたいと思つた。その頃、私の縣には中學が唯一つしか無かつたので、大ブルジョアの子供ででもなければ、到底其望みをかなへるわけに行かなかつた。さうしてゐるところへ急に中學校が縣内に六つも出來た。私の町にも一つ出來、生徒を募集したので私も入學試驗を受け、いきなり二年級へ入るの幸福を擔つた。そして自分の家から通學するのだから、何等の不安もなかつた。

その中に自分の心は大きく成り、田舍で學問することに滿足出來ず、上京した。

上京した年に初めて私はキリスト教に接した。私は初めから一つも疑ふことなく此御教を信奉した。私の幸福は神を崇め禮

拜することに在つた。係うした幸福な生涯は十八歲の秋から二十六歲の冬頃まで續いた。私は一方に好きな讀書をなすことが出來、他方に朝夕、天地創造の唯一神——三にして一なる神——に仕へて幸福だつた。之は素よりユウトピアといふほどのものではなかつた。之は自分一人の幸福だつた。又自分の周圍の人、わずかばかりの兄弟姉妹の幸福だつた。併し私の之までの生涯に於ける最も幸福な時代は此時代だつた。この時代に死んでゐたなら私は天國に生れる以上に幸福者だつたのだ。

私が二十二歲の春、私はトルストイの「我宗教」の英譯本に接した。あまり舊いことで詳細の論は忘れたが、其本の中で尤も私を牽き付けたのは、トルストイ一流のユウトピアの記事だつた。トルストイは有名なキリストの祈り（主の祈り）の中の「御國を來らせ玉へ」といふ一句を拔き來つて詳論細說を極め、地上に天國を建設す可きを力說してゐる。

之はキリスト教的ユウトピアとも云ふ可きものであつて、人人は精神的には同胞の愛を以て結ばれ、物質的には共產主義の社會を造る可し、といふ說だつた。と思ふ。若い私は徹頭徹尾此トルストイの說に××した。從來、自分一人、又は自分の身邊の人々のみの幸福に限られてゐたかの樣な私のキリスト教的喜悅は、トルストイの書を見てから後は、遂に其領域を擴めて全世界的ユウトピアと成つた。

此私のユウトピアの信仰は、私が學窓を出て社會の人と成るまで續いた。而して私は社會へ出てから、此ユウトピアの夢が覺めると同時に私のキリスト敎に對する執着の全部を失つてしまつた。

學窓に在つては、小學中學大學を通じて極めて幸福な學生であり、甘やかされた學生だつた私は、社會へ出て——他の多くの卒業生と同樣に——甚だしい煮え湯を吞まされた。三斗の醋を喫せしめられた、と云ふのは此事だらう。私は本當の善人と、修身教科書の例に引かれたり社會から表彰されたりする善人とは、全く別々であることを知つた。私は學者と博士とは別別であり、文人と文壇人とは別々であり、天才者と大家とは別であり、泥棒と紳士とは同一人であり、詐欺師と法律家とは同一人であり、破廉恥業者と教育家とは同業者であり、刑罰は社會の爲めに存在する者の上にも加へる爲めのものであり××は人民を虐げたるものの胸をも飾る玩具であることを知つた。

世を擧げて紳士にすると云ふことは、世を擧げて泥棒にすると云ふのと同意語であり、世を擧げて善人にすると云ふ努力は、世をあげて詐欺師にすることを私は知つた。

私は人間の社會に對して絕望したのである。

單純にユウトピヤの夢を受け入れた若い私は、又單純に其丸

を投げ出してしまつた。

新聞社その他あちこちに勤めてゐた頃の私は、此世から唯物質的幸福を求める程度にまで、私の要求を狭めてゐた。其物質的幸福は自分の力を以て社會から××す可きものであり、決して與へられるのを待つ可きものではないことをも私は學んだのである。

だが、併し、××を知つたところで寄與を待つてゐたところで、其結果は同様だつた。『持てる者は益々多く與へられ、持たぬ者は其持てる物をも奪らるる也』と云ふキリストの言葉通りの社會である。物質的窮乏を以て始まつた私の生活は、いつ迄しても其窮乏から脱する時期が來ない。

恁ふ云ふ窮乏の牢獄の無期囚人こそは、手探的ユウトピヤを尤も夢み易い境涯だ。だが、私はもはや再びそんな空しい夢を夢みることを耻ぢる。欲しかつたら××、といふより他には、何も考へない。

×× ×× ××

私は數日前、長女を喪つた。七歳まで育てて終に地に葬つた。私の心は今かなり軟化しかけてゐる。

「人生の幸福は何處に在りや」

私はしみじみ今それを考へてゐる。

北京印象記

犬養健

一　途上及び北京

明け方の四時ごろ船室の窓の外で人聲がするので首を出して見た。すると眼には見えず雨が顔にかゝつた。海が一面に代赭色に變つてゐるところを見ると、もう白河の河口に來たらしい。舳に赤い燈をともしたジャンクが近づいてゐて人聲は其處から出たのだ。波があると見えて、一面の灰色の薄明るみのなかでその赤い燈がひどく上下に搖れてゐる。なか〳〵甘くこつちの船に着かない。つや〳〵した黒い雨合羽をかぶつた男が二三人、その燈の赤い色を舳先に流しながら、こつちの甲板へ怒つたやうな大聲をかけてゐた。それが支那語なのだ。調子高い支那語だ。自分は前夜、白河の河口に着いたら水先案内を雇ふのだと船長から聞かされた事を思ひ出したので、この變な時間に近づいたジャンクの意味が分つた。分ると急につまらなくなつて又寢込む。

ちやんと洋服に着かへて甲板に出た頃には、船はもう美しい屈曲でうねつてゐる白河を大ぶん溯つてゐた。河の水は相變らず代赭色。代赭なのは今日の雨のためではないと聞かされたが、その濁つた重みのある色が、行き交ふ支那のジ

ヤンクや小汽船と妙にうつりが佳い。河のうねりに變化が多いので、先へゆく船のマストだけが、何度も反對の方向に變つては葦の上をすべつて行く。河幅がせまいのと淺瀬が多いのとで、それを追越すほどの速力が出せない。兩側は柳に葦、それと突然入れ交じる近代的工場建築、工場の裏の豚の群。土呂で作つた支那家屋。それから遠くの平地のところどころに妙な淋しさをそゝる單調さで廻つてゐる粉作りの風車。それから又葦に柳。——かういふ中を、他國では先づ見られないやうな獨特な濁流が、一種氣の長い様子で流れてゐるのだ。甲板の天幕からは雨垂れが漏れて來る。同じ間隔と同じ音でそれが甲板を打つ。自分はする事がないので、傘をさした儘ベンチに腰かけて、神戸住ひの陳さんといふ天津人に支那語を習つた。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。これでいゝんですか」

「九がいけません。九(ジョウ)!」

「九?」

「いけない〳〵。九!」

「それぢやあ、買ひ物に行つてたかいと云ふのは」

「高(コーウ)」陳さんは片手を伸ばして山の頂上を指すやうな格好をした。

「値段のたかいですよ」

「うゝ、違ふ。違ふ。貴(クイ)、貴(クイ)。」

雨はすつかり本降りになる。兩岸はやつぱり芦荻と工場地帯。——この單調な繰返しは天津に着いて、夏目さんが「嗎動迪」と形容した埠頭の苦力の奇妙な叫喊に度膽をぬかれるまで、ずつと續いた。

天津發京奉線。高粱の畑と雨上りの出水。

それから最後に銃眼の遙かにならんだ城壁を二度くゞると北京前門車站に着く。停車場は先刻通りぬけた筈の城壁とまた出遭つてその下に出來てゐる。薄墨色のその防壁に平行して具合よくプラットフォームを作り、更にプラットフオームの屋根で頂の銃眼を隱して、どれ位まで高いのか空想をたくましくさせようとした鐵道技師は、旅行者の心理をのみこんで大出來だつたと云つていゝ。自分もこの停車場の構造のために北京城壁に對して非常に鮮かな第一印象を得たのだ。壁下に植ゑられた槐は緑を暗くして茂り、その陰に青いボロを着た苦力が日に燒けた顔つきで塊つてゐた。美しい雨後で枝々からは滴が光つて散つてゐた。遲れて迎に來た姉の顔がコンクリート敷の遠くに見えた。旅馴れない自分は實はそれまで心細かつた。

外へ出ると人力車と並木の多いのに驚いた。廣場をへだてゝ北京內城の正門である正陽門が、前後二つの樓門から成立つて聳えてゐる。前の門は箭樓であつて名のとほり夷狄の襲來に備へるためであり、後のは市街の美観のために飾つたものであるらしい。箭樓は厚ぼつたい頑丈な石づくりで陰氣な窓が澤山について居り、支那風といふよりもアラビヤか何處か、とに角われ〳〵の血統や生活からもつと遠い種族の工夫した建築物のやうに自分の眼に映つた。それは實際埃くさい、文明のあかるみをあまり受けない、駱駝隊なぞと配合のいゝやうな寂しい樓門で、建築物といふよりも丘と云つた方がよさゝうなのだ。後の門はこれに比べてよほど漢人種風であつて、院體畫でよく見る樓門と大した隔りはない。たゞ大きさでは、中央亞細亞の野蠻人である箭樓といゝ勝負である。

これが北京市への一番大きい入口である。後で自分は北京內城の九つの門が、すべてこれと同じ構造から成り立つて

ゐることを知つた。

――廣場に並んだ車夫が旅客の周圍に群る有樣は、昔の新橋ステーションを思ひ出させた。四十日の滯在の間自分はこの人力車の厄介になつた。車夫の無智と無感覺と生活の程度のあまりに低いことは、それを考へると陰氣になる程だ。それから賃銀についての交渉も高飛車に出なければ埒のあかない點で、絕えず不愉快だつた。だがそれらを除くと支那の人力車の乘り心地は想像外である。坐席の脊が、深く凹みをつけてえぐられてあつて、支那の人力車は行先の街の混雜に氣を揉むよりも、頭の上の並木の變化、それから並木を透して、その日その日の空の色をぼかんと眺めてゐるのに適してゐる。北京城は高みから見ると森の中の都なのだから。――

二　交民巷

雨續きで路がわるく、遠くへ出られないので、交民巷(チヤオミツンヤン)（公使館區域）を散步して見る。

亞米利加公使館にはYMCAのやうな空氣があり、水泳プールと野球場とが構內の往來に近いところに設けられてある。軍服の若いヤンキーが大勢兵營の窓から首を出してそれらの練習を見物してゐる。カーキ色の番兵を見ても、すぐにカレッヂ・エールを合唱しさうに思はれる。すべて寄宿舍といふ感じである。

英國公使館は廣い支那家屋。犬を連れた老婦人の散步。

ソヴイエット共和國の大使館では、赤い麗しい旗が庭樹の上、曇り空の下に垂れてゐた。

佛蘭西公使館の番兵は紅い縫ひ取りの徽章をつけた紫色の大黑帽を、思ひ切つて斜にかぶつて、大理石の唐獅子と並んでゐる。その日は生粹の佛蘭西生れが立つてゐたが、その前に通つた時はわれわれと同じ皮膚の色をした安南兵が、

その粋な笠帽子をかぶせられて、東洋人固有の無表情を見せてゐた。

ベルギー代表の住所はよく分らなかつたが、その近くの路角にある、一九〇何年とか行に刻した教會で、中世紀風の鐘の音が響いてゐた。鳩や白百合やを聯想した。

イタリー公使館は僕の寢室の裏手にあたるのだが、これは番兵は麥藁帽を頗大きくかぶつた水兵である。朝な朝なカンナの咲いた營庭から、その母音で終る美しい小唄やオペラの一節が、ベッドの蚊帳をとほして僕の眠い耳に聞えて來る。水を汲む音がそれに混る。

日本公使館は一對の唐獅子。金色の菊。塊の暗い並木。突き當りに北清事變の遺物である大砲。

この交民巷は北京内城のかなり樞要な地域を廣く占めて、その上周圍を銃眼のある防壁で取り圍んでゐるのである。こゝの住民は表情、發音、衣服の好み、氣質、みな軒並みに違ふ。一つ温室に種々な科の植物が集められてゐるやうだとも云へるし、又いろ〳〵の複雜な欲望が仕方なしにひと處に落ち合つてゐる狀態にも解れる。

これは見馴れないと妙な風景である。それは支那にとつてあまり名譽ではない。しかし全てかういふ事が文明開化時代の支那にとつて、一つのひり〳〵する刺戟物になつてゐれば、結局わるい事ではないだらう。日本にも嘗てさういふ刺戟物があつた。しかしそれ以上に疲れた大男の支那にとつては、いろ〳〵の國の文化や金欲しさや殖民慾や各々がいゝ子にならうとする競爭が眼の前で鉢合せしてゐる事は、迷惑以外に刺戟物として、氣付かぬところで自覺のための必要劑になつてゐると思はれるのだ。

支那の國内の問題がすぐに國際の問題になり得る事は、或る意味で一個人の欲望がすぐに世界の明るみにさらされ易

い事になる。だからその點では、支那のこの地位は支那自身のためにいゝ事である。さもなければ支那の政治家は際限なく内輪の芝居を大きくするだらう。

これを逆に云つて、支那に當分獨立國としての立派な政治が出來ずとも、各國がいゝ子にならうと騒擾してゐる眞中に立つて、少しづつ地歩を作り、財政を整理する力を養ふ事は困難でないだらう。そしてもう少し都合よく云へば、あまり特殊な條件を持ち出して來る國の鼻をあかしてやり、それを世界の日向に出し、さういふ手の利きにくい空氣を作ることも困難でないだらう。それは弱い國でも出來る。

しかしそのために支那にとつて必要なのは、恐らく支那の青年の考へてゐるやうな、歐米人式新支那人ではあるまい。歐米人式支那人は支那にとつて過渡期のわづかの間の雇ひ人に過ぎない。支那人らしい新支那人――西洋人と根本で膚合の異ふ新支那人で、重厚な力のある人物が出たならば、本當に自民族の立場、東洋人としての支那民族の立場を考へるだらう。

多くの支那の青年は今亞米利加が好きである。長い籠居の後で合衆國が魅力になるのは茲二三十年、無理もない事だ。又又さういふ青年は留學して歸つて來て、支那の未開的分子の覆布（ヴェール）を少しづつ除くことには役立つだらう。しかし支那を積極的な支那にする事は、彼等の役目ではない。支那民族の強み、面白味は歐米人氣質の感覺外にある。

支那に行つてゐると、國と國との關係を眞面目に考へる。それから一つの民族の文化を、世界のために出來るだけ大切にしたい心持が強くなる。支那は一つの非常に大きい病院である。――風景や美術、色や線や動きや靜かさを味ひに行つた自分も其處へ足を踏み入れて、健康狀態や治療法や擔任者の責のことを考へずには居られなかつた。

三　紫禁城

八月五日、一人きりで俥を走らせ紫禁城を觀に行く。北京へ來てはじめての、晴れわたつた暑い日だ。十一時過ぎ、道路の照りかへしでヘルメットをかぶつてゐても眼が細くなる。東華門から入る。雨上りの槐花の匂がいきなり顔を突く。東華殿の前の槐はもう散りはじめてゐるのだ。この暑い午後に誰も見物人はないと見え、協和門といふ東脇の閣を入つて行くと靴の音がよく響く。

そこがもう前庭である。委しく云へば宮城第三門である午門と第四門である太和門とに挾まれた前庭である。東西は廻廊になつてゐる。どの位の廣さか。――周圍の建物の巨きいために眼が迷つて、最初は見當がつかない。兎に角、一面に敷きつめられた大理石が午近くの日光を吸つて猛烈にまぶしい。その石だたみの間から青草が針のやうな勢で健康に伸びてゐる。それが設計者の予定に入れなかつた色を加へて大變美しい。

庭の中ほどを東西に横切つて、泉水が大きい唐草風の線でうねつてゐる。五つの橋がこれも白い石の欄干を十重に重ねて並んでゐる。下を覗いて見たら藻が一ぱいに茂り、鮒のそれを突ついてゐる音が閑かさを破つてゐた。後ろには赤黒い牆を持つた半野蠻人の午門が聳え、正面には太和門が幅廣く船のやうに落着いてゐる。そして四方はすべて豐かな黄色い甍である。

太和門をくゞる。そこに又同じやうな前庭が繰返されてゐる。泉水のないだけに、石だゝみと青草との擴がりが或る淋しさを強めてゐる。僕は夏休みになつた後の、學校の廣い運動場の淋しさを思ひ出した。――その奥の中央に太和殿が、甍の黄色と、三段の礎の欄の白さとで、くつきりと巨大な山形をかたちづくつてゐる。その上に青い北支那の夏空

が澄み渡つてゐるのだ。澄んだ青と光澤々々した黄色と寂れた白と、それが石だゝみの發する熱氣で微かに搖いでゐるのだ。その上、黄色の領分にも白の領分にも、かすれた筆で打たれたやうに雜草の濃綠色が蒔き散らしてゐる。なかにも、昔天子のみが渡つたといふ、一丈の双龍を彫つた中央の階には、僕の肩ほどある雜草が恣に根を張つてゐた。

太和殿の前で暑さに跪みながら眺望する。日時計の影は正午の線をごく纔か外れてゐる。其處の高みからは、さま〴〵な樓閣の甍の豐かな重なりが、前庭で見た時とはまた違つた組合せで靜かに展開されてゐる。それらの明るい黄色の魂りは、まるで空の自然な青さと美的に對抗しようとしてゐるやうに感ぜられる。

一體に紫禁城の線にも色にも、すべてさう云ふ、自然に對する傲慢な意志が感ぜられる。その住居のあるじが超人であらうとした、少くも超人を裝はうとした痕がある。寫眞で見るピラミツトの感じとどこか共通である。こんな巨きな建築の構圖を頭に浮べた役人の肖像が見たいものだ。その男は同時に、人間の傲慢の頂上を木と石とで大規模に表現することを考へついた男である。天子が始めてこの普請を見廻りに來た時は、さぞ明るい調子外れな笑顔を見せた事だらう。こんな言葉を想像して見る。「どうだ、その階の下から見て、俺の顏は霞みはしないか。どうだ、俺は筆をとつたり死んだりする人間に見えるかな！」

太和殿のなかは大きい柱、無雜作な床、正面の塵まみれになつた寶座、それから隅に取り殘されてゐる古びた暖爐。――太和殿にしてもその奧の中和殿にしても、更にその奧の保和殿にしても、外觀の莊嚴な淋しさにくらべて、内はわりあひに平凡である。保和殿では淸室善後委員會の下役人が、奉天に近日送る筈の四庫全書を整理してゐた。

十二時。例の五つの橋の畔で褐衣の衞兵隊が行儀よく交代を行つてゐた。日向に倦むだ衞兵と日陰に休息して來た衞兵とが協和門と熙和門との陰に歩み去つた時に、何處かで工場の笛らしいものが鳴つてゐた。只一人の參觀人である自分

は欄の傍で、鮒の浮ぶ音を聞きながら、手帳を出して略しの建物の配置を心覚えした。それから外へ出た。再び濃い槐の匂。槐の散り花。

四　日記抄

七月二十八日

夜、公使館書記官岩村成允氏の紹介で國際観光局の佐藤洪愛氏を訪問。芥川氏の友人である。佐藤氏宅は東單牌樓街を東に入つた石槽胡同といふ小路にある。大街を出ればぬかるみの道甚だ悪しく、煤けた燈を點じた小肉店、小酒店其他の裏店の前で俥屢々倒れかゝる。店のなかの男、皆燈火に顔を照らされて異怪。それから先へ行くと今度は何處も森閑門扉を閉した住宅街である。白い洋服姿が目立ちはしないかなどと思ふ。未だ北京に馴れないためだ。

佐藤氏宅恰も停電中。俥夫の燈を借り、脊伸びして門札を見る。暗い院子に何か西洋花咲いてゐる。少時燭光にて語る。

五代周文矩の玉歩搖仕女圖。五代張元の羅漢圖、北宋勾龍爽の寒山拾得圖。（三つとも設色）それから六朝の石佛等を觀せられる。張元、周文矩は大村西崖氏宅で寫眞を觀た事のあるもの。張元は羅漢圖といふ題で想像するものと違ひ、一種ふつくらした幽玄な靜かさを持つたものである。繪具粗く、處々ざら〳〵と塊り、衣の青と白の味ひが古雅で大變佳い。勾龍爽は畫品が稍劣るが、これも宋代墨畫の寒山拾得と異なり、奥深い柔かみを含み、寒山も拾得も後世のやうに厳格なる笑ひ方をせず、むしろ佛像の微笑に似てゐるところが珍らしかつた。衣の青と白とはやはり錆びて美しい。周文矩は、寫眞で見た時は張元よりも感心したもの。寫眞によると、眼の細い面長の宮女の横顔は、古風を帯びて氣品

があり、その玉步搖の簪に用ゐられた粗い白繪具の美しさは、寔へて昔のしさうに感ぜられた。が、今原物を見ると豫期ほどの感鳴を受けなかつた。それはこの幅がマクリであつて、手に持ちながら見た故もあるだらう。燈の眞下で顏は平たく見え、粉の白さが生氣を帶びず、畫布のしみばかりが目立つてゐた。しかし自分は東京での第一印象が强かつたので、この繪が額緣に入つてからもう一度見せて戴く約束をした。それがたうとう果されなかつたのは心殘りであつた。張元、周文矩、勾龍爽、みな徽宗題、前の二つは內府舊藏のものらしい。

歸途、暗い小路の門前に榻を置き、半裸のまゝ靜かに團扇を使つて臥してゐる男をちよいちよい見る。ロックフエラー病院の邊りで一台の馬車としばらく並走して行く。寒冷紗を張つた窓のなかに、髮に白い花を挿し、水色の上着をつけた婦人がゐる。その儘一町ほど作れだつ。暗い往來が不氣味であり、紗に透かされた顏がすぐ隣りにあるために、何だか浪曼的だつた。

七月三十日

午、正陽門を過ぎて前門外大街へ行く。珠寶市と記してある小路へ入つて見る。京都の京極の人出のやうである。様々な看板の色彩——紺布、黑地金文字、赤地金文字、金地黑文字、金地靑文字は、ピアノの高い不調音を續け様に鳴らされたやうな感じを受ける。通行人の步き方は皆のろい。其處を自働車、馬車、騾車が割り込む。人の流れ方が面白く屈曲する。いゝ加減で大街へ逃れる。

正陽門內から紫禁城天安門に通ずる並木街で、裸の子供が赤い腹卷一つで遊んでゐるのは愛らしかつた。結髮は略二種。一つは髮を四ケ所ぐらゐに結んでそれを赤い布でくゝり、各々を異つた方向に跳ね上らせたもの。一つは前髮とお下げとを殘してくりくりに剃つたもの。これもお下げを赤い布で飾ること同様である。前者が殊に華手でユーモラス

だ。日本の祭の日の子供を思ひ出す。それから山東の造花の紅さを思ひ出す。

四時、姉の紹介にて山中商店の高田氏を訪問。唐三彩壺、唐佛、明瓷（染付、赤繪、ピーチブルーム）などを觀せて戴く。

唐三彩の壺はなか〱大きく、豐かな線と厚みのある美しさとを持つたものである。綠と群青と黄の縮緬。東京の博物館にあるものと同じほどの大きさだが、色彩も模樣もずつとこちらの方がいゝ。東京のは何だか半野蠻だ。豐富な感じが氣に入る。

純支那風の後庭を見せて貰ふ。岩石、廻廊、花鳥模樣の窓が、さう小細工でなく調和してゐる。——廻廊は壁に沿つて曲つて居り、その曲り角に何か祀つてある。柱の聯に「不俗是仙骨、多情乃佛心。」とある。十數歩行くと離屋がある。今は石佛の藏に使はれて居て空氣が冷たい。

「こゝは元は書齋ですか」

「いや」高田さんは笑つてゐた。「やはり寵姿を置いたところでせう」

柱の聯が生きて來た譯だ。

歸路王府井大街で燈がつく。街角の長安飯店の地階の花店から強い匂がたつてゐる。一齊に點いた燈火と潑剌とした花の匂。自分の頭もはつきりして來る。この盛な匂の花が晩香珠ださうだ。ロックフェラーの前で馬車に乘つてゐた婦人の頭飾は多分これだつたらう。茉莉に似た白い花である。後日買つて見たが、甘い匂が強すぎて寢室には不適だつた。花の形もさう秀れてはゐない。たゞ黄昏を待つて匂ふ性質が取得なのだ。

八月一日

午後中根弥氏岩村成允氏と中央公園に開かれた集賢展覧會を觀に行く。上海工人に送る義損金のための催しださうだ。諸代の陶器、古石器、石彌路、漢印等が列んでゐる。試しに小さい唐俑と稱するものを購ふ。

出て午門樓上の歴史的展覧物を觀に行く。われ〳〵は午門に向つて廣場を横切りながら、北京の鐵筆家王禔の噂をしてゐた。岩村氏が推稱してゐた。その時頭の上で人聲が聞える。暢氣な男が午門の翼の銃眼の上に寢そべつて、廣場にゐる知人に話しかけてゐるのだ。それによつて三人とも、忽ち壁のいかに高いかを感じた。少時空と地面との間に臥してゐるその暢氣者を尺度として、この途方もない設計に感嘆する。壁の膚の赤黒いのも威嚇してゐるやうで異様である。これは一つの建築の線といふよりも、建築が空に映した影の線のやうだ。どうしたならば一つの建築物で、蒼穹のスペースを侵す事が出來るか、それを苦心したかのやうに感ぜられる。午門の下に立つて見た後では、萬里長城はさう驚かなかつた。

「夜この輪廓を見たら凄いでせうね」

午門樓上の窓から北を視くと、太和殿、中和殿、保和殿、その他の故宮が西日を一ぱいにおか〳〵と受けて、淡い夕靄のうちに爛きながら浮き出てゐた。但し午門と共方との境には鐵柵があり、別の入口から三十仙を拂はなければ觀覧出來ないのだ。

歸途中央公園の廣場で休息する。紅い壁と楊柳と栢と。それから野天の幾百の茶卓の列。新時代の共和國男女。この日、夕燒空に夥しく飛び交ふものを、始めは燕だと思つて眺めてゐると、それは蝙蝠だつた。

八月四日

文華殿に入つて行くと先づ携帯者を取り上げられる。手帳を使ふ事も禁ぜられる。さうかと云つて陳列目錄を與れる譯でもない。前もつて案内記などで知つた畫を捜すつもりで元の方へ引返さうとすると、褐衣の兵士が怪んで附いて來

る。これほど嚴重にして、われ〳〵が喜びを感ずるほどの藝術品は觀せてくれないのだ。恐らく文華殿で愉快な時間を過す人は少ないだらう。

東廂には頭に殘るものが一つもない。倪雲林は寫眞で見た岩居圖が出てゐず、萬壑秋亭圖といふのがあつたが少しも惹かれない。王烟客、王石谷、惲南田、清初の大家は皆想像外にひどい。

正殿では王若水の秋塘立鷺圖卷が、筆がしつかりして爽氣に充ち、滿足を與へられるものだつた。仇英の寶命堂圖といふ設色絹本の幅も、細腰の美人、雲に隔てられた樓閣、艶やかでミスティツクなところがあり、勞作である。錢舜擧の吹笛圖（卷）、文珠洗象圖、二つとも淡彩だが洗象圖の方が味はひがあつた。普通の出來だらう。趙大年の設色山水は卷と幅とがあつたが、臨寫らしい力のないものである。其他は李唐、馬貴。李唐の柳陰醫術圖は題材から一寸休日光長の外科手術圖を思ひ出す。

西廂では趙仲穆の馬圖がいゝ。痩せ衰へた馬が草を喰つて居り、その前に飼主が立ち、一種異様な笑顏でこれを凝視してゐる。男の眼が少し斜視になつてゐる。倪雲林の竹石圖といふ小幅は、萬壑秋亭圖を見た眼には稍々味はひがあるが、是も眞としても出來のわるいものだ。王蒙の長松飛瀑圖、何かの案内記で褒めてあつたもの、非常に失望した。沈田は崇山修竹圖、相陰坑鶴圖二つながら出陳されてゐなかつた。しかし鳩聲喚雨圖といふ小品はちよつと愛らしく爽やかである。唐寅はこれも、採菊圖といふ白描の小幅しか見られなかつたが、採菊圖は何となくねばり強い苦味といふやうなものがあつて氣に入つた。陶淵明らしい男が伴の小童を振り返つてゐる靜かな圖である。渇筆を使つてある。その既んだやうな眼が何だか唯者でない。さういふ繪である。

これで文華殿全部を通りぬけてしまつた事になり、再び無人の中庭に追ひ出される。此處には閻立本、李龍眠が收藏

されてゐると聞いたが、兩者とも出てゐなかつた。出たならば失望するのではないかとさへ思はれて來る。以上に作品として擧げたものも、日本の收集家の珍藏してゐる同じ作者の逸品と比べれば、恐らく一つとして拙るものはないだらう。自分が櫻花の盛りを過ぎた殿外へ出て、さう腹立たしい心持にもならなかつたのは、東京で既に文華殿など九分九厘贋物だと聞かされて來た故だつた。

武英殿は太和殿の西、丁度文華殿と同じやうな位置にある。此處に陳べられた宋定窯の白磁の皿は十分に喜びを與へられる。數も多い。

武英殿の裏に浴德堂といふ小堂がある。乾隆帝が土耳古から捕へて來た後宮婦人の居室だつた由。この婦人の油畫肖像は今も武英殿に飾つてある。朗世寧の筆。畫としては伊太利畫の所謂畫工繪だが、若い處の兜をかぶつた戎裝から文學的な魅力を感ずる事が出來る。稍々黄味を帶びた白い皮膚と、唇に使つた無邪氣な紅みが、半歐の美人であつた事を語つてゐる。宮廷畫家と對ひあつて、無理に笑つて見せてゐるやうな淋しさがある。香妃例入中原戎衣行裝圖といふ題になつてゐる。香妃とは、彼女の膚につけた香油類が、滿洲人に與へた明るい印象から起つた異名であるらしい。

香妃はよく故郷を思ひ出して泣いたさうだ。そして刃を欲しがつたさうだ。浴德堂は彼女を慰めるために建てた土耳古風呂付の小住居なのだ。裏手に廻つて見ると天井を玻璃で張つた石づくりの厳めしい所があり、焚き付け口が地面に近く、汚れて黒ずむでゐた。幾年焚かない事だらうと思つた。野藤の蔓が草を這つて亂れてゐた。

香妃とは、こゝの湯氣に立ちこもつた身だしなみの匂に、宦官がしきりと鼻を動かしたところから起つた名かも知れない。

八月五日

午後八時、外城西珠市口の開明戯院に入る。徐碧雲の新劇「緑珠」が評判になつてゐるので、内野教授に誘つて戴いたのだ。「開明」は白堊の洋風、東京の活動小屋と思へば大差ない。扉を排した瞬間、こゝで藝術的な空想が起るかしらと不安になる。

武劇のはげしい鑼鉦を聞いてゐると、ひどい暑氣にあたつたやうな麻痺を感じて來る。これは暑氣の中に生れた白日夢のやうなものだ。武生の隈取は甲蟲か天道蟲の保護色を思ひ出させる。立ち廻りになると甲蟲と天道蟲が一齊にうなり出し、草いきれの強い野天で無邪氣に飛び廻る。目まぐるしいが、疲れてしまふと返つて快くなつて來る。

十一時過ぎて「緑珠」の幕開く。幼稚な油畫の背景を使つてゐるのに先づ失望する。象徴的な動作が背景に消されてしまふのだ。緑珠に扮した徐碧雲現れる。眉と眼が強すぎる。艶やかではあるが何だか土臭い。肩、腰、足どりにも柔か味を欠いてゐる。唱は透るが、これも閑やかとは云はれない。青衣としての魅力と氣品を欠いてゐるので可憐でない。自分は落膽して、大半の興味を失つた。

說明書を抜き書きすると、緑珠は晉代の少女である。母親と家を移して嶺南に赴く途上、石季倫といふ風流才子に逢ふ。石季倫は交趾采訪使として都を離れてゐたのだ。忽ち緑珠の艶質に驚き、聘妓して歸る。それからは春秋佳日、文酒流連、豪華の極天下の傾慕するところとなつてゐる。そこへ孫秀といふ惡者があつて、偶々緑珠を見て魂を奪はれる。孫秀は淮南王が叛亂を起した機に、石を讒謗する。石捕へられる。緑珠は閨房にあつて石の消息を聞かず。清涼寂寞、月夜悲深、ひとり銀釭に對して郎君の吉凶を卜つてゐる。不意に劍戟の闖入する音。緑珠高樓に避ける。孫秀が淮南王の兵を率ゐて彼女を探し廻る。高樓への階を見つける。緑珠身を投げ地に碎ける。王嗣香館作人歸命。——以上十場になつてゐる。

この間に綵珠が作の午後、侍女と前庭に諧謔する場がある。その花を襲した俗悪な群衆ダンスは見るに忍びない。最後に自分を驚かしたのは高樓の自害の場だ。綵珠が幽情に充ちて高樓に登つて行くと、忽ち軒と云はず、柱と云はず、裸の電球に燈が點く。「好(ハオ)！　好(ハオ)！」と二階では大喝采である。電燈はその氣勢に昂奮したやうに赤、青、紫と變化して際限がない。もう佳人薄命も月夜悲深もないのだ。ヒロインは夙うに電燈になつてゐる。自分も可笑しくなつて一緒に笑つてしまふ。

だが孫秀から逃れるすべを失つた時、綵珠は素張らしいことをやつた。高樓から蜻蛉返りをひとつ、綺麗に打つて板敷の上に落ちたのだ。それは一種支那人らしい鋭い線だつた。もしも背景が黒か暗青の幕だつたならば、たしかに幾丈かの欄から身を投げたやうな衝撃をわれわれに與へたかも知れなかつた。だが花電氣の樓台と油畫の庭園では、結局輕業としか見えない。

客席を立つたのはもう一時に近く、眠氣と失望とで疲れきる。

——あまり酷評しては可哀想です。今は過渡期なのです。それに兎に角何か新らしいものを生まうとはしてゐるのですから。

紹介された某氏がかう辯解してゐた。しかしこれほどまで觀客の低級な趣味に媚びるのは、天橋(テンチャオ)の畔の小屋掛け劇場で十分ではないか。しきりに輕蔑の心持起る。

また綵珠劇について云へば、敵役の孫秀が丑(チウ)（道化役）になつてゐるのは、綵珠の薄命を表はすに損をしてゐた。丑(チウ)はこれからの支那劇には一つの厄介物である。丑(チウ)だけが寫實的で、それに道化も茶番の程度なのだ。丑(チウ)の道化振りをほかの役のやうに或る型にまで引上げなければ、これからの觀客には統一した美感を與へることは難かしい。古典劇の中

の喜劇的分子として、丑はあまりに手輕に過ぎ、單獨行動に過ぎる。

これから洋式背景の使用。――電燈はむしろ愛嬌を帶びてゐる。

歸途月あかりを浴びて前門下を過ぎると、戲院から城內へ向ふ馬車の群が、東京ではもうふた昔の記憶になつてしまつた蹄の音をひきゝりなしに響かせてゐた。いかにも古風な、快い夏の深夜だつた。自分も、昔不忍の博覽會で從兄とイルミネエションを夜遲くまで眺めた事を思ひ出し、開明（カーミン）の觀客に對して少しは寬大な心持を取り戾した。

八月六日

夕刻近く妹、甥姪と伴れだち天壇へ行く。天壇は前門から外城永定門に通ずる直路を半ばまで行つて東に折れた郊外にある。前門外大街も大橋を過ぎると急に鄙びた景色に變り、雨上りの河水野にあふれて、楊柳の幹を流れに洗はせてゐる風趣、いかにも平和である。

天壇の城內は北京の街外れに珍らしいほど閑寂である。頭門を入ると此處にも槐の並木數町ほどある。その並木の北側に、身丈に餘る夏草の一面に生ひ繁つた荒草原が擴がつてゐる。蟲がこの白天に鳴いてゐる。草原を越して藥垣が見え、その向うに內城のもろ〳〵の門、その遠くに西山の柔かい輪廓の少しばかり、更にその上には目に見えて澄み渡つて來た秋に近い空。――すべてが柔和で靜かで、通常の支那式風景の壓迫から逃れて休息するにいゝ。藥垣と都會と近郊の青い山との組合せが、何となく京都を思ひ出させる。

自分はこの次に一人で來ようと考へた。秋の深くなる頃まで滯留して、此處で百舌鳥の聲を聞きたいものだと思つた。槐の並木の盡きたところから、古柏の林が兩側に續いて更にいゝ。心を落着かせて自分の跫音に聽き入ることが出來る。

新年殿は、リーチ氏のエッチングから與へられた印象よりも稍々姿がほつそりしてゐる。内城の城壁の上の散歩徑や、その他の近郊から遠くにこれを眺めた時は、もつと好もしい塔のやうに想像したが、今前に立つて見るとそれほどではない。圓形三重の屋根の紫がゝつた碧琉璃の色合は、少し迷信臭い原始的なところがあり、上方の柱や壁の彩色も濁つて半ば野蠻に近い。もう一歩で醜惡に陷り、もう一歩で莊嚴な建築物の仲間に入り得るといふやうな、中途半端の様式で迷つてゐる。たゞ紫禁城と同じく、何となく建物自身、傲慢な意志を表はしてゐるやうなところは氣に入つた。この新年殿の建つてゐる區域は大分の高みであり、北京一帶の眺望は非常に晴れやかだつた。

圜丘に至る通路は、叢の中に白い舗徑が一すじに續いてゐるのだ。甥と姪とがこの徑で百米競走の練習をした。せり合つた二人の笑ひ聲が曲り角に消えると、叢の照り返しが前のやうに目ぶしく、一すじ徑の白さは前のやうに美しかつた。そこは數日前に西洋人の追剝が出たほどの閑寂地帶なのだ。

圜丘は大理石の圓い壇で百坪近くあるだらう。毎年冬至の日出前七刻に燎を盛に焚き、天子が親しく天を祀つた齋場ださうだ。その圓形は天體を象つたものである。その象徴は相當に成功してゐる。だが風雨にさらされた圓壇が、空(そら)と四六時對立してゐるところ、何となく淋しい。何となく空(むな)しい。徘徊して廣さを量りながらさう思つた。

柏林の間をぬけ道して元の門に出る。紫苑と薊とが咲き亂れてゐれた。再び墻外の出水のあたりを歸ると、西日の金色が一面に映え、男が動かぬ牛車を鞭打つてゐた。

八月七日

朝、周作人氏來訪。住ゐが分りにくいからと云つて、僕の方から出かけるのを辭退されたのだ。文學の話。——それから明日北京大學第三院で、敦煌發掘物の研究發表があるので、寫眞など見た來てはどうかといふ事だつた。僕は丁度、

先日集寶展覽會で見た大學所藏の唐碑の拓が四五種欲しかつたので、その方の研究室へも案内して戴く約束をする。落着いた時間を過したので、後まで樂しい心持殘る。

妍たちと孔子廟、國子監、雍和宮へ行く。

孔子廟では長軀長身の立派な老番人から一ドル強請られる。こゝは觀覽無料に係らず、渡さなければ門の鍵に手をかけようとしないのだ。髯が長いので學者かと思ひ、叮嚀に應對して馬鹿を見る。門内には古柏と進士の碑とが隅々にまで影を生み、落着いた調和をつくつてゐた。

國子監の荒れた階には大きく艶やかな鬖が咲いてゐた。花鳥畫に描かれてある鬖を思ひ出す。押花にする。ふと、チイチイ蟬去り、つくづく法師に似たものゝ增えたのに氣が付く。

雍和宮。喇嘛の大道場。雍正帝が皇子であつた頃の宮宅を喜捨したものだといふから莊嚴を豫期して行つたが、例の豪華な甍も映えず、軒は朽ち、祀つてある佛像の陰 さといゝ配合をなしてゐる。伽藍十六といふ宏さである。往来から牌樓(パイロウ)をくゞるともう其處に、赤黑い衣を着け細紐を帶にした怪異な蒙古僧、西藏僧があちこち歩いてゐる。衣と帶だけは淸鈴なフランシスコ派に似通つてゐるが、只生きてゐるから動いてゐるといふ樣子を見せてゐる。それが正門の兩脇の塀の陰に、蒙古側と西藏側と、約二百五十人づつ住んでゐるさうだ。旅行者が一人で來る場所ではない。俗服の青年に案内されてだん〳〵奥へ入る。この青年は英語、日語を少しづつ操る。――女の生首を提げた憤面の和合佛、女を捕へてゐる牛の怪物、黑いマントを着けた夢殿に似た幽羽像、金銅色の乳房を病的にはち切らせた菩薩、火の海らしいものに投げ込まれて跪いてゐる手足、頭蓋の盃。――かういふものを五百人の禁欲生活者が朝と夕、二度[illegible]拜して生存してゐるのだ。此處は精神的浪費の大きな塊りである。張家口(カウガン)から砂漠に出ても、こんな寂寞さは漂つてゐ

まい。賭博窟や阿片窟の住人のやうに、樂しみから發する一すじの光線がないだけに物淒い。

僕は善い叔父だから、和合佛のある第六東配殿は甥たちに見せなかつた。第十四の御籃であつたかと思ふ。案內の青年が「一人でちよつと二階へ來い」と云ふ。興味をもつて素直に從いて行く。其處は日の入らない空部屋で、片隅に今まで晝寢をしてゐたらしい僧がわれ〳〵を待つてゐた。首を斜めにかゝつて來たら——そんな事を眞面目に想像した。晝寢をしてゐたらしい男は窓の透き間から下を覗ひ、靜かに靜かにと合圖する。それから棚の下に隱した襤褸のなかから、小さい佛像を出して見せた。和合佛だ。何んだ。事柄が平凡なので氣拔けする。二人がかりで僕の手に持たせてしまはうとする。要らぬ、要らぬと片言の支那語で坊主に抵ふ。僕が構はず古びた梯子を降りて行く時、坊主は失望した聲を放つてまた元の場所へ腰を下さうとしてゐた。その片隅は暗くて不健康だらうに。

觀終つて牌樓に出ると、案內の青年が急に立ち止る。

「これで終つた。就ては改めて案內料を貰ふ」

案內料は切符を買ふ時に拂つてゐるのだ。出がけに注意されたのはこれだなと思ふ。

「なぜだい。不要（プヤフ）！」

「規則だよ」

「君の習慣をもう聞いて來たんだ」

「ぢやあ、札（さつ）をこまかい金（かね）に崩してやらうか。お出し」

「澤山」

「チエツ！」

われ〳〵が車の方へ足を早めた時、慣めない若者は腰を打つて殘念がつてゐた。だが家へ歸つて考へて見ると、僕は切符代の釣錢を彼にすつかり預けて來てしまつた。……

八月九日

義兄、妹、姪四人、甥三人、ぎつしり自働車に滿載されて萬壽山に向ふ。名高い離宮なぞ、清朝末期の宮廷の趣味低劣を教へるばかりである。しかし美しい眺望と美しい往還の路を持つてゐる點に、萬壽山の取り得がある。半日を費して後悔しないのはそのためだ。

西直門を出ると雨後の大道に、例のごとく楊の古木が厚ぼつたく續く。郊外道路として申分ない。道の中央がそろそろ白く乾き、兩端の影あるところに、鄙びた凸凹の多い鋪道が設けられてある。あたりは黄ばんだ高粱と麥畑、雨で崩れた塀、水溜りに釣絲を垂れてゐる裸の子供、鍬で土を練つては見當をつけて屋根に投げ、簡單に雨漏りの修繕をやつてゐる老人。それから北京近傍に珍らしい松が折々混つて風景を和らげてゐる。或る村外れの川べりに讀書人の隱宅らしいものが見え、塀の陰から夥しい家鴨の群、不意に游いで來る。

こゝを自働車で疾走するのはあまりに殺風景である。或る人のすゝめて呉れたやうに、驢に乘つて日陰を傳はりながら、堤道の所々で里程を問いて行かなくては。――この樂しさは、經驗すると忘れられないさうだ。

佛香閣のすぐ下の高樓で辨當を食べる。其處まで階段三百余段ある。昆明湖の雲の多い空を映した水と、岸の柳と、玉泉山西山一帶と、遠くの玩具のやうな北京城。――これだけで價値は十分である。有名な石舫などは、西太后の趣味の象徴のやうなものだ。

排日の餘波で正金銀行の紙幣通用せず、玉泉山行きを斷念する。歸路は阜成門から入る。自分はこの阜成門（フーチョンメン）と西直門（シーチーメン）

とを發展してゐた。西直門も阜成門も、例の箭樓と本門と重なつて空地を抱き、その空地を更に墻壁で圍み、ちよつと櫻田門のやうな構造に出來てゐる。この空地から城外にあふれて陶器、菓子、靴下、などの露店がごた／＼と並んでゐる。この混雜地帶から外は長閑で平凡であり、一歩樓門をくゞると急に目立つて華やかなのだ。いかにも城下の裏口といふ趣がある。僕は西直門に一人出かけて行つて十數分立つて見たが、駱駝、驢馬、百姓、女、穀物をひろげてゐるやうな面白味を感じた。

「やれ／＼、北京に着きました！」——異國人の、それも小說を書かうといふ男の眼には、駱駝や驢馬の顏付がそんな風に映つて來て、ひとり興がつた。

八月十日

夜、父の舊友である某氏の邸に招かれる。無難なスケッチを書くのだから、假りにA大人といふ事にする。同行は義兄、妹、一番年上の姪。

A氏の宅は最近壽を祝つて改築したものである。珍らしく二階が設けられてゐる。朱欄の廻廊に燈が連なり、庭の暗のなかにカンナが紅く開いてゐた。家庭的な招宴といふ事で、客間にはAさんの近親の紳士達がわれ／＼を待つてゐた。一人の例外なしに日本語が堪能である。

帳を下した別室から婦人達出て來る。四人の夫人達はAさんの令妹であり、二人の令孃は姪にあたるのだ。夫人達はすべて淡靑の衣。

卓二つに分れて福建風の晩餐に就く。Aさんの姪の一人、Sさんといふ小姐、僕の姪を持成す。Sさんは白絹の衣の上に淡黃の佛蘭西絹の袖なし短上衣を着け、白い蘭を髮に挿してゐる。流暢な英語、むしろ米語をあやつる黑眼の大き

い新時代美の人である。挿した蘭の名を訊ねる。福建產の白心(ペイシン)であるよし。その氣品のある細身の花瓣、氣に入る。これは花の王ですといふ。綺麗な音の支那語で家族と話すたびに、口元の黒子搖れる。僕の姪に對つて、上野と江ノ島と刺身との朧ろげな記憶を呼び覺ましてゐる。小さい頃東京に住んだ由。だが種々の話題から、この小姐が新大陸の快活な生活を熱愛してゐる事は明らかだつた。

別の卓で妹と話してゐる面長の令嬢は、黄の縁をとつた白絹の短衣を着け、俯きがちに困惑したやうな笑顔を浮べてゐたが、實はSさんよりも一層激しい姉妹共和國(シスターリパブリック)の憧憬者であつた。この令嬢たちの從姉は、現にハーヴアート大學に入學中なのだ。——彼地の學校生活(カレッヂ)は素張らしい。自分も是非行きたい。しかし兩親が許してくれない。さう云つて笑顔のうちに、わづか眉を寄せて見せてゐた。

最後の粥が出た時、Sさんは象牙の箸を大きく動かして、思はず子供らしくかつこんでゐた。それから日本の娘はどういふ風に碗を扱ふのか、その疑問に打つかつたらしく、耳のあたりを赤らめ、僕の姪の手つきを敏捷く見てとつてゐた。子供らしく狼狽したので、黒い大きい眼が稍々寄り眼になる。だが先刻からの流暢な米國式會話に壓倒されてゐた自分は、はじめてその幼稚な東洋的な羞らひに氣安い親しみを感じた。

(つゞく)

時評

右翼小兒病

山川均

曾てレーニンは『左翼小兒病』といふ有名な論文を公けにして、小兒病的な左傾主義を戒めたことがある。この時以來、『小兒病』は左翼に特發の症狀であるかの如く思はれてゐる。

しかし事實は必ずしもさうでない。左翼の陣營に小兒病の保菌者が絶えないやうに、右翼の陣營からも、しば／＼小兒病患者が現はれる。それも重症患者——反動的資本主義の藥を加減してゐる當のお醫者樣すらも、匙を投げ出すほどの重症患者が現はれる。ことに反動主義が高潮に達すれば達するほど、小兒病は右翼の陣營内に猖獗を極めて來る（關東大震災の當時、偉大な小兒病患者を出したのも右翼であつた。）

先年、軍事教育案なるものが、學校を軍國主義化する陰謀であるとして世間に反對を喚び起した當時、當局者はこの非難に答へて、軍事教育の眞實の『動機と目的』は、『青少年の心身を鍛練し、國體的觀念を體得せしめ、國民の體質を向上するにある』ことを聲明した。そこで軍事教育なるものは、よしその『教育』の外套の下には、カーキー色の『軍事』を着込んでゐやうとも、これほどこ／＼までも、『教育』の外套で蔽うておくべきものであつた。全國の學校に配置せられた二千名の軍事教育官は、よし國體的觀念は體得し得ないとも、この邊の呼吸だけはよく／＼體得して、軍事教育の眞實の目的を遂行すべきであつた。

ところがこゝに右翼小兒病的過激主義者が飛出して、勇敢に

この外套を脫ぎ棄てた。これが近頃、小樽高等商業學校に起つたいはゆる『想定』事件である。

小樽高商では、軍事教官鈴木少佐の立案になる『想定』に基づいて、軍事教育野外演習を行つたが、この問題の『想定』は、既に多くの新聞にも公表せられたものであるが、その着想に大なる價値があるばかりでなく、稀れに見る名文――三十年前の小學生の作文としても慥かに滿點の値ひのある名文――であるから、ここに全文を揭げて見る。

想定

「(一) 十月十五日午前六時、天狗岳ヲ中心トシ、俄然、大地震アリ、札幌及小樽市ノ家屋ハ殆ド崩壞シ、所々ニ火災ヲ起シ、折柄の西風火勢ヲ强メ、今ヤ小樽市民ハ人心恟々トシテ適從スル所ヲ知ラズ。

(二) 無政府主義者團ハ不逞鮮人ヲ煽動シ、此機ニ於テ、札幌及小樽全市ヲ全滅セシメント、小樽公園ニ於テ畫策シツヽアルヲ知リタル小樽在鄕軍人團ハ、忽チ奮起シ、之ト格鬪ノ後、東方ニ擊退セシモ、敵ハ潮見臺高地ノ天嶮ニ據リ、頑强ニ抵抗シ、肉飛ビ骨碎ケ、鮮血滿山ノ紅葉ト化セシモ、獅子奮迅、一步モ退カズ、爲ニ在鄕軍人團ノ追擊ハ、一時頓挫スルノ止ムナキニ至レリ。

(三) 小樽高等商業學校生徒隊ニ應急準備命令下リ、該隊ハ午前九時校庭ニ集合シ、支隊ヲ編制ス、其ノ任務ハ在鄕軍人團ト協力シ、敵ヲ殲滅スルニアリ。」(後略)

これが問題の『想定』であつて、この『想定』が何を意味してゐるかは、說明を加へるまでもない。即ち第一には、この想定は、國民の一部を假想敵としたものである。第二には、この想定は、軍備は國內の敵のために存するといふ思想を暗示したものである。第三には學校に於ける軍事教練は、團體的訓練とか體質的改善といふ一般的抽象的な目的のためではなくて、或る機會には『生徒隊に應急準備命令』が下り『在鄕軍人團と協力し』『國民の一部を『殲滅』する任務を帶びるものだといふ具體的な豫想を與へたもである。

然るにこれに對する陸軍當局者の態度は、この『想定』そのものに劣らぬほど重要なものである。

『潮見臺の高地を攻擊するのが演習の目的であるから、いろんなことを附加へなくてもよかつたらう。しかし學生はこんな想定を好むものである。陸軍省としては、想定の內容にまで立ち入つて指示するやうたことはない。たゞ大體の方針だけを示してゐるが、こんどのことは別段問題にする必要はな

い……例ひ第三國と、戰端を開いたといふ想定の下に演習をしても、とがむべきものでない。そこがいはゆる想定であつて、想定はあり得べからざるものまでを仕組んで、效果をよけいに擧げやうとしてゐる……』

(十月二十日『東京日々新聞』陸軍省伊藤副官談)。

演習の目的が、潮見台の高地を攻擊することにあつたが、それとも其他の何物かを攻擊することにあつたか。學生がこの種の想定を好んでゐるのか、それとも學生がこの種の想定をすることを、何者かゞ好んでゐるのか。

この想定は、あり得べからざることゝまでも仕組んで、如何なる效果を擧げようとしたのか(關東大震災の當時は、同じ想定に基づいた大演習によつて、偉大な效果を擧げた!。)すでにこれ等の疑問に對しては、人々は自ら自由に答へ、自ら自由に『想定』することが出來る。たゞ動かすべからざる一つの事實は、陸軍省は、軍事教育に對して、『大局の方針を示してゐる』、そして斯ような『想定』に基づいて學生を軍事的に教育することは、陸軍省の示してゐる『大局の方針』——少くともその眞實の精神——に一致するものだと云ふことが、當局者の言明によつて明かにされたことである。

斯ような『大局の方針』の下に、斯ような精神に基づいて、二千名の現役將校が一百萬人の青年學生に對して、有り得べからざることを仕組んでまでも、何事をか敎へてゐるものが即ち軍事教育の制度である。然るにこの軍事教育は、近い將來に、中等學校以下の三百萬の青少年にまで普及されようとしてゐるのである。

斯ような組織は、そも〳〵何を意味するであらうか。軍事敎育野外演習が、如何なる『想定』の下に行はれても、敢て『とがむべきものでない』ように、青少年軍事教育の組織そのものが、如何なる動機と目的と想定との上に立つ組織的計畫であるかを『想定』することも同じく、吾々の自由でなければならぬ。

關稅會議

國民的大運動によつて促進せられた支那の關稅會議は、緊張した空氣のうちに、列國の異常な注意を集めて開かれた。國際

政治の中心舞臺は、支那に移つたかの觀がある。これは各々自國に於いて活路を失つた列國の資本主義が如何に重大な利害を支那に持つかを物語つてゐる。

この關稅會議の第一日に於いて、日本全權は英米を出し拔いて、支那の關稅自主の要求を支持する聲明をした。即ち日本は『この度びの會議では、從來の追隨外交とは型の變つた珍らしい積極的態度』を取り、一躍して會議の主役となつた。英米日は、關稅會議を支配する三大勢力、乃至は三大利害である。これは支那の輸入の五割三分を、この三ケ國で占めてゐることによつても知ることが出來る。然るにこの五割三分のうちの殆んど二割三分は、日本が占めてゐる。況んや日本に取つては、この二割三分は、輸出總額の二割に近い數字である。日本が『この度びの會議では、從來の追隨外交とは型の變つた珍らしい積極的態度』を取らざるを得なかつた理由、如何なる代價を拂つても、會議の主役を取らなければならなかつた理由はこゝにある。

そこで日本は『自主的』外交によつて、支那の『自主的』要求を支持したのである。『帝國政府の關稅會議に對する一般的方針は、支那國民の利害關係と我が對支貿易の調節をはかるといふ意味に於いて、支那國民に援助を與へるといふにあり』。これが『支那國民に援助を與へる』といふ言葉の、『自主的』內容なのである。

支那に對する列國の利害は、單に自國工業の製品を輸出する市場としての利害だけではない。製品と同時に、資本そのものを輸出する投資場としての利害がある。そして支那に土着工業の起るにつれ、商品輸出市場としての利害に對し、資本そのものゝ輸出市場としての利害は、益々重要になつて來る。支那の經濟狀態に起つた最近の著しい事實は、內地工業の勃興と、これに照應した、純然たる工業資本家階級の發達である。ことに全ての國々に於ける、工業化の共通の出發點であつた綿糸綿製品工業は、最近、支那に於ても著しい發達をした。これは綿製品の輸入が逐年減少してゐるに反して、綿花や機械類の輸入が增加することによつても知ることが出來る。

その結果は、英國に取つては對支輸出の減少である。のみならず資本を輸出する國としては、英國はとうてい米國の敵でない。そこで英國の利益は、支那に於ける既得權と勢力範圍を維持することである。これに反して米國は、現狀の維持よりも寧ろ現狀の打破を利益とする。支那に於ける粗工業の發達は、米國の對支輸出に取つては大した苦痛でない。支那の資本主義化と、これに基づいたブルジョアジーの要求——國民的統一と有力な

中央政府の形成——を助けることは、資本の輸出國としての米國に取つては有利である。

これは英國をして、支那に對して最も保守的な態度を取らしめた。これに反して關税會議の當のあくまでは、支那の關税自主權の要求を助ける急先鋒は、米國であると思はれてゐた。輸出國——特に粗工業品の輸出國——としての日本の直接の利害は、米國よりも英國に一致した。最近の國民が運動を通じて、日本は常に、對支政策の最右翼を代表する英國の態度に「追隨」したばかりでなく、時としては英國よりも先き走りをした。そして英國の對支政策が軟化したゝめに、日本は英國から置去りにされ、英國に代はつて、日本が却つて保守的政策の急先鋒たるかの如き觀を呈してゐた。若しこの形勢のまゝで關税會議が進んだなら、關税會議の主役を取るものは、日本ではなくて米國だつたらう。そして會議を通じて、日英の勢力が米國の勢力と對時したに違ひない。

會議の第一日は、斯ような形勢を轉換するためには、確かに日本の外交の成功であつた。關税自主の形式を支那に與へること、このかはりに、特殊な品目に對する互惠的の協定によつて、日本の對支輸出に有利な税率を定めること、これが日本の到達した解決——「支那國民の利害と我が國の貿易の利害とを調節する」方法——であつた。これに反して——これに對抗する爲めに——米國と英國とは、關税自主の形式を與へることは保留を加へる代りに、税率に於ては、支那の要求、乃至は要求以上のものを與へようとする。日本は關税自主の容れ物を與へようとし、これに對抗するために、英米は關税自主に中身を與へようとする。日本からこの容器を取り、英米からこの中身を取つて盛つた時支那は初めて、完全に關税自主權を恢復することが出來る。そしてこの事業は、必ずしも望のないことではない。——けれども日本に取つては、事業はそれほど容易でない。關税會議の第一日に、日本は與へ得るものを殘らず投げ出した。日本の全權の手には附加税二分五厘の主張が後生大事に握られてゐる。現に輸出綿糸布同盟會は、『華府會議の決議なる二分五厘增加以上は絕對に認めてはならぬ』と云ふ決議をし、同じく紡績聯合會でも、『關税引上の程度は一律二分五厘』といふ態度を言明してゐるが、日本の對支外交は、何と云ふても、五割方は綿糸綿布の外交である。關税自主の要求は、支那に取つてこそ、自國の產業と財政との見地から關税を決定する權利を得るといふ經濟上の利害以外に、一國としての面目上の問題であるが、他國に取つては、關税を引上げられては困るといふ、單なる税率の問題である。そこで日本に取つては何物でもない

『關稅自主』を支那に與へることによつて、日本に取つては全ての物である『稅率』の引上げを防ぐこと、これが日本の外交家が、渾身の智慧を絞つて案出した解決策――支那國民の利害關係と、我が對支貿易の調節をはかる方法――だつたのである。ところが米國の對案に現ばれてゐる附加稅七分五厘の增徴、または之に近い稅率の採用を見たならば、日本は畢竟、すべてのものを失ふことになる。支那國民の利害關係と、我が國の貿易の利害關係とを調節することは、決して容易な事業でない。

對支輸出は金額の上から見て、日本が英米以上に多くの利害關係を有するばかりでなく、輸出總額に對する割合から見るならば、特に日本に重大な利害がある。英米の對支輸出は、各々輸出總額の一分乃至一分五厘に過ぎないが、日本の對支輸出は、輸出總額の二割近くを占めてゐる。支那の市場は現在に於ても將來に於ても、英米に取つては重要であり、日本の工業に取つては致命的である。從つて關稅率の問題が、特に日本の資本主義の問題であると云つてよい。況んや英國や米國――特に米國――は、必ずしも支那の粗工業と競爭する必要はない。從つて日本の資本主義をへこます爲めには、支那に對して五分乃至一割二分五厘の稅率を讓歩することは大した苦痛でない。然るに日本の對支輸出（輸出稅附加の問題は暫らく別としても）に取つては致命的の打擊である。關稅會議の外觀上の形勢は、日支の兩勢力が提携して、英米の勢力と對峙してゐるかのようである。けれども會議の眞實の形勢は、今まさに頭を擡げかかつた支那の工業と、日本の資本主義との爭ひを意味してゐる。

然しながら少くとも一つの重要な問題について、資本主義列國の利害は一致する。即ち支那民衆の國民主義的運動を鎭壓するに足る、有力な中央政府の樹立を助けることである。支那に於ける國民主義的運動の最近の著しい現象は、その指導權が無產階級の手に移つたことである。支那の國民主義の運動は現に小ブルジョアによつて支持せられて居り、それが國民主義の運動である範圍に於ては、小ブルジョア的性質を備へてゐるにも拘らず、小ブルジョアには、最早やこの運動を指導する力がなく、運動の重心は、明かに無產階級に移つてゐる。即ち最近に於ける支那の國民運動は、一方に於ては、支那の資本主義化に照應する國民的統一國家への過程であると同時に、それは無產階級によつて指導され、資本主義的帝國主義に向けられた鬪爭である。そこで國民主義的運動に對する恐怖と憎惡とに於て、少くとも資本主義列國の政策は一致する。そしてこの一致こそ、その他の對立した利害を調和せしめる有力な力となるに違ひない。

自作農の幻影

時）——

「『百姓と胡麻油は、搾れば搾るほど出るものなり』といふのは搾取機械の幼稚だつた昔のことで、搾取機械の精巧となつた今日は、これは幾分時代おくれとなつた。今日の精巧な搾取機械の場合には、百姓も胡麻油も、或る程度まで搾つた上は、幾分機械をゆるめて何等かの操作を加へないでは、それ以上に油を追出することは出來ぬ。この操作を名づけて、廣義には國民生活の安定と云ひ、狹義には、農民の救濟といふのである。

資本主義は勞働の搾取なしには成り立たぬように、工業資本と金融資本に對する、農業生産者——農民——の完全な隷屬なくしては成り立たぬ。資本主義が自國の農村の、胡麻の油と共に農民を搾り盡した所では、他國の農業と農民との隷屬とによつて、初めてその命脈をつなぐことが出來る。そこで資本主義には、二つの法則がある。即ち第一には、農業——從つて農民——の搾取の上に立つことであり、第二には、農業——從つて農民——を何時までも搾り盡してはならといふことである。若し『搾れば搾るほど出るものなり』といふ單純な技術上の見解で

——（評

壓力を加へたならば、たゞにそれ以上の油が流れ出ぬばかりでなく、却つて×××××××××××××××××
×××××××××××××。

そこで農民の救濟——××××××××××××——が、ブルジヨア政黨の當面の問題の一つとなつた。そしてこの操作のうちで最も有効らしく見えるのが、謂ゆる自作農の創定であつて、すべてのブルジヨア政黨が、各々自黨の自作農創定案を立てようとして競うてゐるのはその爲めである。

政憲聯合内閣當時、政友會出の農相の下に、毎年二千町歩の自作農を創設する計畫が立てられたが、憲政會の單獨内閣となつては、須らく我が黨の自作農創定案なかるべからずとあつて、この案は廢案となり、憲政會自身の成案が練られてゐる。最近政友本黨でも同じ見解から、國民生活安定委員會の成案のうちには、『小作人を自作農になす事』といふ一項目が加へられてゐる。

自作農の狀態については、統計は少くとも、次の如き三つの

事柄を示してゐる。即ち自作農は、相對的に減少しつゝある。五反以下の自作農は增加しつゝある。五反以上の自作農は減少しつゝある。これは自作農の内部に於いて、土地の集中が進行してゐること、土地を失つた自作農の一部分（最低限界）が小作農に沒落しつゝあることを物語つてゐるものである。そこで自作農の創定には、先づ第一に、自作農の内部に行はれてゐる土地の集中作用を阻止する力はない。第二には、限りある財源では、年々の減少を補ふ程度に、自作農を創定することは出來ぬ。

けれども假りに何等かの財源により、年々、相當の數の自作農を創定する成案が得られたとしたら、どうだらう。最近、農林省が全國の標本的な農家百戸について、その經濟狀態を調査した結果として發表せられてゐる數字によると、平均一戸の農業收入は千四百五十五圓であつて、副業の收入二百九十五圓、合計千七百五十一圓である。これに對する經費の支出は七百六十八圓であつて、差引九百八十三圓が純收入（即ち家族の勞働に對する報酬）である。然るに一家族四人七分の生活費は一ヶ年千百七十七圓であつて、差引百九十四圓の食ひ込みとなつてゐる。この食ひ込みは、土地を擔保とする負債となる。言葉を換へて云へば、自作農は年々百九十四圓づゝその土地を失ひつゝあるのである。この數字は、農林省自ら、その肝膽を碎いてゐる自作農創定の幻影を見事に打ち破つたものではあるまいか。

自作農の創定とは、年々百九十四圓づゝその土地を喪失する自作農を創定することである！ この問題を解決しないでおいて、自作農の創定を農民救濟の一項目に加へておくことは、餘りに白々しい欺瞞であると云はなければならぬ。

それにも拘らず、ブルジョア政黨が、自作農の創定に異常の熱心を示してゐる理由と動機とは、おのづから別個の方面に求めねばならぬ。前掲の數字について何人も見落すことの出來ない事實は、自作農は農業によつてゞなくて、副業の收入によつて辛うじて生活してゐるといふ事である。即ちブルジョア政黨の自作農創定とは、單に自作農民を作るといふだけではなくて、副業によつて生活するといふ農民を作るといふことを意味してゐる。農業によつて生活することを豫期しないで、副業によつて生活する打算の上に立つて農業に從事する社會層を作るといふことは、最も搾取に都合のよい、最も抵抗力のない、最も隸屬的な農業生產者を創定することを意味してゐる。自作農創定の眞實の目的は、國民生活の安定ではなくて、××××××××××。

臺灣の農民爭議

原始社會の片影が、現存の未開種族の生活に見られるやうに、謂ゆる原始蓄積の事實を、吾々は最も鮮明に、殖民地の搾取に見ることが出來る。

今から十七年前、臺灣總督府は臺中臺南兩州に跨る一萬餘町の竹林を、模範林に編入するといふ名目の下に、祖先代々からの所有者たる一萬五千の農民の手から取上げて、三菱に貸下げたが、この竹林は、三菱とは滿更ら緣故がないでもない現內閣の下に、改めて三菱に拂ひ下げられた。かくて一萬五千の農民は、最も露骨な方法でエキスプロプリエートされたのである。これが殖民地に於いて、內地の大資本が製紙事業に原料を供給する竹林を手に入れると同時に、生產手段から引き割かれて『自由』になつた勞働力の賣手――プロレタリア――を手に入れてゐる最も標本的な實例である。

然しながら殖民地民族の無產階級化の過程が進むにつれて、對資本無產階級の新しい問題が、必然に起つて來る。資本はその播きつけた種子を刈らねばならぬ。

最近、林糖區域の小作人によつて組織せられてゐる蔗農組合と、林本源製糖會社との間に起つた爭議は、この時期の到來を告げ知らせたものとして、極めて重大な意義がある。

林本源製糖會社は、自ら播きつけた種子を刈らうとしないで、却つて農民の作つた甘蔗を刈らうとした。臺灣の製糖會社は、買收價格を決めないで刈り取つた上、都合のよい價格を支拂ふといふ、極めて都合のよい慣例を守つてゐる。農民には、固より之に對抗する力がない。林本源製糖會社でも、勿論、忠實にこの慣例を尊重して、今年も買收價格を決めないで刈入れようとした。ところが生憎、二林庄方面の農民八百名は、農民組合を組織して居つた。そして刈入前に買收價格を――しかも團體的に――協定することを要求したのである。

これは慣例に反してゐる――言葉を換へて云へば、無制限な搾取の搖籃で育つた資本に取つては、少々勝手が違つてゐる――況んや殖民地民族が、××××××××××××××××××××××××××××××××××

る行爲である。そこで會社は、××××××に、甘蔗刈入れに着手した。そして會社は農民の作つた甘蔗と共に、自分の播いた種子をも刈り入れた。結果は云ふまでもない。四百の農民は現場に殺到した。×××××××××××××××××。×××……等々である。(臺灣のブルジョア新聞は、筆を極めてこの「××」を誇大に書き立てゝゐるが、その目的はこの爭議を一大騷擾事件として、組合××××××××××あると傳へられてゐる)。

これは内地の無產階級運動、特に農民組合運動が、殖民地の農民組合運動に對して、一定の明確な見解と態度を定めなければならぬ時期に達したことを意味してゐる。

法窓閑話を讀む

東大教授 末弘博士の近業

田中耕太郎

本書は自序によれば著者が一つは法律に關する正しき知識の普及のために、一つは著者獨特の法律思想、法學の根本問題に關する專門家の見解を法學の專門家にも問ふために公にした最初のものであるとのゆゑに著者の法律觀をうかゞひ知らんと欲する者は本書による外はない。

自分はこの書を大なる興味を以て心地よく讀了することが出來たことを否定し得ない。今こゝに筆をとつたのも、この書が私に何かいはせなければ止まぬ魅力を持つてゐる結果なることを冒頭に斷つておく。近時新しき法學を標榜する著書論文の發表せらるゝものが少くないが、その多くは外國著書の引用を繼ぎ合せたものでその掲ぐる羊頭狗肉的表題に反比例して獨創を缺き吾人をして頗る嫌厭を感ぜしむるのに反して、著者の所論は徹頭徹尾自家藥籠中の物としたる一般人にも了解し易き法律論である。私は著者の法律生活上の體驗が著者の學識をして、若き學究の通弊たるペダントリーに陷らしめないのを見て愉快を禁じ得ぬのである。

○

現在の社會生活と法律の世界との間隙が如何程大なるものかは、單に法律の世界のみに沒頭し、その空氣に浸潤されてゐる者には往往にして看過され易い所である。これは法律に關する實際の社會生活の凝視よりしてのみ氣付かるゝのである。しかしてこの方面における不斷の努力を以て實地の研究を怠らない著者はこの間隙を異常の烱眼を以て洞察し、これに對する、或は社會的正義が要求し或は社會の推移に合致する適當なるレメディーを獻策してゐるのであつて、これは「誤判賠償の根本原理」「軍法會議廢止論」「小作人と土地所有權」「淳風美俗と親族法の改正」及び法律小話中における各短文中に見受けらるゝのである。私は今詳細に立ち入ることゝなしにたゞこれ等の問題につき著者がとつた素直なる若々しさその快刀亂麻的態度著者の人格の躍如たる文字を心地よく思ひ、結論にも同感し得る所多きこと、且著者の提供する幾多の材料によつて多大なる裨益を受けたことに對する自分の感謝を述べるに止める。

次に著者の一般の法理論に眼を轉ずるに、そこには「法とは何ぞや」また「法と道德との關係」の考察に關する著者の抱負が述べられてゐる。著者が從來の學者の如く概念的に、恣意的に選んだ法の定義より演繹的にこれを取扱はなかつた態度については同感を表するのに躊躇しない。本書全體を通觀するのに、著者が最も語を強めて主張する所を摘出すれば法律が行爲の準則にあらずして裁判の規準たること（九ページ一六九ページ以下）法の劃一性の承認いはゆる「具體的妥當」の攻擊（一六ページ一九ページ）法律の相對性即ち法が社會的事實の變遷に順應するものなること（殊に家族制度の變遷と法律との關係一三四ページ以下二七六ページ以下）加之立法の積極的任務（六〇ページ）國家萬能思想の攻擊（八五ページ以下一八四ページ以下）社會的事實の力による法制の缺陷の補充（殊に勞働問題小作問題に關する團結の力一五八ページ以下一七七ページ）等の諸點をその重なるものとする。しかしてこれ等は法理上極

めて興味あるテーマであつて、われ〳〵は著者が序において約する如くこれ等の一々についての學術的體系的基礎付けを期待するものである。

○

著者が全卷を通じて最も力強く主張する所は法律の世界が人生の極めて一部を支配するに過ぎずして法律の創造的作用を妄信する問題なる舊來の思想に反抗し法律の侵入を許さゞる人生の部分あることであつて、著者はこのことを適切なる例を以て（例へば書面によらざる贈與及び夫婦間の契約の取消その他親族關係について）明かにしてゐる。これは立法當局者をして考慮反省せしむるに足るものである。然しながらこの點のみならば反抗的啓蒙的の思想に止まり法律考察の出發點ではあるが窮極ではない。我々の人格は先づ法律の世界よりの解放を叫ぶが結局それとの調和を要求せざるを得ぬ。こゝにおいてか他の價値との交渉法律の世界と同一順位又は上下の關係にある他の世界即ち經濟道德藝術及び宗教等との關係が問題となる。この點において著者は消極的に一定の事項を道德及び宗教の領域に追放するに止めてゐるのみであつて（六二一頁）これ等の世界と法律との關係殊に道德との調和の方面には明白には論及してゐない、道德と法律との分離の主張のみならば、啓蒙期の思想に止まりこれにより法律は價値の世界の末席につらなり得ぬことになる。吾人が問題とする所は、法律が價値の世界においての評價値と如何なる關係にあるやの點である。問題は結局世界觀に關して來る。これは文化哲學乃至形而上學の問題であらうがこの難問題と雖も著者にして素朴的にも一種の標的を持つてゐるならば一般に理解し得られる形式で示すことが出來る譯である。このことは絕對に必要である。然らざれば著者の仕事は具體的の建言の善きに拘はらず思想的には單なる破壞に終つてしまふ。單なる破壞は世の中を混とんに陷れるのみ。否、よりまつたきものゝ來るにより初めて不完全なるものゝ破壞が行はれ得るのである。

例へば著者は家族制度の問題に關し、家族のとる形態はその社會の經濟狀態その他の事情がこれを定むるものとし、封鎖經濟狀態の下においては大家族制度の存在の理由があるが、社會的分業が極度に發達した大都會における家族については「家族制度の崩壞」が行はれざるを得ぬものと認め、わが法制における家の制度は往時の經濟狀態の下における家を豫想せるものとして現時の經濟組織の下における家には適用すべからざる旨を痛論してゐる。その所說には勿論大に傾聽すべきものあるが、著者は一體この傾向を是認するか又は否認するのか。著者は「斯の如き家庭崩壞の傾向を喜ぶべしといふのではない。たゞ國家の發達と社會的分業とが自然に生み出した自然の現象だといふのである」（一八五ページ）といつてゐる。著者は「この事實を喜ぶべきものと認めず。目到底それには任せ切れない最後のものがある」（同ページ）といつてゐる所より見れば、著者は法以外に安住の地を認めてゐるやうだ。然しながら家族制度に關する法もまた單なる經濟生活の反映 Sein の法則の宣言に止まらず、その中に立法者の理想が包含せられなければならなくはないか。著者は一方において家族制度に關する法を自然法則に合致せしむることを以て甘んじこの點においてたゞ唯物史觀的に考へてゐるやうである。然るに他方においては法律以外の世界即ち道德及び殊に宗教の世界を理念としても認容してる樣である故（六二一ページ）著者は此立場を容する者でもなさゝうである。然らば單に經濟の動きに大體に於て從ふ技術的の法ならば、格別民法殊に親族法の如きにおいては單なる經濟的法則の反映に放任する事は出來ないの

であつて、そこに何等かの立法者の理想が現れなければならぬ。著者は現行法制が過去の社會的事實によるを難じてゐるが、吾人は若し著者にして社會的事實への盲從を背んぜざるにおいては理想を加味しての立法をかれよりして望まざるを得ぬであらう。固陋なる家族主義者の誤りは昔時の事實を今日の理想として掲ぐる所に存するのであるが、法律の範圍においては自然法的に一任し餘は道德宗教の任務にゆだねてしまふ著者の立場よりは遙に理想主義として徹底してる。要は立法の方向を與ふるために何が理想として掲げらるゝかに存する。著者も他の所では立法者の任務としての態度を認めてゐるやうだが(六八〇ページ)これが全卷を通ずる思想であるか否かは疑ひがある。

○

要之家族制度に對する著者の立場は著者が他の場所で自らをペシミストと告白してゐるやうに(三七三ページ)その崩壞を悲しみを以て眺むる悲觀主義に外ならぬ。然らば著者がその崩壞せる家族制度に適合する法律制度を止むを得ざるものとして以上に主張するのは矛盾にあらずんば法の中における理想的なるもの〻否定である。眞の理想家は決してペシミストたる筈がない。著者の眞意若し家族生活を全然法律の世界外に放逐する事にあるならば、法律の世界外において著者は家族制度につき何を望むか。著者の一任せ切れない最後のもの」は何を意味するであらうかそれは原始時代の家族生活の基調をなす血族關係兩性關係ではないであらう。又現代の文明人の家庭にまで侵入し家庭の破壞を見ずには止まぬ、低い目的主義でも勿論ないであらう。家庭はいはゆる感情團體でもなく目的團體でもなほ更ない。私は兩者の特質即ち有機的に結合しながらしかも利害以上の自覺した目的を有する生活の高き標的に向つて共同する團體、最も小さな形における即ち、生團體でなければならぬと考へる。家族制度を生かすのはこの理想によるものであり、しかして著者が若し斯かる理想を漠然ながらも望見し法律の世界においてもその最もかすかなる投影でも望まなければ、家族制度の改正も徹底して論ずることを得ないわけである。

このゆゑに著者が極力固持してゐる法律を以て行爲の準則にあらずして著者のいはゆる裁判の規準に過ぎずとする結論は、一層根本的な基礎付けを必要とすることは勿論だが、然る事により法は全く國民生活と沒交渉のもの、これと內的關聯を缺くものとなつてしまふ恐れはなからうか。法もまたその領域において意識的無意識的に本來國民の行爲の準則であり、時に反射的に裁判の規準たるが爲に行爲の準則たる場合あるに過ぎぬものではないのではなからうか。

著者が他の個所において掲ぐる新道德の基礎として要求する三ケ條の律法即ち働かぬ者は食はざるべき事、物を粗末にせぬこと及び著者のいはゆる犧牲禮拜(三七三ページ)は一つのものから出づるにあらざれば死物であり、しかしてそれより流出するもの必ずしもこの三者に限らずもつと重要なる律法があるに相違ないのである。

要するに若し著者がその自序中にいつてゐるやうに法律を「民衆自らのもの」となし民衆をして「法律に關する正しき理解と確な知識」を有せしめ「法律思想の改造」を企てんとするならば、立法者及び專門家には參考となる部分的斷片的立法論の代りに、從來の法學通論教科書と違をつた方法において法律の世界の全き姿を讀者の前に展開しなければならぬ。この意味において私は本書の形式が「一般人士もまた興味を以て讀み且理解し得べき」ものであるに拘らず、その內容はむしろ專門家向き技術的のものであると思ふ。しかうして法律專門家に對しては著

著者のいふ「通說と異なつた著者獨特の思想」少くとも法の根本問題に關する範圍では本書において單に斷片的の感想として指示せられてゐるのみである。本書の價値は主として法の病理學たる點に存しこの點において著者獨特の手腕を持つてゐるのである。著者は自由法論を嫌つてゐるもの、（一九ページ二〇ページ二三ページ）自由法論が本來法の適用の病理學であるのに對し、著者の仕事は立法に關する病理の研究に存するのであつて、興味の重點には大なる逕庭がない。私は著者が各個の具體的問題に對し現今の法制の缺陷を假藉なく指摘しこれに對し有益なる提案をなしたこと――この意味で本書は決して「閑話」ではない――の有意義なることを充分認めるものであるが、本書が主として一般公衆に向けられてゐるために、法の生理學にも意を注がれたき希望的の念を禁ずることを得ぬのである。（完）（東京日々所載）

女工哀史を讀みて

富山高等學校教官室　木枝增一

「女工哀史」四百四十六頁を讀み了つた私は、自らにして滲む涙の乾かざる間にとペンを執る。あはれ、人間が汗と膏と血の勞働で書きあげた體驗の記錄にしてこればかり尊いものがあらうか。私は自らの血管の中に、感激の逆流を覺えずにはゐられない。私は、今こゝに、靜かに自分の感激を內省し解剖することによつてこの書の批評にあてたいと思ふ。

顧みて、この書が私の心を動かした最も著しい三つの事實に想到する。一つは全卷を貫いて流れる著者自らの體驗の尊さである。自序にも言へる如く、十五年の長い職工生活の體驗が、一字一句の中にも抑へ切れぬ躍動の潮を湧かせてゐる。所々に挿まれてゐる簡單な挿話にも追憶談にも、我々に迫る無限の力のあるのは全くこれのためだ。恐ろしいスピンニング・マシーンの轟音、機械に狹まれて慘死を遂げた職工の血潮のとばしり、無心に女工の母の乳房にすがつて嬰兒の唇をもぎ裂く無情の汽笛、それ等頁から頁へ、章から章へと、唸りつゝ鳴つて行くのを覺える。そしてそれ等を蔽りて、數萬の哀れな女工の血の叫喚を耳にすることが出來るのだ。二には、著者が詳細なる女工の生活記錄を記すに當つて、一時深刻の反抗的精神にのみ墮さずして、之に科學的、研究的の態度を失はなかつたといふことである。我々は隨處に引用してある多くの統計に出會する。しかもそれが往々にして陷り易い頁裏の常套に溺れないで、一々が根柢ある肉付となつてゐることに首肯かされる。こゝに學者にもして見まほしい著者の眞摯なる良心に敬服させられる。且つ學歷などの全く無い著者の學究心の到達點の表現は、實に驚嘆の外はない。三には人道的理想を核心とした社會的意識の覺醒である。無知な男女工の群頭に、目覺しい革新の角笛を吹きならす著者の意氣ある英姿を想像する。其處から噴出する人間的の愛の流れが、哀れな苛酷の勞働に悶え疲れてゐる同胞を、如何に光の國に齎らさうとすることか。細井君こそは、まこと純情を以て、社會意識の夜を閉されたる機械の奴隷の闇から、曉に開らかうとした人である。「冷やかな煉瓦の牢獄」の鍵を握つて立つた人である。

以上の解剖を終つた私は、一一の感想

を付加して短評を結びたい。この書の一部を紹介した「改造」誌の書の如く、「苦闘・忍從・奴隷」の生涯から生れたこの書は、立派な世界的文獻、しかも勞働者自らが描いた僞瞞のない尊い文獻である。

私は書中所々に散見する文學的表現い影を見て、勞働詩人の名を贈りたく思ふと共に、君自らの志であつた工場の藝術的小說表現を完成せずして不歸の人となつた君を心から哭せざるを得ない。章の配例、內容の整理等についての多少の遺憾の如きは、微瑕の一片たるに過ぎない。

著者の靈よ、靜に眠れ。君が墓畔からは萎まぬ花が、女工のために咲き出でやう。（終）（東京日々所載）

今度創刊された理想的幼年雜誌!!



幼年倶樂部

父兄諸君にお願ひ!

都會の子供と田舍の子供を較べて見ますと、同じ年輩の子供でも、その學力にその常識に大變な隔りがございます。其原因は他にもありませうが都會の子供達が課外に子供雜誌を讀むことが最大原因と認められます。此の幼年倶樂部は都會と田舍たるを問はず如何なる幼年にも理想的な雜誌であります。何卒安心して愛する坊ちゃん孃さん方の爲めにお求め下さるやうお願ひ致します。

百餘名の名士教育家賛助!莫大の損失を覺悟で數ケ年の研究を積んで生れた理想の幼年雜誌!

附録 **英雄双六**



◇表紙 武田比佐畫伯筆

定價金五拾錢(送料三錢)

發行所 東京本郷駒込坂下町 大日本雄辯會 (振替東京三九三〇)

◇體裁と内容

◇菊判型 色刷口繪、寫眞二十頁、讀物本文はほとんど各頁繪入で何れも面白く教育的な内容であります。特に最上等の洋紙を用ゐ印刷の鮮麗無比なのは本誌の利益を度外視した奉仕的精神に依るものであります。

新年創刊號は…**十二月六日**全國書店にて一齊に發賣

▲今から非常な評判ですから前以て御近所の書店にお申込置き下さるのが御便宜と存じます。

講談倶樂部

大衆文藝の逸品集る！

堂々七百頁の大冊四大附錄つき

見よ誌界無双の出來!! 乞ふ期して俟たれよ!!

長篇小說作家

顏觸の華々しさ!!

内容充實天下無比！

破天荒の大提供、こんな安い雜誌はない。一冊あれば一家殘らず一月中樂しめる

～～～ホンの概要をかゝげます

特別讀物 名士巨豪自叙傳物語

雜誌界稀有の企畫、この顏

戀愛小說 月火……小栗風葉

本誌にのみ見るを得る風葉先生一世一代の大作。中年者の本能的な肉的な戀愛生活の種々相を描いて深刻を極めた小說、紅葉門下の逸足明治文壇の巨匠の最大傑作。

新小說 怪人……中村武羅夫

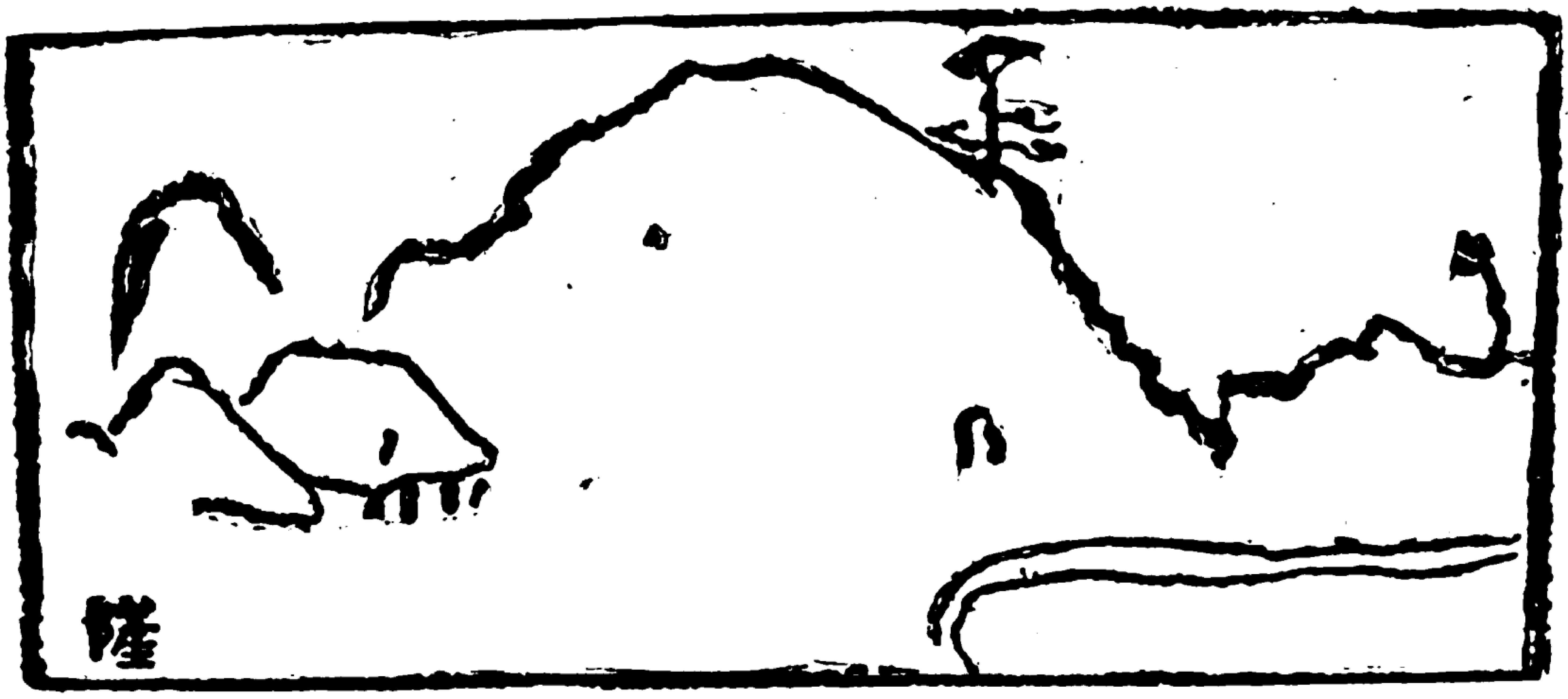
新文壇第一の權威者、長篇小說の天才作家中村氏が極秘の題材を扱つた大篇。光源氏を今にして見る戀愛の化神とも云ふべき一箇男性を中心にして愛慾生活の展開。

歷史小說 家康調伏……眞山青果

千姬の正體を摑んで、いま迄の傳說を引つくり返した觀のあるのはこの小說である。戰國の世に於て政略の犧牲



P-2



戯曲

老醜（四幕）

正宗白鳥

場所　相州のある村

時節　十月頃

人物

吉兵衛（六十歳くらゐ）
妻おしも（同上）
長男辰松（三十くらゐ）
銀太郎（四十くらゐ）
ゆみ子（二十餘歳）
村の婆さん
村の若い者

（一）

資産の豐からしいある農家の庭。庭と云つても、そこは穀類の干場に當てられてゐるので、草花などはなくつて、日本の秋の田舎といへば、直ぐに連想されるやうな俳句味の風趣は、何處にも見られないのである。六十歳くらゐの老主人吉兵衞が、庭先にしやがんで、鷄の毛をむしつてゐる。

中年の農夫銀太郎がそこへ入つて來る。

銀太郎　旦那、殺生をやつてゐなさるね。

吉兵衞　こいつは玉子を生まねえ穀潰しだから、思切つて絞めちやつたよ。こんな肉は堅さうだから、悴どもに御馳走して、おれはソップの汁でも啜ることにしよう。人間も齒を惡くしちや駄目だぜ。

銀太郎　それでも、旦那はいつもお丈夫だから結構でさあ。

吉兵衞　なあに、見かけ倒しだよ。おれは今まで病氣は一度もしたことのねえ男だつたが、この頃はどうもいけねえ。何處が加減が惡いちうことはねえだけんど、心が弱つて來たゞ。

銀太郎　そりや、いくら頑丈な人でも、六十を越しちや、若い時分のやうにはいきますまい。たまには湯治にまで行きなすつたらどうだな。この頃は熱海や湯河原へも汽車が通つて、えらく便利になつたゞから。

吉兵衞　おれもさう思はんでもねえが……湯治といふやつも退屈で、どうもおれの性に合はねえだよ。

銀太郎　さう云へば、旦那は松田の競馬に行つてなすつたやうだが、あの後はどこへも行きなさらんのですか。

吉兵衞は、邪慳に鷄の毛をむしつてゐた手を留めて、相手を見上げて、

吉兵衛　小田原でやつた時にや、おれも三日ぶつ通しで行つたよ。十兩ばかりの損ですんだゞから安い道樂だ。もう競馬の呼吸はちやんと呑込んだから、この次から損はしねえつもりだ。お前はどうだな。

銀太郎　わしは今日大船へ行つて馬鹿な目に會ひました。懐中をスツカリはたいちやつて、歸りの汽車賃を連れの男に借りて歸つたんでさあ。あんな出鱈目な競馬にぶつ付かつちや、馬の明るいものは却つて馬鹿な目を見るんですが。

吉兵衛　(冷笑して)お前なぞ馬に明るいなんて、大きな口を利く柄ぢやねえや。田舎競馬の小博打に夢中になつて、身代をすらねえやうに氣をつけろよ。

銀太郎　ヘヽヽ。さう見くびりなさるなよ。これでも、松田ぢや、百兩の餘もせしめて、懐の中は懐爐を入れたやうに溫くなつたんですぜ。(調子に乘つてさう云つたが、ふと氣づいたやうに)だけど、小田原と大船とで思惑違ひをやつて、折角取つたものをスツカリ吐出してしまひましたよ。

吉兵衛　それ見ろよ。百姓がこの忙しい時分に、野良を放つちやらかして、旅費を使つて、賭事に日を暮すと云ふことがあるものか。

銀太郎　いや、わしだつて競馬なんぞに懲つてやしませんよ。此間うちから一つ大計劃を立てゝ居ります。それについて旦那のお力を借らにやならないと思ひまして。

吉兵衛　そいつは御免だ。(頭を振つて、全然取合はない風をして)おれはお前達と共謀になつて仕事をしようたあ思はねえ。やりたい仕事がありや一人でやるだよ。お前もいつまでも意氣地がねえぢやないか。

銀太郎　自分に意氣地のないのは、十年も前から知つてゐますよ。東京に三年もゐた間に、われとわが身が意氣地のないことだけを學問して來たんですからな。……だけどな、あんたがわしの企んでることに、一錢一厘たりとも、オイ

ソレを資本に融通して下さらないくらゐなことは、わし、百も千も承知してゐますよ。わしは親爺の殘して呉れた田地をスツカリ賣飛ばして、そいつを資本に、自分の思ひついた仕事をやつて見るべいかと思つてゐますだ。

吉兵衞　フヽン、いくらも殘してやしねえくせに。……それで、その田地をおれに買つて呉れと云ふんだな。

銀太郎　お察しの通りでさあ。今の時節だから、決して法外な價で引取つて頂かうとは思つてやしません。

吉兵衞　まあ御免にしよう。高くも廉くも、人の田地などに手を出す氣はもうねえだよ。自分の物でも賣れるものなら賣つちまひたいぐれえだ。

銀太郎　へえ、旦那がそんな氣におなんなすつたのか。ほんとですかい。

吉兵衞　おれの心變りをおめえに話したつて詰らねえな。

彼れは、あらまし毛をむしり取られた鷄を提げて立上つて、相手の方へは目もやらないで、横手から入つて行く。銀太郎は「チエツ」と舌打ちして、疵をまご〴〵して、やがて、縁側に腰を掛けて、袂から煙草を一本出して吸つてゐると、そこへ、奥から年齢三十ばかりの若主人の辰松が出て來る。

辰松　話聲がどうも銀公らしいと思はれた（快活に云つて側へ來て）君は親爺に何かねだり事があつて來たのかい。

銀太郎　まあさうですがね。今日は旦那はわしの話に唾液も引掛けて下さらない。

辰松　親爺に話す前におれに云へばいゝのに。

銀太郎　へゝえ（苦笑する態を見せる）

辰松　ハヽヽ。相變らずおれを侮どつてゐるね。此間からおれは、おれに頼み事をした最初の奴の頼みを、生命に懸けても聞屆けてやらうと、大決心をしてゐたのだよ。

銀太郎　さうでしたか。そいつはしまつた。………今から改めてあんたにお願ひしちやいけませんかな。

辰松　おれを信用してやしないくせに。

銀太郎　決してさう云ふ譯ぢやありません。(眞面目に云つて)それはさうとあんたは、何時までも此方に尻を据ゑてゐなさるんですか。よく退屈をなさらないでじつとしてゐらつしやるものだ。

辰松　銀公にはそれが不思議か。君が東京でしくじつて村へ歸つて來て、燻ぶしてるものだから、おれが半歳もこんな田舍に籠つてゐるのを、さぞ退屈だらうと、身に引くらべてちよつと思遣りを出したのだね。おれは君のやうに、暇潰しの野良仕事も出來ないし、賭博も打てないし、成程、傍から見たら所在ない日を送つてるやうに見えるだらうさ。だけど、銀公、他人にうつかり同情なんぞするものぢやないぜ。おれにはおれ相應な日の送り方があるんだぜ。

銀太郎　それはどういふことでせう。離れ座敷へすつ込んで學問してゐなさるんですか。

辰松　まあ、さうとでも思つてゐるさ。

銀太郎　學問もよろしいで御座んせうが、家にばかりゐなすつちや、身體のためによかありませんぜ。どうです？競馬でも見にお出でなすつちや。わしがお伴しませう。

辰松　競馬だ？。長い面をした馬の駈けつくらを見てどこが面白いんだ？どちらが勝つたつていゝぢやないか。

銀太郎　さう云つちや話にならねえ。

辰松　縁も由緒もない長面獸の競爭を悦しがるやうな子供ぐさい眞似は止して、君も自分で思つてることを遣通して、自分が勝つたらいゝだらう。

銀太郎　馬の駈けつくらを、口を開けて見てやしません。財布をはたいても、自分の見込んだ馬に賭けてゐますよ。

辰松　はした金の小賭博が自慢にやなるまい。おれの親爺までも、この頃は競馬通ひをやりだして、馬の通を話しだしたから可笑しくてならないよ。

銀太郎　小賭博でも大賭博でも、やつて見ない人には、どんなに面白いか分りつこはないな。

辰松　賭事がそんなに面白いのか。おれも可成りいろ〱な事をやつて見たが、まだ金錢を賭けた勝負事はやつたことがないよ。一度試しにやつて見ようか、君の手引きで。

銀太郎　へゝゝ。あんた方はそんな品の惡いことは、まあお止しになつたらいゝでせう。

辰松　親爺の腑つ噛りだと思つておれを見くびつてるね。ところが、この頃は剛情だつた親爺も無常を感じて、おれに世を讓らうとしてゐるんだよ。

銀太郎　それは眞實ですかい。

辰松　もう少し經つたら分ることだ。兎に角今からせい〱おれの御機嫌を取つて置けよ。君の小賭博の資本くらゐは貸してやるよ。

彼れはさう言放つて、ツカ〱と奧へ入つて行く。銀太郎は詰らなさうに縁側を離れて出て行きかけたが、そこへ、二十を可成り過ぎてゐるらしいゆみ子、日本髷で、都會の流行に外れた服裝で、平凡な、むしろ痴鈍な顏付をして入つて來る。

ゆみ子　長沼さんと仰有るお家は此方で御座いませうか（銀太郎に挨拶して訊ねる）

銀太郎　えゝさうです（訝しげに女を見詰めて）あなたはこのお家の誰れを訪ねて來なすつた？

ゆみ子　辰松さんと仰有る方は、まだ此方にいらつしやるんでせうか。

銀太郎　ゐますとも。………あなたは東京から來なすつたんだね。
ゆみ子　え丶。
銀太郎　わたくしが若旦那に取次いで上げませうか。
ゆみ子　どうぞ。さう仰有つて下さいまし。茸手町からまゐりましたつて。
銀太郎　茸手町？。さう云つたら分るんですね。
彼れは念を押して、庭を横切つて向うへ入つて行く。ゆみ子はそつと家の様子を覗き見するやうな風をして、片隅にしやがんでゐる。そこへ、辰松の母親おしもが、粗末な勞働服を着け、藁草履を穿き、さつま芋の入つた籠を脊負つて入つて來て、うさん臭い目でゆみ子を見る。ゆみ子が氣おくれした態度で挨拶をすると、
おしも　あなたは何處から來なすつた？（尖つた聲で訊ねる）
ゆみ子　東京からまゐりました。
おしも　東京から？。そんなら辰松を訪ねて來なすつたんだね（稍々顏を和らげて）さうでしたか（籠をおろして、惱てた様子をして）それなら、わたしが秘密であなたに話したいことがあるだから、ちよつと此方へ來て下せいまし。
……さあ早く。誰れにも見つからないうちに。
躊躇するゆみ子を急立て丶出て行く。吉兵衛は何かを捜すやうな目をして奥から出て來て、庭へ下りると、上手から、辰松と銀太郎とが、何か小聲で話しながら出て來て、吉兵衛を見て當惑した顏する。
吉兵衛　今誰れか女の聲がしたやうだつたが、（と獨言のやうに云つて、籠を見つけて）おしもが歸つて來たのかい。
銀太郎　主婦さんは芋を掘りに行つてゐなすつたんですか。

吉兵衛　お前は今まで此處にゐたのだらう。誰れか來なかつたか。

銀太郎　知りません。

吉兵衛　ハテナ。……おれが鳥の身をたゝいてる間に、何だか、女の聲らしいものが聞えたのだ。

銀太郎、旦那は齒は惡くつても、耳はまだお丈夫なんだね。ぢや、旦那の近くで、うつかり秘密話は出來ませんね。

吉兵衛　どうも不思議だ。おれは身體の心が弱つて來ると、耳だけが感が强くなるんで、時々は飛んでもない聲がおれの耳に入つたりするんだ。

銀太郎（微笑しながら）わたくしの耳へは、主婦さんの聲も聞えませんでしたよ。旦那のお耳にはどんな女の聲が聞えました？。いゝ女の聲でしたか。

吉兵衛　何を。埒ちもねえ（にがい顏して）銀公はもう用事はねえだらう。今日はこれで歸つて出直して來いよ。

銀太郎　でも、わたくしはまだ用事を濟まさないんですが。

吉兵衛　さつきの話はいくら云つても駄目だ。おれがいやだと云つたらいやだ。

銀太郎　旦那の御機嫌の惡い時にぶつゝかつちやかなはない。ぢや、今日はこれで御免蒙りませうよ。

銀太郎は辰松の方へ氣消はしげな目を送つて出て行く。

吉兵衛　銀公はおめへに何を話した？。あんな男に關り合ひをつけられちやいけねえ。お前なぞいくら分つた顏してゐても、まだ〱世の中の修業は足りねえよ。油斷しとるとひどい目に會はされるぜ。

辰松　銀公はなにも云やあしませんよ。

吉兵衛（ふと氣づいたやうに）お前何を考へとる？。

辰松　何も考へてやしません。
吉兵衛　お前がそんな顔をしとる時には、ろくなことを考へやしない。……あゝ、さうだ。鳥の肉は爼の上にのつけたまゝだ。泥棒猫に取られるかも知れねえから、行つて見て呉れ。
辰松　お父さんは外に用事が出來たんですか。
吉兵衛　何でもいゝから、早く行つて見て呉れ。そして、火でも燃しといてくれ。
辰松　僕はまだ腹が減らないから、午餐の仕度はゆつくりでよろしい。
吉兵衛　愚圖々々云はないで、早く見ろよ。お前に喰はせるために、鳥を潰したんぢやないか。
辰松　あんな脂つ氣のない鳥を食つたつて爲様がないな。泥棒猫が狙つてりや食はしてやつた方がいゝくらゐなものだ。

辰松は不承々々に、庭から上へ上つて、顧み勝ちに奥へ入つて行く。吉兵衛は不安な様子をして、外へ行きかけると、おしもが入つて來る。

おしも　お前さん何してるだね。
吉兵衛　お前こそ何處へ行つたゞ。こんな所へ箍を抛散らかしといて。
おしも　……長谷甚の婆さまに一言云ひたいことがあつて、思出して直ぐに行つて來たゞ。
吉兵衛　ほんとか。
おしも　何を氣にしてるだな。お前さん今日は變だな。
吉兵衛　何でもねえだ（安心したやうに云つて）やつぱりおれの空耳か。

おしも　辰松は家にゐるんだらうな。

吉兵衛　ゐるとも。今日はおれが午餐にうまい物を拵えといたよ。

おしも　わしも早く田圃から歸つてよかつた。もうちよつと遲かつたらいやな思ひをせざならなかつたのに（獨言のやうに云つて、籠を持つて行きかける）

吉兵衛　いやな思ひをせざならねえ?。ぢや、お前、誰れかに會つたのだな。まあ待て（籠に手を掛けておしもを留めて）ぢやおれの思つた通り、さつき此處へ誰れか來てゐたのだな。どうも女の聲がしたと思つた。‥‥なぜ、おれに隱すだ。おれの事はおめへ達に始末して貰はねえだ（ふときつい聲を出す）

おしも　可笑なこと云ひなさる。（相手の顏を見てゐるうちに、自分も不快な表情をして）ぢや、何だな。お前さんは、小田原のあの女が、わざ〳〵お前を呼出しに此處までやつて來たと思つてるんだね。まだそんな馬鹿げたことを考へてるのかい。自分の年齢を數へて見なさるがいゝだ。自分のその顏を水鏡にでも映して見なさるがいゝだ。

吉兵衛　人の顏よりや自分の顏を見ろよ。

おしも　わしの顏は、六十年働いて生きて來た顏だよ。馬鹿にして貰ひますまいよ。お前さん一人で仕上げた身代ぢやねえだから。

吉兵衛　何を。身代つくるに、てめいがいくらの足しになつた?。大きな口を利くでねえ（少し萎れたやうに）おら、どうでもいゝだ。たとへ百萬兩の財産があつたつて、おらもうどうでもいゝだ。

おしも　呆れた人間だ。あの小田原の團子見たいな不様な女に愛想を盡かされたつて、自分の身代にまで愛想を盡かす法があるだか。‥‥‥‥二十や三十の若いものぢやあるまいし、人が聞いたら正氣の沙汰とは思やすまいよ。

吉兵衛　世間が何と云はうと、おれの知たつこつちやねえ……お前んぞがいくら惡對ついても、おれには何とも感じねえだ。田畑一切賣りはたいて大盡遊びしたつて、おら、もう面白かねえだ。

おしも　面白からうとなからうと、そんな無茶なことされて、女房子が路頭に迷はされて溜るものぢやない。お前さんが、年甲斐もない眞似をしたいのなら、讓るものは辰松にでも讓つて、自分一人で何處へでも出て行きなさるがい。

吉兵衛　だから、明日にでも身代を辰松にそつくり讓つてやると云つてるぢやねえか。おら、金使つて遊んだつて面白かねえだ。競馬の小賭博で思惑が當つて儲けたつて、その金何に使ふだかと思ふと、競馬に行く張合もねえだよ。

おしも　何と云ふこつた。人に話したくつても、氣はづかしくつて話せることぢやない。（歎息して）實はな。事が面倒になつちやいけないと思つて、わし、今まで秘密にしてゐたのだけんど、さつき、東京の女が辰松をたづねて來たのだよ。

吉兵衛　あの女が來たのか。若い聲がしてゐると、夢のやうにおらの耳へ聞えたのだが、辰松をたづねて來た女の聲だつたのか。辰松は若いからな。

おしも　手切金まで出して緣を切つた女が呼出しに來るつて法はねえぢやないかね。

吉兵衛　それで、お前の一存で追歸したのか。

おしも　あとで沙汰をすると云つて、長谷甚の家へ休ませといたよ。汽車賃くらゐ包んでやつて、おとなしく歸したいと、わし思つてるだ。

吉兵衛　そんなこつちや歸るめえよ。

おしも　お前さんに話したら、一圖に怒つて、女の子を打擲もしかねまいと思つて默つてゐたのだけど、お前さん怒らないのかい。

吉兵衛　そりや、怒らうと企んでも怒れねえ時もあるし、怒るまいと思つてもひとりでに怒る氣になることもあるんだ。……その女には、お前もおれも、まだ會つたことなかつたんだから、今日この土地へ來とるのなら、おら、早速會つて見たいな。どんな女だ。

おしも　顔付はおとなしさうな女だけんどな。……お前さんが會ふにしても、女の來てることは、辰松に知らせねえ方がいゝだらうよ。

吉兵衛　辰松はもう知つてゐる。さつき銀太郎が來てゐたんだが、彼奴が女を見つけて、辰松に知らせたらしいんだ。隱したつて駄目なこんだ。

おしも　これは困つたことになつた。

吉兵衛　兎に角おれが會つてやるべい。

おしも　まあ待ちなよ。此方の料見をよく極めてからでなきやいけない。東京女に迂濶なことを云はうものなら、逆捻ぢを喰はされるだよ。

辰松が奥から出て來る。

辰松　火は燃しましたよ。

吉兵衛　さうか。ちそ、兎に角飯にすべい。

吉兵衛が二人を誘つて、家の中へ入りかけるところへ、長谷茜の婆さんが入つて來て、誰れに渡さうかと惑ひなが

ら、

婆さん　あの女の方がこれをお届して呉れと仰有いました。

　と云つて手紙を出すと、吉兵衛は引たくるやうに手紙を取る。辰松やおしもは緊張した顔してその方を見る。

吉兵衛（封を切つて）「お宅の御様子を外からなりとも拝見いたしたいと思ひましておうかゞひいたしました。只今お目に掛るのも皆様の御迷惑と存じまして、今日はこれでお暇いたします。近所の人にじろ〳〵顔を見られますので、氣樂に休んでもゐられません。いろ〳〵お話し申したいことが御座いますが、またの御縁をお待ちして居ります。お身お大事に遊ばしませ」考へ〳〵讀んで）その女はもう歸つたのか。

婆さん　この手紙をお渡しなさると、直にお歸りになりました。お伜が大井戸の側に待つてゐました。

吉兵衛　折角來たものを、おら一目も見ねえで惜いことしたゞ。（も一度手紙に目をつけて、口の内で讀みかける）

おしも　お婆あにも御厄介を掛けたゞね。成べくなら、人に云はないやうにしてくんなさい。

婆さん　畏りました。ぢや、お手紙はたしかにお屆けいたしましたから、これで御免蒙りましよう。（籠の芋に目をつけて）もうお芋をお掘りなさつたんで御座いますか。

　誰れも返事をしない。婆さんは叮重に挨拶して出て行く。

おしも　おとなしく歸つて呉れてよかつたけんどな。……この手紙誰れに宛てゝ來たゞか。

吉兵衛　名宛てはおれに宛てたんぢやねえ。

おしも　極つてらあね。わしが會つてようく話しといたゞから。

吉兵衛　お前の名も書いてねえだ。おめへが會つて話したつてなにが役に立つものか。

　さつきから不快な感じに襲はれてゐた辰松は、ふと、父親の持つてゐる手紙を、奪取るやうに取つて、

辱松　こんな手紙は破つちまひませう（と云つて、やたらに引破いて、手の平で丸めて庭へ抛出す）

　吉兵衛の目は、丸められた反古の方へ惹かれる。

おしも　手紙が來ても何が來ても、お前はもうあんな女にかゝり合ひをつけるぢやないよ。

辰松　ハゝゝゝ（やうやく氣輕になつたやうな顔して笑つて）僕は此方へ歸つてから、あんな女に端書一本やつた覺えはありませんよ。もうやつて來りやしないでせうけれど、あんな奴は、見付け次第遠慮しないで追拂つて下さい。

おしも　でも、あの女はわざ〳〵東京から來たといふのに、家の中を覗いたゞけで、直ぐに歸つて行くのは、わし、どうも腑に落ちねえだ。

辰松　そんなことどうでもいゝぢやありませんか。

　その女の話を、いつまでも自分の前でされるのをいやがつた辰松は、親のくどいのを咎めるやうに云つて、奥へ入つて行く。

おしも（吉兵衛を見て）ぼんやり何を見てゐるだね。あんな女が飛込んで來たゝめに、いつかのやうに、えらい親子喧嘩がおつぱじまりやしないかと、わし、どれほど心配したことだか。

吉兵衛　おら、辰松ぐれへな若い歳に、あんな手紙一本抛込まれたこともねえだよ。おら、何のために難儀して、金殘すことばかり考へてゐたゞ。馬鹿なおれだ。齒のいゝうちに食べたい物も食べないで、ちつとべい田地田畝殖やしたつて、それが何になるだ。おら、さつき鳥の肉叩いてゐるうち、そんなこと思つて俎の上へ涙落したゞよ。……庖丁を下へ置いて涙拭いてると、若い女の子の聲が聞えたから、氣の迷ひだと思ひながらも、聲に引張られて庭へ下りて

見ると、これはおれを呼びに來た駕ぢやねえ。……あたりめえだ。おら、三十年前のおれぢやねえ。

おしも　何を世迷事並べるだ。（ふと憤りに燃えて）小田原の梅毒つかき女が戀しいのなら、今から追驅けて行くがいいや。六十にもなつて、しよつちうそんな汚らしいことを考へてる人間と、わし一つ家にゐられねえだ。一しよに御飯食べたり、一しよに寢起きしちやゐられねえだ。……さあ、今から出て行つて具んな。……あゝ、汚ない〳〵。

おしもはさう云ひながら、興奮して吉兵衞の胸倉を取つて小突きまわす。

吉兵衞　こら、汚ねえものになぜ觸るだ。（おしもの顏を見据ゑて）てめえのやうな女が、何十年もおらの身體にダニのやうに喰付いてゐたゝめに、おら、一生面白い目をしそこねて、白髮頭の皺くちや爺いになつてしまつた。

おしも　何を云やあがる。この恥知らずの淫亂爺い。

ふと吉兵衞に突飛ばされたおしもは、傍にあつた籠の芋を掴んでは、夫に向つて投付ける。吉兵衞は妻の狂亂を見据ゑたまゝ、抵抗しないでゐたが、投げられた芋の一つは、そこへ、奥から出て來た辰松の足のほとりに落ちる。

辰松は呆氣に取られてゐる。

（幕）

（二）

その夜おそく。

母屋と離れた部屋に辰松は眠つてゐる。窓近い空地の小暗い所へ、銀太郎とゆみ子とが現はれる。

銀太郎　若旦那は此處にいらつしやるんですよ。

ゆみ子　何だかお淋しさうなところですわね。いつもお一人でこちらにいらつしやるんですか。

銀太郎　さうです。妹さんは昨年お嫁に行きなすつたし、弟さんは東京の學校へ入つてゐなさるんです。それで、この頃は、母屋の方にはお老人御夫婦が住まつてゐて、此處には、若旦那お一人でいらつしやるんです。弟さんが夏休みが濟んで東京へ出なすつてからは、若旦那お一人で家にばつかりすつ込んでゐなさるんだが、退屈しねえでよく辛棒してゐられるこんだと、わたしは感心してゐるんですよ。………わたしが聲を掛けて見ませうか。

ゆみ子　えゝ。どうぞ。

銀太郎は窓際へ寄つて、「若旦那」々々々と二三度小聲で呼掛ける。部屋の中の辰松は、ふと寢床から身を起して窓の方を見やつたが返事をしない。

銀太郎　よく眠つていらつしやるやうですね……ぢや、わたしが彼方へ廻つて起しませう。

銀太郎は奥へ入る。ゆみ子は淋しさうにして窓際にしやがむ。

やがて、辰松は起上つて「誰れだい。そこは引張つたら開くんだよ」と云つて、戸口へ寄つて行く。

戸が開いて銀太郎が入つて來る。

辰松　銀公だつたのか。今時分何をしに來たのだ。

銀太郎　戸口に鍵もかけず、栓張棒もかはないのは、不用心ですね。

辰松　いや、この頃は泥棒でも化物でも入つて呉れゝばいゝと思ふことがあるんだよ。しかし、君がこんなに遲くやつて來たのは意外だ。何か事業をはじめるんださうだが、その話でも聞かせて貰はふか。

銀太郎　自分の用事でお伺ひしたんぢやありません。（聲を潜めて）晝間の女の方を御案内して來ました。

辰松　（當惑したらしく）君もおせつかいだね。晝間、あの事はうまく片付いてゐたのに。全體君は何處からあの女を連れて來たのだ。

銀太郎　あの方もわざ／＼東京から訪ねて來なすつたんだから、わたしはお氣の毒に思つて、大井戸の側に待つてゐて、今夜此方へ御案内をする約束をしたんですよ。………しかし、若旦那の御迷惑になるのなら、わたしがよく譯を云つて、あの方をお返ししませう。

辰松　だつて、こんな夜中に追返す譯には行かないだらう。

銀太郎　わたしの家に泊めて上げます。野宿させやしません。

辰松　まあ、連れて來て呉れ。來てゐるのなら爲方がないよ。

銀太郎　ぢや、お連れ申してもよろしいんですね。………わたしはこれでお暇しませう。

銀太郎は出て行つて、再びゆみ子の側へ寄つて、部屋の入口を教へて出て行く。

その間に、辰松は夜具を一方へ片付ける。態度が少しおど／＼してゐる。

ゆみ子は奥へ入つて行つて、部屋の入口からソツと顔を出す。

ゆみ子　御免なさい。

辰松　ここでお前に會ふ義務はないんだがなあ。

ゆみ子　この部屋へ入つちやいけないの？　ここでいけなければ、何處へでも行きますわ。………山の上へでも、森の中へでも。

辰松　夜中に。だし拔けにやつて來るなんて、何かがお前に化けて來たやうなものだね。

ゆみ子　あなたこそどうかしていらつしやるわ。御迷惑になるのなら、今日はお目に掛らないで歸らうと思つてましたら、さつきの方がわたしを呼留めて、あなたがわたしに會ひたがつていらつしやるから待つてゐろと云つたのですよ。

辰松　それはあの男の獨斷だよ。……しかし、今更そんなことを云つたつて爲方がない。兎に角こつちへお入りよ。

ゆみ子　此方は淋しい暗いところなのね。こんなところによくお一人でよくじつとしてゐらつしやれるわね。わたし、あの方に連れられて此處まで來る間に、隨分淋しい怖い思ひをしましたのよ。

彼女が部屋へ入つて座に就くと、辰松は頭を出して、入口の外を見やつてから戸を鎖す。座に就いてはじめ女の顔をよく見る。そして、何か云はうとして、適當な言葉を見つけかねてゐる有樣である。

ゆみ子　あなたはあの時分から見ると、却つて痩せていらつしやるやうぢやないの。

辰松　そんなことがあるもんか。空氣のいゝ田舍でうまい物を食つてゐるのだ。痩せる譯がないよ。………それよりも、お前は何をもくろんで僕の家へ來たのだ。池の中へ石をぶち込んだやうに、僕の家を騷せに來たのかい。

ゆみ子　わたしの來たことがそれ程どあなたの御迷惑になつたんでせうか。わたし、湯淺さんなぞが間に立つて、どんなロをお利きになつたか、氣遣ひで爲樣がなくなつたから、直かに此方の御兩親にお目に掛つて、自分のお腹の中のことを申上げようと思ひましたの。手紙では間違ひが出來るし、わたしには思ふやうに字が書けないんですもの。

辰松　僕の迷惑よりも、お前のぶち込んだ小石のために、僕の家には一騷ぎが起つたのだよ。

ゆみ子　晝間あなたのお母さんにも、さう申上げて置いたのにどうしたんでせう。わたしから一伍一什を御兩親に申上げて、御得心が行つたら、直ぐにお暇しますと吳れ〴〵も申上げといたのにどうしたんでせう。田舍の人は疑ひ深い

のね。わたしにはなんにも魂膽がありやしないのに。
辰松　半年經つた今になつての申譯も變だが、まあそんなことよりも、お前の來たことが變な結果になつたのだよ。お前の豫想しない結果なんだ。僕もそのために今夜は非常に幽欝になつてる。今朝までの僕はこんなに幽欝な人間ぢやなかつたんだよ。お前と金錢づくで縁を切つて田舍にすつ込んでるから、悲觀して身體が痩せて幽欝な顏してゐると當推量してると、それは人間違ひだよ。
ゆみ子　わたしのお訪ねしたことが變な結果になつたんですつて。わたしに分るやうにその譯をよく聞かせて下さいな。
辰松　その譯を自分の口で喋舌るのは御免蒙りたいんだ。その事は僕の頭の中から追拂つてしまはふと思つてるんだから。
ゆみ子　でも、わたし何だか氣掛りだわ。
辰松　お前が聞いたつて何の役にも立たないことなんだよ。………それよりも、お前は今夜はこの僕の部屋へ泊るより爲方がないんだね。お前が眞實に東京からやつて來たゆみ子といふ女なら、山の中や森の中に野宿する譯には行かないだらうし。
ゆみ子　あなたがお前には用はない、一言も口を利きたくないと仰有れば、直ぐにもお暇してよ。都合によつたら、さつきの方の家に泊めて貰ふやうに約束がしてあるの。
辰松　そりやいけない。銀太郎の家なんかに泊つちやいけないよ。(强く云ふ)
ゆみ子　なぜいけないの？

辰松　……今夜は僕の部屋に泊めてやるよ。しかし、明日の朝は、夜の明けない前に起きて歸らなきいけないよ。

ゆみ子　えゝ。あれから後のお話をしてゐたら、話してるうちに夜が明けるでせう。あなたのお噂が時々耳に入るたんびに、わたしは身を切られるやうな思ひをしてゐたんですわ。

辰松　僕はまだ歳が若いから。切られた傷は半年の間にすつかり癒つてるよ。たかゞかすり傷ぐらゐなものだつたのだからね。それで、この頃は、も一度東京へ出て行つて、一仕事やり出す手順がついて、いゝ氣持になつてゐたのに。……お前もおれに會ひたけりや、東京へ行つたあとで會ひに來ればよかつたのだよ。僕はまだ獨身で自由な身體だから、女とのかゝり合ひを恐れて逃隱れをしたりなんかしないよ。

ゆみ子　あなたにそんな元氣がおありになつたのなら、わたし獨りで氣を病んでゐなくつてもよかつた譯ね。

辰松　お前はあれから面白いことがあつたんだらう。少し話して見ろよ。何でも聞いてやるよ。僕は歸つた當座東京の新聞を讀むと、お前の名が何處かに出てやしないかと氣になつたものだ。身投げをしたとか毒を呑んで死んだとか。誰れかに殺された女といふのはお前のことぢやないかと邪推したこともあつたんだから可笑しいだらう。お前のやうな女は世間に何萬人でも何十萬人でもあることが分らなかつたんだね。お前は、僕見たいな男がそこら中にころがつてることを、早くから知つてゐたのだらうけれど。

ゆみ子　あなたのやうに遊んで生きてられる身分ぢやなし、そんな浮氣なことを考へてゐる暇は、一分間だつてありやしませんよ。弟だつて妹だつて、わたしから貢いでやらなきや、浴衣一枚着れないんですからね。

辰松　オイ。所帶染みた話は御免だよ。噓でもいゝからもつと色氣のある話を聞かせて呉れろよ。僕もこんな田舍で謹愼してるんだから、女の話には饑ゑてゐるんだ。

はじめは女に對して反抗した態度をしてゐた彼れも、次第に親しみを寄せて來る。

ゆみ子　色つぽい話なんぞあるものですか。それよりも、わたし、どうしたらいゝかと困り切つてゐるのよ。あなたのお察しのやうに、身投げしようか、猫入らずでも呑んで死なうかと思つてるところなの。

辰松　それで、死場所を捜しにこんな田舍へやつて來たのかい。

ゆみ子　さう思つてらしつてもいゝのよ。

眞面目にさう云つて、さも心配のあるらしい顏をする。

そこへ、寢衣のまゝの吉兵衛がある聲に導かれてゐるやうに、フラ〱と出て來て窓際へ寄る。

辰松　死際に、女手だから僕の所へ寄つたのかい。だけど、今夜この部屋で猫入らずなんかを飮まれちや困るよ。

ゆみ子　冷かさないで聞いて下さい。……わたしには生死の問題なんだから。

辰松（ふと窓の外の物音に耳を留めて、小聲で）ちよつと待て呉れ（と、相手の話を遮つて）銀太郎がまだ外にゐるんぢやないか。……彼奴いやな奴だ（と呟いて、窓際へ寄つて）誰れだ？そこにゐるは、

吉兵衛は窓際を離れる。返事がないので、辰松は戸を開けて外へ見屆けに行かうとすると、そこへ、吉兵衛がムツツりした顏して入つて來る。辰松は倒れんばかりに驚く。吉兵衛は辰松の方よりもゆみ子の方に目を凝らす。ゆみ子は恐れて、顏を背けて慄えてゐる。

吉兵衛　晝間訪ねて來た女はこの人か。

誰れも返事をしない。吉兵衛が女の顏をよく見ようとして側へ寄つて行くと、ゆみ子は怖がつて逃出さうとする。

吉兵衛は女を摑まへて坐らせる。

吉兵衛　おれはどうもしねえだよ。じつとしてゐなさい（わざとらしい笑ひを浮べる）おれは今夜に限つて眠つかれねえで、寝返り打つちや物を考へとると、どつからか女の聲が聞えて來たんで、こんな夜中にどうも不思議だと思つて、聲の在所を捜しに出て、此處までやつて來たのだ。お前さんは何しに來なすつた？。辰松が戀しくつて來なすつたのか。手切金を云ひなり次第に出したおれ達を甘く見くびつて、もう一度金をせびりに來なすつたか。

ゆみ子　さうぢや御座いませんわ。あの時だつてお金なんか頂くつもりぢやなかつたんです。みんな間に立つた人が勝手に極めたことなんです。そんなさもしい女と思はれるのが殘念でなりませんから、一度此方の皆様にお目に掛つて、わたしの眞實の心持を申上げて、お詫びすべきことはお詫びしたいと思つて、今日お伺ひしたんで御座いますの。

吉兵衛　おれは、今はじめてあんたの顔を見た。いろ〳〵な男を誑らかした性質の惡い女だと聞いとつたが、今會つて見ると、そんな女とは思はれねえ。（辰松の方を見て）おい辰。お前が戀しがつとる女はこの人か。

辰松（憂欝な有様で）いや、さうぢやありません。

吉兵衛　だつても、晝間あんな柔しい手紙を寄越した女はこの人ぢやねえのか。

辰松（煩さうに）大勢ゐる女の中の一人が、偶然訪ねて來たゞけなんですよ。今夜寝る場所がないから泊めてやらうとしたゞけで、明日の朝は他所へ行つちまふんだから、氣に掛けるには及びませんよ。

吉兵衛　お前が思ひを掛けてゐた女は、どれほどに美しいだかと、おら、不斷思つてゐたゞよ。おら、女の顔のよし惡しを見分ける眼力はもつてるつもりなんだけれど、夜のせいだか、この人の顔さう美しか見えねえだ。……辰もこの人のために、おれの譲る身代を棒に振りやしめえな。戀しがつとる女はこの人ぢやねえと、今おめえの云つたのは本當

ぢやあるめえな。

今まで小さくなつてゐたゆみ子、憤りを感じる。辰松、默つて茫然と見てゐる。

ゆみ子　わたしはあなたがたに馬鹿にされに來たのぢやありません。お暇しますわ。

彼女は腹立たしげにさう云つて、父子の間を滲つて、外へ驅出ようとすると、辰松は慌てゝ飛付いて引留める。

ゆみ子　離して下さい。

辰松　夜中に何處へ行くんだ?。

ゆみ子　何處へ行かうとわたしの勝手です。

辰松　銀太郎の家へでも行くのか。あんな家へ泊つちやいけないよ。銀公なんかのとこへ行くとどんな目に會はされるか分らないんだ。お前はあの男の性質を知らないんだ。

ゆみ子　わたしがどうならうと構つたことないぢやありませんか。赤の他人のあなたに干渉して貰はなくつてもいゝんです。

辰松　まあ、待て。お前にはいろ〳〵話すことが殘つてるのだ。

彼れは戶を堅く鎖して、その前に立つてゐる。ゆみ子は爭ふ力が衰へて、べつたりその前に坐る。目に淚を含んでゐる。吉兵衛は一方に立つて、二人の樣子を見詰めてゐる。

辰松　さつきお前の話しかけた生死の問題といふのは何だ?。

ゆみ子　それを聞いてどうなさるの?。わたしのやうな詰らない女の一人が死なうと生きようと、あなたにはどうでもいゝぢやありませんか。

辰松　いや、どうでもよかなくなつたのだ。……稲毛の宿屋の離れでこんなことがあつたことが思出されるよ。あの時戸が開いてゐたら驅出して海へ飛込んだに違ひないお前だ。今夜だつてさう昂奮してると、どんなことをするか分りやしない。

ゆみ子　わたしが何をするか、自分でも分りませんの。……でも、この邊には海はないんですわね。（死場所でも空想してゐるらしい目付をする）

辰松　海はなくつても、深い井戸があるし、裏山には首のくゝれるやうな松が何本でもあるんだからね。

ゆみ子　晝間車の上から見た大井戸はそんなに深いんでせうか。

辰松　詰らないことを考へないで、此處でゆつくり寢て、朝早く歸つて行くといゝよ。明け方の田舍の空氣を吸つたら、頭が澄んで詰らない考へはなくなつてしまふよ。

ゆみ子……わたし死にたくつても死ねないの。わたしが今死んだら、妹も弟も路頭に迷ふでせうから。

辰松は安心して腰をおろす。が、父親の顏を邪魔にしたらしく、父に向つて、

辰松　この人を一晩だけ此處で夜を明かさせてやりませう。若い女を暗闇の中へ追出す譯には行きませんから。

吉兵衞　なぜ追出す譯に行かねえだ（と、ふときつい聲を出す。そして、驚く二人を凄く見据ゑて）オイ辰松、こんな女の口車に乘せられて馬鹿を見るな。おめえ、さつき何と云つた。おれを騙したんぢやあるめえな。

辰松默つてゐる。

吉兵衞　よし。お前がこのすべたを追出さねえんなら、おれが叩出してやる。

彼れはさう云ふや否や、ゆみ子の襟元を摑へて、戸を開けて引摺出す。すると、辰松は父親の身體を押退けて、つ

かく〳〵と外へ出て行く。

あとで吉兵衞は氣拔けがしたやうにへたばつて、空間を見詰めてゐる。

突出されたゆみ子は、奥から廻つてとぼ〳〵と出て來る。あとから辰松も出て來て肩を並べる。

辰松　何處へ行く？

默つて急ぎだしたゆみ子の袂を捉へて引留める。

辰松　親爺がどう云つたつて、僕が泊めてやるから安心してゐろ。……口に出して云ふのもいやらしいんだが、親爺はあんな狂人染みた眞似をして、自分の胸の中の鬱憤を晴らしてるんだ。お前は親爺の憎んでる奴の身代りにされたやうなものなんだよ。……そこらを一廻り散歩して來よう。そのうちに、お前の安心して寢られる場所を工夫してやるよ。おれは今日は、おれに物を頼んだ者の頼みを聞いてやらうと、獨りで極めてゐたんだが、頼み手がお前であつたとは意外だ。

さう云つてゐるうちに、二人は相添つて向うへ入つて行く。

吉兵衞はふと立上つて、離れから出掛けようとすると、おしもが入つて來る。

おしも　お前は此處へ來てゐたのかい。夜中に何處をうろついてるのかと思つて、さつきから搜廻つてゐたのだよ。

吉兵衞　お前は、おれを家から追ん出さうとしたでねえか。おれが何處へ行かうと心配して呉れるな。

煩さうに云つて、おしもを相手にしないで出て行かうとすると、

おしも　辰松に何話しに來たゞね。自分の子息(むすこ)に、夜中にこつそり話しに來るのはたゞ事ぢやあるまい。お前は、女房子を棄てゝ、小田原の女の尻を追つて行く氣になつたのだな。

吉兵衛　煩せいな。何度同じことをほざきやがるんだ?。

おしも（部屋の中を覗いて）辰松はゐないのかい。

吉兵衛　辰は女狐の跡を追つて行きやがつた。

おしも　エツ。………ちや、晝間の女とないしよで打合せでもしてゐたのかい。……お前さんが惡いんだよ。晝間に餘計な騷ぎをおつぱじめるからいけねえんだ。

吉兵衛　騷いだのは、おらとおめえとどつちだ。

おしも　辰松の置手紙でも此處にあつたのかい。

吉兵衛　そんなものはありやしねえ。……（元氣のない聲で）若いものは面白いんだ。親から金を出させて縁を切つた筈の女が訪ねて來りや、二人でまた仲のよさゝうな話をしてるだよ。

おしも　辰松がゐなくなつたのも、お前は打遣つて置くのかい。

吉兵衛はおしもに構はないで。部屋を出て、辰松などの行つた方へトボ／＼と歩きだす。おしもは不安らしくその後に隨いて行く。

（幕）

（三）

暗黑なる野道。

辰松とゆみ子、影の如く暗い所へ出て來る。

辰松　お前は失望することはないよ。……親爺は自分を嫌つた情婦（いろをんな）のことを思出してるんだ。その情婦に惡對を吐いてるつもりでお前に何か云つてるたんだ。

ゆみ子　……どうでもいゝの。……あたしを打やつといて下さい。

彼女は辰松の手を振切つて、一方へ入つて行く。辰松追つて行く。

吉兵衞とおしもが影の如く暗い所へ出て來る。

おしも　何處へ行つたゞか。……近所の人起して捜して貰ふべいか。

吉兵衞　近所の人に知らせるにや及ばねえ。……二人で勝手に遊んでやがるんだ。

おしも　こんな暗闇に誰れが遊んでられるものか。お前さんは心配でないのかい。間違ひでもあつたらどうするんだ。

吉兵衞　彼奴等二人連れだ。暗闇でも淋しかあるめえよ。……あしこを見ろ。二人が並んで歩いてるぢやないか。

おしも（夫の指差した方を見込んで）誰れでもゐるねえぢやないか。あれは松の木だよ。人間らしいものは何處にも通つてやしねえよ。

吉兵衞　松の木でもいゝ。おら、あしこへ行つて見るだ。お前はおれのあとへくつついて來ないでもいゝよ。

おしも　二人の居所を捜しもしないで、あんな所へ何しに行くだ。

吉兵衞　何しに行かうと構つてくれるな。お前は勝手な方へ二人を捜しに行け。

彼れは足を早めて入つて行く。おしも追ひすがつて入つて行く。

銀太郎、村の者と出て來る。

銀太郎　さあもう大丈夫だ。（苦しさうに息を吐いて）二階から飛下りた時にや、足の骨がボキツと折れたと思つたよ。

村の者　おら、無我夢中で何處を飛んで來たか分らねえが、あとの奴は皆んな掴まつたゞな。

銀太郎　今思ふと、梯子段の音は巡査だか何だか分りやしない。……だけど、おれはもう今夜で懲りた。またと小賭博の仲間にや入らないよ。

村の者　懲りたく〱はおめえの口癖だ。おめえ、これから家へ歸るんか。

銀太郎　おれはこれからちよつと寄つて見るところがあるんだ。此處で別れるぜ。

村の者　今時分、何處へ寄るだな。

銀太郎答へないで入つて行く。村の者は銀太郎の行く方を暫く見てから、異つた方へ入つて行く。

辰松とゆみ子とが出て來る。

辰松　詰らない眞似をしておれを脅かすなよ。

ゆみ子　死ぬ眞似しか出來ない人間と思つてらつしやるんなら、打やつといたらいゝぢやないの。

辰松　でも、こんな暗闇の中へ、女一人を放つて置く譯には行かないからね。おれの部屋がいやなら、當間お前が休んでた長谷甚の家にでも泊らせることにしよう。

ゆみ子　あんな汚い狹い家に泊りやしない。あんな意地の悪さうな婆さんの側で寢るよりや、野宿した方がましなくらゐだわ。

辰松　銀公の家はもつと汚いよ。……しかし、野宿する元氣があるんならいゝところを教へてやらう。

ゆみ子　何方向いても眞暗なのね。

辰松　急いで歩いちや危いよ。おれの手にしつかり掴つてゐろ。

ゆみ子、男に縋りつく。

ゆみ子（ふと懐つこさうに）こんなところ、とても女一人で歩けやしないわね。

二人は入つて行く。

おしも、吉兵衛の袂を捉へて出て來る。

吉兵衛　何處までおれに隨いて來るだ。離せつたら離さねえか。

おしも　わし聲を立てるだよ。

吉兵衛　聲立てたけりや立てろ。喉の裂けるまでわめいて見ろ。おら、そんなこと恐りやしねえ。

おしも　さつき、わしがあつちを見てゐた間に、お前はあの松の木で首を釣らうとしたでないか。

吉兵衛　それでおれの手を離さねえのか。………人間は生きてるうちは、一生に二度や三度、首でも釣つて死ぬべいと思はねえものはゐるめえ。………だけど、おら、今、自分の首を懸ける氣で松の木見たんぢやねえ。………おら、松の木に人の顔見たゞ。獄門にかゝつた人の顔見たゞよ。だけどそれもおれの氣のまよひだ。………さあ、もう家へ歸れよ。おれも後から歸るだから。………いくら捜したつて、この暗闇の中に人つ子一人ゐるもんぢやねえ。辰松も家へ歸つて手足を伸しとるに違えねえだ。

おしも　さきへ歸れたつて、こんなところ、とても女一人で歩けやしないよ。

吉兵衛　六十にもなつて何が怖いんだ。

二人は歩み疲れた老人らしくトボ〳〵と歩いてゐると、そこへ、銀太郎が入つて來る。

銀太郎　旦那は今時分何處へ行きなすつた？

吉兵衛　お前こそどうしたんだ？

銀太郎　お宅の側を通つたら、離れの方は明けつ放しで、どなたもいらつしやらないぢやありませんか。

おしも　辰松が晝間の女に誘はれてどこへか行つたんだよ。早く搜して呉れなよ。

銀太郎　それは大變だ。

おしもが銀太郎に話してゐる間に、吉兵衛は足早く出て行く。

（幕）

（四）

その翌日。

場面も時刻も（一）同様である。

吉兵衛は、（一）と同じやうに庭先にしやがんで雞の毛をむしつてゐる。

そこへ、銀太郎が入つて來る。

銀太郎　旦那、お宅の雞の毎日潰しなさるんですか。

吉兵衛　なあに。昨日は折角料理までした奴を、ゴタクサ騒ぎで放つといたら、スツカリ隣りの犬にやられてしまつたのだ。（むしつてゐた手を留めて）あの女は無事に二ノ宮から汽車に乘つたのだらうな。

銀太郎　大丈夫です。東京までの切符を買つて乘りましたよ。

吉兵衛　それで一安心だ。お前にも御苦勞を掛けたやうなものだから、一杯御馳走してもいゝ譯だが、………まあ止し

にしとかう。

銀太郎　御馳走して下さらんでもよろしいが、昨日お話しかけたことを聞いて頂きたいですが、旦那に御損は掛けやしません。

吉兵衞　その話は駄目だ。……おれがウッカリ柔しい口を利くと、直ぐにつけ上つて蟲のいゝことを云やあがる（苦笑を洩らして）昨日からお前のしたことは、みんな自分の物好きぢやねえか。餘計なおせつかいをさへしなければ、たとへ、あんな女が家を覗きに來たつて、大した騒ぎは持上らねえで濟んでゐたのだ。烏だつて、犬にも猫にも食はれねえで濟んだのだ。

銀太郎　（ムツとして）そんな勝手な言草はあるもんぢやない。わしがあの時出て來なけりや、若旦那はあの女の後に隨いて何處まで突走つたか分りやしないんだ。……まかり間違や、二人で首でもくゝつてたか知れないんですぜ。

吉兵衞　若い者の首つくゝりの手傳ひでもしかけない貴様だ。

銀太郎　さう思ひたきやさう思ひなさるがいゝ。……わしも馬鹿なことだ。昨夕夜つぴて寢ないで、氣を使つて、それで餘計なおせつかいのやうに思はれちや。……

そこへ、辰松が寢呆け顏して入つて來る。それを見た銀太郎は吉兵衞の側から離れる。

銀太郎　離れにいらつしやつたんですか。

辰松　今まで寢てゐたのだ。君も疲れたらうね。一杯飲んで晝寢でもしろよ。

銀太郎　へゝ。……晝寢なんぞするよりや、また競馬にでも出掛けようかと思つてゐるんです。

辰松　また競馬か。おれも君に隨いて行かうか。

銀太郎　若旦那がいらつしやるのなら、早速お伴しますよ。今日から橋本の競馬場が開くんです。

辰松　おれも暫く家にすん込んでたから、馬でも人間でも、威勢よく飛んだり跳ねたりするところを見たいやうな氣もするんだが、しかしまあ、今日は止さう。

銀太郎　どうしてゞす？。今日はお天氣がいゝから、氣晴らしにもなりますよ。

吉兵衛は鷄の毛をむしつてゐる。

吉兵衛　銀公も今日は邪魔をするな。今日こそ、親子でこの鳥を料理して、午餐を食べようと思つてるんだから。……競馬なんかへ連出すと承知しねえぞ。

銀太郎　わたしは、若旦那が競馬へ行かうと云ひなさるから誘つたまでゞさあ（冷笑する）

吉兵衛　おらもな、銀公。競馬でもやつて、氣を紛らせようと思つたことあつたゞが、勝負事したつて役に立たねえだ。大賭博をやつて百萬兩儲けたつて、なんにもならねえだからな。おら、六十年の間使ふ道のねえ金をコツ／＼溜めて來たゞ。……さう云ふと、そんな金があるんなら、わしの商賣の資本に貸して呉れろと、お前は云ふだらうが、おら、お前なんぞを喜ばせたかねえだ。

銀太郎　さうですか。……旦那の御機嫌の惡い時にぶつゝかつちやたまらないな。

吉兵衛　……さあ、これから料理だ。辰。お前も手傳へ。

彼れは辰松に目くばせして奥へ入る。

辰松　親爺もこの頃は殺生が好きになつていけない。百姓を止めて獵師にでもなるといゝんだね（椽側に腰を掛けて、緊張した顔をして）……銀公、昨夕あの女が、離れの裏の松の木に首を釣らうとしたのを見たと君が云つたのは眞實

なのか。

銀太郎　眞實ですとも。あの人も一時逆上してそんな氣になつたんでせう。

辰松　嘘を吐け。昨夕は君にさう云はれゝばさうかと思つて、僕も慌てたんだが、今朝ぐつすり眠つたあとで目が醒めて考へると、君の云つたことが一切信じられなくなつたよ。

銀太郎　ぢや、お互ひに夢を見てゐたとでもしときませうかね。……昨夕巡査に踏込まれたと思つたのも、わたしだちの勘違ひだつたんですからね。

辰松　兎に角、僕もつく〴〵田舎がいやになつたから、近日何處かへ出て行くよ。君もこんな所にまご〳〵してゐないで、も一度東京へ行つたらいゝぢやないか。

銀太郎　そのうち東京へ出掛けるやうになつたら、あなたにお力添へをお頼み申しますよ。

辰松　僕が親爺の身代を相續すると云つたものだから、さう云ふんだらうが、僕は親爺の手から一坪の田地も一握りの紙幣も貰はうと思つてやしないよ。素手で出て行くのだ。

銀太郎　へえ、それはえらい御決心ですね。(冷笑的に)

辰松　僕を見くびつて笑つてらあ。……僕には昨日來たやうな女は、東京にはいく人たりでもあるんだよ。

銀太郎　結構ですな。……あなたはまだお若いからいゝですね。わたしなぞ、三十代に百姓を止めて東京へ行つて、東京言葉のはしくれを習つて來たばかりなんですよ。

辰松　君だつてまだ若いよ。……まだいゝ主婦さんが見つからないのかい。ないしよでいゝのが出來てるんだらう。

銀太郎　わたしのやうな貧乏人のところへは誰れも訪ねて來て呉れないから駄目ですよ。

互ひに元氣のない平凡な調子で、こんな話しをしてゐるところへ、おしもが野菜の入つた籠を背負つて、心身とも疲勞したらしい老醜そのものゝやうな相をして入つて來る。

銀太郎　主婦さんは今日も野良へ行きなすつたのか（驚いたやうに云ふ）

おしも、弱つてゐる足で急いで緣側近くやつて來て、

おしも　お父さんは居るかい。（不安らしく訊く）

辰松　ゐますよ。

おしも　何してゐるだね。

辰松　また鳥の料理をしてゐる。

おしも　また生物の首を絞めたゞな。自分の首絞めるかはりに鷄の首絞めたゞね。

辰松　いやなこと云ふもんぢやありませんよ。

おしも　お父さんは昨夕も自分の首絞めようとしたゞよ。あの女の首絞めること、ようしないで、自分の首絞めようとしたゞ。……それで、わし、田畝へ出てゐても心配でならないから、大急ぎで歸つて來たのだ。（銀太郎を見て）銀公は辰松に何を話しに來たゞね。

銀太郎　わたしは旦那に頼まれて、あの女を停車場へ見送つて來たんでさ。あの女は無事に歸りましたよ。

おしも　わしも野良で考へたゞが、お父さんの云つた通り、あの女の顏した厄病神は、銀公お前がこの家へ連れて來たのだ。無事に歸つたもねえもんだ。

銀太郎　主婦さんまでそんなことを云ひなすつちや困りますね。…………わたしも惡いところへ來て詰らないかゝり

合ひをつけられたものだ。もう歸りませうよ。

　おしも、ふと銀太郎の袂をへる。銀太郎氣味を惡く感じる。

おしも　あの女、なぜ家へ連れて來たか。わしの腑に落ちるやうによく話して呉んな。

銀太郎　わたしよりも、主婦さんの方がさきにあの女に會つたんぢやありませんか。

　彼れは煩さうに云つて、捉へられた袂を振離さうとすると、おしもは力を入れて捉へる。

おしも　わしをそんなに汚がるのか。昨日一人で考へて思出したゞが、わし、そんなに汚らしい女ぢやなかつただよ。家の人が身代殖やすために、こき使はれて、三人もの子供育てた上に、野良の仕事もやつて來ただよ。面白い目一度しねえうちに、年齢ばかり取つて、こんな顏になつたゞ。若い時には、荒仕事で荒れたこの女で握つてやつた握飯を、わしの手の指あとのついたのを喜んで食べたゞよ。その時のお前の父ちやんは、お前ぐらゐな歳だつた。だから、わし、それを今思出したゞ。

銀太郎（獨言のやうに）こんな時に人間の耳が聾になるといゝ。

おしも　わしが今朝鏡で見た顏は、あの時分のわしの顏ぢやねえ。わし、こんな顏になるために齷齪働いて來たゞ。

銀太郎　昨日來た女は、わしのためにも厄病神だつた。

辰松　人の事よりも、おれが松の木に首を釣りたくなつたよ。

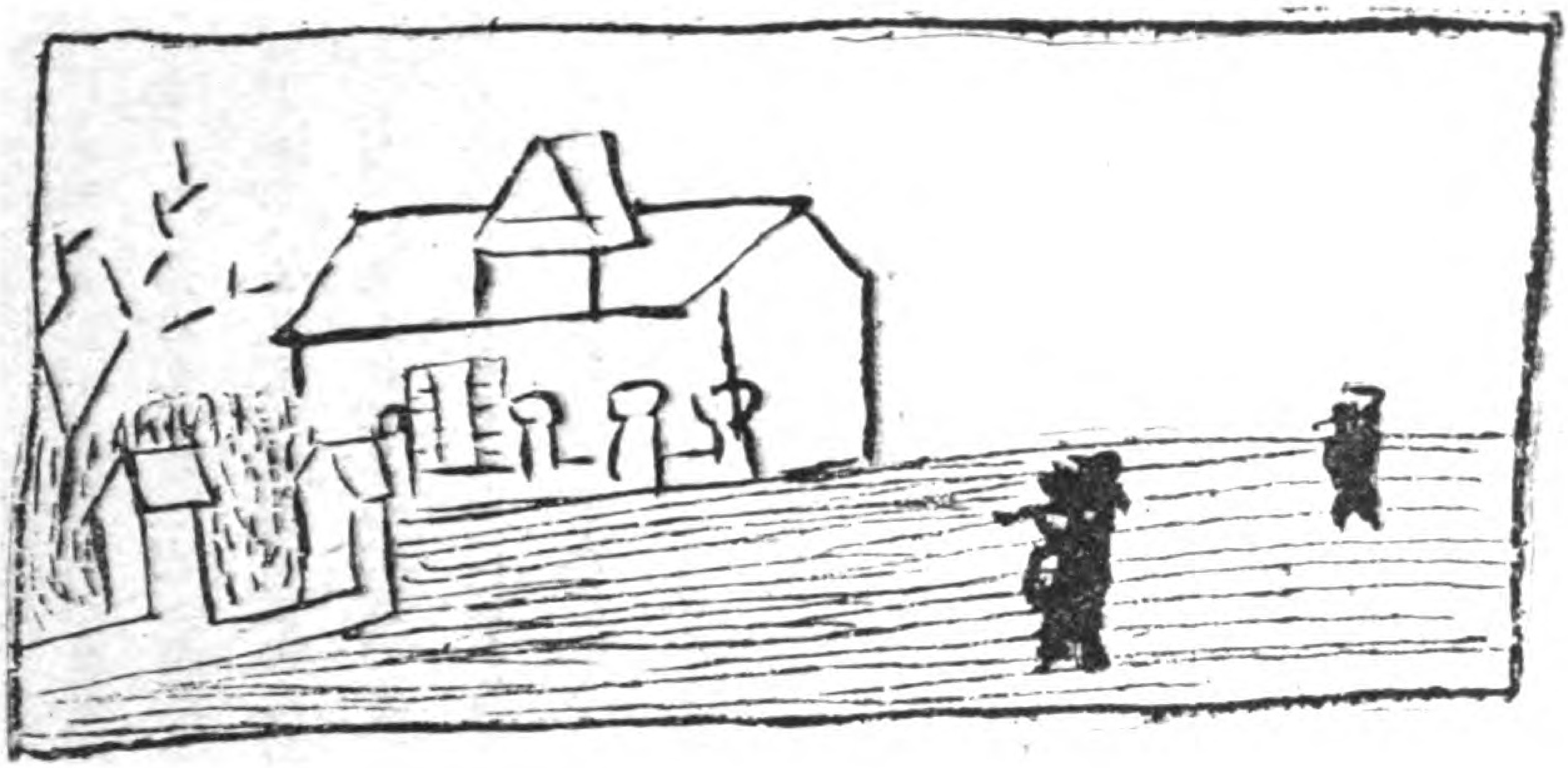
　その時、吉兵衛奥から顏を出して、

吉兵衛　辰。料理出來たゞよ。早く來て喰はねえか。

銀太郎　わたしは、居酒屋で一杯やつて、歸つて午睡でもしますべい。左様なら。

　彼がおしもの手を強く離して行きかける。おしも倒れる。

（幕）



安土城記

木下杢太郎

前記

伊太利ヱネチヤでの事である。

わたくしはF氏と云ふイタリヤ人に連れられて、ゴンドラに乗つて、昨日と同じ水路を航行した。わたくしはF氏のかう毎日毎日わたくしの爲めに勞を取られるのを氣の毒の事に思つてゐる。然しわたくしはかうも考へた。デモクラシイといふのが現代の合言葉ではあるが、封建制度の時代から續いてゐるビウロオクラチイの機關は今なほ強い根蔕を有してゐる。F氏のわたくしに示す好意は畢竟外務省のR男爵に對する奉公に外ならぬのであると。

R氏はM侯爵の女婿であつた。M侯爵が日本を辭去する時、殊にその多忙なる一日を割いて、東都の有名な女詩人を訪ねたことがある。わたくしは其席に陪してM侯爵を識つた。今度羅馬の郊外にM侯爵を訪れると、侯爵は今他國に在つて、邸門は鎖されてあつた。そこでわたくしはその女婿なるR男爵を羅馬の外務省に訪ね

て、この國首都の圖書館に出入する特別の便宜を得たのであつた。

わたくしがヱネチアに去る時、R男爵はわたくしの爲めに、その地の一青年に添書を書いてくれた。それがF氏である。久しく巴里ソルボンに學んで殆ど佛蘭西人の如く佛語を話す。

昨日は祭り日であつたからいつもより早く薄明が來た。その日我我がG邸の文庫で費した時間は一時間に滿たぬほどであつた。わたくしは古書の背革の標題だけを見廻はして、何か獲物があるらしいといふ、いはゞ豫感を持つたばかりである。數冊の大部の寫本綴にはまだ一指だに觸れなかつた。そこで今日も一度その邸に往くことになつたのである。主婦は數日のうちに避暑（ヱネチアに在つてなほ且つ避暑！）に出るといふし、さう度々も尋ねるわけには行かないので、今日は比較的短い時間に出來るだけ多くの仕事をしようと意氣込んでゐた。

コンドラで雅趣ある水道を航行すると、それ自身に滿足して、舟を下るのがいやになる。地面の少い此水都には喬木といふものはないが、それでも水に臨む石垣から鬱蒼たる緑葉の樹が起つて、水面に深い影を浮べる家などがある。此樹はこの市に最もしばしば見るものであり、而も見慣れない異樹といふのでもない。多分 Euonymus japonica と稱せられるものであるだらうと思ふ。

舟がカナアル・グランデから支流に入つてジョワンネリの館の前を通る時、わたくしは今日もまた、昨日と同じ、一種名狀すべからざる甘美の感情に襲はれたことを自覺した。昨日は久しく忘れた草の香の如く、その感情は豫告もせずに突然とわたくしの心を捕つた。今日はもはや意識してゐる。意識して居ながら其突嗟の印象は毫も變らない。是れはわたくしの二十歳時代の小網町の耽溺が回想せられのるに基因してゐるらしい。當時ゲエテが伊太利紀行を愛讀して、小網町の河岸、兜町の橋梁に、まだ見ぬヱネチアを想像したのであるが（無論もつと精確に言へば、それへ女性的江戸

情調的分子が混入してゐたのである。)今は却つてその原物の都に在つて、香の如く消えたる昔日の感激を追想するのであつた。

此地に於てわたくしの宿泊した――今は二流三流の――旅館が、百五十年の昔ゲエテが止宿したと同じ家であつたのも因緣といはねばならぬ。

○

舟は昨日の家の前に停つた。我々はゴンドラを返して石の階段を登つた。野面石(のづらいし)で建てられた前廊の突きあたりに、獅子の首を把(とつて)とした扉があり、鈴を押してそのうちに入ると、內部はやや暗かつた。そして外光の爲めに光る市松形の色硝子に由つて、身の異境に有るといふ觀念が强調せられた。

色硝子は往年の日本の建築にも用ゐられた。銀座の松田などはその爲め幼年の自分に特別の印象を與へたものであつた。日本はどこの眞似をしてそんな窓を作つたのかしらないが、わたくしはいつもそれからまだ見ぬ南歐の氣分を想像したものであつた。

色硝子にこんなにこだはる必要もないが、都がヱネチア、家が古建築であるだけに、その印象は殊に强くつて、いまだに忘れることが出來ない。さて案內の下僕に連れられて、噴水の仕掛けのしてあるロココ風の水盤のある小室から階段を登つて、狹い水路の見下される室に來た。昨日もこの室で主婦と會見したのである。十分ばかり待たされる間に、我々はいくども窓外の水路生活を俯瞰し、また反對側の壁に懸る、くすんだカナレツトオの都の一部を寫せる風景畫を眺める。

隣室には相當に知られてゐるらしい古畫のコレクシオンがあり、昨日はその爲め一時間を浪費せしめられたのであるが、大して興味を索く作品も、また美術史上に重要なる作例もあるのではなかつた。

主婦は昨日の如く、二十歳前後に見ゆる青年と一緒に出て來た。そしてわれわれは極普通の會話をした。我々といつても、さういふことは主にF氏がしてくれる。五十を超えたるらしき女主人は、何か話題を日本に求めようと思ふらしかつたが、今スイスに避暑してゐる老主人が、わかい時に一度日本に往つたことがあるといふ他には何も話すことが見付からなかつたらしい。

F氏が巧に會話の舵を取り、我々は今日は時間を浪費することなく、圖書庫に入ることが出來た。

澤山の古書は主として十六、七、八世紀の伊文の歷史書及び文學書であるが、そのうちに間間東洋に於ける耶蘇敎師の作れる年報類があつた。我々は1585と1615といふ年號に對しては殊に神經質であつた。前者はドン・マンシオ伊藤義賢以下三人の、後者は支倉六右衞門並に其從者の羅馬に入れる年であるからである。Guerreiro, Rivadeneira, Froes, Valiznano などのものも數冊あつた。さう云ふものは然し何もこの家でなければないといふものではなかつた。

この家の主人の集めた寫本、殊に「東洋からの手紙」のうちに何かないかと捜してゆくうちに、一寸珍らしいものが、見付つて、今日はそれをF氏に讀んで貰ふことにした。

それはアレキサンドロ・ワリニャニ師の第二回の日本入りの際、師に隨從した僧が書いたものらしい。筆者の名は分らなかつた。

F氏はこの原稿を二時間ばかりかかつて讀んでくれたが、わたくしは、その安土山の城に關する部分だけを、其場で、日本語に移して記錄した。

二三日の間こんな風な狀態で、F氏と一緒にはたらいたことが、F氏に此研究に對する興味を吹き込む機緣となつた。そして同氏はわたくしに今後も引續いて、この方面の古事古文書を調べるといつた。材料の豐富な土地でその研究をするといふことに對して今度はわたくしが嫉妬に似た感情を起した。

此安土城の記事は今その時の速記を寫しなほしたまでのものである。どうぞ、えらい青年批評家諸君、あまりひどい惡口を言つてくれたまうな。わたくしはむしろ都會人の冷淡な沈默の方を、山出しの露西亞文學崇拜者の青年のぶしつけなさし出ぐちよりも取るものであるから。

本記

○

巡察師父アレキサンドロ・ワリニヤニ猊下が都から安土に來られるといふので、安土の教會では人人が皆緊張した期待の感情を抱いてゐた。信長公は既に都で猊下に會はれてゐたので、猊下の安土到着を樂しんで待つて居られると云ふ情報が近習の人に由つて教會に傳へられた。教會の人々の感情はいよいよ興奮した。此地の教會を隆盛ならしめ、日本全土にデイユスの教を擴める機緣は此期を失つてまた得難いからである。

都と安土山との間には先年既に立派な道路が造られた。其幅は二十五尺あり。其兩側には松柳の樹が植ゑられた。

信長公は都及び天座（これは日本人の其の國及びその諸侯を名稱する所である。）の主であるけれども、然しその首府（都）に在るのは稀で大抵は近江の安土山の城に居住せられた。此城は都より一日の行程であり、公が都を其掌中に入れてのち、千五百七十六年に造營したものである。それより後、已に十二年或は十三年の間、信長公はこの城より日本

全土及び其諸侯を支配してゐるのである。公は安土山に其邸宅を建築したのみならず、それと共に城砦及び都市を經營した。安土山の城廓及び城壁は日本に於ける何れのものよりも遥に立派である。且つ其の地勢の瀾漫なる市民の典雅なる屋宇の壯麗なる孰れの都府も之に及ぶものがない。

都市は曠蕩なる平原に横はり、その一側は大湖に臨んでゐる。湖は其水淸く且つ美しく、其廣袤、凡そ長さ七十二里、廣さ二十里を算する。湖水は溝渠を通じて此地方の田園を灌漑する。都市の他の一側は水田及び平野に接する。

信長公は成るべく速に此都市を繁昌せしめんが爲めに、市民に對して凡ての公課を免じ且つ他郷の商人を無料に宿泊せしめた。それ故に都市を創めて後數年の間に天下の貨寶は此に集まつて、市街は繁劇を極めた。夜は高樓の燈が水に映つて、我國ヱネチアを忍ばしめた。

太湖と都市との間には一大丘陵がある。遠く之を望むと三つの瘤のある駱駝の臥したやうな貌をしてゐる。三つの瘤とは此山の相並ぶ三つの峰を指して謂ふのである。

山上は氣象爽快であつて、樹木が密生し又地面をば綠草が被うてゐる。そしてかの太湖は三方より此山を圍繞するのである。

信長公は自己の威勢を示さむと欲してその三つの峰の最も大なるものの上に、巨萬の資を費して宏壯華麗の城廓を建設せしめた。山麓及び平地には市民の爲めに街區を作り、巨細の道路がその間を貫通し、民家は相櫛比して美觀を作つた。民戸は其數五六千である。

湖に面する山麓の地は一帶の水に由つて此市區と隔たれて居る。そこは一門郎黨の居住の地と定められた。そして人々は信長公の心を怡しむるが爲めに極めて短時日の間に、巨石を以て壁となしたる、美麗の邸宅を竣成せしめた。そ

れ等の石垣はおほよそ十五尺の厚さを有し其頂には砲丸除けの胸壁を備へて居り、邸宅にして同時に好箇の城砦であつた。かくの如き構造の邸宅が沿ひ沿ひに建築せられ、山麓より山腹に及び、中央の最高峰を取り圍む。其形恰も巨大なるアンフイテヤトロを看るが如くであつた。

中案の最高處には信長公の居城が立つ。其廣壯華美、之を歐羅巴の最も美しき城郭に較べても決して遜色がない。こゝに達するには一の急峻なる坂を登る。そこに第一の門が有る。門を入ると内部に一大宮殿が立ち、其旁に廣く大きなる舞臺があつた。これは信長公の時に行はしめたる祭典の際に優人の演戲する場處である。俳優の着る衣裳は殊に華麗なものであつた。恐らくヱネチヤの祭禮の時高僧、高官又甚だ富裕たる市民の着けるものと雖も之には及ばないであらう。

城郭の中心となるものは一種の塔である。是れは日本人の天守と名付くるものである。爾餘の建築に比して遙に高く且つ壯嚴である。それは七層より成り、各層に窓が開けられてある。そして其最下の基礎は巨石を以て造られたる甚だ堅固なる高き石壁である。

此の塔は其内面並に外面に於て結構の極みを示してゐる。即ち内面は金及び各種鮮麗の色を以て畫かれたる繪畫を以て飾られ、其外面は總戶悉く各色の塗料を以て塗られてある。即ち其或者は、日本の習慣の如く白壁に黒の窓で、頗る爽涼の感を與へるが、又或者は紅色或者は青色に彩色せられる。殊に上層閣の窓は金を以て飾られてある。この天守或は高塔は皆青色の瓦を以て葺れてある。瓦は其質、日本の他の城郭に用ゆるものに比して遙に堅牢であるが如くであつた。

又建築の前面部に於ては、凡て突き出づるところ、隆起するところは鍍金せられ、屋根には其美觀を増さしむる爲めにいろいろの工夫が凝された。凡てこの建築の裝飾となるものは悉く是れ高價にして精巧なる工藝品のみであつた。家

屋は原則として木造であつたが、内面外面ともに、その木造なることが感ぜられなかつた。却つて全部是れ石より成るかと思はれるのである。

今その内部の構造を記さうに、美しき石階を登ると、まづ廊を以て取り圍まれたる大堂(サラ)に達する。之れよりして市街の一部分が下瞰せられる。この廊は外部は繪畫を以て裝飾せられ、遠く之を望むと目を眩するほどである。窓及び出張りも亦各種の彩色を似て塗られた。又漆の塗料が惜しげなく用られて贅澤の極みである。廊は多くの室に導くが、各室とも皆美術の妙を盡してあつた。クレタの有名なるラビリントオもかくやと驚かれるばかりであつた。黄金、アツツルロ、美しき織物、高價なる器具、孰れも惜しむところなく使用せられた。室の内部の壁は凡て金を以て貼られ、そこに各種の鳥類及び古代の服裝せる人物が置かれてあつた。扉、窓の金具は皆精巧なる金細工である。第一の廊は五六の庭園に面してゐる。

更に登つて第二階(日本風に數へれば三階)に登ると、ここは王の居室である。其結構精巧無比藝術至上は此に鍾められてある。その廊からは又市街の一角が瞰望せられた。又他の廊よりは、嚮きに述べたるものよりも一層美しき庭園が見られた。そこには日本中に有りとある鳥の種類が飼はれてあつた。

第三階(日本風に第四階)も又數室に分れて居り、その内部には金を塗り、その上に奇獸及び木竹が畫かれてあつた。ここよりは全市街の巷陌、甍棟(ばうとう)を瞰望することが出來た。

塔はその上に更に數層があつたが、その美は決して下層のものに劣らなかつた。そこからは遠く美濃、尾張の一帶を見ることが出來た。

塔の最上層は一種のリボラであつた。その内面は悉く金で塗られてあつた。リボラの屋上には厚き金の冠を置いた。

窓も赤金及びアッツルロで飾られた。それ故朝暮の日之に當ると燦然たる光輝を發した。

輪奐かくの如く備はつてゐるので、巡察使猊下には、之を歐羅巴の人に示して、その名ある宮殿と比較せしむるのも無用の業ではあるまじいと思し召され、善き畫工をして丹青を凝らしてこの城を寫させ、それに說明を添へて、法王陛下にお贈りになつた。

○

さてかやうにして日に日に安土山の普請が捗取つて行つたが、わがオルガンチノ師には、わが教會の爲めにも此都に地面が欲しいとお考へになつた。その故は、此地には日本の最も高貴な人人が住はれ、また信長公をここに訪ねられいろいろの商議をなされる貴人や使者が絕えず此都に來られるに由つて、神の教を短い年月の間に日本全土に擴めるにはここそ屈强の地であり、かくすれば我教會も日本のあらゆる國國に知れ渡らうずと思はれたからである。したがこの望を遂げるには困難が伴つた。と云ふのは信長公は生來佛僧が嫌ひであつて、今までも多くの寺觀を毀ち又この安土の地には一寺の建立をも許さなかつた上に、この地を日本で一番美しい處にしようといふ大願を抱かれたから、宏大な建物に非ざるよりは建築をも許されなかつた。また山腹は既にかずかずの邸宅に占められて了つて、教會の爲めの地面を得ることは出來ない有樣であつたからである。

然しながら巡察師猊下は神にお祈りをしてその願を信長公に通じられた。處が神の特別の御惠により、こたび猊下が信長公に謁せられその事に話し及ばれると、猊下の願は容易く諾はれたのである。

「巡察使殿が、この安土に寺を建立するのは喜ばしいことぢや」と公は仰せられた。「その敷地の事はなほとくと考へ

て置かうぞ。」といふ返事であつた。それから間もなくのことであつた。信長公は他の町人や新來の者には之を許すまじいやうな地處を教會に寄進することを約束せられた。是れは全く神の御心に由つたものと謂はねばならぬのである。

それより少し前の事である。信長公は城下の町と、城を構へたる山との間の水澤の地を埋めさせた。誰もそれを何に用ふるかを知らなかつた。多數の人夫を使つたから、此工事は十五日ばかりの日子の間に竣功し、そこにひろびろとした地面が出來上つた。而してこの地面は去年の復活祭(パスクワ)の期日の間に、巡察使猊下と我等が教會とに寄與せられた。巡察使殿はこの贈物をこよないものに思され(おぼ)、いままで猊下とその教會に寄與せられたもののうちの一番のものぢやと大に喜ばれたのであつた。

信徒たちからの施與と信長公の寄進せられた貳百兩とで、短い日子の間に、教會の師父の爲めの家屋がそこに建てられた。この建物が出來上ると、信長公は直く自ら之が檢分に來られた。

それは秋の日のひる前のことであつたが、公は近郊に鷹狩に出でられ、其歸りに立ち寄られたのである。公の顏(かほばせ)には不滿の色が浮んだ。それは建築が餘りに小さく、その地面が思つたより狹かつたのを見られたからである。そして即座に、地を擴げることを命令し、また家屋の建築の爲めに、もつと多分の寄附をすることを約束せられた。日を置かず、多數の人人が來て、更に沼を填めて地面を作つた。

この事あつてからは信長公は今までにも增した親切を我等が師父に示され、教會堂の建築の事に就いてもいろいろと心を費された。そして我我が喜ぶに引かへて異教の僧侶は大に心を痛めたのである。

信長公はオルガンチノ師をしばしばその屋形に招かれた。イルマン・ロオレンスが屢々之に伴隨した。公は師父に神の話をさせて神妙に聽聞するのみならず、またしばしば重要なる質問をなし、其熱心が師父をさへ驚かすほどであつ

た。公は又多くの貴人の面前に於てオルガンチノ師と教儀の事に就て談話せられた。地理、天文の事に關しては、公は殊に好奇の心を持つて居られたから、師父はしばしば其説話に此學問を引用した。

或時公が師父に語られた。佛僧の言ふ所は皆非理であり、我等が師父の說く所のみ眞であると。又其臣下のうちの信徒は皆甚だ忠實であると賞讚せられた。

公は現世に於ける成功に就て常に心を勞せられたから、他の人のそれを望む意志と手段とは細密に之を洞察することが出來た。而も我等が師父の行動に於ては毫もその傾向を認めることが出來なかつたのである、之に反して、佛僧の、儀式及び信仰を外飾として、其眞實は現世に於ける成功を望むものなることを觀破せられたのである。

○

其後信長公は都へ上られ、そこで巡察使猊下に會はれた。公は猊下よりかずかずの贈物を受けて大に喜ばれたが、そのうちにも取り分け猊下が印度より連れて來たまへる黑人をば珍らしがられた。公はまた關東の國主の使者の呈せる鴨十羽を猊下に贈られた。

公が安土に復歸せらるるや巡察使猊下にもまたやがて其跡を追はれて安土に來られた。猊下は既に都に於てこの地にセミナリオを設くる許可を得られ、オルガンチノ師は其爲め、教會堂建築の一部を變更したのであつた。既にそこの學生たるに決定せられた貴族の青年は鶴首して猊下の來るを待つた。オルガンチノ師は猊下を迎へる爲めに都に赴いた。猊下はパドレ・ルイス・フロエス師及びイルマン・ロオレンスを伴ひ、オルガンチノ師に伴はれて安土に入られた。

信長公は猊下の安土に來られたのを聞かれて殊の外に喜ばれ、直ちに猊下をばその居城に招かれた。教會の師父及び

法兄弟もその時一緒に來るやうにとの沙汰であつた。

巡察使貌下が、師父、法兄弟と共に公の居城に到ると公は彼等を最も懇ろに接待せられ、自ら先に立つて、城の內外を隈なく案內した。世の人の必ず見るを要する好建築であつた。かくの如く城砦邸宅の內部を隈なく縱覽せしめたといふことは特別の恩寵であつたのである。いつもは見せると云うても、唯外から眺望せしむるに過ぎなかつた。

この時恰も果實を滿したる箱が到來した。それは美濃の國から信長公に獻上したものである。公は直ちに之を貌下に贈らせ、そして自分はその座を退かれた。

我等が師父の家屋は信長公の特別の御配慮に出つて、安土山の城廓と同じ型に作られ、其壁は白く塗られた。また此都府の一美觀たるを失はなかつた。この建物を看むとて、日に日に人人が參集した。神の御教を傳へるには洵によい機會であつた。日日說教が行はれた。見物の人々は遠近の國土から集るものであるから、我等の敎會の名はそれらの國國に知れ渡つた。神の敎はかくして去年よりも一層廣く都の內外に擴まつたのである。我等は皆此地の敎會が全國の人人に眞の敎を傳へる中心とならむことを切望したのである。

○

是等聽法の人々の間に彼の近江の殿もあつた。年の頃二十四五歲の體格の偉大なる仁であつた。此殿は信長公の爲めに已が領地を奪はれたけれども今は公の恩寵を得られた。信長公配下の殿の一人で、ジュトオ・右近殿と申された。その父御はダリ・高山殿である。

事の次第を少しく物語らうに、紀伊の國主荒木殿はもと信長公の臣下なるが既に之に服從することを肯はず、却つて

山口の君主を盟主する同盟に加入し、其臣たる高槻城主右近殿及び其父高山殿に命じて、其城を以て信長公に抗せしめた。そして右近殿の二子を質として取つた。

信長公は高槻の城を包圍したが容易く之を拔くこと能はず、右近殿の聖教信徒なるを知るが故に若し開城せざれば聖教の師父等を悉く殺戮すべしと威嚇せられた。

右近殿は大に痛心せられた。若し此城を渡せば己が君主に對して不忠となりその上人質として遣はしたる我子は殺さるべきこと必定であるからであつた。

右近殿はオルガンチノ師に書を贈つて自己の苦衷を訴へ且つ其忠告を求めた。オルガンチノ師は答書を與へて曰うたには、荒木殿は信長公の臣下であつて之に背いたのであるから、卿の荒木殿に背くは不忠といふべきではない。そは卿の君主は信長公であると。

オルガンチノ師は信長公と商議し、更に右近殿の城に來つて、開城の事を勸められたが、右近殿の夫人は人質たる二子の殺されむことを恐れて大に悲歎し、師も强ひて其言を固執することが出來ないやうになつた。

右近殿は日日瞑想せられたが、遂に己れ一人を犧牲にして、師父及び我聖教並に其近親の安泰を求めむと決心せられた。そして剃髮し、法兄弟の姿となつて、ひとり其城を出でられた。オルガンチノ師は右近殿の變れる姿を見て大に悲しまれたが、その決心を聽いてまた大に喜ばれた。

信長公は右近殿の心事を憫んで、少しも咎めることなく之を安土に止まらしめた。右近殿はその夫人と共にわが教へに歸依する覺悟を示され、そして一旦聖教に入ると例なき熱心を示された。四十日の間一日も缺かさずに說教を聽聞せられた。そして遂に洗禮を受けられたのである。

この序にも少し右近殿の事に就て語らう。信長公は後に右近殿に從前にも勝る係祿を與へられ、舊の如く高槻の城に住ましめた。其父ダリ・高山殿も、二人の人質の子女もまた事なきを得たのである。

巡察使猊下が豐後より都に上らるる時、しばらく此高槻の城に止宿せられた。右近殿は此高槻の地のみならず、其附近の田園村落を所有せられ、領内の民のうち二萬の人は我聖教の信徒である。そのうちには多數の貴人が算へられた。又この年には三千五百人の人が新に洗禮を受けた。巡察使猊下は此地に於て、名狀し難き敬愛の感情を以て迎へられた。眞に諺に曰ふ「君主の爲す所是蒼民の爲す通りであると云ふ通りである。これより先き右近殿は莫大の費を投じて會堂を建て、師父の一人をそこに請じたのであつた。

さて巡察使猊下の此地に來られた時は、恰も聖週(サンタ・セツチマナ)に當り、猊下はここに於て聖週及び復活祭(パスクワ)の莊嚴なる儀式を執行せられた。此時領地内はもとより美濃、尾張、堺等よりも多數の貴族及び庶民が參集した。街道には馬又徒歩で高槻に來る人が絡繹としも相續いた。婦女老幼も亦此内に雜つた。教會堂に於ては音樂及びオルガノの奏せられた。猊下も此祭典の盛大なるに感銘せられて、この地の異境たるを忘れ、身の羅馬に在るかと疑はれたと言はれた。復活祭の朝の行列の美しさは筆に及ばぬほどである。歐羅巴に於けると毫も差別のないものであつた。之に參加した人の數は凡そ二萬人あつた。右近殿は猊下を主賓として壯んなる饗宴を催された……

○

さて又安土の話に戻らうに、今年は安土の者に他國のものにも洗禮を受くるものが多く、我教は日に日に遠近の國國に擴まつて行つた。人々は皆聖教を尊敬するやうになつた。信長公も其三人の子息たちも、我教會に對してますます大

なる好意を示された。またしばしば我教會を訪問せらるる貴人たちの爲めに、我教會も漸く隆盛の運に向つたのであつた。それ等の人々は、もし肉身と情慾とが彼等の本心を曇らせなかつたならば、もう疾うにもわが聖教に入つてゐたのであらう。多くの人人はキリストの掟を守るには難い事ぢやと思ふやうであつた。その爲めに歸依の心が鈍つたのである。また或者は我等の師父に向つてこの戒律を少しゆるやかにすることは出來ぬものかと尋ねた。さう云ふ人のうちには、信長公の長子たる世嗣の君もあつた（三位中將信忠のこと）この君（トノサマ）は常には美濃尾張の領國に居住せられ、一人の師父及一人の法兄弟をその國に招ぜられた。

この君は言はれた。若しこの戒律が少し緩かにされるものならば、立ちに自分は洗禮を受けやうず、またその臣下の數十人のものをも同時に入會せしめようと。

この君の言はれたやうな事は、またしばしば殿中に於ても論議せられた。もし戒律殊に其第六條が幾分にても緩かにせられたならば、教會に入るものの數は忽ち增大したのであらう。

尾張の殿はその父に劣らざる勇敢の青年であり且つ學問に對して大なる熱情を有せられた。そして其壯き年齡の爲めに、我々の思考及び感情に同じことが出來た。其身がかくの如き重要なる地位に在るものでなく、また其年齡がもつと壯くあつたなら、セミナリオに入つて學びたいと言はれたこともしばしばであつた。その世嗣の君であるといふことを考へて、我師父たちも、神の掟に關しては詳細なる說明をなしたけれども、この空想の活潑なる青年に、歐羅巴の事情に關する必要以上の好奇心を抱かせることをば抑止したのである。何となればこの青年國主は、其氣象が其父王の如く極めて熾烈で、一旦欲求したるところは、その父に背いても實行するやうな性質であつたからである。

かくの如く勇敢なる青年も、日本の貴族の習慣として、その少年の頃より極めて放縱なる生活を爲し、多くの美女を

蓄へて其妾となした。十の御掟のうちでも「人を殺すべからず」といふこと、「他の資を猥りに望むべからず」といふことより、とりわけ第六の御掟の「邪淫な犯すべからず」といふのが、彼等の最も守るに難き箇條であつたのである。「若しこの掟が變ぜられたら身はまづ第一に宗門に歸依しようず」と言はれるのである。

然しこの要求に向つては師父等は常に同樣なる返事をして之を駁するよりほかはなかつた。「我等の說く所は神の直接に教へたまふところにして人間の發明せるものにあらず。佛僧の說くが如き、人間作爲のものならば、いかにともすべき術もあらうず。この第六の御掟とても神の命令するところであれば、われ等が自らの心ばせに由つて變易することは出來申さない。」それが師父たちの言葉であつた。

彼等も其本心に於ては此答を肯定したのである。唯長い間の習慣に由つて、この罪惡をさして重大なものとは思はぬやうになつたのである。

この貞操に關する思想は、彼等に取つては全く思ひがけないものであつた。佛僧もまるで此問題は度外に置いて居た。それ故晴天の霹靂のやうに此罪惡の考へが彼等の心にはためくと、或者は粛然としてそれに就て冥想した。また或者は殊更に師父の狹量を嗤つて聖教から遠かつて行つた。

神よ、御身の大なる意志を以て是等の本心を追窮し、之に眞の光を投げたまへ。

○

われ等が教會を尋ねて來る貴族子弟のうちに、一人の心最も柔和なる君があつた。この君は三七殿（北畠信雄卿三七殿のこと）と呼ばれ、信長公の息子の一人である。兄弟のうちでも一番愛すべき人物で、諸人から最も敬愛せられて居

た。この殿がわが師父と神の事がらを話すやうになつてから、教會の爲め、師父たちの爲めに大に力を盡された。また洗禮こそはせね、もはや異端ではなく、寧ろ一信徒と見做すべきであつた。殿はわが師父に向つてやがて聖教に入るべきことを公言せられた。そして師父のうちから一人を選んで、己が師範たらしめた。他の人と話す時にも、佛僧の說く所は僞である。唯神の御教のみが正しいといはれた。この事を聞いたものも、心の正しきは、己れも同じくこの正しき道に入り信徒とならむといふ志を起した。殿はかく思惟せられて居たが、事情あつて洗禮の事は延引した。いつかの好機を待つて居られたのである。然しその臣下のうちには既に改宗せるものもあつた。殿自らも我法兄弟の一人からパアテル・ノステルを教はり、そしてこれぞ、われわれの後に聖教に入らむといふ志の徵であると言はれた。殿のかく躊躇せらるるは、偏への其父君の許の下る日を待つてゐるのであるといふことが解せられた。その所以は、殿は今美しき宮殿に住まれ、豐なる生活を爲して居られるが、いまだ一國の領土も封ぜられてゐない。殿は已に廿一歲に達せられ、父君よりも一門よりも愛せられて居るから、やがてはいづくにか封を得るであらうと思はれた。信長公は自分の子どもたちでも己が意に逆ふのを喜ばなかつたのである。そしてこの壯き殿は、己が考の殿中の人人に知られて、又父君の耳に入り、その怒を買はんことを大に恐れて居られたのである。

もし父君にしてその事を惡しく取らないならば、殿は今直ぐにでも洗禮を受けようと思はれたのである。そは兎も角も、殿は常に何くれと、我等が師父を庇護せられ、そして一週に一二度は必ず我等が家をおとなはれた。

然るに今や巡察使殿がこの地に來られたによつて、殿はいつにも增して親切を盡され、我師父たちに使者や賜物を遣はされた。

その上、母君にもわが教のこと、神の掟の事などつぶさに物語られ、また說教の聽聞を勸めたまうた。

巡察使殿が一旦都へと旅立たれるとて、或晩、この母君に御暇乞の爲めに、我等が教會を隔つる湖水を舟で渡つて、安土山の御殿に上ると、母君及び三七殿より親切なるもてなしを受けたのである。殿にはその臣下を隨へて猊下を舟着きまで出迎へられた。猊下が舟から下られると、殿は一人の近習の手から炬火を取つて、自らそれを持つて師を殿中の接見の間まで嚮導せられた。また歸るときも同じやうに舟まで見送りなされた。猊下と交へられる會話は、異端の殿の言葉とは思はれず、全く子のその父に對するが如きものであつた。

別に臨んで、殿には詩句を書き附けたる一紙片を取り出して巡察使猊下に進ぜられた。それは家中の人々の誡にと書いたもので、神、佛等の邪神の崇ぶべからざることを諷したものであつた。その詩句は極めて美しく書かれてあつた。

――神よ、願はくば此殿の良心に惠を與へ、敬虔なる信仰を有する彼の名をば、日本全國にひめたまへ。

○

安土の經營は信長公の最も心を掛けたものであつた。兼ねて都の附近に一つのセミナリオを建設したいと希望せられて居た巡察使猊下は、都で公に會はれた時それを安土に作るお願をしたところが公の諾ふ所となつたのである。猊下が安土に來られるや直ぐ其設計に取りかゝられた。即ち會堂の上層の大室をば其目的の爲めに改修したのである。そこには已に廿五六人の貴族の子弟が居住するやうになつた。是れはオルガンチノ師の盡力で選び集めたものである。巡察使猊下は、兼ねて有馬のセミナリオで爲したと同樣の設備をなし、そして教課とその時間割とを制定せられた。

この序に有馬の教會のことを書き誌さうと思ふ。先年有馬と有江とには立派な會堂が新築せられたが取り分け有馬の方が立派である。高宏な寺院と三棟の家屋とがある。これは九州に於ける教會堂中最も壯麗なるものであり、その材料

（主として木材）は偏へにドン・プロタジオ（有馬晴信）の寄進する所である。

そこのセミナリオには廿六人の青年が收容せられてゐたが、彼等は皆敬虔であり、怜悧であり、その記憶も其悟性も歐羅巴に生れたる青年に優るとも劣ることはない。彼等は螢窓の下に平和に精勵してゐる。殊に語學の一事は、その性質隔絶し、其習得甚だ困難なるに拘らず、數月の間に已に能く讀み能く綴るに至つた。拉丁語は取分け至難のものであるのに之れさへ見る見るうちに上達し、やがて皆一かどのラチニスタになること疑もなく見えた。其他音樂、假裝歌謠が教授せられた。彼等はこれ等のものを倦くことなく習得し、ミサの歌はいつもこの上もない出來ばえであつた……

安土に於ける學生は、皆その氏、育ちよかつた。それは各地の諸侯が競つて其弟子をこゝに遣はしたからである。彼等は亦有馬の學生に劣らざる記憶と悟性とを有してゐた。そして語學の稽古には格段の進境を見せたから、早晩豫期以上の效果を擧ぐることは確かである。その時にはまた Cursum Philosophiae も始められるであらう。われわれは神の御恵に由り其等青年が多大の收獲を得ることを望むのである。

然し一つ遺憾なことは安土の教會にはまだ禮拝堂が設立せられて居なかつたことである。もし此上それが建立せられたなら我等の希望は完成するものであつた。そしてまた信長公にもそれを望んで居られたのである。その事に就て公はしばしば師父たちと話された。それは神の榮光を傳ふる最も好い手段である。

○

巡察使猊下には二箇月の間安土に滯在せられた。復活祭が終つてから、信長公に謁して暇を告げ、この附近の地の信徒を見まひたいと申し出でられた。公も快く之に同意せられ、領分內ならばいづ方なりと赴いて自由に說教せらるべし

と仰せられた。公はその領地内に聖教教徒の殖えることは喜ばしいことぢやと考へられたのである。

さて猊下が此巡回の旅から、安土へ歸つて來られると、信長公は前にも増した親切を示された。そして猊下の居宅を飾るべきいろいろのものを遣はされた。そのうちに、日本の人がいたく珍重する屏風といふものがあつた。

巡察師猊下は信長公のこの親切に背くまいとて、その賜物を頂戴した。この屏風は日本の名だたる畫工の描くところで、頗る美しく、嘗つて内裡から求められた時にも公は元獻上しなかつたといふほどのものであつたから、それが巡察使猊下に贈られたといふのが殿中での大評判になり、皆の人が信長公のそんな大きな恩寵を驚いて語り合つたのである。それが爲めに、安土の人人は無論のこと、都、さては豐後其他の國國から、この屏風を看ようとして人人が集つて來るので、それをば寺に立てて置いて皆に見せてやらねばならなかつた。

この他にもなほ信長公は巡察使猊下にいろいろの好意を示された。猊下が公とその子息たちの許に御暇乞に上つた時に信長公申されたは、今は、今城中になほいろいろの繪を作らせてゐるから、それが出來上つたら御覽に入れたい。それ故出立前にはも一度訪問せられたいと申された。その爲めに猊下はその出立の期を延ばさなければならなかつた。その間に信長公は一大饗宴を準備せしめた。尤も公はさうは口外せられなかつたが、實は猊下に己が威勢を示したいのであると推量せられたのである。

この祭典の有様は如何かといふと、それは日本のしきたりの祭典とほぼ同樣のものであつた。夜になると、門となく窓となく提灯を吊した。即ち歐羅巴に於ける大きな祭典と似たものである。

ただ安土に於て今までの祭典には、貴族の家家は提灯で飾つたが信長公の居城だけにはかかる裝飾を施さなかつた。ところが此度はそれと反對に、貴族の邸宅には之を禁じて、己が居城のみを各色の燈で飾つたのである。それは山上に聳え

る七層の塔であるから、遠く之を眺めると、えも言はれぬ美觀であつた。

その代に町の方では、その主な街道、また我の居住する街區、更に山腹の道路に至るまで、その兩側に全市の庶民を立たしめ、手に手に炬火を執らしめ、そして時を定めて一齊に之に點火せしめたのである。この炬火は管狀の構造をなし、その内に烟硝を充してあつたから、しばらくするとそれから火花が飛び出して高く上つて散亂した。そして街路は至るところ火の雨、火の霧で包まれたのである。さうすると忽ち數十人の貴族の少年たちが現はれて來て、その下を馳驅した。それはその早さ勇しさを誇示する爲めであつた。

かくて祭の夜のやうやく闌けゆく頃、信長公はその城を出でて我等が居宅の方に近づき來られた。窓から外を眺むる師父たちの姿を認められて、心易げに聲をかけられ、そして門のほとりにと歩み寄られた。巡察使猊下には師父たちと共に急いで階を下られ、公を門前に迎へられた。内に入つてしばしが程物語りせられ、祭はどうぢやとお尋ねになつた。猊下が御城の夜景の美しさ、趣向の珍らしさ又少年の勇ましさなどを稱へると、公は大に御喜びになり、高らかに打ち笑ひ、機嫌よう話されて、御歸館になつた。

翌日には、使者を遣はされて、猊下及び師父一同と共に城を看に來たれと仰せられた。そしてまた例の如く城の内外隈なく案内せられて、前に見ぬ珍器、繪畫などを示された。是れ何れの人の見まく欲りするものばかりであつた。

また公の巡察使猊下に對する好意の徴といふべきは、座右に侍る二人の公家（日本の高貴なる家柄の人々）をして、猊下の爲めに、その行く先きの國々の國主に宛てゝ紹介の狀を書かしめたことである。そのうちにはわかき豐後王や薩摩王にあてたものもあつた。是等の書翰は最も有效なるものであり、聖教を信ずる國主のみならず、異教の王たちに對しても、信長公の聖教に對する同情を示すものであつた。されば聖教を弘通する爲めに極めて益多きものであつて猊下

には殊の外に喜ばれた。

又信長公の我等に示されたる好意の最大なるものは、其毫も我等の行動を制肘することのなかつたことである。また用もなく、師父たちを安土山の城に呼ぶこともなかつた。

或日信長公は巡察使猊下に問はしめられた。猊下去るの後、安土の教會とそのセミナリオを主宰せしむが爲めには誰を選ぶべきぞと。猊下は之に答へて、その爲めにはオルガンチノ師を選び置けりと申された。オルガンチノ師は既に一たび此地に在つて、公の知遇を得たるものである。公の三人の子息はまた都に於て師を識り都の教會に於て師の說教も聽聞したことがある。公も亦都の邸宅に於て師を招いてその說教を聽き、大に之を庇護したことがあるので、今猊下の返事を聞いて安堵せられた。

已にして巡察使猊下は安土を出發せられ、オルガンチノ師は之に隨行せられたから、その留守の間信長公は他の師父をして安土の教會を主宰せしめた。

その代理の師父が一人の日本人の法兄弟（フラテ）を連れて、信長公の居城を訪はれると、公は二人を引見して、二時餘りも機嫌よく物語せられた。又いろいろの事を質問せられた。そしてデュスの掟の事、かみ、ほとけの事の如き、重要なる問題になると、議論が行はれたのである。その爲めに靈魂の不滅と云ふやうな問題を、信長公に說明する機會も得られたのであつた。世に眞神は一つしかない。かみ、ほとけは皆邪神であることも說かれた。公はそれ等の說明を一一心に止めて聽聞せられた。それで法兄弟（フラテ）が、もはや御暇乞せむとて、日本風の儀式で禮をすると、公は二度も三度もそれを引留められ、なほもその話を續けることを所望せられた。そして法兄弟（フラテ）の言ふ所に屢同意を示され、至つて滿足げに見えた。

間もなくオルガンチノ師には、巡察使猊下扈從の任を終へて安土に復歸せられた。すると信長公は、豫め何等の通知をなすことなく、唯獨り、我等の教會に來られた。是れは疑もなく、不意に來つて、教會がきれいに整頓してゐるか否かを驗さうと思はれたに相違なかつた。公は不潔、不整頓が大きらひであつた。然し家のうちは萬事善く整ひ、善く掃除せられて居たので、非難すべきものは一もなかつたのであつた。

公は家の最上階へ登つて行かれた、そしてそこに居た下僕のものどもをば下に下らせ、唯師父と法兄弟(フラテ)とのみを殘して、いとも懇ろに話をせられた。そのあとで室に備へてあるいろいろの品を御覽ぜられた。殊に自鳴鐘をば珍らしがられた。それからクラヰチエンバロ及びギタルラ或は羅面絃(ラベイカ)を見られて、この二つの樂器を彈ぜしめむことを所望せられた。そしてそれが彈ぜられた。公は始め微笑を以て聽かれてゐたがやがて眼をつぶり深く聽き澄まされるやうであつた。演じたる曲節は宗教音樂であつたが、此種曲節は恐らく公の耳には珍らしく、異樣に響いたのであらう。然し凡ての善き音樂の人の心を和ぐる力と人の精神を飛翔せしめ、目に見難き物象を空想し把持せしむる能とは、公の胸にも能くわが聖教の感情と歐羅巴の精神とを傳へることが出來たであらうと思はれた。曲終つて、公は今の音樂が殊の外に御意に召された旨を語られた。そして取り分けクラヰチエンバロを彈じた青年を賞讃せられた。それは日向の王の子息の一人なるドン・ジエロオムであつた。即ち豐後王ドン・フランシスコの孫である。この少年に關するあはれ深い話は後の條に於て述べる機會があらう。羅面絃を彈じた他の青年も亦同じく賞揚せられた。かくて公は鐘を見たまはむとて、此室を出でて鐘樓に登つて行かれた。

かくの如きものは異端者を喜ばす爲めにこの上もなく必要の道具である。彼等は皆好奇心が强く、それを見むとて遠路もいとはず訪れ來るのである。それで我等は謂はばさう云ふものをば餌にする。之を以て異端者をして我等に接近せしめ、我等の説教を喜んで聽くやうにさせるのである。今まで歐羅巴から日本に持ち來りしもののうちで、異端者の最も喜んだのはオルガノ、クラヰチエンバロ、ギタルラ及びヰオリノである。我等は既に二臺のオルガノを輸入して之をば、安土山と豐後とに据ゑた。クラヰチエンバロは諸地の教會に置いてある。そしてセミナリオの青年に教授して之を彈ぜしめる。ミサ其他の儀典の時、歐羅巴に於ては必ず有するを要する謳者、伶人を此地に於ては得ることが出來ないから、かくして教育したる青年を以てその代償となすのである。神に事ふる儀式の嚴肅と壯麗とを示して、彼等の信仰の心を誘ふは、この地に於ても亦最も肝要な事とせられるのである。

信長公は數時間人人と話し興ぜられて屋形に歸られた。その時、師父(パドレ)、法兄弟(フラテ)が、階を下つて公を御送することを許されなかつた。公は歸館せられると、やがてオルガンチノ師のもとに、食品の贈物を遣はされた。そして今日はいろいろのものを得て珍らしかつた。その御禮のしるしとして此ものを差上げるといふ言傳へを添へられた。このやうにして信長公は我等に對して常にいや增す恩寵を與へられたが、その爲めに神の法則、聖教並に我教會の、信徒の間には無論のこと、なほ異教徒の間にもだんだんと知られて行くやうになつたのである。主よ此王を導いて眞の道を知らしめたまへ。

この君は我師父の説教をつとめて聽聞せられるが、然しその本心は甚だ傲慢であつて、到底神の掟に從ふやうにはならないと思はれた。がそれでも異教の寺院を破壞し、その僧侶を放逐したりするのを見ると、主が其爲めに斯人を選んだのであるとも思はれないこともない。殊に我教會の爲めに力を盡され、我教を聽かれ、未來の生の事に考慮を費される上は、主の手の是人の上に及ばぬこともあるまじいといふ希望を抱かせるに足りたのである。殊に公がちかごろしばし

ば我等をその身邊に近づけ、極めて心親しく談話せらるゝやうになり、この希望はいよ〳〵切實のものになつた。もと豐後のフランシスコ王に對しても我我は始めのうちは大なる期待を持つことが出來なかつた。此王は唯聖教並にその領土内なる我等が師父に對して、常に好意を寄せられたといふに過ぎなかつたのである。然るに、その事が主の御意にかなうて、三十年の終、其齡の已に高きころに及んで、遂に我等が聖教に歸依し、天主に對し奉つて大なる勤勞を盡すに至つた。信長公に於ても、之れと同じ關係に立ち至るべきこと洵に希望に堪へないのである。

○

今安土山の教會に於ては、オルガンチノ師がその主宰となり、なほ一人と師父、四五人の法兄弟及びセミナリオに住む五十人の青年とともに、おのおのその業をいそしんで居る。

そして巡察使猊下からはやがて日本を出發するといふ便りがあつた。この前に巡察使猊下の其の後の事を申さうに、猊下には安土を立たれてから堺に行かれ、そこまで見送りせられたオルガンチノ師に分れ、船で四國の土佐に赴かれた。四國は猊下が今度定められたる、日本の三つの管區のうちの第三區に當るもので、土佐の國主ドン・パオロ殿は敬虔なる信者である。國主には十三歲になる男子があるが、巡察使猊下に乞うて之を有馬に伴ひ、そこのセミナリオに入學せしめむことを求められた。猊下は此事を喜ばれて、少年を有馬に伴はれた。

猊下は船で土佐より豐後に歸られたが、そこには前國主ドン・フランシスコがその子に代り再び政權を執つて居つた。その女たる日向國主の夫人及びその二兒の洗禮を受けたることは既に說く通りである。

巡察使猊下は此地に於て豐後の王、有馬王及び大村侯より羅馬なる法皇陛下の許に遣はさるべき使者のことについて

相談せられた。

此考は既にサン・フランシスコ・シヤヰエル師の抱かれた所であるが、巡察使猊下はいよいよその實行の決心をせられたのである。それは一には自負心の强き日本人に歐羅巴の事情を知らしめて、天主を敬ふ心を一層深くせしむる爲めであり、又は一には日本の事情を少しも知らぬ歐羅巴の人に、如何にこの國民の禮儀正しく且つ賢明なるかを示さむが爲めであつた。豐後王はこの爲めに巨費を投じて多數の巨船を艤裝して、使者たちを送らうと考へられたが、巡察使猊下はそれと反對の考を抱いて居られた。そして印度行の便船を藉り、その行を極めて質素にせんといふ考であつた。そして豐後の國主は正使として日向國主の第二子ドン・ジロオムを選ばれてそれを迎へる爲めに已に安土に向けて使者を立てた。然し巡察使猊下がその印度に歸る旅行を急がれ、葡萄牙の富める商人ドン・イニヤス・デ・リマの船の解纜の期も切迫してゐたから、伊東殿の公子の安土より來るを待つことは出來なかつた。それで再び安土に使者を送つて豫の命令を取り消すことになつた。そして羅馬に到るべき使者としては、ドン・マンシオ・伊東殿――これは日向の王の孫で豐後の王の同族である――が豐後の王の名代となり、ドン・ミゲル千々岩殿――有馬王ドン・プロタジオの甥で大村侯ドン・バルトレタオの孫である――が是等二人の王侯の名代として選ばれることになつた。同じうからのドン・ジリアノ中浦殿、ドン・マルチノ原殿が之れに伴隨した。

デエゴ・デ・メスキタ師、日本人なる法兄弟（フラアテ）ジオルジオ・ロヨラが一行に加つた。

安土山なる伊東殿の公子ドン・ジエロオム殿の歎は大きかつた。公子がその羅馬行きの使節に選ばれたといふ便りを獲して豐後より來れる使者を迎へた時の喜びの大きかつたに連れ、その沙汰の取り止めになつたのを報ずる第二の使者に會つた時の失望の感情も深かつたのである。

今まで誰よりも快活であつたこの青年の、ただ獨り海岸の樹下に彳むのを、人の見たのもしばしばであつた。この青年は數日のうちに世界の地理を習得し、マカオ、ゴアを經、リスボア、羅馬に至る都會、港灣、海路の名稱、行程を暗記してゐた。

オルガンチノ師その他師父法兄弟は、この青年の悲愁をやはらぐる爲めにどれほどの苦勞をしたか知れはしない。そしてセミナリオの學生の爲めの葡萄牙語拉丁語の教本のうちに出でる、古への聖人また羅馬希臘の賢人の例を引いて此青年を訓戒した。

公子は、上達せるタラキチエンバロを取つて、それをかなで、それに合せて唱歌して自ら慰むるが如くであつた。その最も好むものは Te Deum の曲であつた。

「て、でうむ、らうだむす。て、でうむ、こんひてむうる。て、えてるぬむ、はとれむ、おむにす、てら、ゑねらつうる。……」

その悲壯なる聲が窓外に漏れるとき、師父もまたセミナリオの同窓も、可憐なる公子に對して同情した。

巡察使猊下並に四人の青年使節の長崎を出立したと云ふ知らせを齎した使者の安土に着いた翌日には、人が皆教會に會して、早朝莊嚴なる儀式を行ひ、ミサが讀まれた。そしてきりえ・えれいそん、ぐろりや及びくれどおが歌はれた。

その朝安土は曇つて時々粉雪が落ちた。然し使節の出發の日長崎は青空であつたと云ふことであつた。

人はしばしばドン・ジエロオムの歔欷を聞いた。

……………………………………

後記

〇

わたくしが伊太利エネチヤの一富豪の邸で右の書を抄寫して以來、既に二年有餘の日子が經過した。わたくしは歸朝前の一二箇月の間にすぱにや、ぽるつがるの諸文庫を尋ねて、我邦に關する記錄を調べ、我邦の歷史に緣深いそれ等の國の都府を歷訪したから、四十日の海路の間印度洋の炎暑と潮風とで、わたくしの思想が蒸發し、吹き拂はれたにも拘らず、わたくしにはなほ現代よりは三百年前の世界に住ふ人のやうな氣分が殘つてゐた。

その頃わたくしは何を措いても安土山へ行つて見やうと思つてゐた。單にわたくしは物ぐさのみならず、いろいろの事情がわたくしの此計畫を延引せしめた。そしてさう云ふ空想も涸れ果てたのち、つひ二ケ月ばかり前に始めて安土の土を踏んだのであつた。

薄暮涼風を受けながら靑々とした稻の田の間を車行して、行く手に、かの臥せる駱駝に似る丘陵を見出した時は、それ故單にツウリストの感ずる快感を受けたに過ぎなかつた。山はこんもりと喬木に被はれて居り、今そこにある唯一の建物たる總見寺の塔の最上層と其相輪とが繪ごころに樹間に聳立してゐるので、その快感がある歷史的聯想への方角を取るのであつた。

今の安土は一個の寒村で、昔し華潔なる城下町の在つたらうと思ふあたりは、唯水田桑園の間に三五の茅屋を見る許りであつた。

かのパドレ・オルガンチノが主宰したといふ敎會、セミナリオは何處に當るのであるか、また彼の多感の靑年伊藤ド

ン・ジエロオムの黄昏樹下に彳みしといふは何れの方角にあたるか、今定かに之を判定する由もない。

然し古へ百々の橋の在つたと思はれるほとりには、今は廣き溝渠が通じて、そこに小舟を漕ぐ人の遠い話聲には、いかにも水郷の薄暮といふ響があつた。そのあたりに幾分西洋風を加味した白壁造りの教會堂を入れて空想して見てもこの風景と似付かはぬこともない。もし夕方の鐘聲でも聞えたら、人はいすぱにや、または伊太利亞の田舍にでもあるやうな氣分になるであらう。そしてまた昔の日本人が實際にさういふ耶蘇寺の晩鐘を聽いたときは、やはり強いエキゾチツクの感情を起して、まだ見たこともない異國といふものの豫感を味つたに相違ないと思はれた。殊に況んやわがわかきドン・ジエロオムに於てをや。

急峻なる阪を登つて總見寺に到ると眼界忽ち開けて漫々たる大湖が目の前に横はり、沖の島、長命寺、丸山、八幡山などが指顧に隨つて連る、また遠く比叡の大嶽、比良野のたけが、縹渺たる暮天の果てに見られる。是れ曾つて天守七層閣の燈を映した水であり、耶蘇寺院の鐘聲を反響せしめたる島山である。

二の丸、天守閣などの址は更にそれより深くそれより高き處にある。それ等のものの迹は今は全く崩壞して了つて居るが、その地形は今も殘て髣髴として古への姿を思ひ浮ばしめる。

殊にそこより少し手前の黑金御門と呼ばれるあたりは、巨石を重ねたる見附の構造がそのままになつて居つて、そのかみ、人の此處を過ぐる時、多分南蠻の黑金を以て堅牢に造られたる大門が、巍然として聳えて、森嚴の印象を與へたことと考へられる。

「尾、濃勢、三、越、若州、畿内の諸侍、京都、奈良、堺の大工、諸職人等、被召寄、在安土仕候うて、瓦燒の唐人の一觀被相添、唐樣に被仰付、觀音寺山、長命寺山、長光寺山、伊場山、所所の大石を引下し、千、二千、三千宛にて安

土山へ被上候」と太田和泉守の信長公記に記されてあると云ふことである。而して其「石丈之石壁千萬門之大厦」今安くに在りやである。

天守跡の地形には赤、紫の瓦の破片が堆く積まれてある。手に取り上げて見ると其身厚く其質が硬い。多分昔日の屋蓋の瓦であつたらう。

Fragilia et eternia かよはくにして久遠なるものよ。ジエルサレムの榮華は野の百合に及ばず、英雄の豪奢は湮滅して瓦礫に却つて三百年の匂ひが殘つてゐるのではないか。

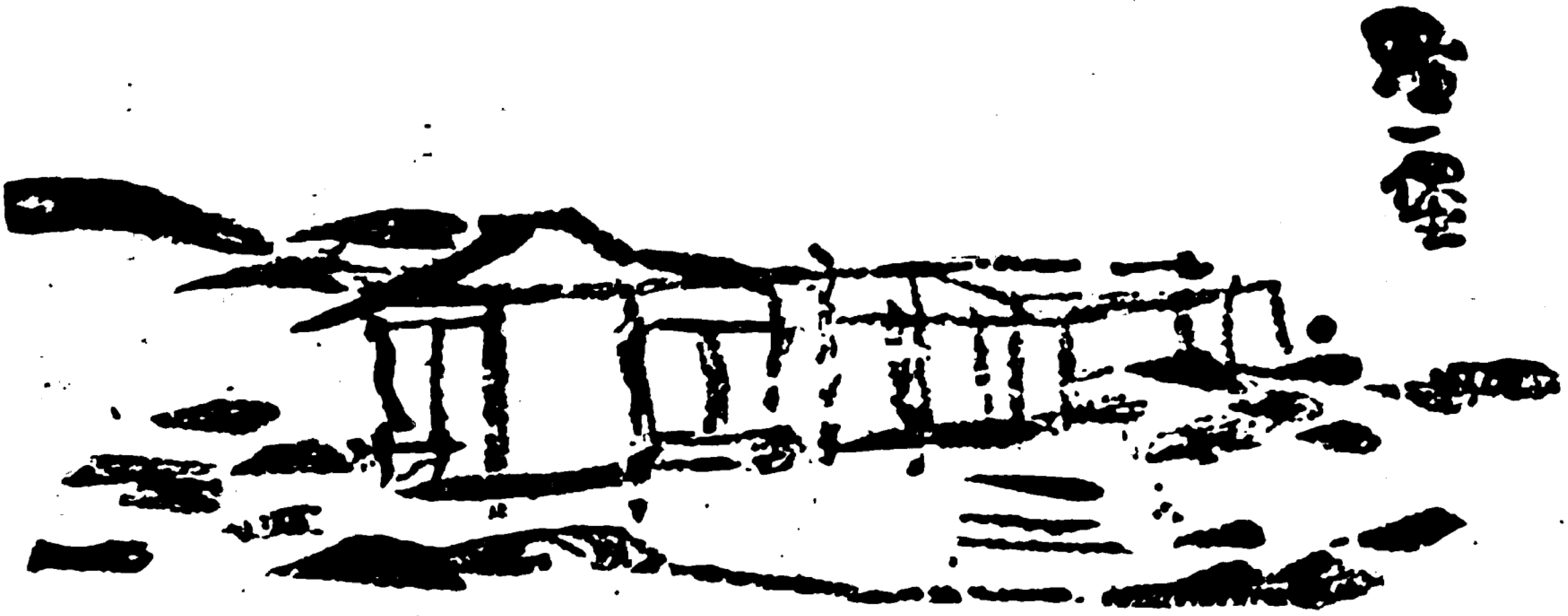
そのうちに四邊が全く暗くなつて來て、足もとさへも定かには見えぬやうになつた。黒い森の梢から唯僅かの星が見られるだけで、何となく氣味が惡くなつた。昔幾百の靈魂を埋めたところであるから今なほ魑魅魍魎の巣を食つて居ないとも限らぬ。わたくしは急にそこを立ち出でると、恐れを懷き始めた心は、足下に鳴る石に驚いたりした。しかし密樹がとだえて、また水光の見えるあたりに來ると、暢びやかな心持になつた。

その水の上に小舟を浮ばせ、三七殿及び其母を尋ねむとして、この山に來るオルガンチノ師の姿も空想せられるほどになつた。そのうちになんかここは、琵琶湖でも安土でもなく、身はラグナの潮水を俯瞰するカンパニレの高塔の上にゐるやうな氣になつた。

「君歴史なんてものを科學として考へるなどは馬鹿馬鹿しいや、過去に在る未來、空想力の少い人の爲めの空想刺戟劑。全くさうして置くに限るよ。」

サン・マルコの廣場の近くの Bauer-Grünwald といふ料理屋で、ラクリマ・クリスチで頬をまつかにしながら氣焰を吐くF氏が目前に髣髴した。

(FINIS)



不肖の兄

豐島與志雄

敏子

なぜ泣くんだ。何も泣くことはありやあしない。嬉しいのか、悲しいのか……いや兎に角、こんな時に泣く奴があるものか。

僕も惡かつた。がそりやあ、皆が云ふ通りの不肖の兄、さういふ僕なんだから、おかしな理屈だが、まあ名前に免じて許してくれよ。

僕は知らなかつたんだ、お前と濱地との間を……あの翌朝まで、薄々は分つたやうにも後では思へるが、全く、翌朝初めて母から聞いてはつきり分つたのだつた。

可笑しな朝だつたよ。

さすがに僕だつて、前夜のことがぼんやり氣にかゝつて、ぼんやりしてるだけにちよつと弱らされた。それで、十一時頃まで寢床の中に愚圖ついてゐて、起き上るとすぐに、酒を飲むと云ひ出してみた。

「え、お酒。」

言葉と一緒に息をつめて、さも呆れ返つたやうに母が見つめてきたので、僕は一寸首をすくめたが、すぐに眉根をしかめてごまかしてやつた。

「えゝ。何だか頭痛がするやうだから、少しでいゝんです。一本……つねや、」と僕は女中を呼んだ、「つねや、大急ぎ、一本お燗をするんだよ。」

「まあ、お前はほんとに……。昨晩あれほど飲んでおいて、その上まだ飲むつもりなんですか。」

「だから、一寸、すこうし……。變に頭が痛くつて……本當ですよ。」

そんなことが信じられるものですか、といふやうな母の顏付だつたが、それでも機嫌はさほど惡さうでもなかつた。

うまくいつた、と僕は思つた。

ところが、朝食の膳に向つて、一人でちびちび、苦い味を我慢して飲み初めると、母は飯櫃の横に控へて、ぢつと僕の方を見守つてきた。

「お前は一體、どういふ氣なんです。濱地さんと敏子との話に、賛成だなんて云つておきながら、昨晩はあんなに濱地さんのことを……それも、お前のお友達ぢやありませんか。まるで醉拂ひの惡體みたいに……。そして今日はまた、お午近くまでも寢てゐて、やつと起き上つたかと思へば、またお酒……。家は茶屋小屋ぢやありませんよ。それとも、酒の上でなければ云へないやうな、何か不滿なことがあるなら、はつきり云つてごらんなさい。濱地さんのことについて、何か腑に落ちないやうなことがあつたら……今のうちならどうにでもなるんですから……。そりやあ濱地さんのことはお前が一番よく知つてるのだから、はつきり理由の立つことなら、わたし達も無理に話を進めようとするのではありませんよ。だけど、昨晩のやうな、嘘だか本當だか分らない、まるで醉拂ひの寢言みたいんぢやあ、取り上げるわけ

にはいきませんからね。」

そんな風に云はれると、僕はもう參つてしまつた。母の氣持は變に眞劍に動いてゐた。初め僕は、兄との喧嘩の方ばかりを氣にしてゐたが、母はそんなことはけろりと忘れたかのやうに、濱地のことばかりを、眞面目に考へてゐるらしかつた。

　僕は頭をこつ／＼叩きながら云つた。

「醉拂つてたんですよ、昨晩は……。何だかでたらめに饒舌つてゐるうちになほ醉拂つてきて……。」そこで僕はちやんと坐り直した。「いや、贊成です。濱地と綾子との話には大贊成ですよ。」

「だつてお前は昨晩、何と云ひました。」

「さあ、何と云つたか……だがもういゝんです。僕は良緣だと思つてゐます。」

　さうした僕の云ひ方が、母をなほ不安になしたらしい。母は何かを見窮めようとするやうな眼付で、僕の顏をなほまぢ／＼と見入つてきた。

　そのため、僕は碌に酒も喉に通らなくなつた。

　綾子

　僕はお前と濱地との結婚に反對ぢやなかつた。どちらかと云へば贊成の方だつた。ひどく冷淡な云ひ方だけれど、それ以上は僕には云へない。

　それをどうして僕があの晩、濱地の惡口を云ひ出したかと云へば、實は兄に對する憤懣からだつた。

　お前も知つてる通り、僕は兄を餘り好かない、兄も僕を好かないらしい。僕達二人は性情や嗜好まで隨分違つてゐる

る。

その二人が、偶然一緒に家で飯を食ふことになつた。兄が結婚して別居してからは、さういふことが稀だつたので、僕は母に御馳走さしてやつた。といふのは口實で、久しぶりに家で醉つてもみたかつたからさ。

そして初めのうちはうまくいつた。ところが、次第に、お前が靜子さんと出かけた後のことだが、僕の氣持は妙に苛らついてきた。

兄はだいぶ辛棒して僕の相手をしてたらしかつたが、三四本目の銚子から、先に飯を食ひ初めた。その時話は自然に、お前と濱地との結婚問題に落ちていつた。

「だがお母さん」と兄は笑ひながら云つたものだ、「濱地君もこんな酒飲の親友を持つてるやうぢやあ、餘り信用もおけませんね。」

「でもね、」と母も笑ひながら云つた、「こんなお友達があつてもしつかりしてるところは、尚更豪いぢやありませんか。」

さういふ會話を僕は聞き流して、一人で杯を重ねてゐた。母が吟味してるだけに家の酒はうまかつた。醉心地がよかつた。そしてつい不調法にも、小唄を口ずさみかけた。だつて、いゝ氣持になつたんだから仕方がないぢやないか。それを兄が聞き咎めたのが初まりで、また例の廻りくどい意見になつてきた。が僕は知らん顔をしてやつた。それがまた兄の氣持を害したらしい。

「つまらないものを二つ三つ書きだして、それで藝術家だと納まり返つて、ぐうたらな日を送つて、羨ましい身分ね。」

「羨ましけりやあ、あんなちつぽけな會社なんか止しちやつて、兄ちんも藝術家になつたら……。」

兄も少し醉つてゐた。が僕もだいぶ醉つてゐた。

「こないだ、お前が書いたものを讀まされて、實に恥しい思ひをしたよ。そら、何とかいふ題の、淫賣婦かなんか出てくる小說さ。僕の會社に、あの雜誌を持つてる男がゐて、あなたの弟さんださうですが實に上手だ、とさう云つて僕に讀ませるんだ。讀んでみて僕は恥しくて眞赤になつた。下らないぢやないか。あんなものはもう書くなよ。もつと高尙な、思想的に深みのある、立派なものは出來ないのかね。だから云はないことぢやない、薄汚い女を相手に酒ばかり飮んでるやうぢやあ、結局駄目にきまつてる。藝術家になるつもりならそのやうに、先づ品行から……その、生活から立て直さなくちやいけない。」

兄は食意地が張つてゐた。いゝ加減醉つてるくせに、皿のものをみな平らげ、鍋のものを盛につゝつき、そして四五杯も飯を食つた。その下齒の、犬齒の前に一本、黑い虫齒があつた。齒醫者にでもかゝつたらよささうなものを、どういふのか、小さくいぢけた黑いまゝに、いつまでも放つてあつた。それが、物を食ふ拍子に、小言を云ふ拍子に、ちよいちよい覗き出して、僕の氣持にさはつてきた。

「實際お前のやうな者には、濱地君は友人として過ぎ者だ。」

「さうかなあ、僕はまた、濱地には僕が過ぎ者だと思つてゐたんだが……。」

「なにを自惚れてるんだ。」

「ぢやあ濱地は僕よりどこが優れてるんだらう。」

「優れてるさ、人格が……。お前みたいに汚れてやしない。」

「汚れてないって……笑はせるなあ。兄さんには見えないんだ。これでも、精神的には僕の方が汚れてやしないぞ。」

僕の云ひ方が惡かつたか知れないが、それを兄は取り上げて、二三度云ひ合つてるうちに、友人を誣いるのは怪しからん、誣いるのでなければ證明してみろ、と嵩にかゝつてつゝ込んできた。その時の兄の高慢な顏が、黑い虫齒や固太い食慾と一緒に、おかしな云ひ方だけれど、それが自分の兄であるから猶更、僕の癪に障つてきた。

「そりやあ、證明しろといふなら、してもみせるが、どうせ兄さんには分りやしないよ。お母さんになら分るかな。ねえ、お母さん、分る……分るんでせう。」

杯を手にして、お臀でくるりと向き直ると、母は苦々しげに笑つてゐた。僕は愉快だつた。

「ねえお母さん、素裸になつてみりやあ、誰だつて清淨な者あゐやあしない。例へば濱地だつて、あんなに君子然と澄し込んでるが、一皮剝いでみりやあ、ねえお母さん……。」

母がもぢもぢしてるのを見て、僕は饒舌り散らすのが面白くなつた。僕は母が好きなんだ。

そこで僕はかういふ話をした。

或る時彼が、夕食後散歩に出た。薄暗い裏通りを歩いてると、夏のことで、向ふの二階の、窓に簾をかけた室の中が、電燈の光に透して見える。その窓際の、机かなんかに、二人の若い女が坐つて、せつせと書き物をしてゐた。往來から見えるのは、肩から上の横顏ばかりだつた。それが却つて風情だつた。彼は何氣ない風をして、そこの通りを幾度も往き來した。散歩の歸りにもまた通つて見た。

それから、翌日も、そのまた翌日も、彼はその邊を歩き廻つた。簾をかけた二階の窓の中には、いつも二人の女が、せつせと書き物をしてゐた。何を書いてるのか、往來からは分らなかつた。家も相當に立派で、素人下宿とも見えなか

つた。

　そして彼には、夜の散歩が一つの樂しみとなつた。窓の女の髪形から横顔の恰好を、すつかり覺え込んだ。さほど奇麗ぢやないが、現代式の理知的な、女學生とも職業婦人ともつかない樣子だつた。いろんな空想が彼の頭に描かれた。

　それが可なりの間續いた。そして、十月の初めは暴風雨が襲つた。その暴風雨の後、彼女達の窓には、簾が取拂はれて、障子が閉切られた。障子にはやはり明々と電燈の光がさしてゐたが、彼女達の横顔はもう見られなくなつた。それで彼も、その薄暗い通りの散歩を止してしまつた。

「どうです、」と僕は云つた、「それでも彼は精神的に汚れてゐませんかね。」

　母は腑に落ちないやうな顏付をした。

「下らない。」と兄が横合から口を出した。「お前の小說と同じだ。馬鹿げた作り話だ。」

「それぢやあ、ねえお母さん、こんなのはどうです。」

　或る時彼は寄席に行つた。落語の間に娘手踊があつた。まづい顏に白粉をぬりたくつた娘達が、ぱつとした派手な着物を着て、眞赤な下着の裾をちらつかせながら、舞臺一杯にもつれ合つた。彼は喫驚したやうにそれを見てゐたが、後でかう云つた。「あんなのはつまらない。第一下劣でいかんよ。」

「どうです、」と僕は母に云つた、「それでも彼は……その精神的に……ねえお母さん。」

「そりやあね、お前さんと違つて、濱地さんには、娘手踊なんか面白くないでせうよ。」

　意味がよく母に通じないのが、僕には却つて愉快だつた。

「なるほどな……お母さんは善良だ。それぢやあ、もつと面白い話がありますぜ。……だが、かう冷えてしまつちやあ

……。」

僕は銚子を熱くして貰ひながら、また話し出したものだ。

或る時彼は淺草に活動寫眞を見に行つた。金曜日の替り目で、館内はぎつしり込んでゐた。その時、彼の隣に、美しく着飾つた令孃風の娘がゐた。それが、變に彼の方へ身を寄せてくる。そして寫眞の代り目になると、プログラムを失くしたから借してくれと云つて、それをきつかけに、何かと小聲で耳元にちよいちよい話しかけてくる。彼は例の內氣さから、初めは用心してゐたが、次第に引込まれて、一寸手を觸れ合ふやうになつた。それに自分の氣がついた時は、もう終演際だつた。さすがに彼も氣味惡くなつて、先に出てしまはふとした。すると、相手の令孃も後からついて來た。そして何とはなしに、二人で連れ立つて、あの池の緣から觀音堂の方へぬけやうとすると、そこの暗がりから、三人の不良少年が飛び出して來て、いきなり短刀をつきつけた。俺達が預かつてる大事な令孃を、何で誘惑しようとするんだと、聲は低いが圖太く脅かしつける。女は平氣で笑つてゐる。彼はまう一縮になつてしまつた。

「そうして、」と僕は云つた。「まあ何ですね、有り金そつくり卷き上げられるか、叩きのめされるか、傷をつけられるか、何れ碌なことぢやねえ。」

「まあ！、濱地さんが、そんな目にお逢ひなすつたんですか。」

だが、それは實は、濱地の話ぢやなかつた。僕が或る不良少年から聞いた話なんだ。

「いや、濱地も、今にそんな目に逢ひさうな男ですぜ。それと云ふのも、何だつけな、精神的に汚れてるからか……ねえお母さん……。」

「止せよ。いゝ加減にしないか。」

食後の茶を飲みながら、煙草を吹かしてゐた兄は、本當に腹を立てたらしかつた。

「止せと云ふなあ、降參したしるしだな。へむ、どーだい。」

「何だ、そのざまは。」

戰勝のしるしとして、なみなみとついだ杯を高く差上げた拍子に、手元が狂つて膝にだらだらとこぼれた。その殘は一息に吸つて、坐り直した。

「これで、證明がついたらう。」

「何の證明だ。」

「何の……はゝあ、逃げ仕度か。卑法だなあ。ほら、キリストが何とか云つたよ、女を見て女を動かす者は……つてな。ねえ、お母さん、お母さんは知つてるだらう。これを知らない者は……主ばかり……。

いゝ氣になつたところを、兄からぱつと杯を叩き落された。

「何を。」

拳を固めて氣張てみたが、立てかけた膝がよろよろつとした。そこへ一つ、手首をぴしりとやられて、へたばりかけたとたんに、箸を取つて投げつけてやつた。

「馬鹿、馬鹿……やーいだ。」

ねち伏せられたのが、變に手柔かなので、ひよいとはね起きてみると、母から押へられてるのだつた。

「何をするんです。お前さんは……兄さんに向つて……。さあお謝りなさい。謝らないと、わたしが承知しませんよ。」

「醉拂つて、こゝをどこだと思ふんです。」

母の言葉はやさしく僕の耳に響いた。僕は本當に醉拂つた氣がした。母の前で醉拂つたのは全く久しぶりなんだ。
「えゝ、謝るよ、いくらだつて。僕は本當にお母さんが好きだよ。お母さんくらゐいゝ人は……好きな人は、天下廣しと雖もか……ねえお母さん。」
ふらりふらりと舟をでもこぐやうな調子に、僕はお辭儀をしてみせた。そのためか、頭の醉がかき廻されて意識がぼんやりしていつた。
それから僕は、餉台のふちにしがみつきながら、兄のしつゝこい惡罵と叱責とを、下手な音樂をでも聞くやうな風に聞いてゐた。その太い言葉を、母の細い嘆聲が伴奏してゐた。と、伴奏の方が突然はつきり浮き出してきた。
「ほんとに、この子は誰に似たんでせう。」
僕はふつと頭を擧げた。
「そりやあ、分つてるさ。父親に似たんだ。僕の知らない、誰も知らない、天の父親にか……。ねえお母さん。」
その醉つた時の口癖の、ねえお母さんがいけなかつたらしい。突然、母の顏が馬鹿に大きくなつてつめ寄つてきた。僕はぞつとして、そこにつゝ伏して泣き出した……いや、本當に泣いたかどうか覺えてゐないが、泣き出した氣持だつた。何だかもうすつかりぼやけてしまつてゐた。そして結局、むちやくちや失言を釋明して、それから、床の中に逐ひやられたものらしい。

綾子。
こんな話をすると、お前は妙な疑を起すかも知れない。然し僕は何も、自分だけがお前達と違つた父親の子であるな

ど、そんな馬鹿げた空想を巡らしたことはないのだ。亡くなつた父に對しても、それから妹には母に對しても、そんな冒瀆な考へは毛頭懐いてやしない。亡父や兄に似寄りの點を自分の顔貌(かほかたち)の中に見出して、どうかすると悲觀することはあつてもね……。

たゞ僕は、心の上で、魂の上で、父や兄とは違つた種族のやうな氣がするのだ。何だかかう、天涯の孤客といつたやうな氣持なんだ。非常に自由で晴々としてゐるが、また淋しい。そんな時僕は、自分の魂の父親、さういつたものを想像する。空なものかも知れないけれど、またすぐどこかその邊に、自然の中に、空低くに、はつきり存在してるやうにも思はれる。そして僕はその父に對して、強い愛を感じてゐる。

お前が知つてる通り、僕は母を大變愛してゐる。ところが、どうかした心の持ちやうで、もつと漠然とした然しもつと深い、第二の母の存在を想ふ時さへある。だから、父が亡くなつて長年になる今、第二の父の存在を想ふのも不思議ではないのだ。何といふ不孝な子だ。これで母もなくなつて、幾年かたつたならば、僕はもう生みの父母のことは忘れてしまつて、別な廣い父性や母性をばかり、自分の魂の父や母をばかり、想像したり思慕したりすることだらう。

然しまた、そのために、僕はどれだけ自由に伸び伸びと生きてゆけることか。

だがこんなことは、お前にはよく分るまいから、これ以上云ふのは止さう。だが、そんな氣持だから生活が放埒になるのだと云はるれば、僕は一言もない。但し自分では放埒だとも思つてやしないがね。

それからも一つ、僕はお前に詫びなければならないことがある。お前は、僕が故意に濱地を誹謗したと思つて、嫌な氣がするだらう。それはもつともだ。僕の云ひ方が惡かつたのだ。僕はあんな云ひ方をして、濱地を傷つけるつもりでは少しもなかつた。男の心つて、それほど淡白なものではないといふことを、兄に向つて云ひたかつたのだ。僕が時々遊

里に足を向けるからと云つて、僕をさも汚れた者のやうに取扱ひ、風呂にも先に入れないで、而も冗談にせよ口に出してまでそれを云ふ、さうした兄に對する反感から、たとひ身體は汚れてゐやうとも、心は潔白だといふことを、間接に主張して見るつもりだつた。それが、反感や酒の醉が手傳つて、妙な風にこぢれてしまつた。濱地のことなんか實はどうでもよかつたのだ。

だから、翌朝になつて、母から濱地のことだけを切り離して尋ねられると、僕は實際弱つてしまつた。あれは兄をやつつけるために濱地をだしに使つたんだとは、まさか云へないものだからね。

「わたしは、お前の昨晩（ゆうべ）の樣子では、この話に反對だとしか思へませんよ。だからさ、反對なら反對でいゝんですから、どういふところが不服なのか、はつきり云つてごらんなさいよ。」

母はいやに落付拂つてゐた。僕は少々面倒くさくなつた。

「ぢやあ、きつぱり云ひませう。僕は反對ぢやありません、贊成です。」

母は僕の顏をやはりぢつと見てゐた。

「それに違ひなければ安心ですがね……。」そして母は一寸頰をゆるめた。「だけどよく考へてごらんなさい。この話にはお前が一番肝心な人なんですよ。濱地さんは親しいお友達、敏子は妹、その二人の一生のことですからね……。」

母が僕の立場を重く見てゐてくれることは、その場合僕には却つて有難迷惑だつた。だから僕は、話を早く切り上げるために、少し餘計な口を利く必要を感じた。

「一體その話はどの邊まで進んでるんです。」

「どの邊までつて、たゞ、淵藤さんからさういふお話があつたゞけなんですよ。そして、わたしも兄さんも、濱地さん

ならよからうと思つてるんですがね……。」

「そして、敏子はどうなんです。」

「承知のやうですよ。」

「濱地は。」

「勿論承知でせうよ。濱地さんの家から加藤さんへお話があつたものらしいんですから。」

「それぢや文句はないぢやありませんか。本人同士がよければ、何にも云ふことはない。僕も贊成です。何でせう、もう濱地と敏子とは愛し合つてるんでせうね。」

「えゝ……。」

おや、僕は思つた。母は何か知つてるんだな、といふより、何かあつたんだな、さう僕は母の樣子から感じた。變に言葉尻を濁して、僕の顏色を窺つてるのだ。

僕は少しうつかりしてたかも知れない。然し、濱地は僕の親友であり、お前は僕の妹であるが、そのお前達二人の間を監視するほど、僕の頭は隙ぢやなかつた。僕はたゞお前達二人が仲のよいことだけを知つて喜んでゐた。或は愛し合ふやうなことになるかも知れないと、ふと思つてみたこともあるにはあるが、結婚なんてことは僕の考への範圍外だつた。

母の樣子から一寸變な暗示を受けて、僕は俄に追求し初めた。敏子は本當に濱地を愛してるのか、濱地は本當に敏子を愛してるのか、そして二人の愛は深いものなのか、その證據が何かあるか……。

母は自分が過でも犯したもののやうに、視線を落して低い聲で云つた。」

「キスしたことがあるさうですよ。」

敏子

お前も馬鹿だね。それならさうと、なぜ早く僕に云はないんだ。勿論僕は何にも尋ねやしなかつたし、お前から進んで話せもしなかつたらうが、然し、母に打明けたくらゐなら、僕にだつてすぐ打明けていゝぢやないか。お前は僕の平常を知りつくしてゐるから、僕に笑はれるかも知れないと思つたらうが、いくら僕だつて、處女の戀愛を否定しやしないさ。母がどんな風にお前を問ひつめていつたか、それを思ふと嫌な氣がする。——恥しい想像を許してくれよ。——だが、僕だつて母を問ひつめていつた。汚らはしい好奇心の仕業なんだ。

然し、好奇心ばかりぢやなかつた。

僕は、前夜のことは酒の上の冗談だと云ひ、緣談に賛成の旨を說いて、母を漸く安心さしたが、その後で非常に淋しくなつた。長年一緖に育つてきて、幼時の親しみをまでそのまゝ持ち續けてる兄が、妹の婚約する折に感ずる一種の愛情と寂寥、さういつた氣持はお前も認めてくれるだらうね。

だが、そればかりでもなかつた。

僕が「幼き愛」といふ變な詩を書いて見せた時のことを、お前は覺えてゐるだらう。あの時お前は僕の樣子を不思議がつたね。だがこれで分つたらう。僕は一體、詩を書くといつもお前に見せて居た。それは女の感受性に敬意を表するからだ、と云へば立派だが、實は自分の詩についての自信がなかつたからさ。それだもの、「幼き愛」などゝいふあんな戯心あつて拵へた詩なんか、何の價値もありやあしない。それをお前はほめてくれた。いつも僕の詩を無遠慮にやっつ

けるお前が、いゝ詩だと云つてほめてくれた。僕はお前の顔色や眼付を窺ひながら、はゝん……と思つた。それから、なほも一度讀み返して、考へてる風をしてると、お前はかう云つたね。

「兄さんそれは誰との思ひ出なの。」

「馬鹿な。」

僕は思はず口走つて、それから詩の原稿を引裂いてしまつた。

「あら。」

その時のお前の、吃驚した顏つたらなかつたよ、だが瞬間に、お前の黒い睫毛は、眼の色に現はれた感情を隱してしまつた。

西洋の誰かが、こんな意味のことを云つてゐる。——昔の野蠻人は、占領した都市に、處女性のない潔白な女を殘していつたが、吾が文明は、潔白さのない處女を拵へ出した。

なぜこんな文句をこゝに引出してきたか、お前にはこぢつけとしか思へないだらうが、まあ默つて先を聞いてくれよ。

その晩……全く靜かな安らかな晩だつたね。夕食後、母とお前と僕と三人で茶の間に集つて、電燈の光りのまはりに默つて坐つてたぢやないか。

「いやに靜かな晩だなあ。」

餘りしんみりしてきたので、僕は少し氣がさして何氣なく云つてみた。

すると、意外にも、母はほつと溜息をついた。が言葉はやさしかつた。

「えゝ、お前が眞面目でさへゐてくれゝば、いつもかうなんですがねえ……。これからは少し落付いてくれなければ困りますよ。」

「落付きますとも、今夜からこの通りに……。」

その時お前は傍で微笑してゐたね。その幸福さうな微笑を見て、僕は……全く氣まぐれなんだが……ユーゴーの詩を讀んで聞かしてやつた。ランプの光りのまはりに一家團欒してるところや、妻や子が主人の歸りを待ちわびてるところや、樂しい夕食の光景や、さういふつゝましやかな家庭の幸福をね。それから最後に、あのコペーの詩さ。主人は朝から晩まで板をけづつてる、日曜日に金使ひもしない、二人の子供は鉋屑の中で遊んでる、お上さんは家の入口で、貯金の胸算用をしながら編物をしてる、一家安隱で商賣繁生だ。さういふ風に僕はごまかして讀んでいつたが、實は、あれは柩造りの詩なんだ。次の疾病を夢想して、收入を空想するところまであるんだ。皮肉ぢやないか。

僕も皮肉だつた。心とうらはらな芝居をうつてゐた。心では、兄の家庭……と云ふより寧ろ、兄の家庭で代表されるさうして家庭のことを考へてゐた。主人は朝から夕方まで勤めに出て、こつこつ機械的に働いてくる。細君は赤ん坊を守りしながら、家の中に閉ぢ籠つてる。そして粗末な夕食の膳、疲れきつた無言の宵、それから薄ら寒い睡眠。それが文字通りに十年一日の如く連續する、一生の間。そして最後に、僅かな貯金と死。

勿論そんなことは、一口には云へない。そのつゝましやかな生活のうちに、掘り下げてみれば、どんな幸福が隱れてるか分つたものではない。

だが、俺は……。いゝかい、この「俺は」がこゝでは大切なんだ。前に云つたらう。第二の父や母を空想したり感じたりする僕は……俺は……なんだよ。

その俺は、兄のやうな家庭がまた一つ生れやうとしてるのを、お前の微笑のうちに見て取つた。濟地は兄と相通ずる性格なんだ。彼は毎日勤勉に學校へ出かけるだらう。お前は忠實に家庭を守るだらう。そして、同じやうな日々のうちから、僅かな月給の餘蓄と赤ん坊……。

もう云ふのを止さう。お前の心に暗い影を投げてはいけないから。

で兎に角、本當のところを云へば、濟地とお前との結婚に、僕は贊成でも不贊成でもなかつたまでだ。もつとどうにかした生き方はないものかと、さうお前のために希望しながらも、また一方から云へば、濟地との結婚は最も安全な途かも知れないとも思つた。

が俺は……。いゝかね、また俺は……なんだ。俺はお前を自分と同じ世界のものに、いつまでもしておきたかつた。せめてお前だけは、拘束のない廣々とした境地に置きたかつた。それなのに、なぜ濟地と愛し合ふやうなことをしたんだ。つまらない。結婚は一種の束縛だ。……とそんな風に僕は感じて、それでもやはり憚られて、卑怯な眞似をして自らごまかしてゐた。

その時、ほら、裏口をことことと誰か叩くやうな音がしたらう。僕はなぜだかぞーとして竦んでしまつた。

「え。」

聲には出さないがさういつた呼氣で、母は半ば耳を傾け半ば僕の顏色を窺つた。

「なあに……どうしたの。」

平氣な聲で、お前は不思議さうに僕と母との顏を見比べてゐる。――幸福を夢みてる者は恐れは感じないさうだ。

「何でもないんだらう、犬か猫かなんだらう。」

さう云つたのが自分でも何だか變で、僕は火鉢の縁にかぢりついた。

「おゝ寒い。」

「さう。褞袍(どてら)をあげませうか。」

「いゝえ……なに……。」

「ぢやあ、何ですね、お前はまた、お酒でもほしいんでせう。」

「いゝえ、今日は……。僕が酒を飲むと、一家の平和を害する、さう悟つちやつたから……。」

「そんな、皮肉を云ふものがありますかね。珍らしく今日はいらないと云ふかと思ふと、すぐお前はそれだからね。」

母の眼は、駄々つ子をでも見るやうな眼付だつた。さういふ母を僕は好きなんだ。それを、よく知つてる筈のお前は、僕に向つて意見めいたことを云つたね。

「兄さんも、お酒が好きなら好きでいゝけれど、外で飲むのはお止しなさいよ。家でならいくら飲んだつて……誰も何とも云やしないわ。だから早く……。」

「何が……。」

「早くどうにか……。」

「早く……何が早くなんだい。」

「どうにかして……。ねえ、お母さん。」

母がにつこり首肯(うなづ)いたのはよかつた。僕はふゝんといつた氣持で煙草を吹かした。そして お前を追求するのは止めた。あの場合お前の口から、早く結婚でもせよとはつきり云はせることは、餘り思ひやりのない仕打なんだからね。お

前と母とが、影で僕のことをどんな風に話し合つたか、それは僕の知つたことぢやない。

だが、實際、いやに寒い靜な晩だつたね。僕は胸がむづむづしてくるのを、しひて蝸牛のやうに自分の殼の中だけに引込んでゐたかつた。そしてふと思ひついて、炬燵を拵へやうと云ひ出した。母とお前が取合はないのを、むりに押し切つて炬燵を拵へさした。それから、菓物を買つて來て貰つて、お初は父の佛壇へなどと云つて笑はれた。だが、馬鹿な、誰が佛樣なんかを信ずるものか。そして炬燵の中がぽかぽかしてくると、とうとうやはり、ビールに觴さ。お影でつねやが一番忙しい目をみた。

さうして、炬燵の中でビールを飲みながら、取留めもない話をしながら、僕はむりに涙を抑へ止めてゐた。何故ともなく、すぐにも泣き出しさうな氣持だつた。だが、心の中では、別なことを考へてゐたんだ。こんなちつぽけな家庭なんか吹き飛んぢまへ、こんな慘めな幸福なんか、こんな古ぼけた天井なんか、みんな吹き飛んぢまへ、青々とした大空が現はれてこい……とね。それからまた、お前に向つて、俺は今夜お前の通夜をしてやるんだ……とね。

お前は呆れ返るだらう。僕だつて自分に呆れてる。だからかう大急ぎに話をしてゐるんだ。

たゞ、一つ、僕はビールのコップを差上げながら云つた。

「ビールの泡と接吻とは同じやうなものさ。唇に殘つたかと思へばすぐに消えてしまう。」

するとお前は、恥しがる代りに怒り出したね。母も險しい眼付をした。

「なあに、僕は子供のことを云つてるんだよ。子供は誰にだつて接吻させる。大人にそれが出來ないのは、心が汚れてゐるからさ。」

「ぢやあ兄さんは子供なのね。藝者にだつて誰にだつて接吻させるんだから。」

「さうさ、心はいつまでも子供、それを置いてきつぱりにして、身體だけが大人になつたものだから、弱つてるんだ。あゝつまらない。實につまらない。」

わざと大きく溜息をしてみせた合間に、母は眞顔で云つた。

「もうお止しなさい、そんな話は。」

僕ははつとして、眞赤になつた。がお前はまだ怒つてゐたね‥‥仲直りのしるしに僕と握手をして、飴をしやぶつて、それからあの、禿頭の子供の話かなんかで笑ひ出すまでは。

敏子

その一晩を、僕は台なしにしてしまつたやうな氣がするのだ。あゝいふ事情の下にあつたあゝいふ靜かな晩は、さう滅多にあるものぢやない。それを僕は何といふ氣持で過してしまつたのだらう。またお前だつて‥‥。

僕と一緒に海で飛びはねたお前ぢやないか。音樂を聽きながら一緒に涙ぐんだお前ぢやないか。僕の詩をいつもさんざんやつつけたお前ぢやないか。母には話せないやうな藝者の話を僕がするのを、口を尖らして聞いた後で、だから兄さんは汚らはしいわと云ひながら、晴々と笑つてたお前ぢやないか。もつと率直にあの晩を過せなかつたのかね。‥‥そりやあ僕も率直ぢやなかつた。だけど本當は、お前と一緒に、朗かに笑ひたかつたし、しみじみと泣きたかつたのだ。

考へてみると、僕はあの一晩を毒したばかりではなく、家の中の空氣全體をも毒してたかも知れないし、お前の心をも毒してたかも知れない。僕は何といふ毒蟲なんだ。

然し、それもこれも、何の罪であるかは、たゞ知る者ぞ知るさ。」

加藤さんへ向つて、母が愈々承諾の返事をすることになつた時、僕はやつと重荷を下したやうな氣がした。變挺な心理だ。そして、ほつと息がつけるその氣持から、一寸旅をした。

少し急な書き物があるから旅をする、とさう僕は母にもお前にも云つた。體裁にだけ原稿用紙を持つて出た。が仕事なんかありやあしなかつたんだ。……そして、三日目に僕は歸つて來た。

その間に、僕が何をしてきたかと思ふかね。これからそれを聞かしてあげよう。―

家を出ると、あの通り、晴れやかな小春日和だつたらう。僕はその大空を仰いで、いゝなあ……と心に叫んだものだ。そして、停車場へ行くのを止めて、照代の家へ行つてみようと思つた。

お前は戀するなら戀するがいゝ、ちつぽけな家庭を構へたけりやあ構へるがいゝ。だがこの俺は、そんななかに卷きこまれてたまるものか。自由なそして心は潔白な彷徨を續けてみせるぞ。日の光が美しく輝いてるぢやないか。

まあ云はゞそんな風な氣持から、籠を出た小鳥のやうに勝手な眞似がしてみたくなつた。で友人のところに原稿用紙を捨てゝ、少しぶらついて時間をつぶして、それから照代の家へ行つてみた。

敏子

僕が照代の家にまで遊びに行くからといつて、旦那氣取りで澄しこんでるとか、或は二人の間が――心のつながりが――おかしいとか、そんなことを考へちやいけない。僕はたゞ、お坐敷で彼女に逢ふよりも、彼女の家に五分間も默つて座りこんでる方がよつぽど面白いんだ。お互に素面なんだからね。何でもない一寸したことから、そんな風になつて

「しまつたんだ。

ところが、その日は大變な目に逢つちやつた。肩に白布をあてゝその上に梳もう電氣がきてたから、五時頃かと思ふが照代はまだ髮を結ひかけてるところだつた。きかけの髮を亂したまゝ、入口まで立つてきた。

「まあー、」それから一寸睨む眞似をして、「今日を幾日だと思つてるの。」

「幾日……何のことだい、そいつあ。」

「あら、もう忘れたの。そら……稻毛……。」

「あゝ、そんなこともあつたつけ。なるほど、君は頭がいゝよ、物を忘れない。」

「あれだ。」

といふのは、實は何かの話のついでに、こんどの日曜に――日曜が笑はせるよ――日曜あたりに、稻毛へ遊びに行かうと、そんなでたらめな約束をしてゐた。その日曜をもう十日餘りも通りこしてゐた。

室へ通つて、彼女が改めて挨拶するのに應じた時、隣りの室に寢てる女の顏が、開いた襖の間から、黑ずんだ縁と赤い布團とその白い襟との中に、仄白く浮出して見えた。

「どうしたんだい。」

「美代ちやんよ。病氣なの。」

見ると、美代子はすやすや眠つてるらしかつた。裾の方で、ばあやさんが火鉢で何か煮立てゝゐた。

「悪いのかい。」

「お午頃から急になんですけれど、大丈夫よ。……待つて〻頂戴。今髪をあげてしまうから。」

長火鉢の前で傑は煙草を吸ひ初めた。その煙草が一本終らないうちに、美代子は突然うーむと苦しみ初めた。照代は飛んでいつた。

「仰向いちや駄目……つ〻伏すのよ……さう……い〻かい……。」

呻り聲の間に痛い痛いと訴へてる美代子を、照代とばあやさんとは上からのしかゝつて、腰のあたりを力一杯抑へつけた。

「ねえさん、注射を頼んでよ、後生だから……おう痛い……痛いよう……。」

「我慢だよ、一寸の間なんだから……。注射はもういけないつて、先生が仰言つたでせう。」

痛みが少し鎮まると、美代子は金盥にしがみついてゐた。

「無理に吐かうとしちやいけないよ。注射のせいだよ。何も出やしないんだから。」

そしてるうちに、美代子はもうぐつたりして眼を閉ぢてゐた。

「蒟蒻を取り代へてみませうか、煮立つてるから。」とばあやさんが云つた。

「さう。い〻でせう、こんど起きた時で。」

そして照代はまた鏡台の前に戻つてきた。

梳手が髪を梳いてる間、お師匠さんは手焙で煙管をはたはたやつてゐた。

「苦しさうですねえ。」

「え〻、そりやあ苦しいんですつて。喇叭管がひきつけるから、腰と下腹がちぎれて取れさうだつて云ひますよ。お座

の時と同じださうですもの。」

「へえー、さうですかねえ。」

僕は一人で茶をいれて飲んでゐた。

「それぢやあ、痙攣かい。」

「えゝ。」

「では、唐辛子をはるといゝんだよ。」

「あら、いやーね、そりやあ胃痙攣のことよ。」

照代はそれでも學者だつた。先生は蒟蒻で温めるやうに云つたけれど、氷で冷しきつた方がいゝ、それも人によるんだけれど、などと云つてゐた。

僕はいゝ加減のところで立上りかけた。

「ぢやあお大事に……。僕は歸るから。

「いやよ。駄目……。待つてるのよ。」

ねえーと云つた調子で、鏡の横から、出來るだけ大きく見開いた露はな眼で、彼女は僕の眼に見入つてきた。それに自然とうなづいて、僕はまた腰を据ゑた。

美代子の痙攣は度々起つた。照代はその度に立つていつた。僕はそこの長火鉢と箪笥との間に、メリンスの坐布團を二枚並べて小さく寢そべつた。ばあやさんが搔卷（かいまき）を着せてくれた。そして、木目の飛出した天井板や、ごて〳〵飾り立てられて眞赤に見える神棚や、お師匠さんの手に渡つてる照代の長い髮や、どこからかの電話や、美代子の痙攣や、赤

つぽい電燈の光や、そんなものを斷片的に意識しながら、出來るだけ縮こまつてると、いつのまにかうとうとゝ眠つたのだつた。

眼を覺すと、長火鉢の向ふから、照代がにこにこ笑つてゐた。丸髷に結つてゐた。

「どう、似合つて。」

僕はたゞ不思議な氣持で見守つた。

「いゝのよ。今晩はどうせお座敷に出られやしないんだから。それで、氣が變つちやつて、こんな風にしてみたの。」

艶やかな髮をかしげて見せた時、僕は急に左手を打振つて、どたん／＼とやつた。

「痛い……おゝ痛い……。」

「しびれ。まあ大袈裟に、美代ちやんより辛棒がないのね。」

彼女が笑つたので、いやその拍子に氣付いたのだが、隣の室から、皆が僕の方を見てゐた。見馴れない丸髷の年増と、お座敷着をきた照次と、それから美代子までが、ぽーつと上氣した細面の顏を枕につけて、無心の眼付でこちらを見てゐた。そして皆一度に、いらつしやいと挨拶したやうな風だつた。

僕はすつかりてれてしまつて、坐り直して眼をこすつた。それから火鉢越しに乘り出して聲をひそめた。

「誰、あの人。」

「知らないの。おつかさんよ。そら、あたしが元一緒にゐた……。」

「あゝ……。」

「ね、どつかへいきませうか。……連れてつて頂戴。」

「だつて……。」

「いきませうよ、ね。」

そして彼女はまた、こんどは近々と、一杯見開いた露はな眼で僕の眼を見入つてきた。

「だつてさ……病人があるのに……。そんな薄情な人は知らないよ。」

「いゝわよ。……ね、いきませう。おつかさんと美代ちやんとがいゝと云つたら、いゝでせう。」

だが、その時また、美代子は痙攣を起した。照代は飛んでいつた。

「お味噌の灸をすえると、ぢきになほつてしまうんだがね。」

おつかさんはそんなことを云つて、痛みの去つた美代子に向つて、熱くも何ともないからと說き勸めた。

ばあやさんが小皿に漉味噌を持つて來た。おつかさんはそれで、昔の二錢銅貨くらゐの平つたい團子を拵へ、それから、艾（もぐさ）をまるめて小指の先くらゐのものを幾つも拵へた。

「これをお臍の上にすえるんだよ。お味噌が熱くなるまで辛棒するんだよ。」

僕は襖を閉め切つた。

味噌灸が初まつた。が途中で、美代子は泣き出した。

「いやよ、もうそんなものはいや。痛い……うーむ……痛いわ……冷くつて。」

皆でそれを押へつけて、それからひつそりとなつた。

暫くたつた。ぱつと襖が開いた。照代がつゝ立つてゐた。

「何をぼんやりしてるの。」

ちらと見ると、おつかさんは味噌の團子と芝の團子とを兩手に持つてゐた。僕は不意に可笑しくなつた。

「そりやあ冷いでせうな。お膳の上に味噌をのつけては。」

「ですからね、」とおつかさんは眞顏だつた。「熱くなるまで辛棒すれば、ぢきになほるんですよ。」

「だつて、お膳の上に味噌おやあ・・。」

照次がくゝつと笑ひ出したのが初りで、照代も僕も一緒に笑ひ出した。おつかさんは眞顏を崩さなかつた。その光景を、いつのまにかうつとり眼を開いて、美代子がぼんやり眺めてゐた。

照代はもう箪笥から、着物だの帶だのをやたらに取出してゐた。

「一寸・・・屆けといたの。」とおつかさんが尋ねた。

「えゝ。」

「あたし、留守してるわ。」と美代子が云つた。

「えゝ。おみやげを持つてきてあげるわ。」

そして、僕は照代とそこを出た。

タクシーの中で、照代はこんなことを云つた。

「昨夜夜通しお酒の相手をして、それで冷えたのよ。寢てりやぢきになほるわ。あの通り元氣ですもの。先刻（さつき）だつて、髮をあげるつて起き上つたくらゐだから。そして、これで寢ついたら、ねえさん、あたしまた借金がふえるわつて、さう云ふのよ。可哀さうね。」

「うむ。」

僕は氣乘りのしない返辭をした。ちらちらと見える街路の灯が美しかつた。

僕達は淺草に行つて、何か食べて、活動か芝居を見るつもりだつた。

「どこにしませう。」

「さうね、どこでもいゝや。君の行くところに默つてついていくよ。」

「さうね。今日はあたしの云ふ通りよ。」

そんな風で、タクシーは千束町の四辻で止つた。そして僕達は狹い石疊の露次をはいつていつた。遊くのそんな家を照代が識つてるのが、僕には意外だつた。

紋子

これから先は、僕も少し話しかねる。またよく覺えてもゐない。

で、簡單に云へば、僕達はそこの二階で、料理を取寄せて酒を飲んだ。僕も彼女も醉つていつた。そしてはしやぎ出して、それがいつのまにか、彼女の惡口になつた。美代子が病氣で苦しんでるのに、外に出て酒を飲むなんて怪しからん。とそう僕は彼女をなぢり初めた。全く不人情な奴だ。と彼女も彼女自身を罵つた……半分本氣に。そして二人で何やかやと、彼女の惡口を云つた。さうしたことが、僕にも彼女にも快かつたらしい。惡口の對象はもう彼女ではなかつた。誰でもよかつたのだ。そして、その後でふつと淋しくなつて、默りこんで、他の室に移つた。許してくれ……とかう云ふのは、お前に向つてぢやない。いや、誰に向つてでもないんだ。

その家から出たのは十一時頃だつた。途中で小間物店に寄つて、おみやげを買つた。おつかさんや照次や彼女自身の

ものは、みなしるしばかりの一寸した品だつたが、美代子にだけはちやんとした物を揃へた。彼女も美代子の半襟や鹿子の柄の見立に熱心だつた。

彼女が送つてきてくれといふのを、僕は頑として斷つた。

「あなたは、ほんとにやんちやね。」

「あゝ、やんちやだよ。」

そして僕達は距てのない微笑を交はした。

彼女はおみやげと幾許かの金を持つて、タクシーで歸つていつた。

吾妻橋のほとりは寒かつた。風はなかつたが、それでも寒い空氣が川の方から流れよつてきた。

何といふ淸楚な感じだ。これぢや駄目だ。もつともつともぐつてやれ。

僕は北の方の一廓に向つた。殆んど不案内な土地だつたけれど、電車でいつて後は歩いた。そして、奥の方の小路を、小店を小店をと物色して廻つた。

「へえ、旦那、如何で……もう十二時近くですから、半夜のところで、御都合でどうにも……へえ、二兩半、他には一切頂きません。」

「そいつあ有難い。今夜は觀音堂の椽の下で寢るのかと思つた。」

「へゝゝ、御冗談……。」

僕はふらふらと梯子段を上つていつた。

そしてその晩は、北に窓が一つあるきりの何にもない長方形の室で、一人で眠つた。

「君はいゝからどつかへ行つてこい。たゞ、風邪をひかないやうに布團だけは賴むぜ。」

山出しの女中と云つた恰好の女は、布團を餘計に一枚持つてきて着せてくれた。

財產がなくなつて、自分の腕で稼がなければならなくなつても、俺は力强く働いて見せる、とそんなことを、僕は懐中無一文の氣で考へてゐた。

そして翌朝九時頃までぐつすり寢込んで、それからそこを飛出して、稻毛へ行つた。

照代のことで、僕の懐中は實際淋しくなつてゐた。翌日のことが心細かつた。で、午飯をぬきにして、晩に酒を一本だけつけて貰つた。

そこの旅館の、丘の松林の中にある離屋を、お前はよく知つてるね。季節外れのこと故、靜かすぎるほどだつた。その一室で、僕は時々遠く海に眼をやるきりで、死んだ者のやうになつて半日を過した。風呂にはいつて頭まですつかり洗ひ淸めて、善良な女中を相手に淋しい夕食をして、あたりに客もないひつそりした離屋の、朱塗りの餉臺の上に兩肱をついて、僕はぼんやり昨日からのことを、前々からのことを、思ひ起してゐた。そして、うつかりすると照代と一緒に來る筈だつたことを考へて、淋しい微笑が頰に上つた。

羽の長い蚊が一匹、十一月の末といふのにまだ生き殘つて、餉臺のふちを力無く這ひまはつてゐた。そいつがひよいと飛び上つておいて、僕の鼻の先にとまつた。

僕は一寸苦笑したが、それから變に可笑しくなつた。

から話してくると、お前にも大體は分るだらう。僕はいくら自分の心にちやんと聞いてみても、慘めだとか汚らはしいとか自責の念とか、さういつたものを少しも感じなかつたのだ。それも普通の道德的な外面的の意味でぢやない。心の直接の裁きに於てなんだ。そのくせ、お前も知つてる通り、僕は本質的の道樂者でもない。こいつあおかしい、俺の本體は何なんだ、とさう僕は獨語したものだ。そしてぼんやり考へた、何もかもみな相對的なんだ、事實そのものも、人の心も、感情も思想も、人事はみな相對的なんだ、絕對的なものなんか何もありやあしない……とね。だから、拘泥しちやいけない、即きすぎちやあいけない……。

幼稚だね。だが分るかい。いやよく分るまい。僕自身にだつてよくは分らないんだからね。

珍らしく早めに起き上つて、椽側の日向にぼんやりしてゐると、松の影が薄すらと匂つてる庭に、大きな濃い影がぱつぱつと飛んだ。おや、と思つて眼を擧げると、鳩が二三羽松の梢に戲れてゐた。冷かではあるがしみじみとした朝日の光だつた。丘の裾から遠く霞んでる沖合まで海は湖水のやうに凪いで鈍く光つてゐた。處々に繫ぎとめられてる小舟が、如何にも靜かだつた。

その景色を胸深く吸ひこんで、僕は東京に歸つて來た。

お前は驚いたやうだつたね、僕が餘り早く旅から歸つて來たので、そして歸るとすぐに、母に金をねだり初めたので……。

母は僕の顏ばかり見てゐた。

「旅費が足りなかつたんです。」と僕は云つた。「だけど、お母さんのところに無けりやいゝんですよ。僕が稼ぐから……。なあに、働きさいすりやあ……。それより、腹が空いちやつた。御飯を食べさして下さい。」

そして、飯を食ひながら、母が用で立つていつた間に、僕は云つた。

「稲毛に連れてつてやらうか。」

「だつて、」とお前はちつとも乗つてこなかつた、「兄さんは行つて來たばかりぢやないの。」

「それがね、實は、照代つて女と一緒に行くつもりだつたんだ。が、どうも……。だからその代りに、お前を連れてつてやらう。」

「いやよ、そんな……。」

「だけどお前は、どうせそのうちには、ちつちやな家庭のちつちやな花嫁として、瀧地と一緒に行くやうなことになるんだらう。だからその前に一度、僕が連れてつてやらうか。」

お前はみな聞かないうちに、眞赤になつて俯向いてしまつたね。僕は微笑したよ、ずるい微笑だつたかも知れないが……。

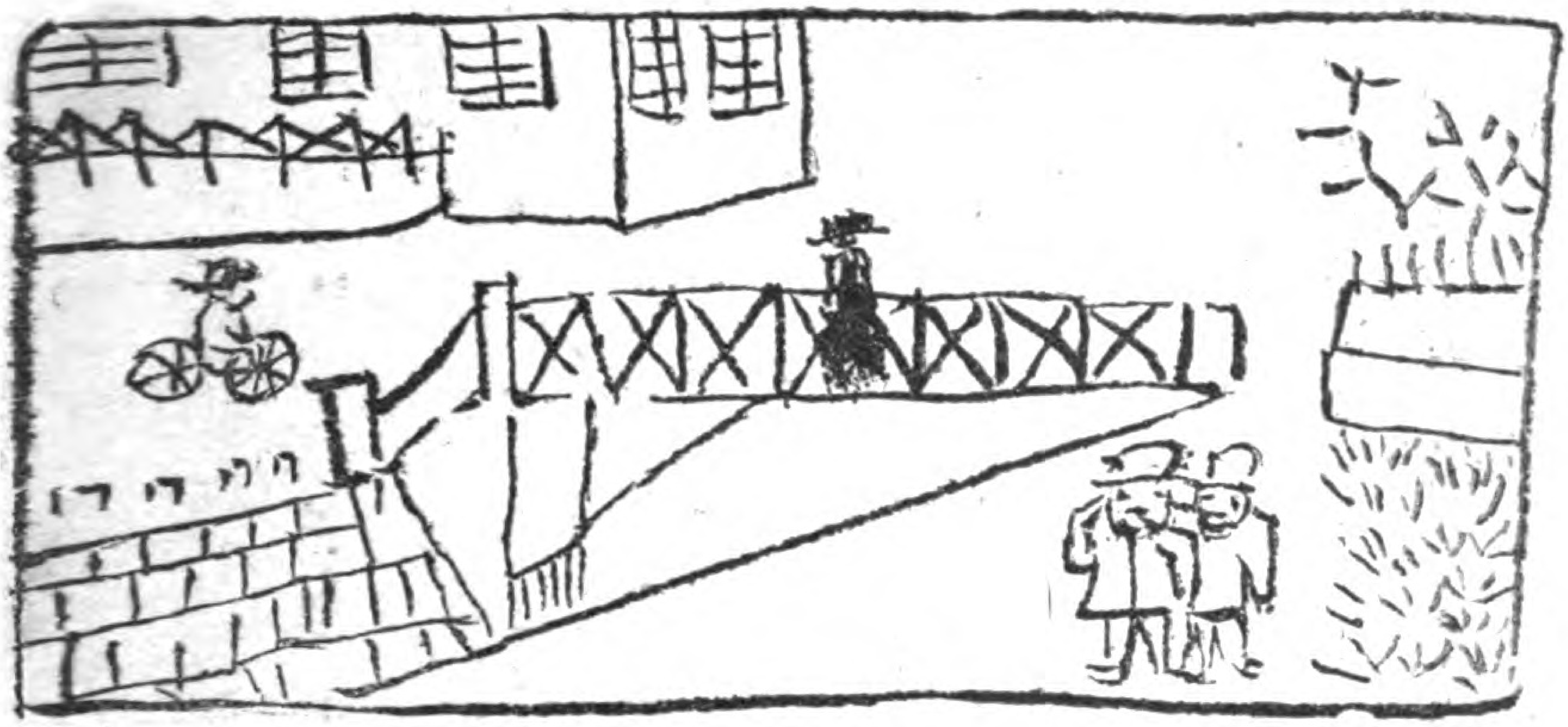
實際、稲毛に行くことなんかは、全くでたらめの話さ。こんどの日曜日につていふやつさ。だけど、これで根性は確かなつもりなんだ。食後、坐敷の椽側の日向で新聞を讀んでると、お前は用もないのにやつて來て、庭の方を見るふりしてぢつと坐つてゐたね。後のために何か意見でもするつもりかしら、とさう思つたものだから、僕はわざと知らん顔をしてやつた。が餘り長くお前が默つてゐるので、ふと顔を擧げると、お前は眼に一杯涙ぐんでゐる。そのお前の顔の、黒い睫毛と細い鼻筋とが、如何にも淋しかつた。

「何を涙ぐんでるんだい。」と僕は云つた。「心配しないでもいゝよ。僕はひどくコスモポリタンだけれど、心の据ゑどこは知つてるからね。」

するとお前は、神經質に頭を振りながら、本當に泣き出してしまつた。僕はぐつとつまつた。

「いゝよ、分つてるから。……そんなことぢやない。だけど……眞晝間泣く奴があるものか。笑つた方がいゝよ。

それは僕の本音なんだ。泣くことなんかありやあしない。馬鹿だねえ。



戯曲

大谷刑部（三幕）

吉田絃二郎

時　慶長五年晩春の日の午後

場所　洛北大原の里三千院

登場人物

大谷刑部少輔吉繼　四十二歳

大谷義勝　その子　二十歳

大谷頼繼　その子　十六歳

僧祐玄　その甥　十七歳

湯淺五助　三十歳くらゐ

松雲上人　七十歳くらゐ

平塚因幡守爲廣　四十七八歳

慈然坊

その他番僧、小者、侍、大原女等

三千院本堂。黑ずみたる太き圓柱數本と、古びたる須彌壇と、阿彌陀佛のみにて、古刹の氣分をたゞよはせてゐる。天井などは見えず。何の裝飾もないが、簡素にして均齊の美を持つた圓柱數基の配置がきはめて沈靜な感じをあたへる。正面の香爐からはかすかに香煙が漂ふてゐる。

廻り緣になつてゐて、正面に階段がある。

上手に比叡の裾山、下手に寂光院あたりの山が見える。

遲咲きの櫻が時々どこからともなく散つて來る。

廢墟のやうな靜けさ。

五助　下手寄りの緣側で春の日影を浴びながら、しきりと黑革縅の鎧の手入れをしてゐる。直ぐ後ろの圓柱には長卷が立てかけられてある。眉濃き、凜々しき若武者。裏山に鶯鳴く。

舞臺しばらく空く。

下手より若き大原女數人花を頭にいたゞきて登場。しづかに上手へはいる。

五助　鎧の手入れをしてゐる手をちよつと休めて、つく〴〵眺めながら。

かうやつて殿さまの鎧を見てゐると何となしに武者振ひがするやうだ。晉州城の戰ひであつた。攝津の守さまの御本陣までが總壞れに壞れて、雪崩れを打つて大川に逃げ込んだ時であつた。殿さまが横合ひから二千の軍勢をお引きつれなされて、あの村雨にお召しなされ、眞つ先きに明の大軍の眞ん中に斬り込んで美事寄手の奴等を喰ひ止めなされた時の、あのお姿は、阿修羅王といはうか、鬼神と申さうか、わしもあの時は御馬前に立つて御轡を取つてゐたが、思ひ出

してもぞくぞくする。あの時殿さまがお召しなされたのがこの黒革縅であつた。

ふたゝび鎧を取り手入れをはじめる。

あゝあゝあの時のやうな戰らしい戰にはあれつきり出逢つたことがない。去年も太閤さまがお亡くなりなされた當座は、やれ前田と徳川が何うだの、石田さまと加藤福島がどうだのと、ひところは伏見の大名屋敷も蹄にかけられることかと、久し振りに腕が鳴る思ひもしたが、それも噂ばかり、天下は靜謐、太刀は錆びる、腕は鈍る、いやもう、これぢや倦怠くつてうんざりする。

僧慈然坊　上手より登場

あゝ鎧のお手入れでございますか？

五助　まあよいお天氣ぢやのう。鎧の手入れには持つてこいだ。

慈然　それにしてもさう鎧のお手入れをなさいますのは、また厭な戰でも始まるのではございませんか？

五助　今に、戰でも始まるので鎧の手入れをするのなら、張合ひもあるが、もう戰は當分おしまひだ。それに家の殿さまはこのころ何を感じなされたか、暇さへあればこのやうにお寺をお訪ねなされたり、お城においでになつてもいつも浮かぬ氣で考へ込んでばかりおいでになる。

慈然　それは御病氣のせいでもありませう。

五助　なるほどそれもあらう、しかしまだあのやうな御病氣が出ない前から大分考へ込んでばかりおいでになつた。今度も大阪においでなされて、無理に御奉行のお役目も御辭退なされ、いよ〳〵敦賀へお歸りといふ道すがらお伴の連中はみんな一月も前に大阪を立たせてしまうて、わしと小者五六人だけをお連れなされ、こゝの和尚さまが年來のお馴

染だから今日でもう二十幾日の御逗留。あのやうに朝なら、夜なら、奥の方でお坐りなさつたきり、眼を一つお開けなさるのでもない。どうなさるつもりなんだかなあ。

慈然　まことに御殊勝なことで、今時の武骨いつぺんな戰人たちには眞似もできぬことでございますよ。

五助　何か知らぬが御自分ではお悟りでも開かうといふお考だらうが、わしのやうな人間にはから面白くもない。このほども大阪からの歸りに醍醐へ立ち寄られた時はちやうど花のさかりであつたが、花を見ようともなさらぬ。花を見て浮かれてゐる人たちを御覽なされて、おれもあのやうになれたらのう！とたゞ一言わしに仰せられた。あれほどの殿さまが何でまあこのころのやうな御心になられたのか譯がわからぬ。こゝにお越しなさる道すがらも畜生塚にお立ち寄りなされ、馬をとゞめて小半時、默然としてをられた。

慈然　畜生塚と申せば、關白秀次さまを始め三十幾人のお姫さま方やお子さま方のあの時のむごたらしい殺されやうは今に思ひ出してもぞつといたしますなあ。（低い聲になりて）刑部さまの御身内のお方もあの時……

五助　（聲をはゞかるやうに）お兄さまだ。祐玄さまの御父さまだ。

慈然　さうでしたなあ。お氣の毒なことで。しかしあれを見て浮世の悟りを開かぬ者はございますまい。

五助　はゝはゝは……法師は法師らしいことを申す。あれしきのことで悟りが開かれるくらゐなら朝鮮で切り取つた五千、一萬の人間の首の山、耳の塚が見せたかつた。そしたらお主たちはどんな悟りを開くだらう。おれたちは血を見ればさらに血の海を湛へて見たくなり、骨を見ればさらに骨の山を築いて見たくなつて、腕が鳴る。それが關東武士ぢや……それにしても何時戰があることやら。

慈然　それは恐ろしい妄語ぢや。お前さまは立派な男振りぢやが、關東から一人で刑部さまのもとへ流れて來た侍ぢ

やと聞いが、成る程心は鬼ぢやなあ。

五助　はゝはゝは……………鬼かッ！まあそんなものだ。父斃るれば父を踏んで敵を伐り、子、討たるれば子を蹴つて敵を屠るのが關東武士の習ひだ。

慈然　それにしても刑部さまはよくよくの御發心であらう、日も夜もあのやうにお坐りなされた切りで…………

と奥の座敷の方を見る。そこからは吉繼が坐つてゐる姿が見える意。

五助　日本一の豪の者と謳はれなされた殿さまが、法師などの眞似をして、禪三昧に耽らるゝ御心がどうしてもおれにはわからぬ。御自分一人ならばまだしも、甥御の義春さまを一昨年(おとゝし)の秋であつたのう？

慈然　祐玄さまが御落飾なされたのは、ちやうど太閤さまがおかくれなされた秋の鞍馬の火祭の日でございました。

五助　さうであつた、このお寺にお入れなされてあのふさふさとした黒髪をすつぱりとお剪らせなされたのは。さすがのおれもあの時は思はず涙を落した。

慈然　今では祐玄さまも立派な善智識でございます。

五助　何か知らぬが、おれは法師は嫌ひだ。あゝいやだいやだ、どつちを向いても抹香くさいものばかり、氣が滅入りさうだ。殿さまもよい加減にして敦賀へおかへりになればよいが、こんな陰氣なところに永居をしてゐたらろくなことはない。さうだ、村雨を引き出して久し振りに一汗かゝせてやらう。

鎧をそこへ置いたまゝ、椽を飛び下り上手廐裡の方へ走る。

慈然　はゝはゝは、何時も元氣なお方ぢや……

そこらを見まはしながら須彌壇の前へ輕く頭をさげて同じく上手へ入る。

同。

のどかに鶯鳴く。

やがて庭から馬を曳き出す物音。蹄の音。

大谷刑部　狩衣の上に黒い袈裟を纏けてゐる。顔色やゝ蒼白。眼を病み、いたく憔悴したる態なれど、まだ癩の病は外に見えるほどにはあらはれてゐない。どことなく颯爽たる風がある。太刀を提げ須彌壇の左手より小急ぎに出づ。不圖、長卷及び鎧に眼をつけ、緣端に立ちてしばらく馬の蹄の音に耳を傾むける。蹄の音次第に遠ざかるやがて消える。

ははあ五助であつたか………。

不圖己れの心に氣付き、心を叱るやうにして、長卷と鎧を抱へて奥へ持つて行き、投げ出してかへる。

いづこの乘り手、誰れの逸物と、つい蹄の音に心を奪はれてしまつた。我ながら恥づかしいことぢや。武門を捨て、世を捨てようと思ふたのは、太閤殿下御在世の折からであつた。命もいらぬ、戰陣の功名もいらぬ。今はたゞ靜かに己れたゞ一人の眞(まこと)の相(すがた)を見たいために、生死の一大事を悟りたいために、山にも入らう、妻子をも捨てようとまで思ひつめたに、このあさましい執念では、とても眞(まこと)の智識は得られまい。

悵然として佇む。

老僧松雲　須彌壇の左手より登場。

刑部殿そこへおいでゞございましたか！

刑部　しづかに振りかへり

これは老師、面目次第もございませんが、五助が乘つた馬の蹄にまたまた昔の妄執の炎が燃えたと見え、この體でございますはゝはゝは………

寂しく笑ふ。

松雲　はゝはゝ………悟りなきが悟りでございませう。

刑部　人間の世には悟りと申すものはないものでございませうか？

松雲　刑部殿ほどの大智者が！

刑部　お恥しう存じます。

松雲　何の、はゝはゝは………。それはそれとして何と申しても今日は落飾なさる御決心でございますか？

刑部　あなたに得度していたゞきますればこの上もないことゝ存じます。

松雲　それはお易いことでございますが、また御殊勝なお心掛とも存じますが、あたら刑部殿ほどの大將を桑門の中に葬つてしまひますのは、出家の身ながら惜しいやうな氣がいたしますので。

刑部　いや、何も殊勝な心掛で髮を剃り落さうと申すのではございません。昔西行法師や熊谷蓮生坊は世の無常を觀じて出家いたしたと承りますが、わたくしのはすこし我儘な願ひからでございます。はゝはゝは……。

寂しき笑ひ。

松雲　………………。

刑部　十六歳、因州鳥取の城攻めを初陣に、大友家に仕へて十幾度の戰場を驅け廻りました。大友家滅亡の後は石田殿の御推擧で、太閤殿下の幕下に參じ、朝鮮の役に至るまで凡そ戰といふ戰に一度も後れを取つたこともございませぬ。幾十度の戰場で血の川、屍の山を越えても、無常とも無殘とも思ひませんでしたが、この二三年不思議な疑ひの雲がわたくしの心の奥に湧いてまいりました。

松雲　なるほど……

刑部　小西攝州と加藤肥州が先陣爭ひから忠州の城下で劍を拔いて果し合ひをしようとしたことがありました。傍には傷手に呻いてゐる二千ばかりの味方が朝鮮の寒風に凍へてゐました。一將功を爭ふがために、萬卒の死を顧みないのでございます。しかし、それは小西、加藤ばかりではございませぬ。わたくしはじめさうだつたのでございます。あの時のことが動機となつたといふわけではありませぬが、ともかくあの凱旋の都入りほど暗い心で歸つて來たことはありませなんだ。わたくしは何か惡いことでもして歸つて來たやうな氣がいたしました。忠州をはじめ朝鮮の寒風に捨てられてゐた幾萬といふ味方の人たちの屍が、わたくしの眼にはつきりと燒きつけられてをりました。わたくしは緋緘の鎧を捨てゝ、せめて法衣を身に纏ふつもりで、あの黑革緘の鎧を着て、心に珠數を懸けて、都入りをいたしました。

松雲　まことにお見上げまうした御心掛けでございます。

刑部　いや、褒められては痛み入ります。が、あのころからわたくしは不圖今まで人間の一大事について忘れてゐたことに氣がついて來たのでございます。戰場に立つからは死ぬ。死ぬるは覺悟してをります。だが、武士の覺悟にはまだ未練があります。己れ死ぬまでも敵の息の根を斷つて死なうとする妄執がございます。わたくしはそのやうな武士の悟りでは滿足ができなくなりました。死ぬべきものならば從容として死なう。敵も無し、味方も無し。恩怨水の如く、生死一如、生死の相を突きつめて後に死にたうございます。殊に、恐れ多いことでございますが、太閤殿下御他界の砌、わたくしはつくづく天下取りのはかなさについて考へさせられました。たとへ天下は取らせられましても、殿下の御心の奥のお寂しさを推察いたすと天下取りのあさましさが身にしみまして……

松雲　いかにも……

刑部　天下を取らせられた日はじめて殿下は、御心の奥の空虚さにお氣付きなされたでございませう。わたくしは領

地も欲しうはございませぬ。天下も欲しうはございませぬ。たゞ欲しいと思ふものは、人間一人、己れ一人の眞の相を觀る力でございます。物足らぬ心の奥を充たしてくれる不壞の知識でございます。わたくしの慾はちと大きうございますはゝはゝは……(寂しき笑ひ)それゆえに奉行の職も捨て、城も捨て、家も捨て、師のお導きにあづかりたいのでございます。

松雲　御心中をお察しいたせばいかにもと存じます。が、まだ天下は靜謐とまうすわけでもなし、いつなんときふたゝび天下分け目の戰ひが起らぬものでもなし、刑部殿ほどの大將一人殺すは天下のためにどれほどの悲しみか知れませぬ。拙僧としてはどうもあまり大きな魚が飛び込んで來たやうで、拙僧の狙ではちと何とも料理いたしかねますぢやはゝはゝは……左樣な發菩提心はまたとない尊い機緣とは存じまするが、出家をすゝむべき役目の拙僧も、刑部殿のあまり頼母しい武者振りを見ては、出家さすのが恐ろしいやうでございます。

刑部　ひよんな戯れを。天下だの、戰の功名だの、そのやうなことは遠い世界の夢、若い日の迷ひであつたやうに思つてをります。今、思ひ切つて發心せずば永劫に發心の機もございますまい。人一倍、猛り易く、憤り易く、燃え易い心の炎はなかなかのことでは消すすべもございません。このやうな不具にも近い病にとりつかれ、五欲の世界を見る眼さへ日に日に暗くなりますのも、自然御佛の御慈悲かと思ひまする。わたくしも四十二歳、五欲の世界は見飽きました。

松雲　さうは仰せらるゝが、今にも天下分け目の戰となれば天下は德川殿の物になるか、上杉殿の……

刑部　はゝはゝは……また天下を捲ぎ出されますか、天下が欲しければ德川にでも上杉にでも勝手に取らせてやるが宜しうございます。わたくしは天下以上の大きな慾に生きたうございます。はゝはゝは……早速、御仕度をお願ひいたします。

松雲　刑部殿の御氣質では…………ぜひもなく存じます。

さすがに愁然として。

祐玄　美僧、三寶の上へ剃刀を載せて須彌壇の右より出づ。僧一、僧二、手水桶、經机等を持ちて登場。よきところに置く。僧はすべて黒衣。

松雲　須彌壇にすゝみて香を焚く。

刑部　默然として須彌壇の前にぬかづき、坐る。

舞臺しばらく空く。

遠くにて馬の嘶く聲、蹄の音。

刑部　きつとなりて正面を見、蹄の音に耳を傾ける。

不圖、我れにかへり、蹄の音を聽かざるかのやうに須彌壇の方へ向き直り、合掌する。

松雲　祐玄の手より剃刀を取る。

一座肅然。祐玄法衣の袂にて涙を拭く。

五助　汗を拭きつゝ上手より小急ぎに登場。一座の光景を見て椽の上へ走り寄る。

殿さま、あんまりでございます……

涙を拭く。

殿さまお一人はそれでお宜しいか知れませんが、若殿さまはじめ敦賀一城の方々の明日からを何とお考へになります？

刑部　振りかへりて

言ふな、何事も。敦賀一城が何ぢや。敦賀一城はおろか、わしの今の心には天下もない。

五助　敦賀一城はおろか、天下もないと仰せられますが、この二十幾年、あなたさまを天にも地にもたゞ一人の頼りとして、あなたさまの御馬前に立つて、朝鮮の涯までもお伴をして、異境の地に屍をさらした人たちの妻や子の涙を何とお考へなされます。殿さまはお一人で勝手な生き方をなさらうが、殿さまお一人を頼つて戰場から戰場へと、生き殘つてまいつた二千人の男たちを、殿さまはお見捨てなさる氣でございますか。

刑部　背を向けたまゝにて

五助ゆるしてくれ。わしにはわしの道を歩ませてくれ。わしは今日まで人々のためばかりに生きて來たやうぢや。この體ではわしの命ももうさう長いこともあるまい。せめて短いこの後の月日だけでもわし一人の道を歩ませてくれ。

五助　さう仰せられますれば、なるほど、殿さまほどわたくし等におやさしい殿さまはなかつた。敦賀の衆は武運にかなうた男ぢやと、どこへ行つても羨ましがられたものでございます。關東の故郷を捨てゝわたくしが敦賀へまいつたのも、あまり殿さまが慕はしかつたからでございます。敦賀の衆は一人でも御馬前で死ぬるのを心の底から喜んでをらぬものはございません。殿さまほど思ひやりの深い大將がどこにをりませう。考へて見ると成るほど、わたくし等のためばかりに殿さまは生きてゐてくださつたのでした。一日でも殿さま御自身のためにお生きなされたことはなかつたのだなあ。それを思ふと………

刑部　振りかへりて祐玄、五助を見る。

もう何も言ふてくれるな。では、わしの行く道を歩ませてくれるか……。ゆるしてくれ。

松雲　刑部の頭の上へ剃刀を持つ。手顫く。

刑部　蒼白の顔。やゝ暗き影。

松雲　ぢつと刑部の顔を見つめる。手いたく顫く。

刑部　どうぞ一刻も早うお剃り下さい。でないと、一刹那の後に、わたくしの心にどのやうな迷ひが起らぬともかぎりませぬ。人間の心は、己れ自身にもわかりませぬ。

松雲　己れの心がわからぬとおなじく、己れの運命もわかりませぬ。今日、この刹那、日本一の弓取りをあたら名もない沙門に追ひ落す運命の手が、拙僧のこの皺び果てた痩せ腕にあらうとは夢にも思ひませなんだが。

刑部　では、どうぞ……合掌瞑黙する。

諦玄三寶を落す。泣く。

うしろ向きになつてゐる刑部の背がかすかにすゝり泣くもののやうに揺れ動くのが見える。

あわたゞしき跫音。番僧一人下手より登場。

番僧　越前からのお越しでございます。

五助　あの越前の方々が?

大谷義勝、頼継、平塚爲廣出陣の装ひにて部下を率ひ下手より登場。本堂の光景を見てみな〳〵驚きたる態。

義勝　父上、内府よりの御書面でございます。

刑部　内府よりの御書面ッ!

義勝　はい。

書面を取り出して父へ渡さうとする。

刑部　いや、今のわしの身には内府の書面など何のかゝはりもないものぢや。

爲廣　他の書面ならば兎も角、一刻を爭ひまする火急の事件出來、それによつて内府よりのお召しでございます。

刑部　火急の事件とは?

松雲目くばせして、祐玄、番僧等をつれて退場。

爲廣　去年九月奥州の新領へ歸られた上杉殿が、内府よりの再三の御督促にもかゝはらず、何彼と言葉を構へては御上洛なく、却つて直江山城殿より内府に對して手痛い御狀を送られましたさうでございます。のみならず諸國の浪人を集め、白河口、津川口、仙道口の寨を固め、いよ〳〵御謀叛によつて、不日内府自身伏見御發足の由、急の御布令、當家にはわざ〳〵井伊兵部少輔殿御使お見えなされてございます。

頼繼　父上、北陸、中山道かけて、伏見、京、への道といふ道は國々の大名たちの人馬旗指物で、埋まつてをります。父上早う出陣が致し度うございます。

刑部　昨日までのわしであつたら、たとへこの眼がつぶれやうとも、この身が腐れ、たゞれやうとも、明日といはず、今日この場から出陣して上杉殿の塞へ一の矢を射込んだであらうに。もう今となつては拔け駈けの功名も欲しうはない。矢叫びの音も聽きたうはない。わしは今はじめて百千の寨を拔くよりも、一手に天下を握るよりも、なほ〳〵大きな仕事を思ひついたのぢや。徳川殿が呼ばうと。たれが呼ばうとわしはもう戰場へはゆかぬ。

爲廣　一度かうと思ひつめられた上からはどうでも仕遂げないではお止めなさらぬ御心、とやかく申すも無益でございませう。が、たゞ一言。今になつて髮を落し、太刀をお捨てなされたら、やれ刑部少輔殿は上杉勢との戰ひを恐れて桑門に逃げられた、やれ眼が不自由なのをたてに戰場を捨てられた、まだ臆病風に吹かるゝほどのお齡でもないにと、かう後ろ指をさゝれなされたら………

刑部　(きつとなりて。)吉繼は死を恐れて法師になるのではない。あの悲慘な馬蹄の役をお忘れか。たゞ一人最後ま

で踏みとゞまつて、敵の矢玉の雨の中に、笑ふて馬の頭を立てゝゐたのは誰であつた？、戰ふことが人間一生の大事なら、たとへこの兩眼が盲ひても、この腕が腐れ、兩脚がたゞれても、息あるかぎりは楯に乘つても、拔け駈けの功名を爭ふて見せよう。十六歲の初陣に敵の大將の首搔き切つてこの方、一度でも一番槍の功名を人にゆづつたことのない吉繼、殊にこの醜い姿になつて、何時死ぬるかも知れぬ身で、何の命が惜しからう。（默然と）

賴繼　父上、わたくしも上杉方の大將の首搔き切つて父上にも劣らぬ初陣の功名をいたします。

刑部　（いかにも父親らしきやさしき表情にて）お前は初陣であつたのう。齡もわしの初陣と同じ十六。

賴繼　父上は白木の鞍に乘つて初陣をなされたさうに承りましたが……。

刑部　祖父さまが貧乏だつたので、馬だけは飼ふてあつたが、いつもわしは裸馬に乘つてゐた。戰場には裸馬といふわけにもゆかぬのでは、はゝはゝ……………

刑部次第に賴繼等に惹きつけられる意。

幸に白木の鞍一つ百姓の家から押し借りして、母上に墨をすつてもらうて、わしは自分で蝶の繪を鞍に書いた。その鞍で、因州の城攻めに乘りましたのぢやはゝは……三郎お前もわしにあやかり上杉方のよき大將を討取つてかへれ。天下を對手に上杉殿は氣味のよい戰をする人ぢや。初陣としてこの上もない戰ひぢや。敵は謙信公以來の名將甘粕備後、安田上總、杉原常陸、千坂對馬……何れと組んでも敵として不足なき人々ばかりぢや。あゝそうぢや、お前の初陣に何か祝ふものがなくてはすむまい。五助、何か引出物を……。

五助　はい。」

刑部　あゝ何彼といふことはない、わしの太刀を持て。

五助　太刀を持つて來る。

刑部　この太刀を引出物に。長光ぢや。

自分で頼繼が佩いてゐた太刀を解き、長光の太刀を佩かせてやる。

うむ、これで三郎、武者振りがずつとようなつた。太刀を敵るべく後に引くやうに佩くがいゝ。うむさうぢや。馬上に敵と組んだならば、下に馬ありと思ふな。生命ありと思ふな。身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれぢや。

つくづく不自由な眼で頼繼の顔を見る。

上杉殿の猛者と組むにはやゝ纖細い腕ぢやのう。二郎はどうぢや。二郎は朝鮮の役でもわしと一緒に轡を並べて走つたので、戰さの駈け引きも分つたやうであつたのう。うむ……三郎は初陣ぢやが……。

頼繼　わたくしは一人で初陣いたします。

刑部　お前は父に連れられもせず、一人で初陣するか………お前は子供の頃から纖弱い性であつたが。（ぢつと考へる。）

頼繼　天晴、初陣いたします。武運惡く討死いたしますとも、武士らしく討死いたします。

刑部　武士らしく死ね。

頼繼　はい。

刑部　頼繼の肩や腕をさすりつくづく案じたる裏。

生きてかへると思ふな………引き組んでいさぎよう討死せえ。

頼繼　はい。

刑部　冑の緒はお前が締めたのか？

頼継　はい、わたくしが締めました。

刑部　緩い！（結びなほしてやる。）

籠手の紐は？

これは固すぎる。もすこしゆるく……。（ふたゝび結びなほしてやる。）

どれ、二郎は？

義勝の具足をさぐる。

二郎は筋骨といひ、うむ……よく締めてある。籠手も……うむ太刀の佩き方も…………二郎、何事も二郎へ相談するのぢや。五助ッ！

五助　はい。

刑部　二郎への引出物は……うむ、わしの長卷がよい。あれを持て。

五助　長卷を持ち來る。刑部受取りて義勝にわたす。

蹄の音聞ゆ。

刑部　あの音？

小者下手へ走り、街道を見る。

小者　伏見へ急がるゝ大名たちらしうございます。あのやうに砂煙を立てゝ急いでをられます。

五助、この間に土器を準備し、三寶に載せて來る。

五助　御出陣のお祝だけなりと……

刑部　土器を取り、飲みて義勝、頼継、爲廣にまはす。土器を投げ砕く。

義勝　父上、お暇をまうします。

刑部　行け！因幡殿、二人の子供らのことお頼みまうします。

爲廣　御二方のこと御案じ下さいますな。

一座肅然。爲廣下手へ退場。五助、殘り惜しげに後を追ふ。刑部愁然として正面の階段に腰を卸してゐる。

間。舞臺やゝ薄暗くなる。

五助　下手より小急ぎに登場。

刑部　もう行つてしまつたか？

五助　はい、お二方さまともいかにもお嬉しさうに、馬の頭を並べてお出かけなされました。

刑部　さうであつたか。

五助　細川さまでございました。やはりすぐ後からすぐお通りでございましたが、お殿さまと若さまがたがお二方轡を並べておいでなされました。

刑部　細川殿もたしか御子息等は初陣であつたのう。

五助　はい、左樣でございました。それに……

不圖言ひにくさうに躊躇しつゝ

丹後少將さまも直ぐ後からおつゞきになりましたが、やはり若さまも御一緒に……

刑部　丹後少將殿もさうであつたか！

五助　はい………（袖口で涙を拭ふ。）

刑部　二郎と三郎が馬の頭を並べて行つたか！

五助　はい、何かお睦まじさうにお話しなされながら……。

刑部　三郎は繊弱いでのう……天晴れ武士らしう討死してくれゝばよいが……。

五助　…………………………

間。舞臺次第に暗くなる。刑部しばらく耐えきれぬやうに悶へてゐる。

刑部　五助ッ！馬を曳け！

子供らの行つた後を眺め、決然として首より懸けたる袈裟を裂く。

五助　あのお馬をッ？

刑部　馬ぢや！

五助　はッ！

刑部　わしは一足先に行く。後から追ふて來い！

須彌壇の後ろへ走り、黒革縅の鎧を抱へて出で、急ぎ下手花道へかゝり子供らの後を追ふ。

五助　階段の下に立ちたるまゝ呆然として見送る。

祐玄　黒き法衣にて御燈明をかゝげて奥より登場。

ちつと刑部の後を見送りながら、須彌壇の前に立つ。

幕

第二幕

時　第一幕より約三ケ月の後。七月十日の昔。

場所　江州佐和山城内書院

登場人物

石田治部少輔三成　四十一歳

蒲生備中　五十歳くらゐ

樫原彦右衛門　四十七八歳

渡邊宗庵　五十七八歳

大谷刑部少輔吉繼

その他侍女、侍等

上手寄りに、ほとんど何の裝飾もなき極めて簡素なる部屋。壁などは所々紙で張つてある。廻り椽。上手書院窓。椽側づたひに上手に茶室がある。茶室の一部分が見えてゐる。茶室と書院の間には梧桐が青々と茂つてゐる。時々湖の波の音がかすかに聞える。

下手寄りに、木立の間に佐和山城の出城の一部分が見えてゐる。さらにその後ろに比叡、比良、坂本あたりの山が湖をへだてゝ、見えてゐる。

石田三成　やゝ神經質な沈欝な顏、病み上りのやうな衰へが見える。質素なる裝。下手植え込みの中より登場。

渡邊宗庵　つゞいて登場。

三成正面よきところに腰を卸す。

三成　今日は御事多のところを御苦勞であつたなあ。

宗庵　いえ、實はこの三月。加藤さま、福島さま、黒田さま七人の方々と、あなたさまの間がうまくゆかず、あなたさまは佐和山城へ御引退、今日まで御閉門同様な御有樣、ぜひ一度佐和山へ參つてお見舞ひいたさねばと存じてをりましたが、つい何や彼と追ひまはされまして飛んだ御無沙汰をいたしました。一昨日、京への御使でございましたので、よきしをと存じまして、おわびかた〱參りました。

三成　いや、わしも三月、佐和山へ歸つてからは一歩も城外に出たこともないし、浮世を外の隱居暮しぢやはゝはゝはゝは……

宗庵　それにしてもひどいおやつれやうでございますな。太閤さま御在世のをりは德川さまと肩をお並べなされたあなたさまが…………

默然として三成を見る。

三成　何事も時世ぢや。

宗庵　………………………

三成　越前の刑部殿が伏見から會津の陣へ立たるゝ由、噂を聽いたので、强ひても佐和山へお招きいたし、別宴かはりに、久々にてお茶一つさし上げたいと思ひ、實は宗匠に御苦勞を願つたわけぢや。

宗庵　左樣でございましたか、それはさぞ刑部さまもおよろこびでございませう…………ですが、刑部さまはこの春ころから惡い御病氣で、もうお顏などもだいぶくづれかゝつておいでとのことを承りましたが……

無氣味なといふ表情をする。

三成　たとへどのやうな御病氣であらうと三成は何とも思はぬ。たゞ〱あれほどの大將をあのやうな病で殺すのが

氣の毒でならぬ。

三成、床の間から袱紗つゝみの肩衝を取り出して

これは先年伏見で、宗匠の手から黄金三百でもとめたあの唐茶壺ぢや。これほどの名器を世に失ふのも惜しい。形見として受けとつて置いてもらひたい。

宗庵　お形見でございますかッ！不吉なことを仰つしやいます。

三成　いやさうではない。萬一またも時勢がめぐつて來れば、福島、加藤などはおろか德川殿へも、今の我が身のわびしさを思ひ知らせてやることもできよう、はゝはゝはゝ……だが人の運命はわからぬ。また何時、何處の戰場で命拾てぬものでもない。どうぞ形見に納めて置いてくれ。

宗庵　一向合點がまいりませぬが。では、ともかくおあづかりいたして置きませう。

三成　それでわしも安心した。

樫原彥右衞門　花道より乘馬にて急ぎ登場。

三成　彥右衞門か。で、刑部殿は？

彥右衞門　昨日伏見をお立ちなされ、今日はすでに醒ケ井の並木へおかかりのところをたつてお引きかへしをお願ひいたしましてございます。

三成　御苦勞であつた。御同勢の方々は？

彥右衞門　若さま方、因幡さま御一緒でございましたが、佐和山へは刑部さま御一人でお越しでございます。

宗庵　わたくしはこれにて失禮いたします。

三成　では、もう刑部殿も直ぐお見えであらうから、その邊のことあちらの部屋で賴みますぞ。

宗庵　上手へ退場。

刑部　下手より若侍一人連れ添ひにて、駕籠より登場。

三成　三成下手まで出でゝ迎へる。彦右衛門駕籠をすぐ座敷近くまで導く。三成駕籠の戸を明け自ら刑部の手をとり扶けんとする。

三成　刑部殿、三成でございます。

刑部　治部殿、忝うございます。だが、あさましいこの病恐れ入ります。

と、手にて辭退する。

三成　何の御遠慮。

手を取らうとする。

刑部　まださほど衰へてはをりませぬ。昨日も逢阪山だけは馬にいたしました。會津面の戰場はいづれ馬上にて驅け廻るつもりでをりますはゝはゝは……

刑部駕籠より出づ。狩衣。白絹にて顏をつゝんでゐる。第一幕よりやゝ癩の病が昂じてゐる。駕籠及び侍下手へ入る。治部、刑部顏を見合はせしばらく思ひ入れ。

三成　噂に承つてゐましたよりは、はなはだ御元氣で重疊に存じます。

刑部を座敷に案內する。椽に近く坐る。

刑部　ありがたうございます。治部殿も春からの御蟄居、御心中お察しいたします。…………實は過日書面にて申上げました通り、この四月、わたくしはしばらく洛北三千院に病を養ふてをりましたが、德川殿よりの急のお召し殊

に三郎は初陣のことでもありますので、かねて捨てようと思ふてをりました太刀をふたゝび取つて、伏見まで駈けつけました。今にも戰ひが始まることかど若い者と同じ氣になつて駈けつけましたが、徳川殿は伏見を立たれ、大方の人々も會津面へ出陣いたしましたが、わたくし一人には伏見と大阪の警護に殘つてくれとのお言葉、詮もないこととわたくしは諦めもするが、若い奴等が腕を鳴らしてをりますので、再三徳川殿へ使を立て、やつとおゆるしが出たやうな次第で實は昨朝伏見を立ちました。

三成　お疲れのところ、殊には御病體をわざ〳〵お伴れいたし恐縮に存じます。

刑部　いや、實は左樣な次第で、出陣が遲れましたし、若い奴等はぜひ第一戰の先き駈けをいたしたいなどとはやつてをりますので、つい道を急いでゐまするし、成るべくならば御子息隼人正殿に垂井まで御越しを願ひ、かの地にて御伴いたして會津面へ出陣いたす考でございました。隼人正殿も初陣でおありだと存じますが。

三成　あれもこの度が初陣でございます。

刑部　三郎も初陣でございますが、初陣の子を持つ親の心は妙なものでございますのう。小田原の陣で討死いたした太郎、……それから二郎の初陣にはこちらも若かつたせいか、さほどにも思はなんだが、末の子の初陣には、もうから意氣地のない父になつてしまひましたはゝはゝは……で、治部殿は御蟄居のをりから御出陣を御遠慮とのことを承り、ならば及ばずながら隼人正殿の初陣にわたくしがお伴いたしたらばと存じましたので、あのやうな使をさしあげました次第でございます。

三成　いや、わざ〳〵お引きかへしいたさせまして、まことに勝手にて恐れ入りますが、刑部殿も會津面へ御出陣になればいつまた御凱旋とも知れず、わたくしも蟄居後ひどく躰を痛めまして臥りがちでございますので、萬一のこと

もあらば永劫お目にかゝりますをりもあるまいかとつい妙な心になりまして、ぜひ一度お逢ひいたしたる上にてお訣れを惜しみたく存じ、自身お後を慕ひ馬を走らせるは易いことでございますが、蟄居中の身で一歩たりとも城外に出まするは、世間への憚りもあり、かたがた……。

刑部　さほどまでに刑部を思ひくださる御心中うれしう存じます。

三成　いや、左様に仰せらるゝと却つて汗顔の至りでございますが、實はこの方の勝手もあり、是非共御出立前に極、内々に御相談いたしたい儀もございましたので家來の者を遣はし御引き留めいたしたやうな次第でございます。

刑部　内々の御相談！……

刑部しばらく沈默。日の光り曇る。

三成　内々の御相談とまうしますは……

刑部　いや、お待ちください。内々の御相談と仰つしやるからには……

直覺的に感じやゝ驚きたる態。

しかし、そのお話はわたくしにはお打ち明けなさらぬ方が、宜しうはございますまいか。

三成　……

刑部　わたくしは治部殿にも二十幾年の恩顧を忝くいたしてをります。と、同時に、徳川殿とも年來の熟懇。このたびは會津面へまいり徳川殿への誓書の手前もあり徳川殿の幕下に走せ、飽くまでも徳川殿の味方となつて働くつもりでをります。それを御存じの上お話しなさつてもお差支へのないことなら、いかやうのお話も承りませう。で、ないかぎりはお話なさらぬ方があなたのためでもありまたわたくしのためでもあると思ひます。

三成　よく言つてくだされた。先刻わたくしは刑部殿にしみじみお別れを惜しみたいためにお茶をさしあげたいと申しましたが。三成の心を切り開いて見たら、それも萬更嘘の言葉ではございません。たしかに三月以來蟄居のわたくしは刑部殿一人を一番心强い味方とも思ひ、朋友とも思ふて今一度お逢ひいたしたいと考へてをりました。さらに今日ぜひとも御立寄りをお願ひいたしましたわけは、お察しの通り一大事を企てゝをりますので。

刑部　いや、それならばもう……

刑部手にて制す。

三成　お話いたしたところで、刑部殿の御意志を無理に曲げさせやうとは存じませぬ。また三成の願をお聽きくださらぬにしてもいさゝかお怨みはいたしませぬ。たとへ御他言くだされても何とも思ひはいたしませぬ。三成は德川殿を向ふにまはして天下分け目の戰ひを企てゝをります。

兩人しばらく沈默。

刑部　左様でございましたか。

悵然として。

それほどの御決心がおありなら、何故もう一月早く刑部へお話しくだされませなんだか。刑部、お怨みまうします。德川殿伏見出發以前に、御心中をお明かし下されたなら、近江伊勢の間に兵を伏せ、刑部自身內府をお送り申すことにいたし、長束殿と申し合せ、前後より挾み撃たば雜作もないことでございましたに。今日すでに箱根を越えてあれば、野に虎を放つも同然、今となつては戰ひの時機を逸しました。

三成　刑部殿のお考も御尤でございますが、わたくしにはまたわたくしの考もございます。實は去年伏見にて直江山城と申し合せ、會津にて上杉殿が旗を擧げらるゝを機會に、こなたにても兵を擧げ、關西九州の人々を一手にして起ち

ますれば、德川殿の威勢恐るゝに足らずと存じます。

刑部　西國の大名にて誰々がお味方に御加擔いたしました？

三成　毛利一門、島津、小西、宇喜多、小早川これ等の人々は間違ひないことでございませう。信濃には眞田昌幸父子。家康、上杉殿と兵を交ゆると同時に、關西の大軍を以て箱根を越え一擧にして江戸を衝く所存でございます。

刑部　（慨然として）治部殿ほどの大器量人が、あたら機を逸し、謀を誤られたか。天下は德川殿か治部殿か、二人に一人の物とはかねてより察してゐましたが、恐らくかうなつては治部殿の手から、わざ〳〵德川殿へ天下をさしあげられたも同然でございませう。

三成　何故にまた左樣なことを言はるるか？

刑部　德川殿に天下を取るほどの力量があれば、治部殿にもまた天下を取るほどの力量はございました。しかしもう勝負は決まりました。斯樣になるのも運命でございませう。

三成　運命とは？

刑部　治部殿の仰せらるることは、奕棋にてまうせば中人對手の策戰でございます。先づ吾れに成算あり、吾れ斯の如くせば、彼れ斯の如くせんと計畫を立てゝかゝります。果して彼れはわが計畫通りに動きます。即ち吾れ勝つ。しかしこれは中人對手の勝負でございます。もし名人に逢ひますれば悉く吾れの成算を裏切るでございませう。今日の德川殿は棋道に於ける名人でございます。今日德川殿を對手に事を擧げらるゝに五つの不可がございます。德川殿は今日五老の上に居り、權威日に月に加はるのみ、天下の諸將爭ふてその幕下に參じ、競ふてその命を奉ぜんことを努めてをります。しかるに太だ失禮ではございますが、治部殿にして五十萬石も領してをらるれば格別、何分にも御領地は小ひさ

く、官位高からず、自然治部殿を慕ふ人も少なき道理。今の世の人たちは心だけでは動きませぬ。權勢、利得、金力の
あるところにのみ蟻のやうに集まります。これ第一の不可。
今、天下に大國を領する者、毛利あり、德川あり、しかし毛利は德川の敵ではありません、人心悉く德川に歸してを
ります。これ第二の不可。
德川殿壯年の頃よりしば〳〵甲斐、駿河の敵と戰ひ、遠謀深慮、豪勇果敢、天下無敵でございます、これ第三の不
可。
凡そ天下に德川殿ほど良き大將を持つ人はございますまい。井伊、本多、榊原、酒井、大久保、平岩、大須賀、鳥居
なんどみな一騎當千の大丈夫でございます。これ第四の不可。
子孫を思ふは人の情。德川殿はよくこゝの機微を辨へてをられます。部下に死する者あれば、厚くその子孫を祿する
がゆえに、自然親を慕ふが如く德川殿を慕ひます。喜んでその馬前に命を捨てます。今の世一人として德川殿に比すべ
き仁人もありません。これ第五の不可。
何れの點より見ても今日德川殿を對手に兵をお擧げなさるのは不覺でございます。
三成　しかし兵は機でございます。變幻きはまりなきが兵の常態でございます。今東西相呼應して立たば家康を擊つ
こと……。
刑部　その謀はすでに機を逸してをります。それは德川殿がまだ伏見滯陣中に施さるべき策戰でございました。
たゞ〳〵殘念なことに存じます。治部殿惡いことは申しませぬ。この度の御企ては今暫く御考へなされた方が宜しうご
さいませう。

三成　刑部殿の仰せらるゝこと、三成とても思ひつかぬでもございませぬが、……刑部殿、秀頼公の今の御有様を思ひますれば、勝敗のみ考へてもをられませぬ。

刑部　…………

三成　あれほど太閤殿下の御恩顧を蒙つた加藤、福島等の人々が國許を出船いたし、大阪に上陸いたせば、先づ第一に御幼君へ御伺候いたすが臣子の禮であるべきに、大阪城に秀頼公御母子をお訪ねいたすことはせで、先づ伏見に或ひは江戸に、たゞその遅れんことをこれ恐るゝ態にて、徳川殿へ伺候いたす有様、幼君母公の御心中をお察しいたせば、何ともおいたはしく、夜も寝られぬことさへございます……

刑部　強きにおもねり、榮ゆるに媚びるが人の心とは申せ……

二人暗然として沈默、三成袂にて眼を拭ふ。

三成　三成一人の命、いつ捨てたとて惜しうもございませぬ。

刑部　…………

同じくそつと涙を拭ふ。

三成　いや、よしもないことをお話しまうした。何事も今夜のことは三成の夢物語、このまゝお忘れ下さい。せめて今日一日だけはゆつくり御とゞまり下され、ゆる〳〵と昔話でも承りませう。考へまするると、刑部殿と三成はずゐぶん古いおちかづきでございましたなあ。

刑部　わたくし、大友家へ仕へ居りますころから、殿下の幕中に石田殿のをらるゝことはよく承つてをりました。大友家滅亡の後浪々の身となつて大阪へまいり、治部殿の御推擧あつたればこそ今日のわたくし。その御恩は生々忘れは

いたしませぬ。

三成　何のあれしきのことを恩に…しかしあれ以來刑部殿と三成は何の御緣か、片時もお別れまうしたこともなく、終には朝鮮の涯までも御一緒に生死の境を……

刑部　まことに不思議な御緣でございましたなあ。

三成　その刑部殿とも、敵となり、味方となつて戰はねばならぬかと思ふと心苦しう存じます。

刑部　…………

俯向いたまゝ考へ込んでゐる。

侍女　正面の襖を開き、茶をさゝげて來る。刑部の前に置く。

三成　刑部殿、宗庵が立てましたお茶一服お上り下さい。實はあちらの茶室へ御案內いたさうかと思ひましたが、それも却つて御迷惑かと存じ、こちらで失禮いたします。

刑部　頂戴いたします。

いたゞいて飲む。

まことに結構なお加減でございます。

三成　あツ、どうぞこちらへお廻し下さい。

刑部　でも、わたくしが飲みました茶碗を……………

自分の醜き病を恥ぢて躊躇する。

三成　何の御遠慮を………

刑部　でも、それはあんまり

三成　恐らく今日かぎりのお別れでございませうから

刑部　…………………

なほ躊躇しつゝ疊の上へ茶碗を置く。

三成　茶碗を取り、いたゞいて最後の一滴まで飲み干す。

刑部　不自由な眼で、ぢいつと三成を見つめてゐる。感激の情、表にあらはる。强ひてそれをおさへる。ふたゝび愁然として俯向く。

三成　刑部殿さぞお疲れでございましたらう。ではあちらの部屋にてゆつくり……

刑部　御親切はありがたうございますが、戰場へ急ぐ身でございますれば一刻の時も惜しうございます。只今から直ぐ出立いたしたいと存じます。子供らも待つてをりませうから。

三成　でも、今夜だけはぜひ。

刑部　治部殿に御味方するつもりなら、一夜は愚か十夜でも百夜でもお宿もねがひませうが、いさとなればわたくしは德川方となつて、眞つ先に治部殿の御陣へ斬り入ります覺悟の者。たとへ一夜でもお宿を願ひましてはいざといふ場合太刀先の鈍りますのも如何、はゝはゝは……これでお別れいたしたうございます。

三成　まことに、それもさう。ではお名殘り惜しうございますが、これでお別れいたします。

手をたゝく。侍女登場。手をつく。

お客さまのお立ちだ。

侍女　はい。　退場。

三成　刑部の手を取り、庭へ案内する。

刑部　治部殿、いつも變らぬ御親切、まことにうれしう存じます。お味方もせぬ吉繼づれへ肝膽を碎いての御相談、殊に御心をつくされてのおもてなし、二ケ國、三ケ國の新地を給はつたよりはうれしうございます。

三成　いや、もう今日のお話は埒もない夢物語でございます。

刑部　夏の世のはかない夢でございましたなあはゝはゝは………

三成　はゝはゝは………

駕籠及び侍下手より登場つゞいて蒲生備中、旅の裝にて。

刑部　駕籠に近づく。

三成　刑部殿今日は何のおもてなしもいたしませなんだ。せめてものおもてなしと存じ、この程新たに見えました蒲生備中をおちかづけかた〴〵御途中までお見送りいたさせます。どうぞお見知り置き下されますやう。

蒲生備中　蒲生備中でございます。

刑部　すかし見るやうにして

蒲生備中殿か。天晴れな大將振り。治部殿はよき大將をお見出しなされたなあ。今日のおもてなしのお禮には、萬一、治部殿と敵味方となりて、戰場で目見ゆることもございましたら、何時でも吉繼、この醜い首も進上いたします。

はゝはゝは………

三成　はゝはゝは………

刑部半身を駕籠に入れる。土を掘る音かすかに聞ゆ。刑部耳をかたむける。

刑部　治部殿、土を掘りくづす音が聞えますが、城普請でもなさるのでございますか。

三成　お耳のおさといことでございますなあ。このころは昼夜兼行にて、城の普請をいたしております。

刑部　いざ天下分け目の戰といふ場合、大阪城ならばともかく、他に立てこもるに足る城はございませぬ。御自身、馬を陣頭にお進めなさい。城の御普請は無駄ではございませぬか。

三成　この城一つに天下の軍勢を引き受けようとは思ひませぬ。しかし天下分け目の戰にもし不覚を取ることもございましたら、この城まで落ちのび、湖上の月でも見ながら、心靜かに死にたうございます。（湖の浪の音が聞えて來る。）はゝあ風が出てまゐりましたなあ。（空を仰ぐ）

刑部　波の音に耳を傾け默然としてゐる。

土を掘る音ふたゝび聞ゆ。

三成　時折は、あの土を掘る音を聴きますと、日夜、三成一門の墓場を築いてゐるやうな氣がしてならぬこともあります。はゝはゝは……（寂然たる笑ひ）

刑部　御一門の御墓場を……

三成　悄然として見送る。

いたましげに三成を見る。駕籠に入り、わざと急に駕籠の戸を締める。

駕籠下手花道へ入る。蒲生らしろより。

同じくかへし

時　七月十一日午前三時ころ

場所・濃州垂井宿陣屋

登場人物

大谷刑部少輔吉繼
同　二郎義勝
同　三郎賴繼
平塚因幡守爲廣
湯淺五助
島左近　六十歳
その他武士、卒等

垂井の宿はづれの或る豪家の奥座敷と次の間。奥座敷は正面床の間に隣りて一間の襖が立ち、そこから廊下へ出るつもり。廻り縁。家の後ろは一町ばかりへだてゝ、中山道の本街道になつてゐて、松並木が下手に見える。奥の床の間には鎧櫃、長卷等。次の間にも鐵砲、弓、槍、旗指物など。縁端には小荷駄など。短檠の燭が奥の間に一つまたゝいてゐる。

次の間には籠手、脛當をつけた夜番の侍二人。侍一は縁の柱にもたれて居眠りをしてゐる。侍二はまだ若い男……縁端に腰をかけてすすけた行燈の下で手紙を認めてゐる。二人とも草鞋穿きのまゝ。縁端の柱には槍と鐵砲が立てかけてある。

しきりに蟲が鳴いてゐる。

縁端の蚊遣り火の煙がいぶつてゐる。

月がやゝかたむきかゝつてゐる。霧が深い。下手の裏の松並木のかなたに伊吹山がかすかに月の光りの下に見えてゐる。松並木と庭の

間には低い籬がある。夕顔や月見草が咲いてゐる。中央よりやゝ上手に寄りて大きな木が一本ある。鐵砲を持つて、肩から法螺貝を掛けた夜番の侍三が背を向けて松並木の方を見つめてゐる。松並木を歩いて行く馬上の士や、徒走の侍たちや、小荷駄などが霧をへだてゝ見える窓。馬の鈴の音などが聞える。

夜番の侍三　松並木の方を向いたまゝ

また通るぞ、今度のは大分多勢だ。二三千はあらう。半時ばかり前からつづいてゐるが、まだ通つてゐる。加藤殿かな……それとも島津殿かな……みな急いで行くわ、あのやうに急いで行くわ……あの勢で會津面に押し寄せたら、幾ら上杉さまや、直江さまが強くても一と溜りもあるまい。

夜番の侍一　ふと眼をさまし

おう、もう交代の時刻だらう。うと／＼としてゐた。

のびをして立てかけた槍を握り、庭に立つ。

お前はまた手紙を書いてゐるのか。よく毎日、毎夜、手紙ばかり書く男ぢやなあ。

夜番の侍二　恥づかしさうに手紙の封をして、腹卷の下に突き込んでしまう。

夜番の侍一　まあよいわ。お主はまだ若いのだからのう。若いうちだ、女といふものを神さまのやうに思つたり、女の心を千年も萬年も變らぬものゝやうに思ふのは、はゝはゝはゝゝゝ

二人鐵砲と槍を持ち、侍三とともに後ろの方へ退場。

刑部　奥の座敷の襖を開き登場。佐和山城から歸つて來たまゝの裝ひ。やゝ酒に醉ひたる體。

夏の夜山の道を駕籠に搖られ、快く疲れたところを五助にすゝめられて、久し振りで酒少しすごしたのがひどく體に

きけたやうぢや……

篝り火の傍の床の上に柱によりかゝつて坐る。

ありやうは治部殿の心中を察し、思はずも落涙いたした。佐和山の城を出るまでは人の手前もあり、よう耐へてゐたが、駕籠に揺られて暗道を走るころから、意氣地なき涙がこぼれて來て、わしは顏を掩ふてしまふた。眞の男の心は眞の男のみが知る。

今、天下の人々のうちで、治部殿の心を知る者は恐らくわし一人。わしの心を知る者は治部殿一人。………わしは治部殿を捨てゝ垂井まで歸つて來た。わしは駕籠の中で幾度か駕籠を佐和山へもどさうかと思ふたが、わしの弱い心を叱りつけてこゝまで歸つて來た。歸つては來たが治部殿の顏が眼についてならぬ。實にわれ一人を賴る孤城無援の治部殿を振り捨てゝ歸つて來た。わしは酒でも飲まないではをれなかつたのぢや。士は己れを知る者の爲に死すといふに、わしは治部殿を振り捨てゝ歸つて來た。わし一人の身であつたら、わしは今夜これから直ぐに佐和山に引きかへさうが、わしは義勝や、初陣の賴繼まで勝味なき戰さの犧牲にしてむざ〳〵殺したうはない。

庭に下りて俯向きがちに考へ込みながら、立ち止まつては遠き物音に耳を傾け、あちこちと歩く。時折或る誘惑からのがれるかのやうに體を顫はせる。

伊吹山の裾を越ゆれば佐和山の城が見える。佐和山に近い垂井に滯陣してゐたのでは、心苦しうてならぬ。この靜さでは佐和山の鐘までも聞えるであらう。まだ夜は明けぬか。早うこゝを立ちたい。佐和山の町から遠ざかりたい。

空を見る。痛さうに眼を押へる。

醫者に止められてゐた酒を飲んだせいか、ひどく眼が痛んで來た。

押へつゝ庭を歩む。ひどく苦しむ。

おう、あの筧の水で冷やして見よう。

袂から白布を取り出し、泉の水に浸して眼を冷やす。

誰かゐぬか。ちよつと明りを持つて來てくれ。

五助　はい。たゞ今………

裏手より松明を持ちて登場。

殿さま、どうなさいました。

刑部　五助か。眠つてゐたところを起してすまなかつたが、あまり眼が痛むので、ちよつとわしの眼を見てくれ。

五助　それはおこまりでございますなあ。あゝ、五助が無理にお酒をおすゝめいたしたのが惡うございました。でもさつき殿さまが佐和山からお歸りになりました時は、あまりお顏色も惡かつたし、何か御思案に暮れておいでのやうでございましたので、つい、飛んだことをいたしました。だいぶお眼が赤くなつてをります。お痛みなさるでございませう。

松明にて熱心に刑部の眼を見、一生懸命になつて刑部の眼を冷やしてやる。

刑部　何の、心配いたすことはない。おかげでだいぶよくなつた。

五助　あゝすつかり忘れてをりました。お醫者からいたゞいてゐました殿さまのお藥を。

懐から藥を出して刑部の眼にさしてやる。

刑部　おかげで餘程よくなつたやうぢや。五助ちよつとその松明を貸してくれ。

五助から松明を受け取つて泉のそばに立つ。

わしの眼も一日一日と惡くなるばかりぢや。越前にゐたころはまだ空の星もはつきりと見えたが、國を立つてからは、一夜一夜と星の光りが霧をかけて來た。霧は深くなるばかり、星は遠くなるばかり。明日はもう日の光りさへ、松明の光りさへ見えぬやうにならうも知れぬ。

松明を見、月を見てうれしさうに。

まだ松明もよう見える。月もよう見える。

醜うなつたわが顏を見るのも心がすゝまず、國を出てこの方久しうわが顏も見なんだが、せめて眼のつぶれぬうちに、わが眼でわが顏をたゞ一度だけでも思ふ存分…………

松明をかゝげ、松明の光りに顏を照らし、躊躇しつゝ泉の面を覗き込む。

しばらくぢつと見つめてゐる。嬉しさに耐へぬもののやうに。

うむ、よく見えた。水に映つた松明の火も、泉の底の月の光りも、そしてわが顏も…………

急に絶頂の嬉しさから、どん底の悲しみに……

松明をさらにちかく顏に持ちて、ぢつと水の面を見つめる。松明を持つてゐる手わなゝく。

絶望的な表情

五助ツ！　非常に高い、救ひを求めるやうな聲。

五助　（驚いて）はいツ！

刑部　刑部の聲に驚いて裏手より森勝、額織、爲廣等出で、庭の下手に佇んでゐる。松明を顏から離し遠く持ちて。

五助ツ！この松明を消してくれ！

地に松明を投げる。

五助、わしはこの醜い、たゞれた顔をして、よう治部殿のお目にかゝつた。地の裂け目でもあつたらはいりたい。

五助　いゝえ、殿さま、それはわたくしが御酒をおすゝめいたしましてからのことで、今半時ばかり前から少しお顔色が變つて來たばかりでございます。もう半時も經ちましたらまた御普段のお顔色におなりなさるにちがひございません。石田さまにお目にかゝらうと、どなたにお逢ひなさいませうと何の御遠慮がいりませう。

刑部　いやさうではない。わしはまだわしの顔を信じてゐた。よもやかほどまでとは思はなんだ。

五助　あれほどけだかく、お立派であつたお顔が……御病氣とはまうせ……。

刑部　それにしてもわしは佐和山で治部殿にお茶の馳走になつたが、治部殿はわしが飮みかけてゐた茶を所望されて、快う一滴も殘さず飮まれた……わしは知らなんだ……あゝ……治部殿、吉繼はあなたを捨てゝ來ました。治部殿、これが眞の武士の爲ることかッ！わしの武士は捨たつたッ！五助わしは……わしの心はわしのこの腐つた顔よりも醜う腐つてをる……五助ッ！……

刑部手にて涙を拭ふ。義勝、頼繼等みなく俯向き、或ひは眼を拭ふ。刑部に近づく。

僞廣　かねてのお氣性としては、左樣にお考へなさるのも御無理はありませぬが、こゝは感情にのみお走りになつてはいけません。少しくあちらで御休息なされて、御熟考なされますやう……夜明けまでにはまだ間もございますので。

刑部　俯向いたまゝ奥の間へ上る。

下手から一人の若き侍、槍を抱へたまゝ急ぎ登場。

僞廣　誰ぢや？

若き侍　左門でございます。たゞ今佐和山から急の御使者でございます。

刑部　佐和山から急のお使者ッ！どなたが？

若き侍　島左近さまでございます。

刑部　左近殿か！

しばらく沈默。

この夜更けに左近殿が………

爲廣　御人數は？

不圖、警戒するやうな緊張が人々の面にあらはれる。

若き侍　左近さまお一人でございます。

爲廣　伴をも連れられないでか？

若き侍　はい。

刑部　義勝、早く幕を持て。

義勝　父上、幕と仰つしやるは？

刑部　いら立ちて

幕ぢや。陣營の幕ぢや。

賴繼　父上何になされます？

刑部　この醜い顏で治部殿にお目にかゝつたが恥づかしいに、今また左近殿にまでこの顏で逢はれるか。早く幕を引け！幕を隔てゝお逢ひするのぢや。

爲廣　それほどの御遠慮が！

刑部　さうでない。早くツ！

義勝　はい！

五助に目くばせをする。五助小荷駄の一つを解いて陣幕の幕を取り出す。庭の上手の大きな木と地に突きさした槍とにくゝりつけて幕を張る。幕には墨で大きな蝶の紋が一つ書いてある。義勝、斬織二人父をいたはりて上手へゆく。

刑部は庭に下りて上手の床机に凭る。

島左近　いかにも戰場馴れたる白髪の老武者。下手花道より馬にて登場。馬より下りる。卒數名裏手より松明を持ち、左右に立つ。

人々警戒の眼を左近に向ける。

主人石田三成の使として島左近これまでお跡を慕ふてまいりました。實はこれまでまいる道すがらも、舟津面へ向はるゝ方々に幾度となくお逢ひいたしましたので、刑部殿の御同勢も最早御出發かと案じながら馬を急がせました。尚一度お目にかゝることができましてうれしう存じます。

上手へ近づき、幕を見て不審の顔をする。

義勝　御承知の病にて今夜はひどく惱んでをりますので、むさくるしい體にてお目にかゝるのも心苦しいとまうし、失禮ながら幕を隔てゝ！御挨拶いたします。

左近　何のその御心つかひ、却つて痛み入ります。主人三成まうしまするには、このたびのお別れは恐らく永の御別れと存じ一しほお名殘惜しう存じます。ついては先刻左和山御發足の砌、御餞（はなむけ）のおしるしまでにお目にかけたく存じました正宗の一腰、つい心みだれ失念いたしましたので、只今左近に持たせてお屆けまうすとのことでございます。

舞臺出でゝ左近より袋に入れたる刀を受け取りて父に渡す。刑部受け取りていたゞく。

刑部　左近殿…………治部殿の御志、七生までも忘れはいたさぬとお傳へください。

感きはまつて手わなゝく。間。

左近　お暇まうします。最後のお願には今一度お顔を拜したうございます。何卒この幕をおとり下されますれば主人へのわたくしの顔も立ちます。

人々ふたゝび左近を警戒する。

刑部　御尤なお言葉でございますが、晴れの戰場では冑に名香を焚くが武士の心懸と存じますれば、この醜い姿を今更ら…………

左近　（愁然として）詮方もございませぬ。では、お別れいたします。

刑部　左近殿ッ！

左近　行きかけて立ち停る。

刑部　さいぜん治部殿から承りましたが、島津殿始め關西の方々、內々の御誓文は間違ひはございますまいなあ。

左近　そのことでございます。今夜も物見の者の知らせでは、今夕まで賴みにいたしました關西の方々も大方は或ひは鈴鹿を越へ、或ひは北國街道へ拔け、或ひは夜にまぎれこの中山道を關東へ關東へと押してまいるやうでございます。如何に主人三成に對しては、年來の疎遠はあるにせよ、秀頼公の今日の有樣を思ひますれば加藤殿にせよ…………

刑部　加藤までが……

左近　加藤殿ばかりではございませぬ。太閤殿下恩顧の淺野殿、黑田殿も…………

刑部　淺野も、黒田も？……増田右衞門は？

左近　右衞門尉殿は今夕二人の密使を關東へ送られました。その一人はわたくし部下の者が取り押へましたが、一人は殘念ながら取り逃がしました。主人このたびの擧兵のことを德川殿へ密告いたしたるものでございます。

刑部　あれほど治部殿とは入魂の右衞門が！……前田殿は？

左近　前田殿の御同勢も今夜半時ばかり前、この街道を關東へ下られました。

刑部　治部殿は誰をお味方に秀頼公のために旗を擧げらるゝ御所存か！

左近　秀頼公のためならばたとへ一人になりても、佐和山の城一つあればと、まうして居ります。

刑部　たとへ一人になりても、秀頼公のおためならばと仰せでございますか。

刑部しばらく沈默。涙を拭ふ。

間。刑部床机より立ち上り、思はず隔りの幕を撤し、左近の前に立つ。

左近殿ッ！刑部は東に行くことを止めにしました。

左近　何と仰せられます。

人々驚く。

刑部　人々はみな東へ行かれる。今をさかりの德川殿の幕下へと、潮のやうに夜を日について東へ行かれる。西にはたゞ二人幼君秀頼公と、治部殿だけが、……………治部殿の心中を察すれば、吉繼はもう一歩も東へは進まれませぬ。德川殿には恩顧こそうけたれ、何の怨みもない。しかし、德川殿には吉繼一人行かいでも何の不足もない。治部殿はかやうなあさましい病人の吉繼一人でもお待ち下さるであらう。

左近　刑部殿お一人御加盟下されますれば、百萬の味方を得ましたるより心強うございます。

刑部　爲廣殿みなをお集め下さい。

爲廣、一人の部下にさゝやく。鐘のほとりにて、夜番の侍、法螺貝を吹く。人々旗指物を立て、思ひ思ひの武裝にて、上手下手より集まる。

刑部　お集りなされたか。吉繼は治部殿の御心のあまりいたはしさに、今宵かぎり關東行きを思ひ止まり、この場より治部殿にお味方まうす。だが、吉繼は誰をも伴れてはまいらぬ。關東へ行かるゝ方々は子々孫々までも榮へらるゝであらう。治部殿に味方して西に行く者は明日をも知らぬ命…。爲廣殿！義勝、頼繼をお伴れ下されて關東へお越しください。二人の子供らを會津面へ差し向けますれば、わたくし一人治部殿へ味方したとて、子供らへは何のおとがめもあるまい。わしはたゞ一人で西へ行く。

爲廣　誰れ一人東へまいりませう。死なば御一緒でございます。

義勝　わたくしらは父上と離れたうはございませぬ。

刑部　東へ行け、そして生きよ。西へ行く者はたゞ死が待つてゐるばかりだ。

頼繼　父上わたくしも西へまいります。

刑部　お前はめでたい初陣ではないか。

頼繼　父上とならば初陣の討死もうれしう存じます。

五助　殿さまどこまでもお伴させていたゞきます。もし御討死なさいますのなら、御一緒に討死させていたゞきます。あの世まで御轡を取つてまいります。

刑部　わしは人々を殺すに忍びぬ。わしをたゞ一人で西に行かせてくれ！

頼繼　でも、父上に別れて誰れ一人、おめおめと越前へ歸りませう。父上、わたくしはやつぱり一人で初陣をいたす

のでございますか！

刑部　…………。

爲廣　越前出陣の日から、一人殘らず御馬前に討死は覺悟いたしてをります。せめて人々を武士らしう討死させてください。殊に關西方は無勢の戰さ、一騎當千の越前の若者たちをお作れなさらば、それこそ石田殿に對しても何よりの御加勢かと存じます。御眼は衰へ、御體は日に日にお弱りなさるあなた樣を捨てゝ誰一人、榮華を求めて東へまいりませうや！

人々泣く。

刑部　感激に耐へず、身を顫はせて。

因幡殿！人々の命、吉繼かたじけなう頂戴いたします。

舞臺一面に深い感激、歔欷。

月がちやうど伊吹山の端に落ちかゝり、東の空が白む。

幕

第三幕

時　慶長五年九月十四日の眞夜中より、十五日の夜明まで。

第二幕より約二ケ月の後。

場所　關ケ原關の藤川大谷陣屋

登場人物

大谷刑部少輔吉繼
同　二郎義勝
同　三郎頼繼
僧　祐　玄
湯淺五助
平塚因幡守爲廣
若侍山根敬之進
島　左　近
其の他武士數多

稚松がまばらに生へたゆるやかな小山の一部分。遠くうしろに伊吹山が見えて居る。下手に松尾山が黝く見える。

舞臺やゝ上手に草葺きの農家の母屋がある。廣い土間になつてゐる。軒には玉蜀黍だの粟の穗だのがつるしてある。

母屋につゞいて下手に、そしてずつと奥へ引込んで牛小屋がある。牛はゐない。牛小屋の周圍から、軒の下あたりに苅つたばかりの稻穗が積んである。簑が二枚土間の壁に懸けてある。

母屋は正面がすつかり破れた壁になつてゐて、そこいらには弓だの鐵砲だのが立てかけてある。楯を組んで作つた輿が土間の壁にくつ付けて置いてある。

牛小屋の後ろは小高い丘の松山になつてゐて、牛小屋の横からそこへ登つてゆく小徑がついてゐる。

牛小屋の中から、軒の下あたりに十人ばかりの武士が莚を布いて横になつたり、柱にもたれたりして休んでゐる。
時々負傷した男の呻き聲が聞える。
時雨が降つてゐる。月の夜であるが、雨が降つてゐるのでやゝ暗い。
最初は人の聲は聞えるが、姿はよく見えない。
こほろぎが絶え〴〵な聲で鳴いてゐる。

武士一　やけに降るぢやあないか。いつになつたら降り止むか知ら？

武士二　今夜にかぎつてひどい雨だなあ。日が暮れて間もなく、大垣の城から南宮山の麓を廻つてこゝまで歩いて來る間一度も降り止まなかつた。杭瀬から少しこつちへ來たころの雨といつたらなかつたなあ。

武士三　あの時はほんの二三尺先を歩いてゐる奴の影でも見失ひさうだつた。南宮山の長曾我部さまの陣の松明を目あてに道をとれといふことであつたが、松明の火が見えればこそだ。

武士四　お前らはあのひどい雨の最中に、右手に風のやうな鬨の聲があがつたのを知つてゐるか。

武士五　あゝ知つてるとも。關東の奴等が追ひ撃ちにやつて來たんぢやなかつたのか。

武士四　さうぢやない。島左近さまが赤坂の方へ斬り込んだのださうだ。

武士一　左近さまに暴ばれ込まれたんぢや關東の奴らも度膽を拔かれたであらうな、はゝはゝはゝ……

みなみな哄笑

武士六　それにしてもかう雨に濡れちや氣味がわるくてならぬ。背骨の髓までも雨がしみこんでゐるやうだ。

武士七　なにせえ、松明一つ點けてはいけないといふんだし、大垣から南宮山の南を廻つてこゝまで六里、眞つ暗な

道を降られ通しでやつて來たんだからなあ。

武士三　それにしても今夜は氣味の惡いほど靜かな晩だな。少くとも味方だけでも、夕方からこの眞夜中にかけて十萬ちかくの兵が、この雨の中を動いてゐるのだが。馬の嘶き一つ聞えぬ。

武士一　靜かだといへばこれ、叢の中でこほろぎが鳴いてゐるぢやないか。

人々しばらく耳をかたむける。

武士二　まつたくだ。寂しさうに鳴いてゐるわ。

武士一　もう秋も末にちかいからなあ。

遠くで銃聲二發つゞけざまに聞ゆ。

ふたゝび元の靜けさにかへる。

牛小屋の中で呻き聲が聞える。

武士三　またあの男が呻き出したぢやないか。

武士五　とても助かりつこはない。右の胸から背骨へかけて鐵砲の彈丸を食らつたんだからなあ。

ひどく苦しさうに呻く。藁をつかむ音が聞える。かすかの聲で何か話しかけようとする。

武士六　のたうちまはつて苦しんでゐるわ。おい何とか言つてるぜ。

武士七　介錯してくれといつてるんだ。誰れかひとおもひに介錯をしてやれよ。

ひどく呻り、もがく、藁をつかむ。

武士一　この男の仲間は誰れだ。仲間の者で介錯をしてやれ。可哀さうぢやないか。はやくしろよ。

武士四　誰もゐないのか仲間の者は。

武士八　仲間の者ではありませんが、倒れてゐる男があつたものですから、どこの隊の人だか知りませんでしたがわたしが連れて來たのです。

武士二　そりやお前とんだ親切をしたものだ。ぢや親切ついでにお前介錯してやれ。

ます〳〵ひどく呻る。

武士八　沈默してゐる。

あのやうに苦しんでゐるから。

武士四　早く息の根を止めてやらぬと可哀さうだ。

武士八　はい、でもこの暗がりでは……

武士一　この暗がりでは刀も振れまい。

武士四　仕方がない。短刀で胸を刺すか。でなけりや、首を締めてやれ。

武士一　思ひ切つて。

武士八　はい。

武士四　意氣地がないなあ。さあこの綱でやれ。

武士八　しばらく躊躇してゐたが呻いてゐる男の上に馬乘りになる。

はげしき呻き聲。氣味惡き沈默。

間。裏の山から槍を持つた男、體を現はし牛小屋の人々へ聲をかける。

槍を持つた男　おい、みんなこつちへ上つて來てくれ。敵だか、味方だかわからぬが、右の方の森の裏手へまはつた

者がある。七八人ばかりだ。

武士一はじめみな〳〵鐵砲、槍などを持ち裏山の方へ登りゆく。

槍を持つた男　そつちの見當だ。あの白く見える道の方だ。

みな〳〵見えなくなる。

湯淺五助　刑部の陣羽織を抱へて、奥より出で、爐に榾を焚き裏山を覗く。

おい、そこに立つてゐるのは誰だい？

裏の山より一人の若者鐵砲を持ち下つて來る。

若者　敬之進でございます。

五助　敬之進殿か。殿さまも今おかへりになつた。もうそこの見張りもよいだらう。御苦勞だつた。殿さまもすつかり雨にお濡れなされたから、少し火を焚いて上げよう。少しくらゐ火を焚いても、こゝなら敵に見られる氣遣ひはないからなあ。何かそこいらから少し拾つて來てくれ。

敬之進　裏手へまはり、薪を拾つて來る。

たくさんございました。

五助　これ、これ、これにかぎる。

薪を爐に折りくべる。刑部の陣羽織を火にあてゝ乾かす。

敬之進殿、こつちへ來て乾かしたがいゝ。あんたもひどく濡れとるなあ。

夜が明くれば最後の御奉公だ。うんと働かうぜ。

敬之進　どうしても味方が敗でございますかなあ。

五助　裏切りばかり多くてはなあ。何ぼうちの殿さまや、石田さまがお働きなされても、詮のないことだ。あの御不自由なおからだで、あれほどまでに夜晝おつとめなさるのを見たゞけでも、敵に裏切るやうな義理知らずなことはできぬのだがなあ。今日だつてさうだ、みんなは大垣からの雨の中の引き上げをぶつくさ言つてゐたが、うちの殿さまにしろ、石田さまにしろ、朝大垣で立ちながらちよつと握り飯を召し上つたきり、晝も夜も御飯抜きぢや。うちの殿さまと一緒につい今しがた石田さまもお引き上げになつたが、こゝへお立ち寄りなされて、お二人で粟飯に茶をかけておあがりなされた。おなかゞすいておいでだものだから、うまいうまいと仰つしやつて石田さまも三杯めしあがつた。三杯の粟飯を食ふてこれがこの世のお別れになるかも知れぬと仰つしやつて笑つてお歸りなされた。

敬之進　その時だつたかい、井伊家の密使とかいふ奴を、殿さまがお斬りなすつたのは。

五助　あれは石田さまがお歸りになつて間もなくだつた。石田さまがお立ち歸りになるのを待つてゐて出て來たんだ。蓮見とかいふ立派な男だつた。

敬之進　どんなことを言ひに來たのだ。

五助　榾をくべながら

うちの殿さまに裏切りをすゝめに來たのだ。そして何でも裏切りをすれば越前半國をくれるなどといひ出したのだ。そこでうちの殿さまがお怒りなすつた。今さら徳川から越前をくれるなんて、いらぬお世話だと仰つしやるのだ。太閤殿下からちやんと越前の敦賀をいたゞいてゐると仰つしやるのだ。

敬之進　さうだとも。

五助　それから徳川のことをそいつが上様といつたのだ。そこでうちの殿さまが、いつたい上様といふのは秀頼さま

お一人に使ふ言葉だ。徳川こそ左樣な言葉を使ふからは謀叛人だと仰つしやつた。そして關東の奴等や、裏切り大名たちへの見せしめだと仰つしやつて、こゝの下の池の傍でその使者を斬り捨てゝおしまひなされた。

敬之進　それは氣味のよいことをなされましたなあ。

五助　うむ氣味のよいことだつた。うちの殿さまがあのやうに御立腹なさるのはよくよくのことなんだ。

大谷刑部　奥より登場。白絹にて顏をつゝみ、練絹の小袖の上に村蝶を墨にて畫きたる鎧直垂を着、第二幕よりさらに病勞が昂じてゐる體。つゞいて義勝、爲廣登場。みな雨にひどく濡れてゐる。

義勝　父上はもうお着きになつてゐたのでございますか。

刑部　わしの方が早かつたのう、はゝはゝは……

義勝　實は烏頭坂あたりであの大雨、頼りに致してまいりました南宮山の合圖の火も深い霧に見えませず、つひ父上を見失ひまして一方ならず心配いたしました。

刑部　さうであつたらう。わしも三四度立ち止まつて待つてゐたが、それらしいものも見えなんだで、案じながらも引き上げて來た。まあ無事に引き上げて何よりであつた。して頼繼はどうした。

不安な心持が顏に泛かぶ。

爲廣　大垣お引き上げのころまでは治部殿と御一緒においでゞございましたが、左近殿が急に思ひ立たれて株瀨川あたりで敵の橫合からひと煽り煽り立てられました時、御自分も左近殿と轡を並べられて、勇ましう御出かけでございました。わたくしも御供いたさうかと存じましたが、味方の人々のこともありますし、頼繼殿のことは左近殿にお頼みいたして引き上げました。まだ十五六丁もへだたりませぬうちにあの大雨の中に勇ましい鬨の聲を聽きましたが、その後どう

なりましたことやら。

刑部　左近殿が夜討ちに出かけられたか。左近殿にふさはしいことだ。それにしても、もう何とか知らせもありさうなものぢやな。夜戰の駈け引き……頼繼は何分あのやうな若武者だから……

僞廣　戰さ上手の左近殿が附いてをられますからには御案じなさることもありますまい。

刑部　案じもいたしませぬがはゝはゝは…

寂しき笑ひ。

陣地の配備は全部終りましたか？

僞廣　地圖をひろげ刑部の前に出す。

誰れか燭を！

若侍　二人奥より燭を持ち來る。刑部の左右に立つ。

僞廣　地圖を指さし。

南宮山の長曾我部殿、安國寺殿、吉川殿、毛利殿

刑部　燭を近く！

眼をしばたゝき見入る。若侍。二人、燭を近く持つ。

僞廣　これが中山道本街道でございます。これが北陸本道。石田殿、島津殿、浮田殿、小西殿

刑部　燭を近く！

若侍二人あやしみつゝさらに燭を地圖に近く持つ。

刑部　小早川秀秋殿は？

爲廣　松尾山の上に陣をお布きなされてございます。

刑部　松毛山の上に！

爲廣　はい。

刑部　あの山に登つてをられては所詮、朝の合戰には間に合ふまい……秀秋殿の心中を疑ふわけではないが、秀秋殿萬一の場合は……因幡殿そのお積りにてわれらの陣を布かれたがよい。脇坂、小川あの人々の陣は？

爲廣　北國街道南の黑田長政の軍へ向はせ置きました。

刑部　長政は戰さ巧者、あの人たちでは歯も立つまい。長政には蒲生殿を向け、脇坂、小川の人たちは秀秋殿の近くへ陣備へなさるやう。萬一の時を慮りて……

爲廣　わたくしは早速その手配を。

刑部　御苦勞。

爲廣奥へ退場。刑部、後を見送りつゝ若侍がかゝげてゐる燭をぢつと見つめる。視力がはなはだ衰へた態。下手より島左近、賴繼を肩に負ひいたはりつゝ登場。島左近は額に太刀傷、賴繼は左の腕と、胸を白布で卷いてゐる。

五助　殿さまッ！賴繼さまがお歸りでございます。左近さまも御一緒に。

走り寄りて賴繼を扶く。

刑部　三郎かッ！

非常なよろこびと不安とが動く。

左近　刑部殿、頼繼殿にどうぞお手當てをなされてください。面目次第もございませぬ。

左近の顔にも不安な影が動く。

頼繼　父上、何でもないのです。左近殿が案じられて、御自身傷を省いてくだされました。わたくしは苦しうはございませぬ。

非常に衰へてゐる。五助に扶けられ壁によりかゝる。

刑部　左近殿が今夜、夜襲にお出かけとは夢にも思ひませなんだがはゝはゝは……

左近　大垣からのめく〳〵關ケ原まで引上げるのもいまく〳〵しいと思ひましたので、はゝはゝは…

刑部　はゝはゝはゝしかし昨日大垣の城中で島津殿が夜襲の計を持ち出された時、夜襲は大軍と大軍と戰ふ正々堂々の戰法ではないとまうし、島津殿の御意見を一蹴されたが……

左近　はゝはゝは、自縄自縛。だが、實はあの篠突く雨の中を神妙に引き上げてゐましたが、わたくしこの老齢まで、一度も敵を前に置いて、引き上げるやうな戰さをいたしたことがございませんので、前に敵があると思へばどうしても腹の蟲が承知いたしませぬ。幸ひ内府殿が赤坂へ着いたばかりだと承つたので、屈竟の場合、本陣まで斬り込むつもりでございましたが、内府もなか〳〵の戰さ上手、油斷などはありませぬ。株瀬川で黑田の先手を散々にきりまくりましたが、味方は無勢。霧の中を横合から衝いて來た新手の敵をよき加減にあしらひ、株瀬川の手前まで引き込んで、みなごろしにいたすつもりでしたが、さすがは黑田、川を一歩もこちらへは進ます、霧にまぎれて引き上げました。

刑部　頼繼が何かとお世話、足手纒ひでございましたらう。（案じながら頼繼を見る）

左近　何の何の。左近爺も及ばぬお働き、陣頭に馬をすゝめて初陣の武者振、刑部殿にお目にかけたうございまし

た。

刑部　五助に扶けられてゐる頼繼にぢつと眼をつけて

頼繼、どうであつた初陣の味がわかつたか！

頼繼父に近くにじり寄る。

もちつと近く寄つてくれ。

燭を近く！

どうぢや、傷は痛むか。……。自ら傷口を改め、薬をつけて、白い布で卷いてやる。

頼繼　別に痛みはいたしませぬ。

刑部　大分髪もみだれたな。血を浴びたな。これでお前も一人前の武士になつたといふものぢや。夜が明けたら日本開闢以来の大戦さぢや。勝つも宜し　勝たぬも宜し。討つも宜し　討たるゝも宜し。武士はたゞ義によつて戦ひ、義によつて死ぬまでぢや。天下分け目の戦ひに初陣して傷手を負ふたお前は果報者ぢや。まだ夜が明けるまでには間もあらう。早くあちらへ行つて眠れ。

頼繼　はい……　傷の痛みに耐へ切れないでさらつと涙を拭ふ。

刑部　傷は直ぐ癒る。落ちついて眠れ。

頼繼　はい。よろめき、五助に扶けられて奥へ入る。刑部心配けに頼繼を見送る。五助、若き侍等退場。燭風に消ゆ。舞台には篝の火のみ殘る。

左近　では、刑部殿わたくしもおいとまいたします。

刑部　左近殿もうお歸りか。

左近　夜明までにまだ用もございますので……、賴繼殿の御手當をどうぞ。左近まことに面目次第もございませぬ。

刑部　何の、遲かれ早かれ、夜が明けますれば……

左近　刑部殿、六道の巷でお待ちまうしますはゝはゝは……

刑部　はゝはゝは……ゝ。

左近退場。刑部楷の火を持ち、不自由な眼で地圖を案じてゐる。

火の暗いことよ。

楷をつかみ爐にくべる。

楷火を握つて地圖を見る。

あゝ、今になつてこの眼がツ！もう半日か一日で味方が勝つか敵が勝つか、戰は決するに、武運が盡きたのか……

さらによく燃える楷火と取りかへて。

あゝまだ見える……まだ見える。

うれしげに楷火を地圖に近く動かす。奥から、賴繼が呻く聲が聞える。刑部、楷火を爐に投げ入れ、不安げに呻き聲を聽く。

義勝（奥より登場）父上大變でございます。

刑部　大變とは？

義勝　只今、秀秋殿の陣より松野主馬殿まいられ、黑田殿のきもいりで、秀秋殿には主馬殿の言を用ひず、關東へ

内通の由にございます。

刑部　小早川筑前が！　平岡頼勝は？

義勝　平岡自身すでに黒田殿と内々……

刑部　あれほど頼みにいたしてゐたに。この期に及んで秀頼公を賣り、われらを賣り、……人畜生ともいふべきは筑前小早川の一門だ。先には増田右衛門に欺かれ、今また小早川秀秋に裏切られなされた御幼君のおいたはしさ……

爲廣（登場）爲廣、只今より直ぐ様松尾山へまいり、秀秋殿の御返事次第では指しちがへて相果てまする覺悟でございます。

刑部　秀秋一人と取りかへるには、因幡殿の一命は惜しい。この上は躊躇いたすことはない。松尾山を襲ひ、秀秋を撃ち果すがよい。義勝お前もまいれ。犬侍の首を叩き斬つて來い。……三郎はどうした？

義勝　奥に休んで居ります。苦しがつてをります。

刑部　傷は重いやうぢやのう……。五助ッ！

（五助登場）お前は因幡殿について行け。

五助　頼継さまが…………。ひどく不安げに

頼継の呻き聲はげしく聞ゆ。

刑部　女々しいことを言つてをる場合ではない。親の死骸を踏み、子の死骸を蹴つても敵を斬らねばならぬ時ぢや。…………

五助　はい……。五助壁に立てかけてある槍を取る。

爲廣　では刑部殿……

義勝　父上………

刑部　因幡殿……義勝……人々下手へかゝる………………あつ因幡殿ッ！

爲廣　立ち止まる。

刑部　霧が深いで、引上げのころを見はからひ裏の山に松明を焚かせませう。そちらからも合圖の松明をお焚かせください。

爲廣　かしこまりました。人々退場。

同じくかへし

登場人物

大谷刑部少輔吉繼
同　二郎義勝
同　三郎賴繼
僧　祐　玄
若侍　敬之進

同じ家の裏手。うしろは稚松の丘になつてゐる。上手に白壁の穀倉がある。戸口には石の階段がある。壁には大根がつるしてある。倉へくつ付けて左へ雨をしのぐためにこけら葺きの屋根が八尺ばかり出してある。その軒下へ莚を布いて賴繼が臥れてゐる。軒からはな

下手へ一本紅葉した木がある。その枝へ網代笠が一つ懸けてある。舞臺は最初暗い。雨は止んでゐるが、曇つてゐる。

刑部　頼繼の死體を前に默々として坐つてゐる。

祐玄　黑き法衣、白き手甲、脚絆、素足に草鞋穿きにて上手叢の中より階段を下り蠟燭の火をかゝげて來る。黑き風呂敷包みを腰に結んでゐる。

こほろぎが鳴いてゐる。

祐玄、燭を死體のかたはらに置く。しばらく死體の前に合掌する。

刑部　（不圖眼をひらきて）ようたづねてくれたのう！

祐玄　せめて頼繼殿の息あるうちに逢ひたうございました。

刑部　お前とは大の仲よしであつたが、お前が訪ねて來てくれたことも知らずこのやうに眠つてをる。

祐玄　おいたはしう存じます。

刑部　お前とは一つちがひ、子供のころからよう二人でわるさをしよつたがのう。

祐玄　…………

刑部　三千院の御堂で、冑の緒を締めてやつた時、初陣のうれしさに笑ふてゐた頼繼の顏を見れば、つい、子供ら二人戰場に出すのがいとほしく、それに持つて生まれた性分から、戰場と聽いては矢も楯もたまらず、五體の血といふ血が一時にわき上つた。不圖した發頭から三千院にはいつたのは、思ひ出しても恥づかしい。獅子は獅子で死ぬるが眞(まこと)ちや。朝鮮から歸つて、半年、一年の天下泰平で、陣の音を聽かず、太刀打ちの音を聽かなんだで、わしの魂が憂髀の蟲に食ひつかれたか、わしはあのころ殊勝なことを考へてゐた。たま／＼三千院の上人に聽いた人間生死の一大事が氣

になつて、たゞその事一念のために國も捨てよう、家も、子も捨てようとまで思ひつめたこともあつた。

祐玄　そのころでございましたなあ、叔父上がわたくしを山へお送りなされたのは。

刑部　亡くなられた兄上からあづかつたお前に、武士を捨てさせるには忍びなかつたが、わしはあのころ歩士といふものには愛想が盡きてゐたのぢや。ひたすら利得に眩み、名聞に飢えた今の世の武士の仲間に入れようより、佛門に入れた方がお前のためだと思ふてゐたのぢや。やがてはわしもお前の後を追ふつもりであつた。……お前にはまことに濟まぬことをした。

祐玄　勿體ないことでございます。わたくしは叔父上のお蔭で御佛へ仕へますことができましたし、今では……

刑部　祐玄、今になつてわしに何も遠慮はいらぬことぢや。お前はわしのために佛門に入れられたことを後悔してゐるであらう。

祐玄　いゝえ……

刑部　それならば、お前は御佛の悟りを見出しえたか？

祐玄　日に日にたゞ疑ひの雲が深くなるばかりでございます。得度を受けましたころはたゞわけもなくありがたい、かたじけないと思ふてをりましたが、このごろではやつぱり人並にいろ〳〵の功名心や、欲念がきざしてまいりました。

刑部　さうであらう。お前の父兵庫殿は人一倍の勇士であつたからのう。

祐玄　頼繼殿が緋縅の鎧を着て、あの三千院の門から出陣される後姿を御堂の階で見送りました時は、さすがにわたくしも、あのやうな凛々しい姿で出陣がいたしたうございました。父上さへ生きてをられたらと、つい叔父上の御心を存じながらも、叔父上をお怨みまうしました。

刑部　…………

祐玄　あれから十日ばかりはわたくしは頼継殿を羨んでばかりゐました。そして見る影もない墨染の身を木の端のやうに自分で恥ぢてをりました。人知れず、幾度か叔父上を怨んで泣きました。

刑部　さうであつたか。ありやうはわし自身が出家にもなりたいと思ふてゐた矢先であつたし、一人出家すれば九族天に生まるとのこともあり、兄兵庫殿は関白秀次殿にお仕へなされ、君命とはまうせ或る時は木に人を吊して射殺し、或る時は孕み女の腹を割くやうなことをなされた。その因果か、秀次殿始め三十幾人、兵庫殿もあさましい死に方をされた。菩提を弔ふごとにわしは兵庫殿の魂が世に迷ふてござるやうな氣がしてならなんだ。

祐玄　父の魂を救ふために、叔父上の御親切で、わたくしを山にお送りくださつた御心は御心としてわかることはわかります。が、わたくしの心は、叔父上のいらぬおせつかいで一生を無駄にしてしまつたやうに、いつもさう思ふてをります。くやんでをります。

刑部　わしは正しい道ぢやと思ふてお前の道を選んでやつたのであつたが………わしの誤つた心づかひから、お前の一生を踏み迷はせたのであつたか！では、何でお前はわざわざこの危い戰場へわしらをたづねてくれたのぢや。

祐玄　上人さまが今度の戰は恐らく石田方は敗けであらうと仰せられました。

このあたりより背後の空次第に赤く燃え初める。

刑部　それはまた何で？

祐玄　上人さまが仰つしやいました。石田方に興味があるならば刑部殿は石田方へはお味方なさらぬであらう。刑部殿は若い時からいつもそのやうな人であつた。今度こそ刑部殿は石田方のために討死なさるであらう。ひと目、お目に

かゝり、法華經一卷お渡しまうしてくれ。はげしい戰陣の間、お暇とてもございますまいが、せめて御討死まへに御心靜かに御念誦遊ばされ、人間生死の一大事御觀念なされますやうにとのことでございました。

腰に結んでゐる黒い風呂敷包みを解いて、法華經を取り出し、刑部にわたす。刑部受け取り、手に握つてゐる。

刑部　せつかくの上人の御志なれど、われらは緣なき衆生であらうか、もう經を讀む眼は見えぬ。人間一生のこの大事の刹那に、法華經を手に握り、目前に我が子の死骸を見つめ、ありとあらゆる人間の我執、妄念を去り、心を玻璃の鏡に照らして、ひたすらに人間生死の一大事を悟らうと思ふが、たゞ悔しいと、悲しいと、腹立たしいとのみが胸を焼いて、とても殊勝な心は思ひも寄らぬ。

祐玄　叔父上、わたくしとても今日までの佛門の修業が何に役立ちませう。上人がこのたびのお使ひをわたくしに仰せつけられました時、わたくしは叔父上や、賴繼殿にお目にかゝることをどんなに喜んだか知れません。しかし、こゝへまいる道すがらも、若い馬上の武者姿を見まするにつけて、わたくしはこの乞丐のやうな沙門の姿を恥ぢました。わたくしはやつぱり武士になつて戰場を驅けめぐりたいと思ひました。いつも凱旋のをり、父上が召されたやうな萠黄縅の鎧を着た侍大將を見るごとに、叔父上を怜む心にさへなりました。父上の幽靈がわたくしの耳に、御法の珠數を斷ち切れとさゝやくのでございます。わたくしはこゝへまいつて、叔父上のお姿を見ました。死んでゆく賴繼殿を見ました。わたくしは何だか、わたくしの怨みがお二人の上に、眼の前にあらはれて來たやうで恐ろしうございます。おいたはしいお姿を見てゐますと、泣かずにはをれませぬが、心の底では、あさましい鬼奴が笑ふてゐるのでございます。ゆるして下さい。わたくしも所詮救はれぬ衆生でございます。

刑部　救はれぬ衆生といへばわしこそぢや。武士の名聞、武士の意地立などとよしないことに囚はれ、われ一人の生死はとまれ、朝鮮の涯までもわれ一人を頼り、年來生死を共にした二千餘の人々を、あたら關ケ原の鬼にしてしまふのぢや。頼繼一人の討死をわしはうれしいとも思ふた、人々への申しわけにもと思ふて。…………頼繼には頼繼の考へもあつたらうに、わしはわしが思ふまゝに頼繼を育て、頼繼を歩ませて來た。これ、三郎はわしの膝にもたれたまゝ何の疑ひもなく、不平もなく、すや／＼と眠つてをる。

祐玄　でも、頼繼殿は仕合はせでございます。叔父上の膝にもたれ、緋縅の鎧を着て、花々しい初陣の討死が出來たのでございますから。

刑部　それほどまでにお前は武士になりたかつたのか？

祐玄　…………………………

遠くにて鬨の聲

刑部　義勝等が秀秋の陣を襲ふたのだな。うむ、筑前奴の首を叩き切つてくれたか。」

ひどくうれしさうに、同時にくやしさうに身を顫はせる。

祐玄　不圖空を見る。空が眞つ赤に燃えてゐる。

叔父上、何事でございませう。空の色があのやうに……

刑部　空の色が………立ち上り不自由な眼で遠くの空を見る。

湯淺五助　血を浴び、槍をひつさげ下手より走り登場。首を一つ抱へてゐる。

刑部　五助か？筑前の首かッ！　ひどく昂奮してゐる。首のことにのみ夢中になり、五助の方へ近づき首を受け取らうとする

五助　殿さま！頼繼さまは……頼繼の死骸にのみ見とれ、首のことは忘れたやうになつて呆然として立ちすくんでゐる。涙を拭く。祐玄頼繼の死骸の傍に坐る。

刑部　五助の樣子に氣付き、ふたゝび自分自身頼繼の死に心を惹きつけられる。

　三郎は死んだ！初陣の討死、三郎も本望であらう………

ふたゝび五助が抱へてゐる首に心を惹かれ。

五助　裏切り者の首持つて來たか！

五助　筑前さまのお首ではございませぬ……

刑部　なにツ！筑前の首はまだ斬らぬかツ！（いまいましさうに）

五助　斬らねばならぬ首は、筑前の首一つではございませぬ。

刑部　筑前の他に斬るべき首が？

五助　脇坂、朽木、小川、赤座の人々はみな敵に内通いたしました。

刑部　脇坂、朽木、小川、赤座……うむ、あの人々までが！

五助　因幡さま御一人にて小早川の陣屋へまいらるゝ筈にて、山路へおかゝりのところを、小早川の人々はすでにわれらを目かけて理不盡にも斫りかゝつてまいりました。その鬨の聲を合圖に、脇坂、朽木、小川、赤座の人々までがわれらの背後より衝いてかゝりました。

刑部　小川、赤座の人々までが！……そして義勝は？

五助　若殿さまは、敵は筑前唯一人と仰つしやつて、無二無三に小早川の本陣にお斫り込みなされました。味方は不

意の裏切りに散り散りに薙ぎ立てられ、つひに若殿さまの御姿も見失ひました。御行方も見届けませずまことに残念に存じます。所詮御討死かと存じます。

暗然として頼繼の死骸を眺める。

刑部　二郎も死んでしまうたか！……

因幡守は？

五助　因幡守さまは小早川の先手の大將横田半介を討ち取り、わたくしにこの首をおわたしなされ、殿さまへおみやげに持參いたせと仰せられました。何やら御辭世の歌をおよみなされましたが、亂軍の中ではございましたし、殘念ながらわたくし聽きもらしましてございます。一足お先へ冥土へまいりお待ちいたしますとのことでございました。

刑部　因幡守ももう行かれたか！（横田の首を引き寄せて見る。）半助の首か！憎い奴ぢや……でもよい男ぢやのう。葬つてやれ！

五助、上手の穀倉の横へ首を隠して來る。空の焔ますます赤くなる。

あの空の炎は？

五助　大垣の城らしうございます。それにおう、關ケ原の町をも燒いてゐます。うむ、關東の奴らが……

刑部　井伊あたりの指圖であらう、よしもない殺生をするものぢやのう。

五助　あッ、あのやうに、また新たに燃え出しました。

刑部（堅く法華經を摑んだまま）おう、あの炎、あの赤い空、わしはまだわしの眼であの炎を見ることができる。おう炎だッ！炎だッ！まだ見えるぞ、わしの眼で！（うれしさに耐へぬやうに）祐玄！（祐玄走り寄る）わしはもう、法華經を讀む

眼は失ふてしまふたが、まだ城を燒く炎を見る眼は失はぬぞ。わしは若いころから城を燒き、町を燒く炎を見るごとに全身の血が湧き立つたものぢや。そして千人萬人の中も恐れずまつしぐらに敵中に馬を乘り入れたものぢや。今もなほこのあさましい體になつてゐても、あの炎を見ればわしの胸の血は湧く。わしは今もなほつくづく武門に生まれた身の果報を思ふ。(潜んでゐた好戰的本能が絕頂まで昂じたやうに)筑前も背け、脇坂も小川も背け。越前の男らは最後のたゞ一人になるまでもお前等の肉を食らはずには置かぬぞ。(不圖賴繼の死骸に氣付き)五助ッ!

五助　はい。

刑部　三郎の死骸は……裏の山にでも捨てゝくれ。戰場に屍を捨てゝ、鳥、獸の餌食となるのは武士としてこの上もない果報ぢや。

五助、祐玄二人死骸の傍にしやがむ

しかし待て、五助。せめて首だけでも何處かに葬つてやりたいのう。

祐玄　わたくしが寺へ持ちかへりまして、どうともいたしませう。

五助　祐玄さま、それでわたくしも安心いたしました。

祐玄　沙門のわたくしが、從弟の賴繼殿につくす最後の一番ふさはしい仕事でございます。

刑部　では、祐玄願ひますぞ。五助……首を!

五助　はい……ちよつと躊躇するが、やがて思ひ切つて、祐玄と二人で死骸を倉の横に運ぶ。

間。刑部暗然として合掌。やがて倉の横にて首を打つ音。

五助　首を持ち、袂に包み、呆然として出づ。泣いてゐる。祐玄つゞいて出づ。刑部しばらく首を眺めてゐる。祐玄に首をわたす。

祐玄、腰の黒い風呂敷に首を包む

刑部　もう何一つ思ひのこすこともない。五助、夜が明けるに間もあるまい。殺すか、殺さるゝか、最後の戰さぢや。さあ用意を！

五助　では御肩輿にお召しなさいますか？

刑部　いや、わしはまだ眼が見える。

赤く燒けたる空を見る。

肩輿はいやだ。馬を曳け。わしは武士らしう最後の戰さをしたい。

五助　でもお馬では危うございませう。

刑部　たとへ眼はつぶれても、大谷刑部吉繼だ。陣頭に立てば、わが手綱はかの裏切り者等の眼よりは確だ。早う馬を！

五助、倉の横へ入り、馬を曳いて來る。祐玄、首を包んだ風呂敷を背負ふ。

刑部、法華經一卷を手に持ち、馬に乘る。五助、長卷を持ち馬の轡を取る。

刑部　祐玄、御苦勞であつた。關ケ原のこの靜かな夜明けが、やがて幾萬の血しほに染められ、矢叫びの聲に修羅の巷を現ずるであらう。怪我をせぬやう早う立ちのいてくれ。

祐玄　叔父上、もし御討死の時は叔父上の御首も、義勝殿の御首も御一緒に葬りたう存じます。

刑部　かたじけない。だが義勝はまだ生死もわからぬ。わしも追付け討死いたす覺悟ぢやが、この醜い首や、義勝の首は五助に頼む、のう五助！

五助　……………………

刑部　頼むは初陣で死んだ三郎の首だけぢや。祐玄早う歸るがよい。

祐玄、木の枝に懸けてある網代笠を取り

お別れいたします。

刑部　法華經一卷は……もはや眼もつぶれんばかりになりまして、所詮讀誦もかなひませぬが、吉繼、肌身につけて討死いたしますと、上人に傳へておくれ。では達者で、早う歸れ。

祐玄　おいとまいたします。叔父上もお達者で。

網代笠を冠り、頼繼の首を背負ひ、振りかへりつゝ別れを惜しみ上手へ退場。刑部ぢつと見送る。空の赤い炎次第に衰ふ。

刑部　五助、さあ行かう。(下手へ馬を向ける。)

五助　殿さま、あちらではございませんか。(上手を指さす。)

刑部　いや、松尾山へ行くのぢや。

五助　でも殿さまは、朝の戰さには、眞つ先に中山道の德川の陣を衝いてやると仰つしやつたではございませぬか。

刑部　いや、もう德川はどうでも宜い。わしの第一の敵は松尾山に居る。わしは裏切り者の肉を食らふまでは討死はせぬぞ。さあ行け!

遠くにて靜かに鐘の音聞ゆ。

刑部　鐘の音ぢやのう。

五助　鐘の音でございます。

刑部　敵の鐘か……味方の鐘か?

五助　石田さまの御陣の鐘らしうございます。

刑部　ふうむ、味方の鐘か！

ぢつと耳を傾け、聽く。暗愁顏に漂ふ。

氣を取り直してふたゝび空を見る。炎燃ゆ。

松尾山はこの見當だなあ！

五助　左樣でございます。

刑部　霧が深うて見えぬやうぢやのう………何の合圖もなく、太刀打ちの音も絶えた。因幡殿も義勝も一人殘らず討死したと見える。五助ツ！引き上げの合圖に松明を焚かせて見い。

五助　敬之進殿松明を點して下さい。

敬之進、倉の中より松明を點して出で、下手の小高い丘の上にゆきて松明をかゝげ持つ。

五助　或ひは夜明けまで霧の中に、ぢつと陣備へをなされておいでかも知れませぬ。

刑部　それにしては山があまり靜かだ。二郎も討死したであらうのう……（敬之進に向つて）合圖はないか？

敬之進　何の合圖もございません。

刑部　松尾山に松明の火は見えぬか？

敬之進　何も見えませぬ。

刑部　もつと高く松明を振つて見い。

敬之進松明を高く振る。

刑部　やはり見えぬか？」

敬之進　はい、何も見えませぬ。」

風の音。

刑部　五助、今、人聲はしなかつたか？」

五助　いゝえ。

刑部　風の聲か！」

それとも人の聲か！

子供らの魂がこの暗い空を駆けまはつてゐるやうぢや！」

下手の松尾山の方を見つめて

二郎よ！

間。耳をかたむけてゐる。風の音。馬を少しく乘りまはし、ふたゝび立ちどまりて正面の暗い空を見つめて

三郎よ！

咽ぶやうな哀切な聲。ぢつと耳をかたむけてゐる。

靜かな時雨の音。松明消ゆ。

靜かに幕

—一九二五・一一・八—



長篇「この三つのもの」

佐藤春夫

五

北村と赤木とは東京へ行くことになつた。正午近くになつて起きると北村がそのことを直ぐ發議したのだ。お八重の件に就てはすべて東京で相談しようといふ。

「相談と言つて何も僕にすることはあるまい。どうだね、お八重と直接に話し合つたら。さうすれば、何とでも君の好きなやうに言つていゝわけだし」

赤木がさういふと、北村は口を結んだまゝ強く首をふつた。赤木は更に言つた、

「でも、いつかは一度、顏をつき合して話さなけやなるまい?」

「それはさうだが。………ともかくも東京へ行かう」

赤木もいづれそこへは行かざるを得ないのだし、北村にもそこで用があつた。彼の筆になつた戯曲が上演間際になつてゐたので、その背景を一度檢分することを上演者から希望されてゐた。そんな都合もあるにはあつたけれども、第一に北村は、お八重の近くにゐることが厭はしかつた。思ひつめて取みだしたお八重に對しては

不憫と嫌悪とが同時に湧き上つて、この両立しがたいものが一つの心を襲ふことが、北村にとつては脅かされでもするやうな氣持だつた。北村は一切、お八重の顔を見ないやうに努めた。外出の着がへまで殆んどお八重の手を借りることを恐れてゐるやうであつた。それでもいつものやうにお八重が差出すものを引つたくるやうな樣子などはなく、どことなく出來るだけ柔らかに振舞つた。その表情のなかにもいつものやうな險しさはなかつた。笑ひに似たやうな翳をさへしてゐた。その代りには、一言も言葉らしいものを云はなかつた。お八重の身になつてみるといつもとは異つた自分の夫が一層不安であつた。どうかして夫の心の有樣を知りたいと思ふらしく、絶えず夫の顔の上へ瞳を注いでゐるのを赤木は見た。それをいぢらしいと赤木は思つた。

昨夜のお八重の事を思ひ出して、赤木は今日、お八重をひとり殘して置くことを心配にも考へてみたが、お八重の一擧一動は昨夜のことなど忘れたかのやうに靜かだつた。東京でゆつくり相談をしようといふ北村の言葉を、赤木がお八重に傳へた時にも、お八重はごくしとやかに、簡短に、よろしく頼むと言つた。さうして、子供の事を考へてはやつぱりどうしても北村に捨てられたくない事をくれぐれも言ふのであつた。さうしてなるべく早く返事が知りたいと言つた。赤木は明日の夕方までにまたここへ來て報告しようと約束した。

柔和な曇り日であつた。

停車場へ出る途は、古城の大きな濠に沿うた廣い片側町だつた。並木の柳は葉がこぼれつつあつた。濠には敗荷があつた。城砦の石垣は大きかつた。北村はステツキで大きな圓を描いてそのあたりを示しながら言つた、

「いいだらう、落着いてゐて」

二十分ほどの歩行の間に北村の言つたのは、この外には、家を出たとき直ぐ「君は見すぼらしい裝をしてゐるんだ

な、寒いよ、東京へ行くと」と言つたぐらゐなものであつた。北村はさりげない様子をしてはゐたけれども、お八重の幻に憑かれてゐた。しげしげと彼の上に注がれたお八重の瞳を、見ぬやうに努めながらも北村は知つてゐたからだ。

赤木はまた北村の沈默を尊重してゐるうちに、自づと東京に於ける美代子との會見を豫想し始めてゐた。北村や橘などの所謂「不良少女上り」なる赤木の妻の美代子その者は、この場合になつてはもう赤木にとつて何の重荷でもなかつた。いつも考へるとほり美代子はもう兼ねてその決心をして、田舍にゐる時に赤木から歸り去つてしまつてゐるのだ――ソボヤマヒオモシカヘレといふ電報は、美代子が誰かに頼んで打たせたものに違ひないのだ。それをきつかけに歸つた美代子は、赤木には再び會はないぐらゐのつもりでゐるかも知れない。今度會つたならば、赤木から言ひ出すよりさきにそれを彼女自身から發言しさうな氣さへする。ただ厄介なのは美代子の家の人たちだ。あんな田舍くさい堅氣な家から、たとひ母親だけで育つたとは言へどうして、美代子のやうな放縱な女が出來たかと思へるほどなのだから、別れ話などと言へば大仰に騷ぐことだらう。母親もさうだが、日ごろからしつかりしてゐる祖母が、小面倒な昔風を言ひ立てるに違ひない。その人たちの重苦しい北國風の訛が耳に思ひ出された。

汽車に乘つてしまつてからも、北村は別に何ごとをも話すでもなかつた。客の少ない二等車室は見るものもなかつた。この二人の男は並んで腰を下ろして、絕えず煙草を吹かしながら、窓ガラスに額を押しつけるばかりに窓外の景色を見入り、しかし別段、それらの何物にも注意せずにそれぞれの問題を考へ耽つてゐた。

「ね」

赤木が聲をかけたが北村の耳には入らなかつた。

「北村！」

「……」呼ばれた者はやつと無言で顔を相手に向けた、
「ね、僕は東京へ行つてからの不愉快が思ひやられるのだ」
赤木がさういふと、
「どうして？」
北村は反問した。彼は一瞬間、赤木がお八重の件に就て言つてゐると解したからである。
「でも久しぶりに逢つて愉快な話をするのぢやないからね。美代子はまあいいさ。ただ、あの家の人たちがね」
「うん、さうか。――でも仕方がないぢやないか。」
「さうだとも」さう言つて置いて赤木はちよつと言葉を休んでから「一たい世間ではかういふ場合、つまり、ともかくも夫婦のやうな生活をしてゐたやうな男女が別れるやうな時には、金をやることが習慣のやうだが、僕などにすればどれぐらゐやればいいものだらうかね」
「さ、……まづ五百圓以上、千圓ぐらゐかな。ともかく五百圓以下ならをかしいだらう」
「そいつは困つたな。僕にはそんな金は出來さうもなしさ、さうかと言つて、自分で勝手に引つぱつて來た女が、事もあらうにこんな事をしでかしたと言つて、親父から金を引き出せるわけのものではない」
「――昨夜聞いたやうな話の筋合ひだとね」
「一たいこんな事は金などで始末をすべきものぢやないではないか。實にくだらない習慣だ」
「さう思ふなら、それで金なんぞやらなくつたつていいではないか。それに見たところ先方はそんな點でうるさい事などいひさうもない人のやうだがね」

「それはさうだ。だが何にも言はないところへつけ込むやうでも厭だし、それにあの家は困つてもゐる」

「それや君の方が有福だらうさ。出來るならしてやるに越した事はない」

赤木はしばらく無意味に自分の靴を見つめてゐた。さつきから氣がついてゐることだが、その赤靴はいつの間にか綺麗に磨かれてあつた。何れはお八重が下女に言ひつけてさせてくれたのであらう。

「いや、止さう」赤木はひとり宣言するやうに言つた「金などはやらない。僕も錢金にも換へられない苦しい思ひはした。金なんぞやるべきものぢやない。向ふから要求などすれば猶のことだ」

北村はもうそれに就ては別だんの意見は述べなかつた。

近いところだから、間もなく横濱も過ぎてゐた。

不意に北村は腹立しげに舌皷を打つた。赤木が顔を見上げると、北村は眉の間に皺を刻んで、チョツキのポケットから時計を出して見てゐた。赤木の物問ひたげな顔つきに北村は答へた、

「腹がへつて仕方がないんだ」さういつて赤木が笑ふのを見て彼自身も苦笑した「うちではろくに食はなかつたものだかね。着いたら直ぐに太平樓へ行かう。くだらない事よりは先づこの空腹から解決するです。——話をするにも太平樓がいい。時間も早いから靜かだらう」

「序に竹中にも相談するのかい」

「そいつは考へて見たがよさう。竹中になんぞ聞かしたつて仕方がない。結局、君ひとりの方がいゝよ」

太平樓といふのは支那料理を食はせる家として都下でも有名であつた。そこの主人の竹中は北村とは竹馬の友であつた。料理屋といつても太平樓は立派な家であり、主人の竹中は、道樂半分に高等工業などを出た主人でもあつた。少年

時代を北村とは同じ下町の近所で育つて、株式仲買をしてゐた北村の家が失敗つづきで落魄してしまつてからは、青年時代の北村を何かと保護したやうな話もあり、現に北村夫婦の仲人は竹中夫妻であつたことも知つてゐる赤木は、北村が太平樓へ行かうと言ひ出した時にも、相談事のなかへ竹中が加はるのかと思つたのは自然であつた。けれども「竹中になんぞ明かしたつて仕方がない」といふ北村の言葉も、赤木にはすぐ了解された。といふのは、北村はいつも竹中に關しては親密な口調で愛情をもつて噂をしたけれども、彼等二人の間の性格的相違とそれから來る當然の生活態度の理解といふやうなものに就て、北村は竹中を大して尊重しては居なかつた。つまり北村は竹中を平俗な人としてしか見てゐないらしい口吻を時折洩してゐた。竹中は親切すぎて、人の生活に立入りすぎる——それも理解なしにだから困る。北村はそんな風に思つてゐた。赤木も北村につれられて一二度、竹中といふ人を見た事はあつたが、好個の紳士といふだけの人物のやうであつた。

「竹中には何もかも決定してしまつてから一つ報告的に言ふだけの事にしよう。ああいふ連中の意見といふものは、常識的で溫健でうるさいからね」

北村はそんなことも言ふのであつた。

北村は、心の中ではもうすつかり大たいの方針は立つてゐるのであつた。つまり年來夢想してゐて斷行するだけの勇氣と機會とを發見せずにゐたことを、今日やつてのけようといふのである。善も惡も天下の思惑もない。北村は彼が今までの著作のなかに書いた幾多の人物のやうに振舞はうと、自分を決めてゐた。主人のあとを追ふ犬のやうな無智で從順でしかし甲斐のない、だが不憫な女は、この男にくれてやらうと思ひ定めて、北村は自分の隣りに疲れたやうな顔つきをして座つてゐる赤木を見た。さうして北村は、哀れなお八重を托するのに必ずしも不適當でない人物としての赤木

を考へてみた。北村は交友の初めから赤木を好いてゐた。赤木が北村に對してさうであつた如く。先づその才能を認めた北村は、次に貫目がなくつて饒舌で一見猥雜にさへ見える赤木の底の方から、案外內氣で氣の弱いそのくせ偏狹と非常識との中間を貫いて一本氣で守るところのある妙に澄み透つた赤木を知つた。かうして北村は赤木をいつのころから思ひがけなく賴みになる人物として受入れてゐた。この男が本當にお八重を愛してゐるとすれば、お八重の前途もさう氣づかふこともないやうな氣がした。またお八重が北村の友達のうちでも赤木を好んでゐることも知つてゐた。それは赤木が北村の第一の、いふより唯一の親友であつたからといふ點からも來てゐるが、性格的に赤木とお八重との間には共通し兩立するやうな點があるやうな氣がした——どういふ點がさうなのだか別にはつきりしないけれども。お八重の特に女々しく淚つぽいところと快活とが交錯してゐるあたりが、赤木に向くやうに思へる。北村は赤木の隣にお八重を坐して考へてみると、お八重が不思議に決して厭はしい女ではなかつた。さうして赤木の隣にお八重を置くと同時に、無論、北村自身のわきにはお雪がいつも居たのである。彼女を別に新らしく意識に上す要のないほど、お雪はいつも北村のなかにあつた。時々、それに氣づいた時、北村はお雪を彼にとつて一種の宿命的な者とさへ感じた程である。さうしてその度每に、お雪が彼の妻ではなくてそれがお八重であつた事を、北村はいつも運命の惡意ある戲のやうに思ひ做した。罪を自分のなかに感ずることは尠く、その惡謔に滿ちた運命を憎りたい程であつた。その意味に於ては、自分と同じように苦しめられてゐるお八重を可愛さうに思はないではなかつた。さうして彼とお雪とさうしてお八重とに纏る七年間の生涯が、事新らしく北村の胸裡に通過するのであつた。

北村は默々として新橋の驛に下りて、同じやうに默々として市內電車に乘つた。さうして電車を下りてからは快活げに、いつも後に步いてゐる赤木に話しかけたが赤木はまた赤木で、唯無言で笑ふぐらゐの外には答へなかつた。赤木

はへんに氣が滅入つてしまつて、その理由を昨晩の不充分な眠りの爲だと思つた。ふと、お八重が今ごろ何をしてゐるだらうかと思ひ浮ぶと、明日自分が返事を持つて行くまでの間を、彼女はどうして暮すだらうと、そんなことが氣になつた。赤木は北村の彼女に與へようとしてゐる返事をもう直覺的に察してゐた。また一日、北村がさう言ひ出した時に、それを說服するために何の用意もない自分を赤木は感じた。お八重が北村に捨てられることを決して望むのではないと、赤木は自分に向つても斷言することは出來た。しかしあんなに感情のかけへだたつた夫婦といふものを、それが明瞭にわかる以上、その關係を持續させようといふことは、夫にとつても妻にとつても一種の殘酷をさへ感じたからである。赤木はそれほど屢々虐遇されてゐるお八重を見て來てゐたからである。靴のままで玄關へかけ上つてステッキで彼女を亂打する北村を赤木は見た。男でもこしらへて逃げて行つてしまへばいいと、北村がいつもいふのを聞いてゐた。北村が妻を殺す男を描いたの一度ならず讀んだ。さうして赤木はそれほど堪えがたいものを妻にしてゐる北村がわからなかつた。さうしてその問題に就て言はうとしても、北村はいつも或る程度以上には、赤木をしてそれに觸れさせなかつた。なまなかにお八重に同情を持ちすぎてゐると自ら氣がついてゐる赤木には、進んでその問題に干涉しようといふ態度にも出ることが出來なかつた。何よりも第一に赤木は自分自身の不貞な妻によつて惱まされてゐた。やつと自分の問題をそれも心持のなかで解決し得た今日、それに就て相談しようと思つて立寄つた北村の家で、いづれは改めて徐に忠告しなければならないと思つた第二の問題は、赤木がそこに居ない一年の間に思ひがけなく開展して爆發してしまつてゐる。第一の事がまだ終りを告げないのに、既に第二の事が待つてゐて、しかもその渦のあたりのいつの間にか己を見出した赤木は、人間の生活が多すぎて休む暇もないことを歎きたいやうな氣持があつた。もし北村が平然とお八重を捨てるなら――さうしてそれは北村としては仕方もない事なのだが、――お八重は、その不幸によつて、もつと自己の問題になることを赤木は、いつしかはつきりと自覺して來てゐた。

編輯だより

□吉例により支那の動亂はますます擴大した。關稅會議もお流になる形勢だ。さしづめ、張作霖は加藤高明の地位で、吳佩孚が田中義一、形勢觀望の馮玉祥は床次竹次郎と云ふ地位だ。どれもこれもたいした代物でないだけに誰が勝たうと我不關焉だ。

□本誌生誕してから七年、來月は第八歳の春を迎へる譯だ。來年は本誌にもいろいろの新しい計畫があるが、新年號で發表することとした。

□新年號の本誌は論文、說苑、創作に於て秋季號以上の大作が隨分集まつた。讀者の滿足さるる光彩ある大雜誌が堂々とその雄姿を現はすのは十二月廿二日頃である。執筆者及其題目もすべて決定しているが、發表だけは見合せた。

□新年號の本誌から每號「運動コーチ」欄を設置することになつた。其擔當者は野球も庭球も何れも一流の權威である。

□「社會科學」新年號は「マーシャル研究」號とする。そして其執筆者も斯道の權威十二名を網羅した。かく組織立つてマーシャルの研究されたことは諸外國にもない所だ。現代の經濟組織を知らんとする人には此文獻が必要である、と同時にマルクス學徒達も一讀して貰ひたい。

□細井和喜藏君遺著長篇小說「工場」出づ。日本に類例のない紡績奴隸に取材した深刻な小說である。本書はすべての點に於て我國民に一讀さるべき有益な人生記錄である。我國の工場の解剖書として、またその男女工の奴隸的生長を赤裸々に物語る點に於て獨步の地位に居る。

□本誌十二月の創作欄は從來の慣例を打破して長篇力作を登載した。恐らく十二月文壇の白眉であらうことを喜んでいる。

□日本文壇の開眼に努力した功勞者「中央公論」主幹瀧田樗蔭君逝く。氏は雜誌編輯者として或點は典型的なところがあつた、氏の主宰する「中央公論」がデモクラシーの徹底に奮闘したごときは我々の感謝措く能はざる所である。いろいろの功績をのこし年齒未だ若くして逝つたのは痛恨の至りにたへない。敬んで哀悼の意を表する。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵税不要
壹ヶ年	拾壹圓卄錢	增大號共郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾四年十一月二十日　印刷納本
大正拾四年十二月一日　發　行
（價八十錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行兼印刷人　平田貫一郎
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

御歳暮の御贈答用には……………

三越の商品券◆◆◆

……………贈るに御便利・受けて重寶……………

御歳暮御贈答の季節が參りました。三越の商品券は御贈答用として、最も理想的で、現金同樣、御望みの品は何でも御引換が出來、東京本店分店は勿論、大阪支店、京城、大連の兩出張所にも共通致します。其の御便利、趣味高尚な商品券は本店並に分店で發賣致して居ります

三越分店

◆三越新宿分店……新宿停車場前

◆三越青山分店……青山學院前



東京市駿河町

三越呉服店

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可

